

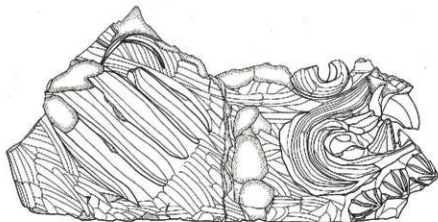
# 伊丹市埋蔵文化財調査報告書

震災復旧・復興事業に伴う発掘調査

—有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第203次調査—

—有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第217次調査—

—有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第231次調査—



2007年3月

伊丹市教育委員会



1. 遺跡遠景（北より）

兵庫県教育委員会撮影（平成4年）



2. 富士山蔵 正面

（平成6年）



## 序

未曾有の大被害をもたらした阪神・淡路大震災は、貴重な文化財にも少なからぬ打撃を与え、本市でも、国指定重要文化財『旧岡田家住宅』の被災をはじめとして、大きなダメージを受けました。

被災後、本市では“町の復興・心の復興”を掲げ、市をあげて復興・復旧事業に全力を傾注してまいりましたが、教育委員会としましては特に埋蔵文化財の保護に留意し、兵庫県教育委員会ほか関係機関と協議しながら発掘調査を実施いたしました。これらの調査には、県教育委員会埋蔵文化財調査事務所並びに全国から集まった支援職員の皆様の全面的なご協力をいただきました。あらためて感謝を申し上げます。

本報告書は、平成9年度・10年度・11年度に実施した「富士山蔵」跡地の調査結果をとりまとめたものです。この報告書をもちまして、一連の震災復旧事業の調査報告は終了することとなります。

本報告書が、郷土の歴史に関する資料として、学術研究だけにとどまらず、広く本市の学校教育・社会教育の分野でも活用されることを期待いたします。

最後になりましたが、発掘調査をはじめとして、本市の文化財行政全般にわたってご指導いただいている兵庫県教育委員会並びに関係各位に対し、深甚なる感謝を申し上げます。

平成19年3月

伊丹市教育長 中西 幸造

## 例 言

1. 本書は、平成7年1月17日に発生した「阪神・淡路大震災」の震災復旧・復興事業に伴う緊急調査として実施した、埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本書に収めた、調査成果及び調査期間は下記の通りである。  
有岡城跡・伊丹郷町遺跡第203次調査 平成10年2月16日～平成10年3月31日  
有岡城跡・伊丹郷町遺跡第217次調査 平成11年12月21日～平成12年3月31日  
有岡城跡・伊丹郷町遺跡第231次調査 平成12年2月1日～平成12年4月30日
3. 発掘調査は、伊丹市教育委員会生涯学習部社会教育課小長谷正治（現伊丹市立博物館）・中畔明日香（旧姓 上村）・岡野理奈が担当した。

整理作業（平成18年度）は次の組織で行った。

生涯学習部長	鷲谷宗昭（4月～6月）、本庄和郎（7月～）
社会教育課長	石堂行文
同 副主幹	福井 収
同 主任	佐藤友治、中畔明日香
同 職員	和島恭仁雄
同 嘱託	赤松和佳、細川佳子

4. 整理作業の分担は次のとおりである。

遺物実測／瀬川眞美子、三輪隆子、吉川敬子、岩田朱美、岡野理奈  
遺構・遺物のトレース／丸岡たかみ、三輪隆子  
挿図図版作成／岩田朱美、岡野理奈、三輪隆子  
遺物写真撮影及び写真図版作成／吉川敬子、瀬川眞美子、岩田朱美  
出土遺物観察表作成／赤松和佳、吉川敬子

5. 報告書の執筆は、各発掘調査担当者が分担して行った。執筆者の氏名は文末に記した。
6. 報告書の編集作業は、中畔明日香・和島恭仁雄が行った。
7. 出土遺物及び発掘調査資料は、伊丹市教育委員会にて保管している。広く利用されたい。
8. 今回の発掘調査及び、報告書作成にあたり、多くの方々や機関からご助言、ご教示を賜った。ここに感謝の意を表する。（順不同。敬称略）

兵庫県教育委員会文化財室、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所、小西酒造株式会社、伊丹酒造組合、大阪歴史学会、中世土器研究会、摂河泉古代寺院研究会  
芦田淳一、市本芳三、大脇 潔、小川良太、川口宏海、黒田慶一、後藤玉樹、小西新右衛門、小林章男、駒井正明、近藤康司、佐藤 力、嶋谷和彦、武内雅人、田中幸夫、中井淳史、藤本史子、松尾信裕、山上雅弘

## 凡 例

1. 遺構実測には、国土座標第V系を使用した。水準高は、東京湾平均海水値（T.P.）を用いている。
2. 現地の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務所監修・財団法人日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帳」に準拠した。
3. 調査区内の遺構名は、各調査区及び調査区内の地区ごとの通し番号である。
4. 壁面土層図及び遺構図版において、以下の部分はスクリーントーンを使って表した。



5. 本調査地は、3回に分けて調査を行ったため、同一の建物の検出が複数次に及んでいる。第3章において、建物の報告をした際、遺構平面図にその建物全体の平面図を付した。そこで薄く表わした部分は、報告次数外を示す。
6. 掲載した遺物の各番号は、各調査回数ごとの通し番号である。また、写真図版の遺物の番号と一致させている。
7. 遺物の実測において、中心線を1点破線で示しているものは、反転復元していることを表す。
8. 遺物観察表において、法量がカッコ付きのものは、復元した数値であることを表す。
9. 遺物観察表の瓦分類名は、第4章第2節「中世瓦の考察」に記載する。
10. 巻頭図版-1、図版1-1の写真は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に提供していただいた。
11. 表紙掲載の図は、第231次調査池状遺構出土の鯰瓦（第139図-140）である。

## 参 考 文 献

- 赤松和佳 「大阪府下出土の肥前陶器について」『国内出土の肥前陶器 西日本の流通をさぐる』第1分冊 九州近世陶磁学会 2002年
- 赤松和佳他 「伊丹部町遺跡の陶磁器の様相」(『第1回伊丹部町研究会大会発表要旨集』) 伊丹部町研究会 2003年
- 芦田淳一 「能持寺出土の中東瓦—瓦当接合技法を中心に」『帝塚山大学考古学研究所研究報告1』帝塚山大学考古学研究所 1998年
- 有田町教育委員会 『幸平遺跡』 2003年
- 有田町歴史民俗資料館・有田城参考館 『有田町歴史民俗資料館・有田城参考館 研究紀要』第1号 1991年
- 伊丹部町調査研究会 『有田城跡・伊丹部町Ⅷ—宮ノ前地区市街地西側発見に伴う発掘調査報告書—』 2001年
- 伊丹市文化財保存協会 『伊丹市文化財調査報告(第8集) 伊丹の民具 伊丹の酒造り道具』 1978年
- 伊丹市役所 『伊丹市史』第2巻 1969年, 第3巻 1972年, 第4巻 1968年, 第5巻 1970年, 第6巻 1970年
- 伊丹市立博物館 『新・伊丹史話』 1994年
- 伊丹市立博物館 『聞き書き 伊丹のくらし—明治・大正・昭和—』 1989年
- 伊丹市立博物館 『小西新右衛門文書目録(近世編) 1995年、(近代編) 1999年
- 伊藤延男 『禅宗寺院』『日本の美術11』 至文堂 1946年
- 伊藤延男 『住居(すまい)』『日本の美術6』 至文堂 1969年
- 藤原昭彦 「明石遺跡の編年について」(第12回関西近世考古学研究会大会『近世の実年代資料』) 関西近世考古学研究会 2000年
- 上田秀雄 『14—16世紀の青磁繪の分類』『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982年
- 上原真人 『瓦を読む 歴史発掘記』 講談社 1997年
- 江戸遺跡研究会編 『図説 江戸考古学研究会』 柏貴州 2001年
- 大阪市文化財協会 『大阪市中央区 住友銀行跡発掘調査報告書 住友銀行舞谷新システムセンター建設に伴う発掘調査報告書』 1998年
- 大阪市文化財協会 『大阪城跡発掘調査報告1』 2002年
- 大阪市文化財協会 『大阪城跡Ⅱ』 2003年
- 大阪市文化財協会 『大阪市北区 広島藩大阪蔵屋敷跡Ⅰ 大阪市教育委員会による大阪市立近代美術館(仮称)建設工事に伴う発掘調査報告書』 2003年
- 大阪市文化財協会 『大阪市北区 広島藩大阪蔵屋敷跡Ⅱ 大阪市教育委員会による大阪市立近代美術館(仮称)建設工事に伴う発掘調査報告書』 2004年
- 大阪府教育委員会 『大阪府埋蔵文化財調査報告書第三十輯 陶瓦草』 1978年
- 大橋康二 『肥前磁器』(考古学ライブラリー55) ニューサイエンス社 1989年
- 大橋康二他 『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会 2000年
- 大橋康二他 『国内出土の肥前陶器 西日本の流通をさぐる』第1分冊 九州近世陶磁学会 2002年
- 大橋康二他 『別冊太極 実物大そば口亭典』 平凡社 2002年
- 岡佳子他 『軟質施物陶器の成立とその展開』『研究集金資料集』 関西陶磁史研究会 2004年
- 大平茂 『近畿丹波地輪跡の形式分類とその編年』『下相野宮址』 兵庫県教育委員会 1992年
- 小野正敏 『15・16世紀の染付陶。墨の分類とその年代』『貿易陶磁研究』No.2 日本陶磁学会 1982年
- 塚上実 『南河内の変器陶』『藤澤一夫先生古希記念古文化論叢』 1983年
- 小長谷正治・川口宏海 『伊丹部町の酒造跡』『関西近世考古学研究Ⅳ』 関西近世考古学研究会 1996年
- 大橋康 『陶瓦』『日本の美術13』 至文堂 1968年
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究所 『江馬氏城跡Ⅱ—下段跡門前地区と庭園の調査—』 1996年
- 川口宏海 『兵庫西伊丹部町遺跡出土の煙管について』『大干前大学社会文化学部論集』第1号 大手前大学 2001年
- 川口宏海 『西宮と伊丹の磁器発掘調査報告』 歴史学会第2回研究発表会 2009年
- 川西市教育委員会 『川西市崇徳寺庭園遺跡—第20・21次発掘調査報告—』 2003年
- 黒田俊雄編 『伊丹中世史料』『伊丹資料叢書』2 伊丹市役所 1974
- 神戸市教育委員会 『沢の鶴大石蔵』 2001年
- 古代の土器研究会編 『古代の土器1・郡城の土器編成1』 1992年
- 古代の土器研究会編 『古代の土器2・郡城の土器編成2』 1993年
- 小林章男 『東瓦』大塚経済出版 1981年
- 小林章男 『続 東瓦』 1991年
- 坂井正明・近藤康司・田中龍男 『金剛寺遺跡出土瓦の再検討』『大阪府埋蔵文化財協会 研究紀要2』(旧大阪府埋蔵文化財協会) 1994年
- 滋賀県立安土城考古博物館 『信長の城・秀吉の城』 2006年
- 出土鉄貨研究会 『中世の地輪と鴉目』第9回出土鉄貨研究会資料 2002年
- 白神典之 『境遺跡について』『堺市文化財調査報告第37集 堺遺跡都市遺跡(SIKT79) 発掘調査報告』 1988年

- 新居区内藤町遺跡研究会 『内藤町遺跡』 1992年
- 菅原正明 「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告 第19集』 1989年
- 瀬戸市文化振興財団歴史文化財センター 『江戸のやきもの一生涯と流通一』(記念講演会・シンポジウム資料集) 2006年
- 高槻市教育委員会 『高槻市文化財調査報告第14冊 摂津高槻城 本丸跡発掘調査報告』 1984年
- 大分県市教育委員会 『大分県市文化財 第49集 大分県委発給 XV-陶磁器分類編一』 2000年
- 山中幸夫 『鎌倉の中世瓦一瓦が語る神社・寺・城跡一』 2004年
- 玉井哲雄 『絵巻物の住宅を考古学発掘史料から見る』『絵巻物の建築を読む』 東京大学出版会 1992年
- 中里土器研究会編 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995年
- 津名町教育委員会 『津名町埋蔵文化財調査報告書第2集 志筑庵寺発掘調査報告Ⅰ-四庫補助事業 志筑庵寺朝洲確認調査報告書-』 2004年
- 坪内利弘 『四蔵瓦懸板』 理工学社 1977年
- 東京都埋蔵文化財センター 『汐留遺跡Ⅰ』 1997年
- 土岐市教育委員会他 『元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書』 2002年
- 徳島県教育委員会 『新蔵町1丁目遺跡 企業総合管理センター(旧副知事公舎)地点』 1998年
- 富田林市教育委員会 『富田林市埋蔵文化財調査報告35 新堂庵寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お龜石古墳 本文編』 2003年
- 奈良由美 『古伊万里 酒楽開口・酒器1000』 講談社 2001年
- 奈良国立文化財研究所 『奈良国立文化財研究所史料第48巻 発掘調査資料・別冊 (PP.191~256) 第2部 発掘図面一覧』 1998年
- 榎崎幸一・藤澤良祐他 『戦国・鎌倉期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品』(シンポジウム・講演会『瀬戸大窯とその時代』資料集) 2001年
- 藤波洋三 『徳川氏大阪城期の地物』『難波宮址の研究 第九』(財大阪市文化財協会 1992年)
- 西宮市教育委員会・白旗記念酒造博物館 『文化財資料・第37集 瀬の酒造り』 1992年
- 日本貨幣共同組合 『日本貨幣カタログ』1996年版 1995年
- 栗岡実 『畿前焼遺跡の編年について』『第3回中近世畿前焼研究会』 2000年
- 栗岡実 『畿前焼大塚遺跡レクチャー資料』『関西近世考古学研究会』 関西近世考古学研究会 2001年
- 長谷川真 『近世丹波焼遺跡とその系譜関係』『関西近世考古学研究会』 関西近世考古学研究会 2000年
- 長谷川真 『丹波』『全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」資料集』 2005年
- 富田市教育委員会 『伊藤南大塚跡周辺発掘調査報告書Ⅰ』 2003年
- 兵庫県教育委員会 『神戸市北区 玉津田中遺跡 第6分冊』 1996年
- 兵庫県教育委員会 『兵庫県文化財調査報告第106冊 兵庫県姫路市所在 大笠瓦窯跡一山陽自動車道岡本埋蔵文化財調査報告Ⅲ』 1997年
- 藤井直正 『有岡城跡・伊丹町Ⅳ』 大手前女子大学史学研究所 1995年
- 藤澤良祐 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1986年
- 藤澤良祐 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1987年
- 藤澤良祐 『日本の遺跡5 瀬戸窯跡群』 同成社 2005年
- 藤原敏・渡辺宏 『和瓦のはなし』『物語／もの』 鹿島出版会 1990年
- 法隆寺昭和資料編編纂委員会 『法隆寺の至宝 瓦』第15巻 小学館 1992年
- 法隆寺昭和資料編編纂所 『法隆寺昭和資料編調査報告10 伊可賀瓦』 1989年
- 橋野俊明 『日本版圖の心得』 毎日新聞社 2003年
- 水野信太郎 『日本焼瓦史の研究』 法政大学出版局 1999年
- 森田敏 『14～16世紀の白磁の型式分類と編年』『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会 1982年
- 八木哲浩編 『伊丹古陶図集』『伊丹資料叢書』6 伊丹市役所 1982年
- 山口市教育委員会 『山口市埋蔵文化財調査報告第76巻 乗福寺跡・御懸遺跡』 2001年
- 山口市教育委員会 『山口市埋蔵文化財調査報告第82巻 乗福寺跡Ⅱ』 2003年
- 山本忠尚 『鬼瓦』日本の美術12』 至文堂 1998年
- 楠本学 『摂州伊丹西條城跡』『地域研究いたみ』第8号 伊丹市立博物館 1978年
- 楠本学監修 『伊丹酒造家史料』『伊丹資料叢書』8 伊丹市役所 1983年
- 和島恭仁編 『古文書からみた旧岡田家住宅』『地域研究いたみ』第24号 伊丹市立博物館 1995年



# 目 次

序 文  
例 言  
凡 例  
参考文献

第1章 遺跡の概要 .....	(中群・和島)	1
第2章 調査の経緯と経過		
第1節 調査の経緯 .....	(小長谷)	5
第2節 調査の経過 .....	(小長谷)	5
第3節 調査日誌抄 .....	(小長谷)	7
第3章 発掘調査の成果		
第1節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第203次調査 .....	(小長谷)	15
第2節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第217次調査 .....	(中群)	71
第3節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第231次調査 .....	(岡野)	141
第4章 考 察		
第1節 棟飾瓦からの一考察 .....	(中群)	209
第2節 中世瓦の考察 .....	(瀬川)	211
第3節 酒蔵の所有者について .....	(和島)	237
第4節 富士山麓の酒造遺構について .....	(小長谷)	240
第5章 結 語 .....	(中群)	249

# 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 .....	1	第11図 東壁土層断面図 .....	16
第2図 調査地点位置図 .....	1	第12図 南壁土層断面図 .....	17
第3図 「文禄伊丹の図」解説図 .....	2	第13図 第1面全体図 .....	19
第4図 「寛文9年伊丹郷町絵図」解説図 .....	2	第14図 礎石建物1平面図 .....	21
第5図 「天保15年伊丹郷町分間絵図」解説図 .....	3	第15図 礎石建物4平面図 .....	22
第6図 第203・217・231次調査 調査区設定図 .....	6	第16図 レンガ竈出土遺物 .....	24
第7図 第203・217・231次調査 第1面全体図 .....	9	第17図 燃料置き場出土遺物 .....	24
第8図 第203・217・231次調査 第2面全体図 .....	11	第18図 竈1平面・断面図 .....	25
第9図 第203・217・231次調査 第3面全体図 .....	13	第19図 竈1出土遺物(1) .....	26
有岡城跡・伊丹郷町遺跡第203次調査		第20図 竈1出土遺物(2) .....	27
第10図 調査区設定図 .....	15	第21図 竈4平面・断面図 .....	28
		第22図 槽1～3、男柱1、垂壺7～10平面・断面図 .....	29
		第23図 男柱2・3、垂壺1～4平面・断面図 .....	30
		第24図 男柱2出土遺物 .....	31

第25図	男柱3出土遺物	32	第61図	A区SX1・2出土遺物	79
第26図	男柱4・垂壺6平面・断面図	34	第62図	A区第2面全体図	80
第27図	男柱5・垂壺5平面・断面図	35	第63図	A区SD103平面・断面図	81
第28図	男柱5出土遺物	35	第64図	A区SD103出土遺物(1)	81
第29図	井戸2出土遺物	36	第65図	A区SD103出土遺物(2)	82
第30図	SK6・7・16・40・241出土遺物	37	第66図	A区SD103出土遺物(3)	83
	.....		第67図	A区SD103出土遺物(4)	84
第31図	SP41・42・79出土遺物	38	第68図	A区SD103出土遺物(5)	85
第32図	第2面全体図	39	第69図	A区SD103出土遺物(6)	86
第33図	SD16出土遺物	41	第70図	A区SD103出土遺物(7)	87
第34図	SD22出土遺物	41	第71図	A区SX301平面・断面図	89
第35図	SX20平面・断面図	42	第72図	A区SX301出土遺物(1)	89
第36図	SX20上層出土遺物	43	第73図	A区SX301出土遺物(2)	90
第37図	SX20下層出土遺物	44	第74図	A区SX301出土遺物(3)	91
第38図	SK59・60・61・63平面・断面図	45	第75図	A区第3面全体図	93
	.....		第76図	A区SD302出土遺物	94
第39図	SK59・61出土遺物	46	第77図	A区SX302出土遺物	94
第40図	SK63出土遺物	47	第78図	A区SX302周辺出土遺物	95
第41図	SK93出土遺物(1)	48	第79図	A区SK310出土遺物	95
第42図	SK93出土遺物(2)	49	第80図	A区SP325・337・373・448・498	
第43図	SK106平面・断面図	50	出土遺物	96	
第44図	SK106出土遺物	50	第81図	B区土層断面図	97
第45図	SP242出土遺物	51	第82図	B区第1面全体図	99
第46図	第3面全体図	53	第83図	B区礎石建物5・6平面・断面図	
第47図	SD30・38~43・49・50平面・断面図	55	.....	101	
	.....		第84図	B区礎石2出土遺物	101
第48図	SD31・39・44出土遺物	56	第85図	B区竈9平面・断面図	103
第49図	柱穴列4平面・断面図	56	第86図	B区竈10平面・断面図	104
第50図	柱穴列1~3平面・断面図	57	第87図	B区槽1~3平面・断面・立面図	
第51図	SK200・208・226・228・229出土遺物	58	.....	105	
	.....		第88図	B区槽2出土遺物	106
第52図	SP607・652・670出土遺物	59	第89図	B区槽4~8平面・断面図	107
第53図	第3層出土遺物	59	第90図	B区槽5・7出土遺物	108
<b>有岡城跡・伊丹郷町遺跡第217次調査</b>			第91図	B区男柱1・2・垂壺1~4平面・	
第54図	調査区設定図	71	断面図	110	
第55図	A区土層断面図	72	第92図	B区男柱2出土遺物	111
第56図	A区第1面全体図	73	第93図	B区第2面全体図	113
第57図	A区礎石建物4平面・断面図	74	第94図	B区地鎮遣構1平面・断面図	115
第58図	A区埋桶1出土遺物	76	第95図	B区地鎮遣構2平面・断面図	115
第59図	A区埋桶6出土遺物	77	第96図	B区地鎮遣構1出土遺物	115
第60図	A区埋桶7出土遺物	78	第97図	B区地鎮遣構2出土遺物	116

第98图	B区第3面全体图	117	第134图	北区池状遺構出土遺物(5)	166
第99图	B区SD109出土遺物	120	第135图	北区池状遺構出土遺物(6)	167
第100图	B区SK315出土遺物	120	第136图	北区池状遺構出土遺物(7)	168
第101图	B区掘立柱建物1平面・断面图	120	第137图	北区池状遺構出土遺物(8)	169
第102图	B区SK332出土遺物	121	第138图	北区池状遺構出土遺物(9)	170
第103图	C区土層断面图	122	第139图	北区池状遺構出土遺物(10)	171
第104图	C区第1面全体图	123	第140图	北区SK70出土遺物	173
第105图	C区礎石建物1平面・断面图	124	第141图	北区SP133出土遺物	173
第106图	C区第2面全体图	125	第142图	北区第3面全体图	174
第107图	C区SD2出土遺物	126	第143图	北区SD35平面・断面图	175
第108图	C区SD203出土遺物	126	第144图	北区SD35出土遺物	176
第109图	C区SX201出土遺物	126	第145图	北区SK121・133出土遺物	177
第110图	C区SK207・208・228・352 出土遺物	127	第146图	北区SP253・279出土遺物	177
第111图	C区SP303出土遺物	128	第147图	南区土層断面图	179
<b>有岡城跡・伊丹御町遺跡第231次調査</b>					
第112图	調査区設定图	141	第148图	南区第1面全体图	181
第113图	北区土層断面图	142	第149图	南区礎石建物4平面・断面图	182
第114图	北区第1面全体图	144	第150图	南区男柱1平面・断面图	183
第115图	北区礎石建物5・6平面・断面图 ……………	146	第151图	南区男柱1出土遺物(1)	184
第116图	北区槽1・2平面・断面图	148	第152图	南区男柱1出土遺物(2)	185
第117图	北区男柱1平面・断面图	148	第153图	南区男柱1出土遺物(3)	186
第118图	北区男柱1出土遺物(1)	149	第154图	南区SK30出土遺物	187
第119图	北区男柱1出土遺物(2)	150	第155图	南区SK7出土遺物	187
第120图	北区井戸1出土遺物	152	第156图	南区SK18出土遺物	188
第121图	北区SX1出土遺物	152	第157图	南区第2面全体图	189
第122图	北区SK8・16出土遺物	152	第158图	南区SK31出土遺物	190
第123图	北区SK54出土遺物	153	第159图	南区第3面全体图	191
第124图	北区SK81出土遺物	154	第160图	南区SD4出土遺物	192
第125图	北区SP61出土遺物	156	第161图	南区SK35・36・西壁第11層出土遺物 ……………	193
第126图	北区SP70出土遺物	156	第162图	南区北壁100~102層出土遺物	193
第127图	北区第2面全体图	158	第163图	棟飾瓦出土地点	210
第128图	北区池状遺構(上層)平面・断面图 ……………	159	第164图	瓦部位名称	211
第129图	北区池状遺構(下層)平面・断面图 ……………	161	第165图	軒丸瓦A類	212
第130图	北区池状遺構出土遺物(1)	162	第166图	軒丸瓦B類	213
第131图	北区池状遺構出土遺物(2)	163	第167图	軒丸瓦C類	213
第132图	北区池状遺構出土遺物(3)	164	第168图	軒丸瓦D類	213
第133图	北区池状遺構出土遺物(4)	165	第169图	軒丸瓦E類	214
			第170图	軒丸瓦F類	214
			第171图	軒丸瓦G類	214
			第172图	軒丸瓦H類	215
			第173图	軒平瓦A I類	215

第174図	軒平瓦AⅡa類	216
第175図	軒平瓦AⅡb-1類	216
第176図	軒平瓦AⅡb-2類	217
第177図	軒平瓦AⅡc類	217
第178図	軒平瓦AⅡd類	218
第179図	軒平瓦Ba、Bb類	218
第180図	軒平瓦C類	219
第181図	軒平瓦D類	219

第182図	軒平瓦E類	220
第183図	軒丸瓦と軒平瓦の組合わせ	227
第184図	「明治19年酒造場絵図面届書写」	239
第185図	「明治37年酒類製造場図面」	239
第186図	富士山蔵 酒蔵図面	241
第187図	酒造遺構の変遷 (昭和2年酒蔵図面)	244

## 図 版 目 次

巻頭図版-1 遺跡遠景 (北より)

巻頭図版-2 富士山蔵正面

### 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第203次調査

図版1-1	遺跡近景 (南東より)
図版1-2	第1面全景 (北より)
図版2-1	礎石建物4 (西より)
図版2-2	礎石35 (南より)
図版2-3	礎石30 (南より)
図版2-4	礎石建物2 (北より)
図版2-5	燃料置き場 (東より)
図版3-1	竈1 (南より)
図版3-2	竈3 (北より)
図版3-3	竈4 (西より)
図版4-1	槽1~3、男柱1、垂壺7~10 (東より)
図版4-2	男柱1 (北より)
図版4-3	男柱2 (西より)
図版5-1	男柱3 (東より)
図版5-2	男柱4 (東より)
図版5-3	男柱5 (東より)
図版6-1	第2面全景 (北より)
図版6-2	SD16 (南より)
図版6-3	SD22・23 (南より)
図版7-1	SK59・61・63 (南より)
図版7-2	SK63 (東より)
図版7-3	SK59 (北より)
図版8-1	SX20 (南より)
図版8-2	SK106 (東より)
図版9-1	第3面全景 (北より)

図版9-2 SD30・38~43・49・50 (北より)

図版9-3 柱穴列1~3 (北より)

図版10	出土遺物 (1)
図版11	出土遺物 (2)
図版12	出土遺物 (3)
図版13	出土遺物 (4)
図版14	出土遺物 (5)
図版15	出土遺物 (6)
図版16	出土遺物 (7)
図版17	出土遺物 (8)
図版18	出土遺物 (9)
図版19	出土遺物 (10)
図版20	出土遺物 (11)

### 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第217次調査

図版21-1	A区 第1面全景 (北より)
図版21-2	A区 礎石1 (西より)
図版21-3	A区 礎石2 (西より)
図版21-4	A区 礎石3 (西より)
図版21-5	A区 礎石5 (西より)
図版22-1	A区 第2面全景 (北より)
図版22-2	A区 SD103・SX301 (西より)
図版23-1	A区 第3面全景 (北より)
図版23-2	A区 SX302 (北より)
図版24-1	B区 第1面全景 (東より)
図版24-2	B区 礎石1 (西より)
図版24-3	B区 礎石2 (西より)
図版24-4	B区 煙突・煙道 (北より)
図版24-5	B区 竈1~5 (西より)
図版25-1	B区 竈9焚口 (南より)

- 図版25-2 B区 槽1~3 (西より)  
 図版25-3 B区 槽1 (西より)  
 図版26-1 B区 槽4~8 (南より)  
 図版26-2 B区 槽8 (南より)  
 図版26-3 B区 男柱1・2 (西より)  
 図版27-1 B区 第2面全景 (東より)  
 図版27-2 B区 地鎮遺構1 (東より)  
 図版27-3 B区 地鎮遺構1 (東より)  
 図版27-4 B区 地鎮遺構2 (東より)  
 図版27-5 B区 地鎮遺構2 (東より)  
 図版28-1 B区 第3面全景 (東より)  
 図版29-1 C区 第1面全景 (南より)  
 図版29-2 C区 礎石1 (北より)  
 図版29-3 C区 礎石2 (西より)  
 図版29-4 C区 礎石3 (北より)  
 図版29-5 C区 竈1 (北より)  
 図版30-1 C区 第3面全景 (南より)  
 図版30-2 C区 SD203 (東より)  
 図版30-3 C区 SD205 (北より)  
 図版30-4 C区 SX201 (南より)  
 図版30-5 C区 SX201南北断面 (東より)  
 図版31-1 C区拡張区 第1面全景 (東より)  
 図版31-2 C区拡張区 礎石4 (南より)  
 図版31-3 C区拡張区 礎石5 (東より)  
 図版32 出土遺物 (1)  
 図版33 出土遺物 (2)  
 図版34 出土遺物 (3)  
 図版35 出土遺物 (4)  
 図版36 出土遺物 (5)  
 図版37 出土遺物 (6)  
 図版38 出土遺物 (7)  
 図版39 出土遺物 (8)  
 図版40 出土遺物 (9)  
 図版41 出土遺物 (10)  
 図版42 出土遺物 (11)  
 図版43 出土遺物 (12)  
 図版44 出土遺物 (13)
- 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第231次調査**  
 図版45-1 北区 石列1~5全景 (南より)  
 図版45-2 北区 第1面全景 (南より)  
 図版46-1 北区 溝1 (南より)
- 図版46-2 北区 槽1 (北東より)  
 図版46-3 北区 槽2 (東より)  
 図版46-4 北区 男柱1 (南より)  
 図版46-5 北区 SX1 (南東より)  
 図版46-6 北区 SK8 (北より)  
 図版46-7 北区 SK81 (北より)  
 図版47-1 北区 第2面全景 (南より)  
 図版47-2 北区 SD6 (南より)  
 図版47-3 北区 SK70 (東より)  
 図版47-4 北区 SK111 (西より)  
 図版48-1 北区 池状遺構 (南より)  
 図版48-2 北区 池状遺構上層 (北東より)  
 図版48-3 北区 池状遺構石垣 (東より)  
 図版48-4 北区 池状遺構下層 (南より)  
 図版48-5 北区 池状遺構瓦出土状況  
 図版49-1 北区 第3面全景 (南より)  
 図版49-2 北区 第3面東側全景、SD35 (南より)  
 図版50-1 北区 SD12周辺 (東より)  
 図版50-2 北区 SD18 (北より)  
 図版50-3 北区 SD25 (南より)  
 図版51-1 南区 石列1~3全景 (北より)  
 図版51-2 南区 石列2・3近景 (南東より)  
 図版52-1 南区 第1面全景 (北より)  
 図版52-2 南区 礎石1 (南より)  
 図版52-3 南区 礎石2 (南より)  
 図版52-4 南区 礎石3 (南より)  
 図版52-5 南区 男柱1 (東より)  
 図版53-1 南区 第2面全景 (北より)  
 図版53-2 南区 第2面全景 (西より)  
 図版53-3 南区 SK31 (北より)  
 図版53-4 南区 SK31 (西より)  
 図版54-1 南区 第3面全景 (北より)  
 図版54-2 南区 第3面全景 (西より)  
 図版54-3 南区 SD3 (北より)  
 図版54-4 南区 SD4 (北より)  
 図版55 出土遺物 (1)  
 図版56 出土遺物 (2)  
 図版57 出土遺物 (3)  
 図版58 出土遺物 (4)  
 図版59 出土遺物 (5)  
 図版60 出土遺物 (6)

図版61	出土遺物 (7)
図版62	出土遺物 (8)
図版63	出土遺物 (9)
図版64	出土遺物 (10)
図版65	出土遺物 (11)
図版66	出土遺物 (12)

図版67	出土遺物 (13)
図版68	出土遺物 (14)
図版69	出土遺物 (15)
図版70	出土遺物 (16)
図版71	出土遺物 (17)
図版72	出土遺物 (18)

## 表 目 次

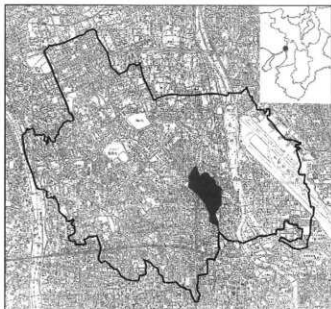
第1表	第203次調査遺物観察表 (1)	62	第21表	第231次調査遺物観察表 (1)	196
第2表	" 遺物観察表 (2)	63	第22表	" 遺物観察表 (2)	197
第3表	" 遺物観察表 (3)	64	第23表	" 遺物観察表 (3)	198
第4表	" 遺物観察表 (4)	65	第24表	" 遺物観察表 (4)	199
第5表	" 遺物観察表 (5)	66	第25表	" 遺物観察表 (5)	200
第6表	" 遺物観察表 (6)	67	第26表	" 遺物観察表 (6)	201
第7表	" 遺物観察表 (7)	68	第27表	" 遺物観察表 (7)	202
第8表	" 遺物観察表 (8)	69	第28表	" 遺物観察表 (8)	203
第9表	" 遺物観察表 (9)	70	第29表	" 遺物観察表 (9)	204
第10表	第217次調査遺物観察表 (1)	129	第30表	" 遺物観察表 (10)	205
第11表	" 遺物観察表 (2)	130	第31表	" 遺物観察表 (11)	206
第12表	" 遺物観察表 (3)	131	第32表	" 遺物観察表 (12)	207
第13表	" 遺物観察表 (4)	132	第33表	" 遺物観察表 (13)	208
第14表	" 遺物観察表 (5)	133	第34表	互観察表 (1)	230
第15表	" 遺物観察表 (6)	134	第35表	互観察表 (2)	231
第16表	" 遺物観察表 (7)	135	第36表	互観察表 (3)	232
第17表	" 遺物観察表 (8)	136	第37表	互観察表 (4)	233
第18表	" 遺物観察表 (9)	137	第38表	互観察表 (5)	234
第19表	" 遺物観察表 (10)	138	第39表	互観察表 (6)	235
第20表	" 遺物観察表 (11)	139	第40表	互観察表 (7)	236



## 第1章 遺跡の概要

### 古代～中世の調査地

有岡城は、荒木村重により、天正2年(1574)、伊丹丘陵上に構築された惣構えの城である。南北1.7km、東西800mの規模をもつ。東縁は丘陵の段丘崖を利用し、西縁は堀と土塁を築く。城内にも、幾筋も堀が掘られていたことが、近年の調査で明らかになってきた。主郭は東端に置き、北・西・南端には砦を配す。西・南の砦は、古墳の境丘を利用してはいる。



第1図 遺跡位置図

4世紀以降、上臈塚古墳(女郎塚砦/消滅)を初めとして、猪名川西岸城に古墳が造られる。市内に現存する鶴塚古墳(鶴塚砦)・御願塚古墳・柏木古墳などを含め、猪名野古墳群が形成される。『日本書紀』・『古事記』には、大和朝廷が設置した果のなかに「猪名」の記載が見られる。律令国家体制下になると、猪名川と武庫川に挟まれた、現在の尼崎市・伊丹市・川西市・猪名川町にまたがる地域は、摂津国川辺郡(河辺郡)となる。郡内には、雄家・山本・為奈・郡家・楊津・余戸・大神・雄上の8郷があったことが、『倭名類聚鈔』(巻6、国郡部)の記載よりわかる。伊丹廃寺や猪名寺廃寺(尼崎市)・栄根寺廃寺(川西市)はこれらの郷と深く結びつくものであろう。



第2図 調査地点位置図(●が調査地点)

「イタミ」という地名の文献上の初見は、「伊多美武者所」と記載された治承4年(1180)で、平安時代末のことである。「伊丹」という表記は、鎌倉時代の嘉元元年(1303)まで待たねばならない(以上『伊丹市史』第1巻。以下、『伊丹市史』を『市史』と略記)。武者所とは、院・摂関家などに設置された警護武士の詰所のこと、伊丹が中央権力と密接な関係があったことを窺わせる。それはこの地域に所在する「橘園」が摂関家ゆかりの地であり、伊丹氏は、それを基盤として成長してきた武士団であろう。

文和2年(1353)の森本基長軍忠状に、「伊丹城」とあり、これが伊丹城の初見と



なる。

「城といっても崖や堀や土塁・塀・櫓などで固めた館といった程度のものであったらう」と『市史』第1巻 (P535) には述べられている。この「伊丹城」(伊丹氏居館) について、現在、有岡城遺構の直下で検出されている遺構をあてる説もあるが確証はない。また、『市史』は、摂津国は管領細川氏の一族が守護を務めており、伊丹氏はその支配下におかれていた「郡代」と呼ばれた代官だったのではないかとしている(『市史』第1巻、P562)。

管領細川氏の代々の被官であった伊丹氏は、常に、細川氏の家督争いに巻きこまれていたことが、『細川両家記』などに見られる。その『細川両家記』に、永正17年(1520)、伊丹城にいた伊丹但馬守と野間豊前守の二人が、この城はこの数十年の間、武士や土民らのたいへんな負担で構築したのに、役立てることもなく逃げるのはいかにも残念だ。我ら二人だけはこの城の中で腹を切ろうではないかと、四方の木戸を閉じて家々へ火を放ち、天守で切腹した(『市史』第1巻、P606)、とある。この「天守」が後世のいわゆる天守閣でないのは明らかだが、「家々」とは異なる「天守」という特別な建物が建てられていたこと、また、この伊丹城(伊丹氏居館)が数十年もかかって造られたことが注目される。城主としての期間がたった5年しかなかったにもかかわらず、惣構えの城「有岡城」を造り上げた荒木村重と大きな隔たりが感じられる。

永禄11年(1568)、織田信長が足利義昭を奉じて入京した。伊丹氏は、すぐに信長方につき、和田惟政・池田勝正とともに「摂津の三守護」となる。天正元年(1573)の將軍義昭の追放の翌年、荒木村重は旧主の池田勝正を追放した。さらに、同年、主君となった信長の命により、伊丹城を攻め落とし、有岡城と改名して、城主となる。『市史』の言葉を借りるならば、「伊丹氏は中世の初頭にあらわれ、よかれあしかれ伊丹地方の中世の歴史とともにあり、そして滅んだ」(第1巻、P639)。

荒木村重によって再整備された惣構えの城「有岡城」は、「城と(城下)町の間に侍町御座候」と「信長記」の記述にある。今回の調査地は、この侍町内となる。天正7年(1579)、信長軍は、城を落とすためにこの侍町に火をかけたと、「信長記」は伝える。落城後15年頃の伊丹の町を復元した「文禄伊丹之図」(第3図)や、江戸時代初期の「寛文9年伊丹郷町絵図」(第4図)には、まさしく町と城



第3図「文禄伊丹之図」解説図(部分)

『伊丹古絵図集成』より(●が調査地点)



第4図「寛文9年伊丹郷町絵図」解説図(部分)

『伊丹古絵図集成』より(●が調査地点)

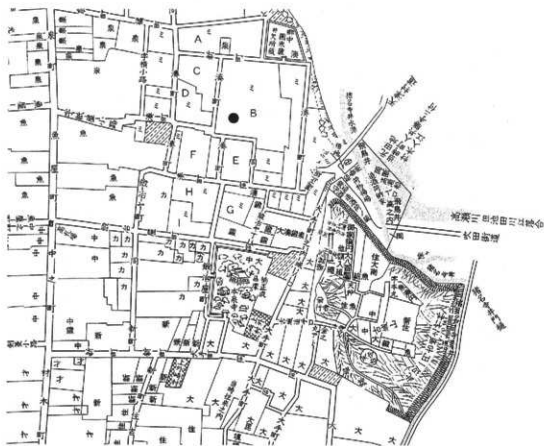
の間は通りのみが描かれ、旧付町地区には白い空間のみが広がっている。焼け残った町を中心にこの後、伊丹が発展したようすを伝えている。(中群明日香)

### 江戸時代の調査地

今回発掘された通称「小西酒造<sup>ふじやま</sup>山蔵」は明治期から伊丹市が成立した昭和15年までの地名でいえば、伊丹町字雲正ノ上291番地にあった。江戸期の町村名では伊丹村のうち湊町に属する。湊町は伊丹郷町のうち伊丹村を構成する27の町のひとつで、元禄年間(1688~1704)に成立した(『市史』第2巻)。天明4年(1784)に猪名川通船が許可され、町内の雲正坂下の猪名川筋に高瀬船の船付場が整備されて酒荷物が積み出された(同書)ことを町名の由来とする説もあるが、町の成立の方が早い。ただし、有岡城期に何らかの港灣施設があつて湊町と呼ばれており、その呼称が復活したという見方もできる。

湊町の東南は古城山(有岡城跡)と大手町(法華宗本泉寺がある)、南は鍛冶屋町、西は魚屋町・泉町、北は桶町に接していた。東は伊丹段丘の縁に位置し、「天保15年(1844)伊丹郷町分間絵図」(武田政義氏所蔵。第5図)によれば、もっとも東北のはずれには「郷中田蔵并欠所蔵」が置かれていた。雲正坂下の船付場からは猪名寺井水路を渡って隣村天津村に至る道があつた。

なお、猪名川通船は天明4年に許可されたが、雲正坂下の着船場は文化14年(1817)に出願、文政2年(1819)閏4月、伝送衆を通じ幕府に伝えられ(「有岡庄年代秘記」『市史』第4巻)、同3年に初めて許可された(「難波津山荷物を神崎に切替の儀難波村問屋共難波に付きこれまで通りとされた



第5図 「天保15年伊丹郷町分間絵図」解説図(部分)

『伊丹古絵図集成』より(●が調査地点)

き願い」小西新右衛門文書〈近世〉II33、「御領下御触書留」同V328)。ただし、「寛政8年(1796)伊丹細見図」(『伊丹古絵図集成』所収)によれば坂下から東に伸びる「桑津道」沿いに「木場」があり、「文化10年飛鳥井・雲正下分間絵図」(同書所収)でも坂下を流れる猪名寺井沿いに「船役人屋敷」「船番所」と「積荷蔵」2ヵ所が描かれているので、文政以前にも高瀬船の荷物を扱う場は一定整備されていたことがわかる。

(和島恭仁雄)

## 第2章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査の経緯

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災により伊丹市内にも大きな被害が生じた。建物の損壊や倒壊は全市的に発生したが、有岡城跡・伊丹郷町遺跡が所在する中心市街地も同様である。中心市街地は、有岡城の城下町に端を発する古くからの町場で、江戸時代には清酒醸造の一大生産地として栄え、江戸後期には85軒もの造り酒屋が軒を並べていた。明治以降の清酒生産の衰微に伴い酒蔵の数は激減していったが、現在でも江戸時代から明治時代にかけての酒蔵建築が残っており、中でも延宝2年(1674)に建築された旧岡田家住宅・酒蔵は、年代の明らかな現存最古の酒蔵建築として平成4年に国の重要文化財に指定されている。

今回の発掘調査の対象地には、震災直後まで江戸時代末期建築と推定される酒蔵が建っていた。この酒蔵は地元の小西酒造株式会社が保有する江戸時代以来の伝統ある酒蔵で、小西酒造が取得して後は富士山蔵と呼ばれていた。戦時中に酒造統制が行われる前までは、小西酒造(9蔵)の主要酒蔵として稼動していたが、昭和18年「戦力増強企業整備要綱」に基づく「清酒製造業整備要綱」により清酒醸造を休止に追い込まれた。この要綱では、清酒製造の整備のため、操業を続けるもの、将来の需給関係の変動に備え保有するもの、軍需工場等に転用するもの、廃止するものの4区分が定められ、富士山蔵は保有製造場として当面は清酒醸造が休止されることとなった。ところが、戦後の清酒醸造規制の撤廃以後も酒蔵としての利用が行われず、大きな空間を擁する酒蔵建築の特性を活かして倉庫などの利用が続けられてきたのである。震災後に取り壊されることとなり、その跡地に共同住宅建設が計画され、共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘届出が平成9年11月6日付けで提出された。

震災後の震災復旧・復興事業に関しては、開発事業に伴う発掘調査においても特別な措置が図られた。この発掘調査についても、被災住民に住宅を供給する事業の位置付けがなされ、国庫補助事業による発掘調査の実施となった。こうした事情により、いち早く被災住民に安定した住宅供給を促進する趣旨で、当該物件についても酒蔵建築の解体作業が完了した範囲から順次本発掘調査の実施に踏み切ることになった。

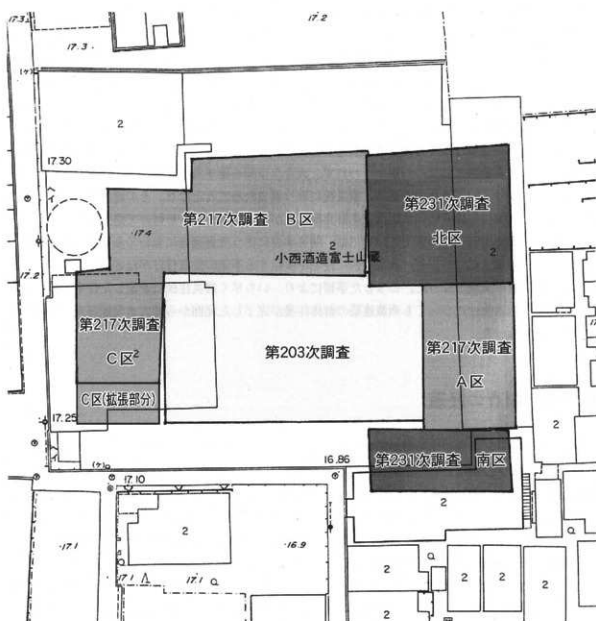
### 第2節 調査の経過

平成9年11月6日に埋蔵文化財発掘届出が提出されてから届出者と協議を重ね、さらに発掘調査の事業費の算出および掘削業務と測量業務の委託先の選定などを行って、翌年2月16日から現地での発掘調査を開始することに決定した。開発計画では3600m<sup>2</sup>の敷地に、建築面積1434m<sup>2</sup>の共同住宅を建設するというものであった。しかし、現地にはすぐには解体できない酒蔵関係の建物が残っていたため、その範囲については建物解体後に発掘調査を実施することとした。最初の調査が有岡城跡・伊丹郷町遺跡第203次調査である。調査期間は平成10年2月16日から年度末の3月31日までとした。

第203次調査に先立ち、先ず当地点の遺跡の状況や土層の堆積状況を把握するため、敷地中央部の3ヵ所の試掘調査を実施した。この結果、当地点には3層の調査すべき構面が存在することがわかり、この成果に基づいて本発掘調査を実施した。第203次調査の範囲は敷地中央部の700m<sup>2</sup>を対象とした。

2回目の調査が第217次調査で、平成10年12月21日から翌年3月31日までの間に実施した。調査範囲は、第203次調査の東側（A地区）と北西部（B地区）、西側（C地区）で、調査面積は1100㎡である。

当初の計画では、203次・217次調査をもって本発掘調査を終了する予定であったが、届出者から建築計画の変更の申し出があり、平成11年11月24日付で設計変更に伴う埋蔵文化財発掘届出書が提出された。この設計変更は、当初計画より北東部と南東部に建築範囲を広げるものであった。この届出に基づき、未調査部分の500㎡を追加調査することになった。この調査が第231次調査である。調査期間は平成12年2月1日～4月30日である。



第6図 第203・217・231次調査 調査区設定図

## 第3節 調査日誌抄

## (第203次調査)

- 平成10年 2月16日 確認調査を開始する。2m×2mのトレンチを3ヵ所設定する。
- 17日 確認調査の結果、3層（第1～3遺構面）の調査をすることを決定する。
- 18日 本発掘調査開始。重機掘削本日より20日まで行う。
- 18日 調査区南東隅から重機掘削を開始する。礎石や埋桶を確認する。
- 20日 調査区中央部から酒造用竈に使用されていたと見られる多数のレンガが出土する。
- 21日 第1遺構面検出作業開始。
- 23日 ベルトコンベアー搬入。
- 25日 第1遺構面の遺構検出作業を終了する。
- 26日 第1遺構面掘削前写真撮影。第1遺構面遺構掘削作業始める。
- 27日 レンガ竈東側から槽場遺構（SX1など）を検出する。
- 3月2日 江戸時代の酒造用竈（竈1）の掘削を始める。
- 3日 男柱5（SX4）は柱を抜き取っていないことが判明する。
- 6日 第1遺構面クレーンによる空掘。平面実測開始。
- 10日 第2遺構面へ掘下げ開始。中世の瓦器と埴輪片が出土する。
- 14日 第2遺構面掘削前写真撮影。
- 16日 第2遺構面遺構掘削作業開始。
- 18日 溝16（SD16）、溝17（SD17）の掘削を行う。
- 19日 土坑106（SK106）から鉄滓、瀬戸美濃の灰釉皿、丹波焼播鉢などが出土する。
- 21日 第2遺構面クレーンによる空掘。平面実測始める。
- 23日 第3遺構面へ掘下げ開始。
- 26日 第3遺構面掘削前写真撮影。遺構掘削始める。
- 28日 堀状遺構（SX20）の掘削を行う。
- 31日 第3遺構面クレーンによる空掘。平面実測終了。発掘作業終了。

## (第217次調査)

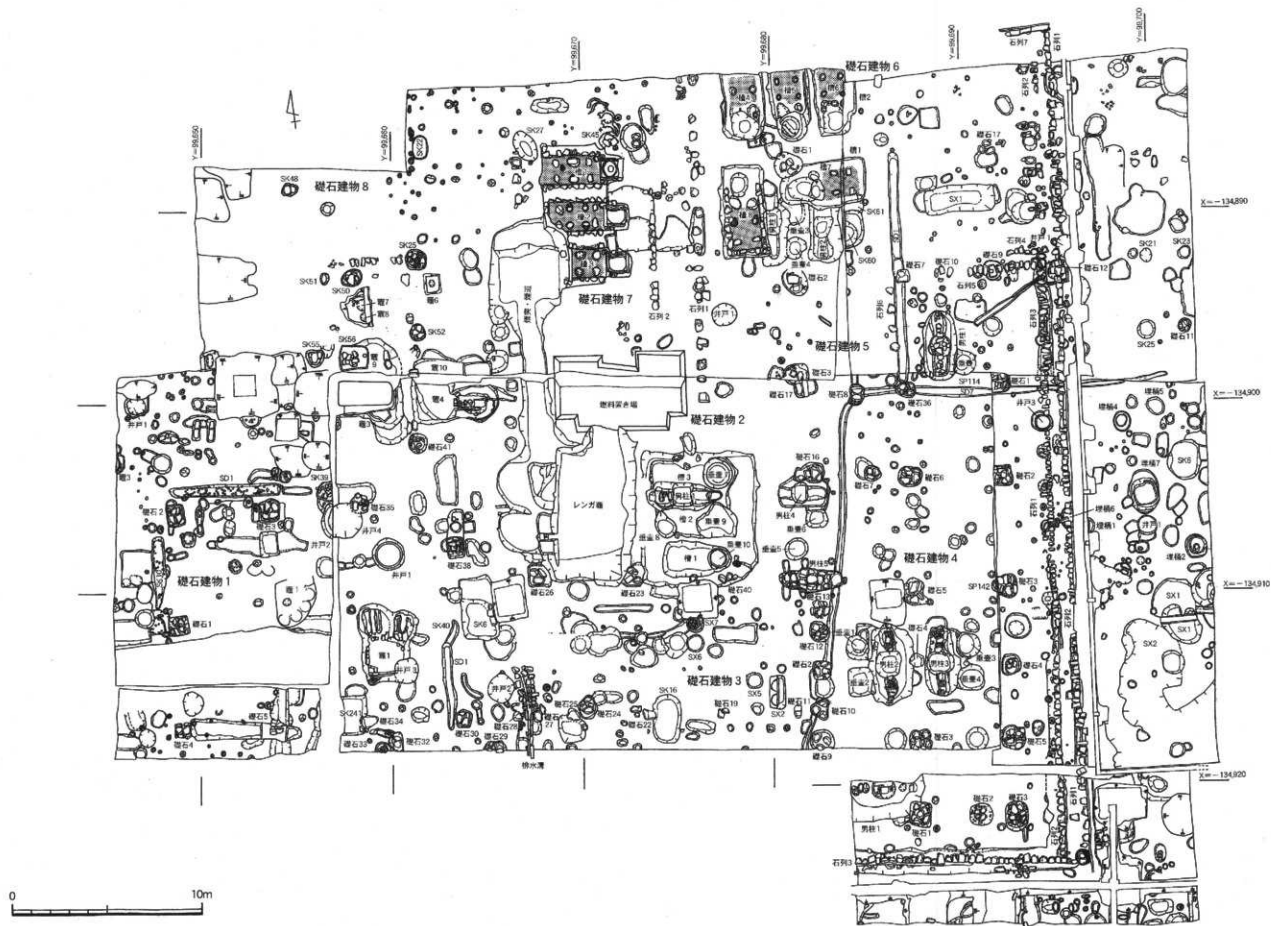
- 平成10年 12月21日 本発掘調査開始。
- 22日 重機掘削開始。
- 25日 B区にて近代の槽場発見される。
- 1月6日 ベルトコンベアー設置。
- 13日 第1遺構面掘削前写真撮影。
- 14日 第1遺構面の遺構掘削始める。
- 26日 A区全景写真撮影。
- 28日 B区全景写真撮影。
- 2月3日 C区全景写真撮影。
- 4日 A区、第2遺構面へ掘下げ開始。
- 18日 B区、第2遺構面へ掘下げ開始。

- 25日 瓦溜りから出土した瓦が1500年前後の時期と鑑定される。
- 27日 親子発掘体験講座を行う。
- 3月2日 A区、第3遺構面へ掘下げ開始。
- 11日 A区、第3遺構面掘削前写真撮影。C区、第2遺構面全景写真撮影。現地説明会に向けて記者発表を行う。
- 13日 B区、第3遺構面へ掘下げ開始。
- 24日 A区、第3遺構面全景写真撮影。
- 27日 現地説明会開催。
- 29日 A区にて古墳周濠検出。
- 31日 発掘作業終了。

**(第231次調査)**

- 平成12年 2月1日 事務所開設。
- 2日 重機掘削北区から開始。
- 3日 北区の重機掘削終了し、遺構検出作業を始める。
- 9日 北区、石列の写真撮影を終了し、平板実測を行う。
- 16日 北区、第1遺構面掘削前写真撮影。南区、重機掘削開始。
- 17日 北区、第1遺構面遺構掘削開始。
- 29日 北区、第1遺構面全景写真撮影。
- 3月3日 北区、第2遺構面へ掘下げ開始。
- 21日 南区、第2遺構面へ掘下げ開始。
- 29日 北区にて池状遺構の全形が明らかになる。
- 30日 北区、第2遺構面全景写真撮影。南区、第2遺構面掘削前写真撮影。
- 31日 池状遺構から中国製白磁皿、染付碗、羽釜などが出土する。
- 4月7日 南区、第2遺構面全景写真撮影。北区、池状遺構の実測始める。
- 10日 北区、池状遺構北側に調査区を拡張する。
- 11日 南区、第3遺構面へ掘下げ開始。
- 14日 南区、第3遺構面掘削前写真撮影。北区、池状遺構の拡張部の調査を始める。
- 18日 池状遺構の瓦出土状況の写真撮影。
- 19日 南区、第3遺構面全景写真撮影。
- 20日 池状遺構から鬼瓦と天目碗が出土する。
- 22日 北区西側、第3遺構面全景写真撮影。
- 25日 北区、古墳周濠から円筒埴輪と須恵器が出土する。
- 27日 北区にて古墳周濠（SD35）を検出する。
- 28日 北区東側、第3遺構面全景写真撮影。
- 南区、壁面の写真撮影後に埋め戻し始める。
- 北区、古墳周濠全景写真撮影。
- 北区、古墳周濠の平面実測を終了する。
- 30日 発掘作業終了。

(小長谷正治)



第7図 第203・217・231次調査 第1面全体図





第8図 第203・217・231次調査 第2面全体図



第9図 第203・217・231次調査 第3面全体図

## 第3章 発掘調査の成果

### 第1節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第203次調査

調査面積 700㎡

調査期間 確認調査：平成10年2月16日～2月17日

本発掘調査：平成10年2月18日～3月31日

調査担当者 小長谷正治 岡野理奈

#### 1. 調査の概要

当地点の発掘調査は、酒造会社が所有していた江戸時代以来の酒蔵が震災で被災し、後に解体されて共同住宅が計画されたため、事前調査として行ったものである。酒蔵建物の解体が一度に行われなかったため、最初に解体が行われた範囲の発掘調査から始めたものである。今回の第203次調査を第1回目として、この後第217次調査、第231次調査と続いている。

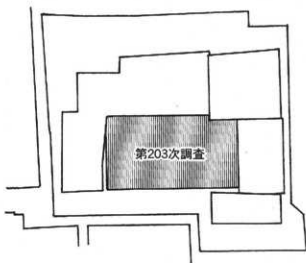
当地点は、有岡城の本丸のある主郭部から北西に200mに位置し、荒木村重が城主となった天正2年(1574)～同7年の間には侍町に属していたと考えられる。当地点周辺部では、これまでに本格的な発掘調査は行われていないため、具体的に侍町を示すような遺構は確認されていないが、町屋と侍町を画する大溝筋(堀)の内側にあたることから、侍町の遺構の存在が期待されていた。

廃城後の江戸時代は、しばらくの間は空地になっていたことが「寛文9年伊丹郷町絵図」(第4図)などから推測され、その後伊丹郷町の酒造業の発展に伴い、町場になっていったと考えられる。当地点が湊町と呼称されるようになるのは元禄年間(1688～1704)であるので、寛文9年から元禄年間にかけて当地点周辺が町場化していったものであろう。しかし、発掘調査の結果では元禄年間に遡るような遺構も陶磁器などの遺物も出土せず、古くて18世紀中頃であり、湊町でも奥まった場所にあたる当地点の町場化はやや遅れたものとみられる。

調査の結果、第1面では江戸時代後期から近代まで続いた酒蔵遺構が検出された。酒蔵は広大な敷地に酒造工程に沿って多様な建物が配置される。明治時代の酒蔵絵図面(第186図)によると、今回の調査範囲は、「店舗」と「洗い場・釜屋」、「仕込蔵(大蔵)」の施設が建っていた場所にあたる。なお、酒蔵は酒造技術や生産量の増大などにより施設の配置転換や建替え、増築などが度々行われるものであり、絵図面が残されていない江戸時代のような発掘調査によらねばならない。敷地を3回に分けて調査をしているので、酒蔵の全体像に関しては後章で述べることにする。

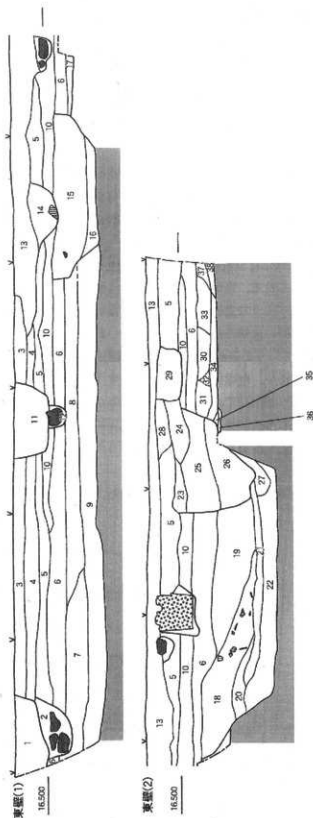
第2面と第3面に関しては、有岡城の侍町に関する遺構も検出されたが、むしろそれより古い伊丹城段階の遺構が主に検出された。

第2面で検出した南北方向の溝(SD16・22)



第10図 調査区設定図(1/1000)

第11図 東壁土層断面図



1. 10764/4褐色粘質土層 (2~3cmの硬さを持つ)
2. 10764/4褐色粘質土層 (0.5cmの硬さを持つ)
3. 10764/4褐色土層 (硬さなし、層状での層、互角状)
4. 10764/4褐色粘質土層 (0.5cmの硬さを持つ)
5. 10764/4褐色粘質土層 (0.5cmの硬さを持つ)
6. 10764/4褐色粘質土層 (0.5cmの硬さを持つ)
7. 10763/4褐色粘質土層 (1~5cmの硬さを持つ)
8. 10763/4褐色粘質土層 (3~10cmの硬さを持つ)
9. 10763/4褐色粘質土層 (硬さ多く含む、5cm以下)
10. 10764/4褐色粘質土層 (0.5cm又は0.5cmの層、互角状)
11. 10764/4褐色粘質土層 (0.5cm又は0.5cmの硬さを持つ)
12. 10764/4褐色粘質土層 (0.5cmの硬さを持つ)
13. 10763/4褐色粘質土層 (硬さ多く、5cmの硬さを持つ)
14. 10764/4褐色粘質土層 (互角状)
15. 10762/4褐色粘質土層 (互角状、硬さ多く含む、硬さなし)
16. 10764/4褐色粘質土層 (0.5cmの硬さを持つ)
17. 10764/4褐色粘質土層 (0.5cmの硬さを持つ)
18. 10765/4褐色粘質土層 (3~5cmの硬さを持つ、互角状)
19. 10765/4褐色粘質土層 (硬さ多く、5cmの硬さを持つ)
20. 10764/4褐色粘質土層 (0.5cmの硬さを持つ)
21. 10764/4褐色粘質土層 (硬さ多く、0.5cmの硬さを持つ)
22. 10764/4褐色粘質土層 (0.5cmの硬さを持つ)
23. 10764/4褐色粘質土層 (0.5cmの硬さを持つ)
24. 10765/4褐色粘質土層 (互角状、互角状)
25. 10765/4褐色粘質土層 (硬さ多く、互角状)
26. 10765/4褐色粘質土層 (硬さ多く、互角状)
27. 10765/4褐色粘質土層 (硬さ多く、互角状)
28. 10764/4褐色粘質土層 (硬さの硬さなし、互角状)
29. 10764/4褐色粘質土層 (硬さ多く、5cm、硬さの硬さを持つ)
30. 10764/4褐色粘質土層 (0.5cm以下の層、硬さなし、硬さなし)
31. 10764/4褐色粘質土層 (硬さ、0.5cm以下の層、硬さなし)
32. 10764/4褐色粘質土層 (硬さ、0.5cm以下の層、硬さなし)
33. 10765/4褐色粘質土層 (硬さなし、硬さなし)
34. 10764/4褐色粘質土層 (硬さなし、硬さなし)
35. 10764/4褐色粘質土層 (0.5cm以下の層、硬さなし)
36. 10765/4褐色粘質土層 (0.5cm以下の層、硬さなし)
37. 10765/4褐色粘質土層 (0.5cm以下の層、硬さなし)
38. 10765/4褐色粘質土層 (0.5cm以下の層、硬さなし)



は敷地の区画を示すものと考えられ、重要な発見である。また、第3面で検出した溝跡とは方向が異なるといった新たな知見も得られた。

#### 調査方法

確認調査は、調査対象範囲に8mの間隔において2×2mの試掘坑を3カ所設定して実施した。その結果をもとに、本発掘調査は3面の遺構面を調査することとし、表層は重機によって掘削を行い、それ以降は人力によって掘り下げることにした。

遺跡の測量は基準点測量を実施し、国土座標に合わせて調査区に5m方眼の測量杭を設定した。また、水準点の測量を実施し、遺構面の実測や遺物の取り上げにはこれを用いた。遺跡の全景写真にはクレーンを用いて、垂直写真の撮影を行った。

## 2. 基本層序と遺構面

### 調査区域の地形

現状の敷地は酒蔵解体時に整地され、発掘調査の障害になるものはすべて取り除かれていた。整地後の地形は平坦で、地表面の標高はT.P.+17,000mから高い場所でも17,300mであった。当地点の東側70~80mで伊丹段丘の急崖になるが、現状では全くの平坦地に整形されて土地利用が行われていた。しかし、最終遺構面である地山面まで掘り下げると平坦ではなく、地形は北から南へ、西から東へと標高が下がっていた。もともと地形的に高い北西隅の地山面の高さは16,450m、最も低い南東部の高さは15,900mであった。第1面から第3面の設定に際しても、同じ土層を追っていくと西側から東側へと下がっていく傾向が認められた。その各遺構検出面の西側と東側の比高差は、第1面で30cm、第2面で20cm、第3面で55cmである。

### 調査面の設定

本発掘調査前に確認調査を行って土層の堆積と遺構面の存在を確認した。それによると、当地点には、最下層の地山面上にもっとも古い遺構面が、地表面と表土下に江戸時代後期以来の酒蔵に関係する遺構面があり、その間にも遺構が存在する文化層が確認された。こうした事前の情報から調査に際しては、3段階に分けて調査を行うことにした。

#### 第1面 (第13図 図版1)

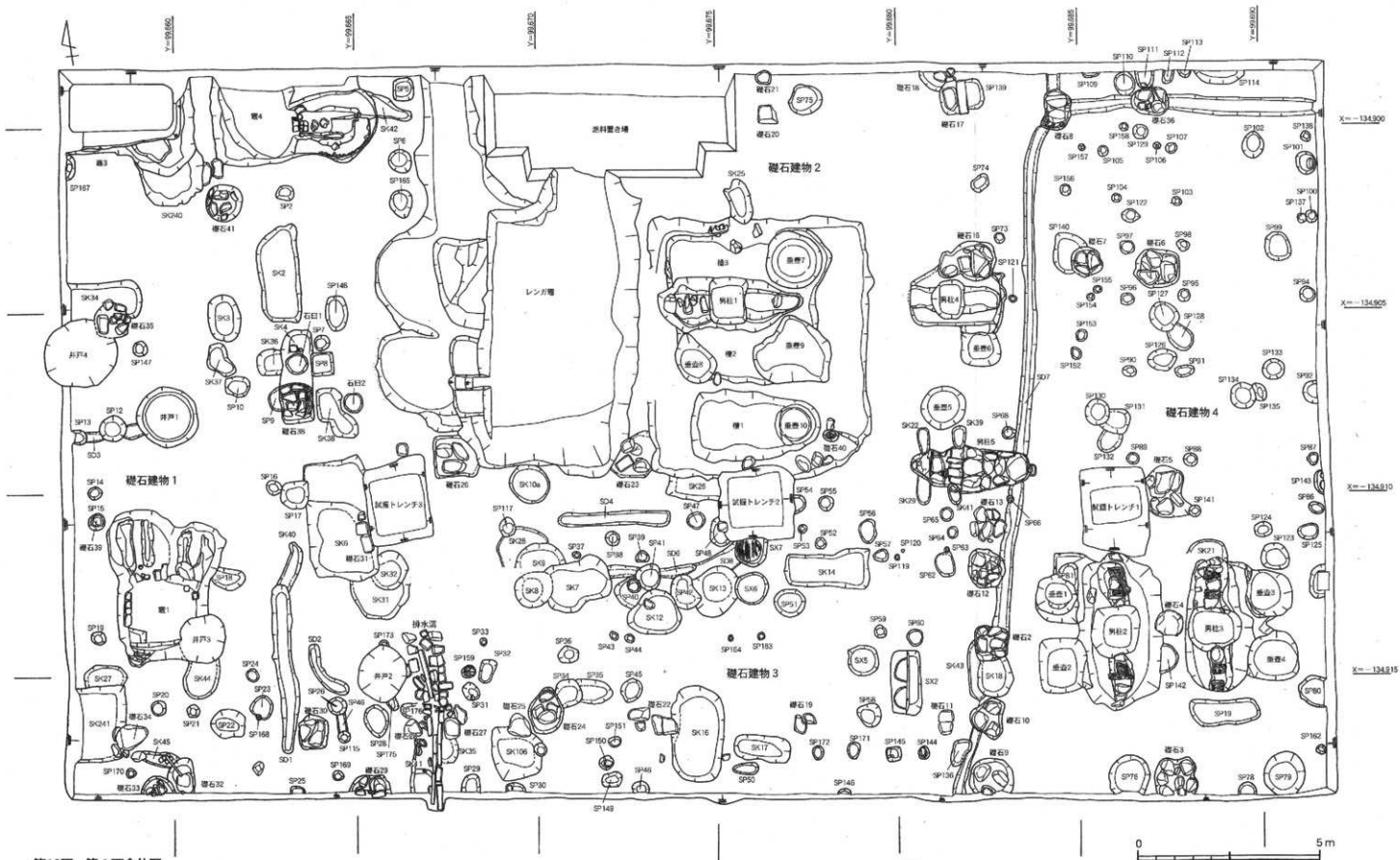
第1面の酒蔵遺構に関しては、調査前まではもっとも古いもので江戸時代末期という建築物も建っていた。こうした状況から、酒蔵遺構の調査については地表面から行う必要もあったが、酒蔵建築物の解体時に地表下数10cmまでは攪乱されていることが常であるので、調査区全体にわたり重機を用いて掘り下げを行った。その際には酒蔵礎石などはなるべく重機掘削で取り除かないように慎重に行った。第1面の標高は概ねT.P.+16,500~16,800mに合わせた。第1面の遺構と層序との関係では、第1面検出遺構の多くは地表近くから掘り込まれたものであり、第1面から掘り込まれた遺構ではない。

#### 第2面 (第32図 図版6)

第1面から30~40cm程度人力で掘り下げ、T.P.+16,200~16,400mを第2面とした。第2面検出の遺構掘り込み面と土層の関係を見てみると、北壁では46層(褐色土層)・57層(黄褐色土層)・6層(明暗褐色砂礫層)の上面、東壁でも6層上面が遺構の掘り込み面となっている。また、南壁では10層(褐色粘質土層)・64層(褐色粘質土層)・88層(褐色粘質土層)、西壁でも88層が遺構の掘り込み面となっている。

#### 第3面 (第46図 図版9)

伊丹段丘の基盤層である黄褐色土層(地山)の上面を第3面とした。この層は、場所によっては礫



第13図 第1面全体図

層が露出する。第3面の遺構と土層との関係を見ると、北壁では77層（にぶい黄褐色粘質土層）、南壁では38層（黄褐色粘質土層）の上面、その他では地山面からの掘り込みである。

### 3. 調査成果

第203次調査では、第1面から第3面の3層の調査を行った。第1面は、近世から近代にかけての酒蔵跡、第2面は15～16世紀を中心とする伊丹城期から有岡城期にかけての溝跡や柱穴、第3面はそれ以前の鎌倉～室町時代に相当する。

#### 第1面

##### 建物跡

調査区内から多数の礎石および礎石下の基礎石（根石）が見つかった。これらの並び方や明治以降に作成された酒蔵の絵図面を参考にして建物の復原を試みた。第1面で検出された建物跡はすべて酒蔵に関係するものと考えられる。伊丹郷町の酒蔵には、酒造に関わる施設として工程順に、臼家（精米工程）、洗い場（洗米工程）、釜屋（蒸米工程）、仕込蔵・大蔵（仕込み工程）、槽場（圧搾工程）、澄し蔵（貯蔵工程）などがある。これに麹を作る麹室や原料の米を貯蔵する米蔵、さらに酒造家や杜氏など蔵人が居住する居宅がある。酒蔵によっては、洗い場・釜家が居宅空間に付設され、個別の建物が設けられない場合や、槽場が仕込蔵の一面に付設される場合、独立した澄し蔵が設けられる場合などがある。これらの違いは、酒蔵の規模や醸造規模によるものと考えられ、規模の小さい酒蔵の場合、一つの建物に複数の機能を持たせてある場合が多い。また、長年にわたって使用された歴史ある酒蔵は、その間に建物の建替えや酒造施設の改良、場所の移動などがあって、その変遷を検証する必要がある。



4



礎石35



礎石38

今回の第203次調査を含め3回に分けて発掘調査を行った結果、ひとつの建物を3回の調査で検出した場合もあり、酒蔵の全体像がつかみ難いと思うが、これについては後章でまとめて説明をすとして、本章では建物の事実関係を中心に説明しておきたい。

今回の第203次調査を含め3回に分けて発掘調査を行った結果、ひとつの建物を3回の調査で検出した場合もあり、酒蔵の全体像がつかみ難いと思うが、これについては後章でまとめて説明をすとして、本章では建物の事実関係を中心に説明しておきたい。

#### 礎石建物1（第7・14図 図版2）

この建物は、酒蔵の店舗兼居宅に相当する。建物の正面から中ほどにかけては第217次調査で調査している。第203次調査では礎石30・34・35・38が関係する。礎石35と礎石30・34の間には広い土間が作られている。この土間は釜家と洗い場を兼ねていたと考えられる。この建物の背面の壁通りは、礎石30の東側の排水溝あたりと考えられるが、壁が設けられていた痕跡は見つからなかった。礎石建物1の背面の壁は取り払われて背後の礎石建物2・3に続く広い空間が作られていた可能性もある。



礎石34



礎石30



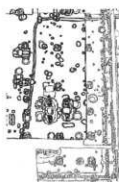
第14図 礎石建物1平面図



礎石としているものは、すべて礎石下部の基礎である。伊丹郷町の酒蔵の主要建物の礎石は、その下部に方形の掘り方があり、大型の石を用いて基礎が作られている。掘り方の規模は概ね1m四方で、中に30～50cm大の石を積み上げたものである。

### 礎石建物2 (第7・13図 図版2)

この建物は、蒸米工程に使用された釜家である。江戸時代の釜家はこの場所ではなく、竈1のある



第15図 礎石建物4平面図

礎石建物1の土間が兼ねていた。この場所に釜家が設けられた時期は、明治19年作成の「酒造場絵図面届書写」にすでに描かれており、建築時期はそれより前であることは明らかであるが、19世紀前半までの釜家は竈3と竈4のある場所に建てていたと考えられることから、礎石建物2の建築時期は幕末以降明治19年以前となる。明治37年絵図面では、釜家は4間1分×2間半の建物に4間1分×5間の建物が続いている。昭和36年の航空写真でも、東西に長い平屋の建物が写っている。

この建物の礎石は、礎石26とその東に続く礎石23・礎石40と考えられるが、それに対する北側の礎石が確認できていない。3ヵ所の礎石の距離は心で5mの等間隔である。

### 礎石建物3 (第7・13図 図版2)

酒蔵絵図面によると、この建物は明治37年にはなく、この場所の大半は空地になっていたが、同42年には酒造場が建てられている。この建物は同44年には「澄し蔵」として使用されていた。東西に長い平屋の建物で、2間8分×7間半の規模であった。この建物に関する礎石は、礎石11・19・22・25・27が考えられ、その間隔は2間、4間、4間、1間である。

### 礎石建物4 (第7・15図 図版2)

この建物は、敷地のもっとも奥に建てられた酒造蔵で、仕込蔵とも大蔵とも呼ばれる。

明治19年の届書写には、「二階附酒造場」と記され、同37年絵図面によると南北に長い6間2分×11間8分の規模であったことがわかる。桁行11間8分は、京間の1間(6尺5寸=197cm)で換算すると、23.246mになり、梁行は6間2分で12.214mになる。南北の妻

側には下屋はなく、東側に下屋が設けられていたことが昭和36年の航空写真で確認できる。西側に下屋がないが、元からなかったのか、あるいは後に礎石建物2、礎石建物3をつなぐ必要から取り払われたのか不明である。この建物の大半は第203次調査で検出したが、南側の一部は第231次調査、東側の一部は第217次調査で検出した。復原すると柱通りは南北方向に3列あり、3間の間隔である。第203次調査では西列（礎石17・16・13・2・9）と中央列（礎石36・6・5・4・3）を検出した。中央列と西列ともそれぞれの礎石の間隔が異なっている。

付属施設に槽場（男柱2・3）がある。礎石西列の間に位置する槽場（男柱4・5）がこの建物に伴うのか今ひとつ不明確であるが、礎石16を北側に、礎石13を南側に位置をずらしているところを見ると、この建物の当初の槽場であると考えられることもできる。

## 酒造用竈

### レンガ竈（第7・13・16図 図版10）

レンガ竈は同じ場所で何度かの改修が行われている。この場所に釜屋が設けられたのは明治19年以前で、その後は昭和18年の酒蔵稼働休止まで一貫してこの場所が釜屋として使用されている。検出された竈は、酒蔵休止以後に徹底して破壊されており、竈の構造を知る手がかりは少ない。ただ、竈の掘り方と焚口の掘り方、および煙道と燃料置き場が残っていた。また、掘り方には竈や煙道に使用された耐火レンガが多数埋め込まれていた。したがって、最終段階の竈はレンガを使用した竈で、燃料は石炭であることがわかった。この最終段階のレンガ造りの竈をレンガ竈と呼称し、僅かに痕跡がある前段階の竈も合わせて説明しておきたい。

竈の構造は、2基一組（2基連基型）の半地下式で、竈の掘り方の規模は、北側が直径約3m、南側が同2m、深さ56～67cmである。焚口は東側に開口し、焚口部は長方形を呈し、その規模は南北7m、東西4.3m、深さ1.43mである。焚口部の北側は燃料置き場（石炭入れ）とつながっている。燃料置き場は、平面形が隅入りの長方形で、壁面は砂漆喰を貼って仕上げている。燃料置き場の北側を第217次調査で検出している。再調査で明らかになった規模は、東西7m、南北4m、深さ1.7mである。

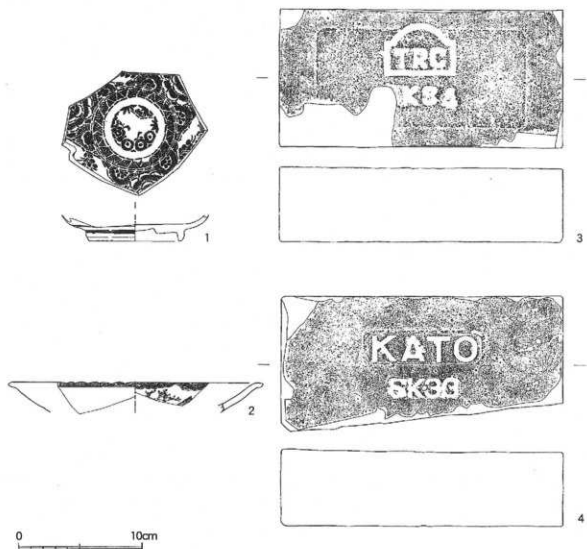
竈の掘り方の底に、前段階の竈の掘り方が残っていた。それによると、前段階の竈もレンガ造りで、1.5mほど東側にあった。

出土遺物は、型紙摺りの文様を施す染付皿（1）と銅版転写で文様を施す染付皿（2）、耐火レンガ（3・4）が出土した。（3）の耐火レンガには「TRC」の商標と耐火度を示す「SK34」が刻印されている。（4）には「KATO」の商標と「SK33」の文字が刻印されている。燃料置き場からも型紙摺りの染付碗（5）などが出土している。

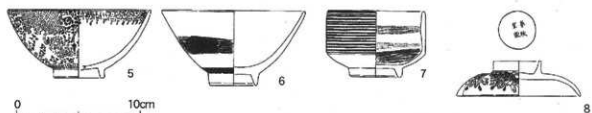
### 竈1（第7・18～20図 図版3・10）

この竈は、礎石建物1の土間中央に位置している。大小2基の竈を一組（2基連基型）にした酒造用の竈で、地面を掘り込んで作られた半地下式構造である。焚口から見て左側が大型、右側が小型の配置になっている。焚口の手前には方形の作業場（焚口部）が続いている。規模は、左の竈が奥行1.94m、幅1.90mの円形、深さは1.14mである。右側の竈は奥行1.65m、幅1.17mの長楕円形を呈し、深さはやや浅く1.06mである。竈の内壁には、石組みの痕跡はなく、粘土を貼っていたと思われるが、それも崩れて残っていなかった。火床には凝灰岩の切石を2列に埋め込んだ灰の掻き出し溝があり、その一部の石が並んだ状態で発見された。焚口部の西側の壁面下部にも切り石が並んでおり、壁面に石垣が組まれていた可能性がある。また、焚口の南西隅には階段状の掘り込みが残っていた。

肥前陶器刷毛目文碗（9）は内外面に刷毛目を施している。京焼系陶器灰輪碗（11）は高台裏に

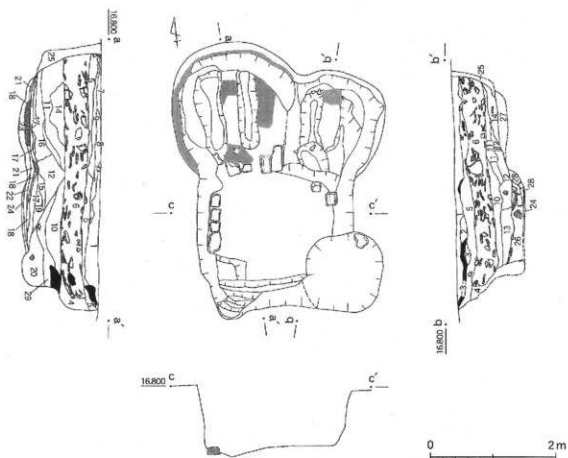


第16図 レンガ産出土遺物



第17図 燃料置き場出土遺物

「マセハ(カ)」の文字が墨書され、肥前陶胎染付碗(10)の外面には山水文が描かれている。肥前磁器としては、草花文碗(12)と染付皿(13)が出土した。これらの出土遺物から、竈1は18世紀中頃まで使用されたと推測される。

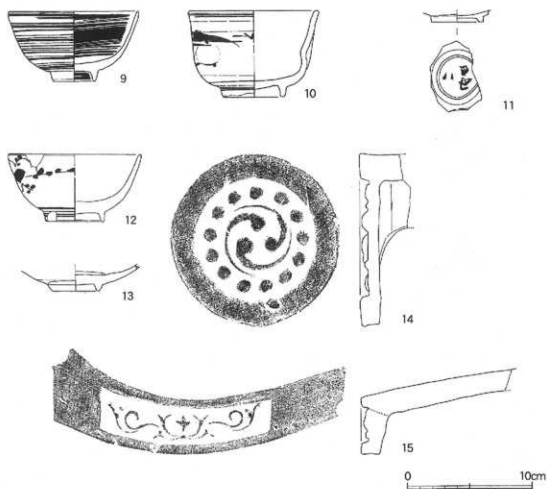


- |  |                             |
|--|-----------------------------|
| 1. 25Y5/6黄褐色粘質土層(炭混じり)                           | 16. 25YR4/6赤褐色細砂層           |
| 2. 25Y5/3黄褐色粘土層                                  | 17. 25Y5/2暗灰黄色粘質土層          |
| 3. 5Y5/3灰オリーブ色粘土層                                | 18. 25Y3/1黒褐色細砂層            |
| 4. 25Y4/6オリーブ褐色シルト層                              | 19. 5Y5/2灰オリーブ中砂層           |
| 5. 10YR4/6褐色土層(炭混じり)                             | 20. 5Y5/4オリーブ色微砂層           |
| 6. 瓦割  | 21. 25YR4/1赤灰色細砂層           |
| 7. 10YR4/4褐色土層(炭多く混じる、互含む)                       | 22. 25Y6/2灰黄色細砂層(炭・流土多量に含む) |
| 8. 25Y5/4黄褐色シルト層                                 | 23. 10YR5/8赤色砂礫層            |
| 9. 25Y4/6オリーブ褐色シルト層                              | 24. 25YR4/1黄灰色細砂層           |
| 10. 25YR5/8明赤褐色粘質土と5Y6/3オリーブ黄色粘質土の互層<br>(炭・流土含む) | 25. 25YR8/8褐色シルト質土層         |
| 11. 10よりも25YR5/8明赤褐色粘質土層の割合が多い                   | 26. 5Y6/3オリーブ黄色粘質土層(焼土若干含む) |
| 12. 5YR5/6明赤褐色粘質土層(炭含む)                          | 27. 10YR5/8黄褐色シルト質土層        |
| 13. 5Y6/3オリーブ灰色粘質土層(やや焼土混じり)                     | 28. 25YR8/2灰赤色シルト質土層        |
| 14. 7.5Y6/2灰オリーブ色中砂層(2~7cm大の礫含む)                 | 29. 25Y4/6オリーブ褐色シルト層        |
| 15. 5YR3/2暗赤褐色中砂層                                |                             |

第18図 竈1平面・断面図

## 竈3 (図版3)

竈3は調査区の北東隅、礎石建物1の北側に位置する。近代の鉄製タンクに主要部分を破壊されていたが、竈が半円形に残り、その横(西側)にもう1基の竈が連なっていたことから、2基一組(2基連基型)の酒造用の竈と推測した。今回の調査では全体の規模や構造は不明だったが、後に北側で



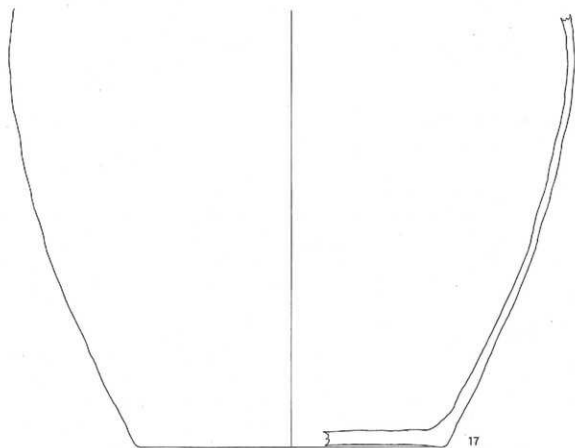
第19図 竈1出土遺物(1)

行った第217次調査でこの竈の焚口部(第217次調査では竈9)を検出し、規模が明らかになった。その成果も含めて述べると、竈3は焚口が北側に開口した2基一組のタイプで、竈から焚口部までの全長は4.9m、焚口部の幅3.52m、深さ50~60cmである。東側竈の直径は約1m、灰掻き出し溝の有無は不明である。詳しくは第2節(第217次調査)を参照していただきたい。

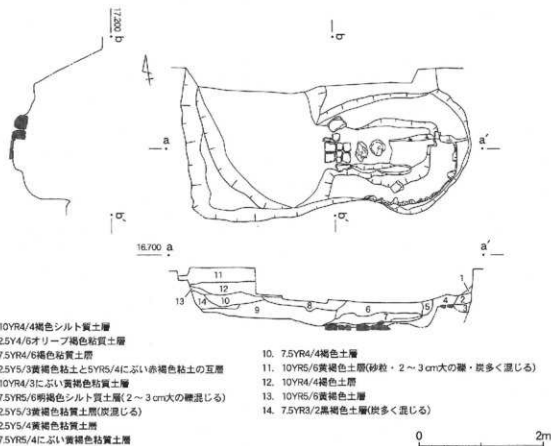
#### 竈4(第21図 図版3)

竈3の東側に位置する。竈3とは切り合い関係にはない。竈の北側は、後に行った第217次調査B区で検出している(竈10)。その成果を合わせると半地下式の2基一組(2基連基型)の竈と判断される。今回の調査で検出した部分は、2基の竈のうち南側竈と、その西側に開口した焚口部である。南側の竈は、奥行きが2.35m、幅が1.93mで、掘り方の内側を粘土と一辺20~30cm大の石を積み上げて釜壁を構築している。底面の中央には灰の掻き出し溝が作られている。竈の深さは94cmで、焚口部に向かってやや浅くなる。灰の掻き出し溝には、両側面と底に方形の石を並べ、その規模は長さ1.06m、幅30cm、深さ20cmである。焚口部には床面に薄く炭が堆積していた。

両調査で明らかになった規模は、全長が4.77m、焚口部の幅3.56mである。詳細については第2節(第217次調査)を参照していただきたい。遺構の時期を示す遺物は、両調査ともに出土していない。



第20図 甕1出土遺物(2)



第21図 竈4平面・断面図

### 槽場

この調査で検出された酒の搾り場（槽場）は8基で、礎石建物2に属するものは男柱1と槽1~3、礎石建物4に属するものが男柱2と男柱3、男柱4と男柱5である。酒の压榨工程は、男柱を立ててテコの原理で搾る方法から、近代になって機械式に搾る方法に替わっていく。木製の槽を使用することは同じであるが、男柱を用いない方法では、槽を土間より一段掘り下げた半地下の場所に据えるなどの変化がある。詳しくは第4章で説明するが、名称としては男柱を用いた搾り場を男柱、用いないものを槽とした。ともに、垂壺という一時的に酒を溜める遺構が伴っている。

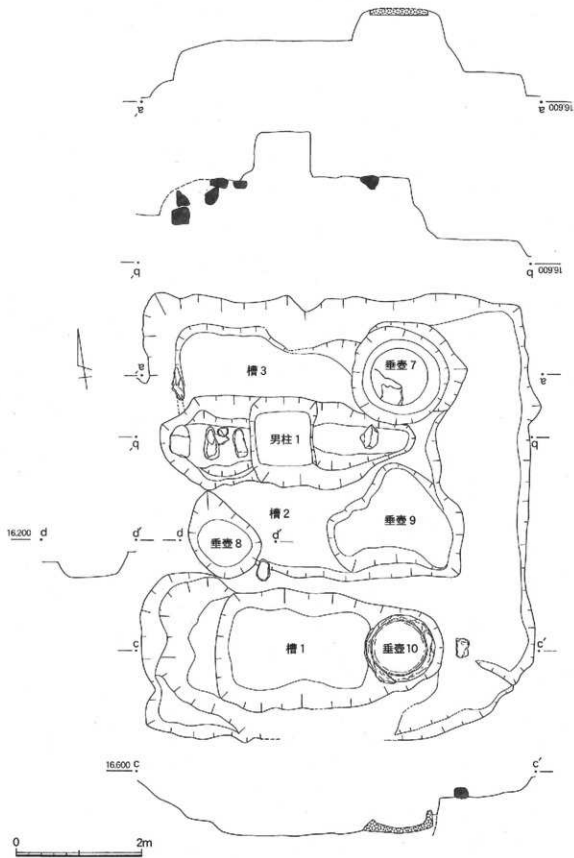
#### 槽1（第22図 図版4）

槽1は、男柱を用いない槽場施設で、北側にある槽2と並んで位置する。おそらく同時に使用されたものであろう。上部が大きく削平されているため遺存状態が悪いが、酒槽を土間より一段掘り下げた場所に据える半地下式の構造である。その東側に垂壺が設けられている。垂壺には壺は用いられていなかったと考えられ、円筒形の掘り方の底に円形のコンクリートが貼られていた。この形式であれば、壺の代わりにホローかステンレス製の容器を垂壺として使用していたと考えられる。

酒槽の置き場所の規模は、全長2.3m、幅1.85m、深さ85cmである。垂壺の直径は90cmである。

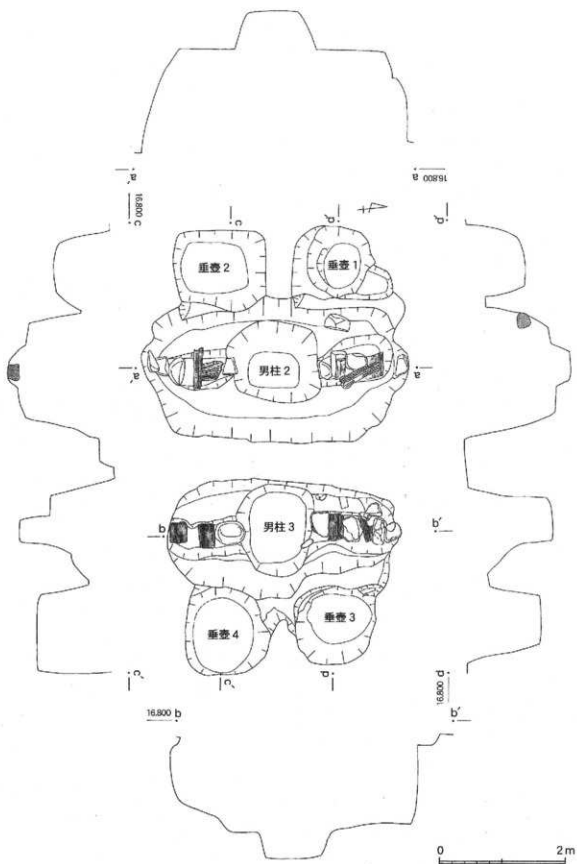
#### 槽2（第22図 図版4）

槽1と同様、男柱を用いない槽場施設である。長方形の半地下式の酒槽置き場とその東に垂壺がある。垂壺の底にはコンクリートが貼られていた。槽1と同様に壺を使用しない垂壺と考えられる。規

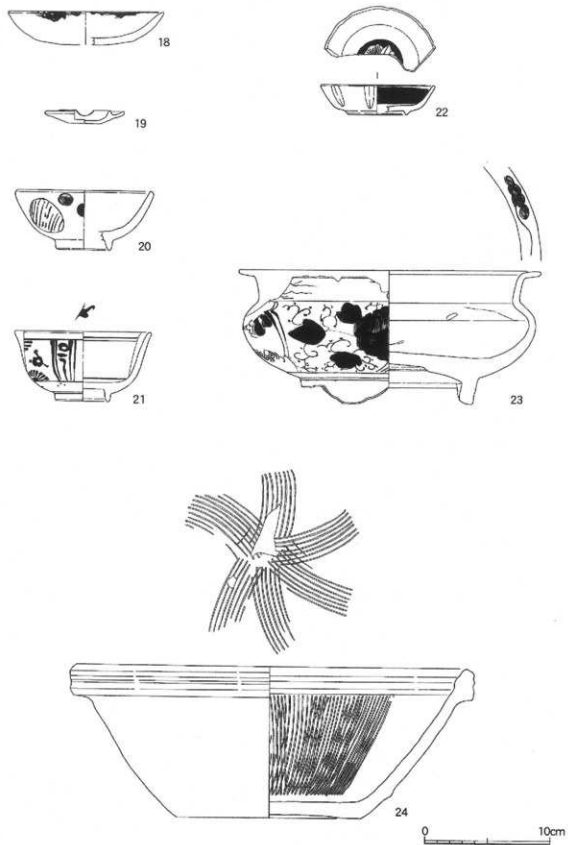


第22図 槽1～3、男柱1、垂壺7～10平面・断面図

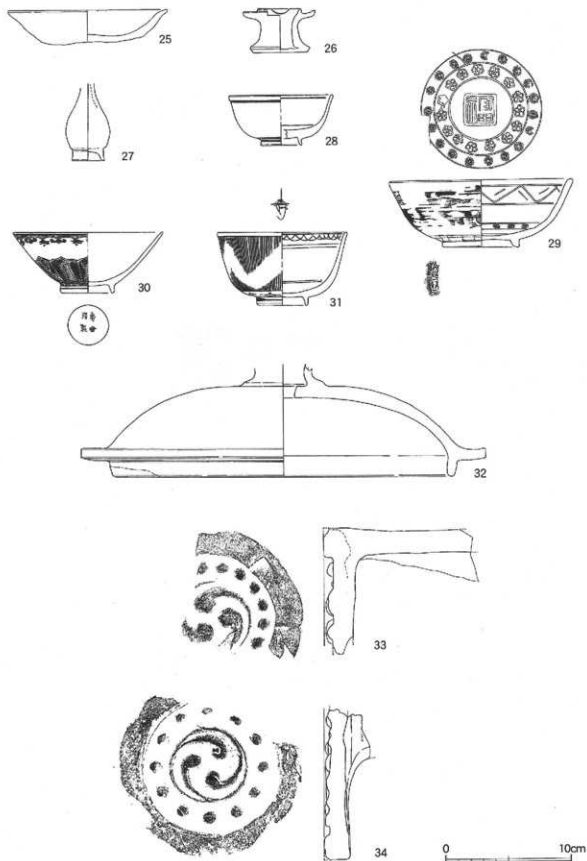




第23圖 男柱 2・3、重壘 1~4 平面・断面圖



第24図 男柱2出土遺物



第25図 男柱3出土遺物

横は、全長2.75m、幅は男柱1に切られているため不明である。深さは85cm、垂壺の直径は90cmである。

遺物は出土しなかったが、槽場の構造からみて本酒蔵最終段階の槽場と考えられ、酒蔵を廃業する昭和18年まで使用されていたものであろう。

### 槽3 (第22図 図版4)

槽1・2と同様に男柱を用いない槽場施設である。半地下式の酒槽置き場の規模は全長2.8mである。垂壺の掘り方の直径は90cmで、底にはコンクリートが貼られていた。

### 男柱1 (第22図 図版4)

調査区の中央部に位置する。長楕円形の掘り方の中央部に一段深く掘り下げた男柱の埋め込み穴がある。男柱の埋め込み穴は方形に作られている。掘り方には男柱を支える貫(横木)を固定するための石が残っていた。規模は長さ4.07m、幅1.45m、男柱の埋め込み穴は1.45×1m、深さ1.14mである。これに伴う垂壺は垂壺8で、すでに取り除かれていた。掘り方の規模は直径1.1mほどである。男柱の形式は、男柱に酒槽(垂壺)1基が伴う(1槽挿し単基型)。時期は遺物が出土していないため不明であるが、明治19年には槽場が礎石建物4に移動しているため、それ以前と考えられる。

### 男柱2・3 (第23～25図 図版4・5・11・12)

調査区の南東隅に位置し、礎石建物4の付属施設である。男柱2と男柱3はそれぞれの男柱に酒槽が2基伴う(2槽挿し型)。それが背中合わせに並ぶ「2槽挿し連基型」である。この槽場の形式は伊丹町の酒造業の生産量が増大した19世紀になって現れる。男柱の規模も江戸時代を通じてもっとも大きくなっていく。

男柱2は、長楕円形の掘り方の中央部に男柱の埋め込み穴がある。男柱を中心に左右2ヵ所の垂壺が設けられていた。これら男柱と垂壺は、槽場を移転するにあたり抜き取られていた。掘り方の規模は、全長4.31m、幅2.34m、深さ1.35m、柱の埋め込み穴は1.52×1.25m、深さ93cm。垂壺の掘り方は、北側の垂壺跡が1.33×1.16m、深さ93cm、南側の垂壺跡が1.48×1.34m、深さ98cmである。

京焼系の灯明皿(19)、肥前磁器染付碗(21)、明石焼播鉢(24)などが出土している。

男柱3は、男柱2の東側に位置する。男柱2と同様に男柱を中心に左右2基の垂壺が伴う。男柱および垂壺は抜き取られていた。掘り方の規模は、全長3.66m、幅1.90m、柱の埋め込み穴は1.31×1.27m、深さは76cmである。垂壺の規模は、北側が1.28×1.26m、深さ1.02m、南側が1.36×1.41m、深さ1.24mである。

高台脇に「赤膚山」銘のある赤膚焼碗(29)、「亀塘精製」銘の染付碗(30)、端反りの肥前染付碗(31)などが出土している。

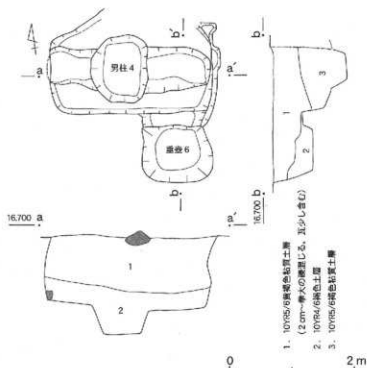
### 男柱4 (第26図 図版5)

礎石建物4の付属施設とも考えられるが、建物の礎石16に男柱の掘り方が切られているため、礎石建物4より古い可能性もある。この男柱の形式は、男柱に1基の酒槽が伴う「1槽挿し単基型」である。男柱および垂壺は抜き取られていた。男柱の規模としては小型の部類に入る。規模は、全長2.75m、幅1.6m、深さ1.2m、男柱の埋め込み穴は1.1m×92cm、深さ42cmである。垂壺の掘り方は1.15m×95cm、深さ65cmである。

遺物は出土していない。

### 男柱5 (第27・28図 図版5・12)

礎石建物4の付属施設とも考えられるが、位置が建物の下屋にあたるため、男柱4と同様に礎石建物4より古い可能性もある。男柱に酒槽1基が伴う「1槽挿し単基型」である。垂壺は抜き取られて



第26図 男柱4、垂壺6平面・断面図

さ94cmである。

丹波焼甕の胴部 (35) が出土している。

## 井戸

今回の調査で4カ所の井戸を検出した。いずれの井戸も調査区の西寄りに集中し、酒蔵に関係する井戸と考えられる。

### 井戸1 (第13図)

この井戸は、コンクリート製の井戸枠が使用されている。内径は1.2mである。深さは不明。礎石建物1の付属施設である。明治19年段階ではこの井戸が使用されていた。19年の図面には、井戸に接して北東側に方形に区画された「洗い場」が設けられていた。この井戸はその後、明治37年、同42年、同44年の図面に描かれているので、昭和18年まで使用されたものと考えられる。明治段階は素掘りで、その後コンクリート製井戸枠が嵌められたものであろう。井戸1の東側から検出された排水溝は、洗い場の排水用の溝と考えられる。

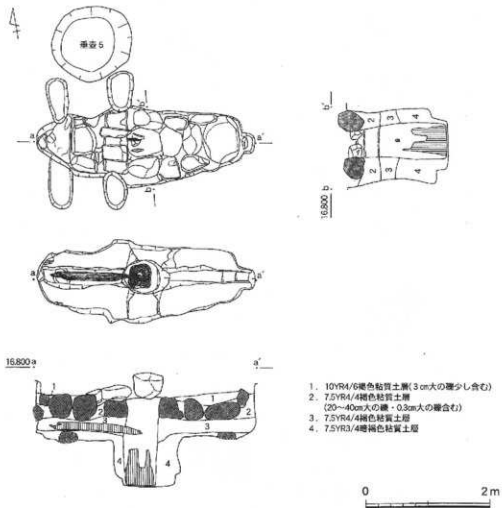
### 井戸2 (第29図 図版12)

井戸2は、礎石建物1の土間に附属する井戸である。この井戸は素掘りで、直径は1.3~1.4mである。深さは不明である。井戸3の東側5mに位置し、井戸の東側には排水施設がある。

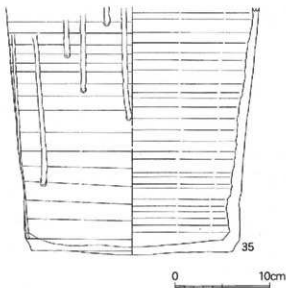
出土遺物には、肥前染付碗 (36)、肥前染付皿 (37) のほかに、軒丸瓦 (38)、軒平瓦 (39~41) がある。

いたが、男柱は抜き取られておらず底に柱が残っていた。おそらく土間の高さで切り残されたものであろう。それに伴い、男柱の下部に通してあった貫も腐りながらも残り、貫を押さえるための大きな石もそのままに残っていた。

男柱は腐食して小さくなっていたが、元は一辺60cmほどの角材を使用し、底から90cm上に穴を開けて、一辺20cm程の貫を通していたことがわかった。さらに40cm大の石を貫の上に並べて固定していた。全長は3.35m、幅は1.27m、貫下までの深さ1.0m、男柱の掘り方は1.3×1.05m、深さ75cmである。垂壺の掘り方は、1.2×1.3m、深



第27図 男柱5、垂壺5平面・断面図



第28図 男柱5出土遺物

### 井戸3 (第13図)

井戸3は竈1と切り合い関係にある。その新旧関係は井戸3が古いと考えられる。規模は、直径は1.3mで、深さは不明である。

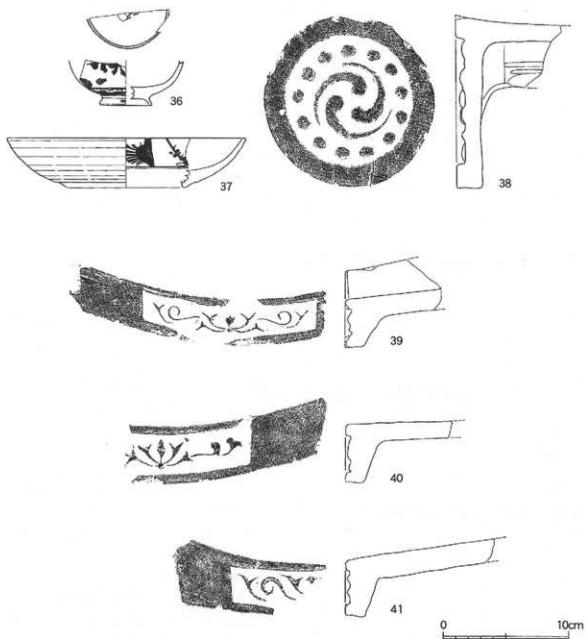
遺物は出土していない。

### 井戸4 (第13図)

礎石35に切られており、礎石建物1より古い井戸である。この井戸の西側の一部は217次調査C区で検出した(井戸2)。素掘りの井戸で、直径は1.9mにもなる大型である。深さは不明。

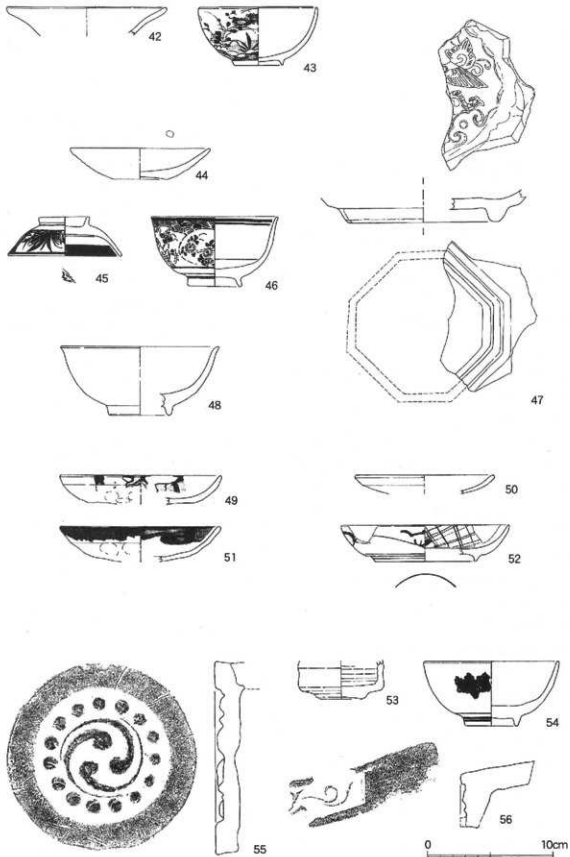
### 土坑

第1面では、調査区内全城から土坑(SK)や小穴(SP)が検出された。これらの遺構の



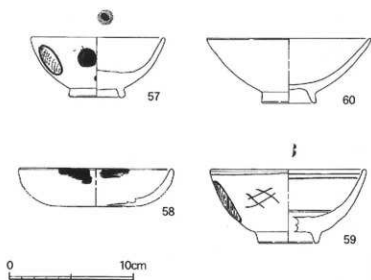
第29図 井戸2出土遺物

うち、機能や用途の判明するものは少ないが、木桶を埋め込んだ円形の土坑の場合は、便所の可能性がもっとも高い。江戸時代の伊丹郷町では桶を便槽に使用する例が多く、江戸後期以降に次第に丹波焼などの甕を利用するようになる。桶の痕跡をとどめる土坑は、埋桶が2基並んだSX2、SX6・7と、SK8がある。以上の埋桶遺構は、礎石建物3あたりに集中する。おそらく礎石建物3が建築される以前はこのあたりに便所が設けられていたであろう。遺物を出土した土坑もある。第1面の存続時期との関係もあるので、本項で取り上げて説明を加えておきたい。



第30図 SK 6・7・16・40・241出土遺物





第31図 SP41・42・79出土遺物

礎石建物3の礎石(礎石11・19・22・25・27)のうち、礎石22に切られている。

端反りの肥前白磁碗(48)が出土している。

#### SK40(第30図)

SK40は、礎石建物1の土間付近から検出された溝状の遺構である。SD1に切られている。

灯明に使用された口径13cm前後の大型の土師皿が2点(49・51)、肥前染付皿(52)が出土している。

### 柱穴

#### SP41(第31図 図版13)

SP41は、礎石建物3付近から検出された小穴である。

肥前染付碗(57)が出土している。

#### SP42(第31図)

SP42は、SP41の東側から検出された。

灯明に使用された大型の土師皿(58)、肥前染付碗(59)が出土している。

#### SP79(第31図)

SP79は、礎石建物4内部から検出された円形の小穴である。

肥前陶器碗(60)が出土している。

以上の遺構出土の遺物を概観すると、第1面の時期は江戸後期から近代にかけてであることがわかってくる。

### 第2面

第2面は、第1面の調査後に平均的に30~40cm程度掘り下げて検出した。遺構検出面の時期は長く、概ね鎌倉時代から安土桃山時代と考えられるが、その中心は15世紀後半~16世紀代である。この

#### SK6(第30図 図版12)

SK6は、調査区の西側に位置し、礎石建物1の土間から検出された方形の土坑である。

土師皿(42)と肥前染付碗(43)が出土した。

#### SK7(第30図 図版13)

SK7は、礎石建物3付近から検出された不整形の土坑である。

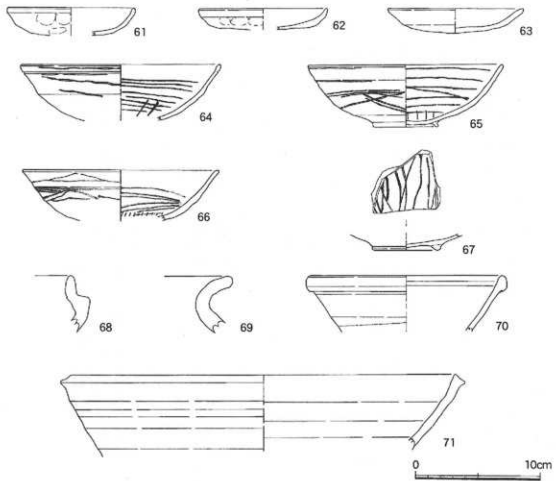
京焼系陶器皿(44)、染付碗蓋(45)、型紙摺りの染付碗(46)、三田青磁の型押し成形の皿(47)などが出土した。

#### SK16(第30図)

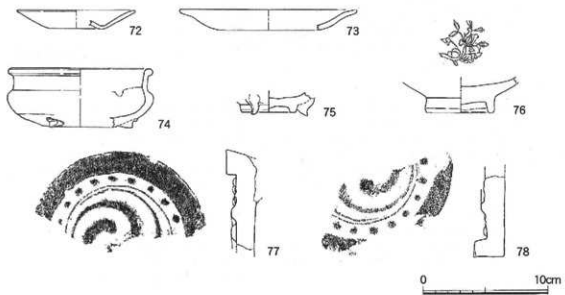
SK16は、礎石建物3付近から検出された大型の土坑である。



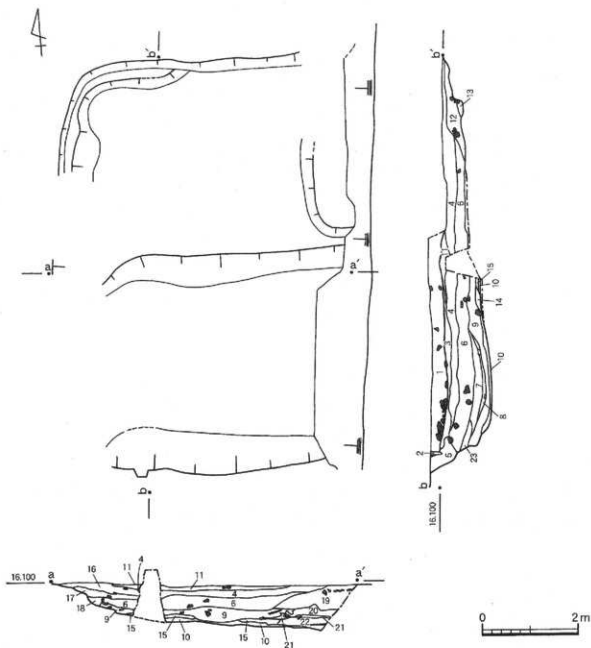
第32図 第2面全体図



第33図 SD16出土遺物

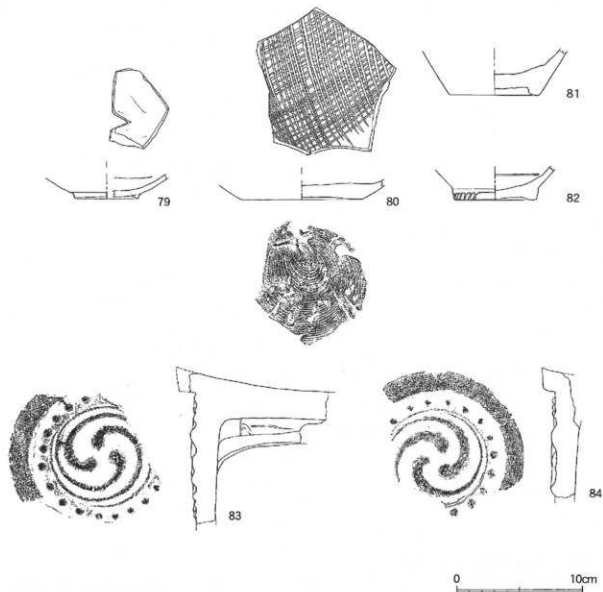


第34図 SD22出土遺物



1. 10YR5/4にぶい黄褐色土層 (1~10cm大の礫多量に含む)
2. 2.5Y4/4オリーブ褐色土層 (5cm大の礫少量含む)
3. 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト質土層 (2cm~5cm大の礫・炭・鉄分含む)
4. 10YR5/3にぶい黄褐色シルト質土層 (3~5cm大の礫・炭含む)
5. 10YR4/4褐色粘質土層 (2~3cmの礫・炭・鉄分含む)
6. 10YR4/3にぶい褐色シルト質土層 (礫大の礫・瓦・鉄分含む)
7. 7.5YR4/4褐色土層 (砂粒・0.5cm大の礫含む)
8. 10YR3/1黒褐色粘質土層 (砂粒少し、炭含む)
9. 10YR4/4褐色土層 (砂粒・0.5cm大の礫含む)
10. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土層 (砂粒・炭含む)
11. 10YR6/4にぶい黄褐色砂層 (粘質土・鉄分を多く含む土が互層になっている)
12. 7.5YR4/4褐色土層 (炭・瓦・礫大の礫・鉄分含む)
13. 10YR6/3にぶい黄褐色粘質土層 (炭・鉄分含む)
14. 10YR4/2灰黄褐色粘質土層 (砂粒・炭・瓦含む)
15. 7.5YR5/4にぶい褐色土層 (0.2cm大の礫含む)
16. 10YR4/4褐色粘質土層 (炭・鉄分・砂多く混じる)
17. 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土層 (鉄分・瓦含む)
18. 10YR4/4褐色粘質土層 (砂粒多く含む)
19. 7.5YR4/4褐色粘質土層 (2~7cm大の礫・瓦・鉄分多く含む)
20. 10YR4/6褐色土層 (1~2cm大の礫・砂粒・瓦含む)
21. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土層 (砂粒・炭少し混じる)
22. 2.5Y4/2暗灰黄色土層
23. 2.5YR5/8明褐色土層 (2cm大の礫含む)

第35図 SX20平面・断面図



第36図 SX20上層出土遺物

面で検出された遺構は、溝と廃棄瓦を集積した土坑が多い。瓦を葺いた建物の存在は明らかにできなかったが、柱穴と考えられる小穴も多く検出されている。

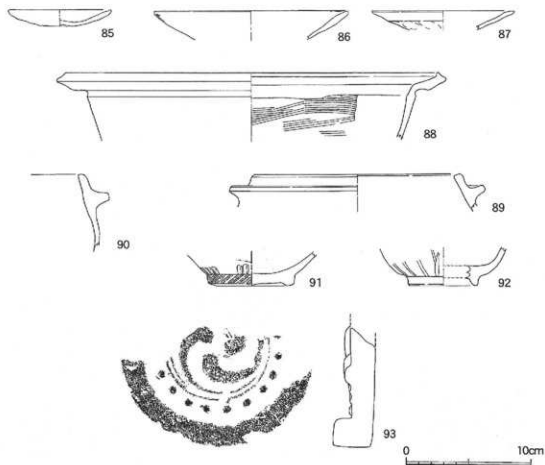
### 溝

溝は、調査区の東側と西側にあつて南北に延びるSD16・22と調査区の北東隅に位置するSD17がある。SD16とSD22は方向が一致し、SD22の西側にも小規模なSD23が平行する。

#### SD16 (第33図 図版6・13)

SD16は、調査区の東側に位置する溝で、その方向は国土座標の南北に沿っている。規模は、幅2.1～2.5mで調査区の北端でやや幅を減じ、深さは北端で24cm、南端で36cm、最深で50cmである。溝の形状は、溝底から緩やかに立ち上がる皿状を呈している。この溝の北側は、第217次調査B区に続いている。

瓦片や瓦器碗(64～67)、丹波焼壺(69)、中国製の白磁碗(70)、東播系片口鉢(71)などが出土し



第37図 SX20下層出土遺物

ている。

**SD22 (第34図 図版6・13・14)**

SD22は、調査区の西側に位置する南北方向の溝で、西側に小規模なSD23が平行する。遺存状態が悪く、所々でかなり浅くなり、北端は電や近代の鉄製タンクによって破壊されている。規模は、幅が1.8~2.6m、深さはもっとも深い南壁付近で47cmを測る。

土師皿(72・73)、瀬戸・美濃焼香炉(74)、中国製青磁香炉(75)と同碗(76)、軒丸瓦(77・78)が出土している。

**SD23 (図版6)**

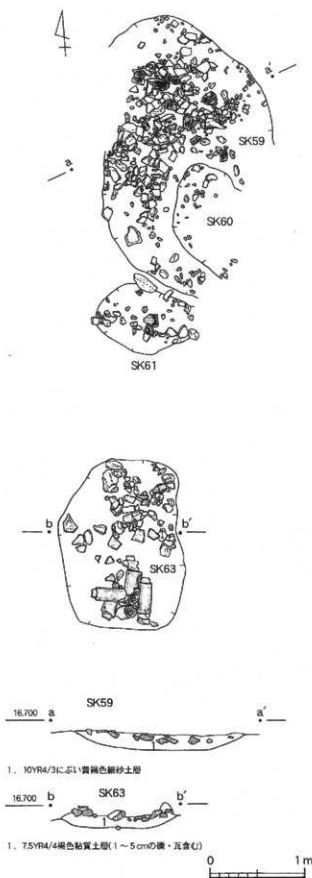
SD22の西側の小規模な溝である。SD22とは20cmほどの一定の間隔を保ち、重複しないので、同時期に存在していたと推測される。遺物は出土していない。

**堀状遺構**

今回の調査で堀状遺構としたものは、SX20である。SK93もその後の第217次調査で東西に長い小規模な堀状遺構(第217次調査SD103)であることが確認された。両遺構とも同種の瓦を出土しているので、同時期の遺構と考えられる。

**SX20 (第35~37図 図版8・14・15)**

SX20は、調査区の東端に位置し、遺構の東側は隣接地を調査した第217次調査のSX301に続いてい



第38図 SK59・60・61・63平面・断面図

る。また、この遺構の西側は第1面の男柱2に切られている。遺構の規模は、南北11m、東西8.4mで、遺構の中央部から2段に落込み、堀状となっている。東側の第217次調査のSX301に続くのはこの堀状部分である。堀状遺構の規模は、幅4.7~5.1m、深さ1.35mである。第217次調査を含めると、長さが10mほどになる。遺構の形状は、平坦な底面から北壁で55度、南壁で65度の角度で立ち上がる。

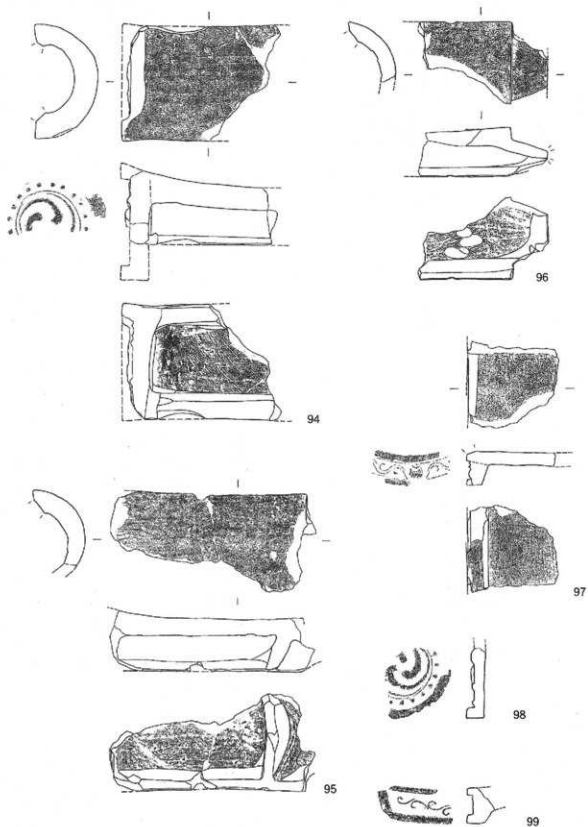
この遺構は、防衛用の堀とは性格が異なると考えられる。しかし北側に位置する堀状遺構(SK93と第217次調査SD103)と同じ方向性を示しており、密接な関係があると推測されるが、現在のところ遺構の性格は明らかではない。

出土遺物は、上層部出土と下層部出土を分けて掲載した。上層部からは、瓦器碗(79)、瀬戸焼おろし皿(80)、中国製白磁碗(82)、巴文軒丸瓦(83・84)などが出土した。また下層部からは、土師丸(85~87)、土師質鍋(88)、瓦質三足羽釜(89)、土師質羽釜(90)、巴文軒丸瓦(93)などが出土している。

### 瓦溜り

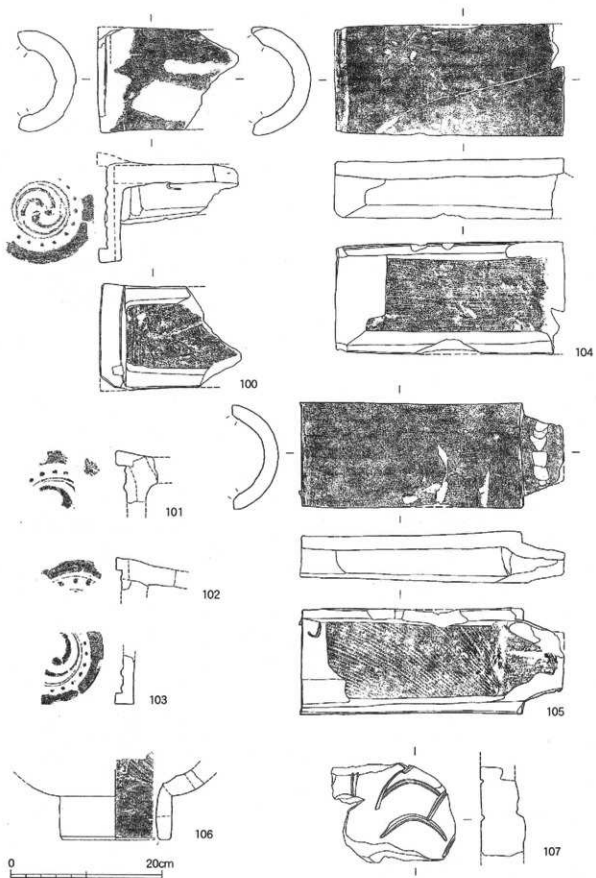
瓦溜り遺構は、土坑内部に多くの瓦が集積したものをいうが、今回の調査で検出されたものは、瓦を廃棄するための穴が掘られたのではなく、SK93は堀状遺構に瓦を廃棄して埋めている。また、SK59・60・61・63も小規模な浅い土坑にかなり細かく粉砕された瓦が集積するものであり、瓦廃棄用の穴とは考え難い。また、第231次調査では、池状遺構の内部にも多量の瓦を廃棄している。こうした状況から、瓦葺きの建物の廃棄(焼失の可能性が高い)に伴い、関係する池や堀状遺構に瓦を廃棄したものと考えられる。

遺構の時期は、瓦やそれに共伴する遺物

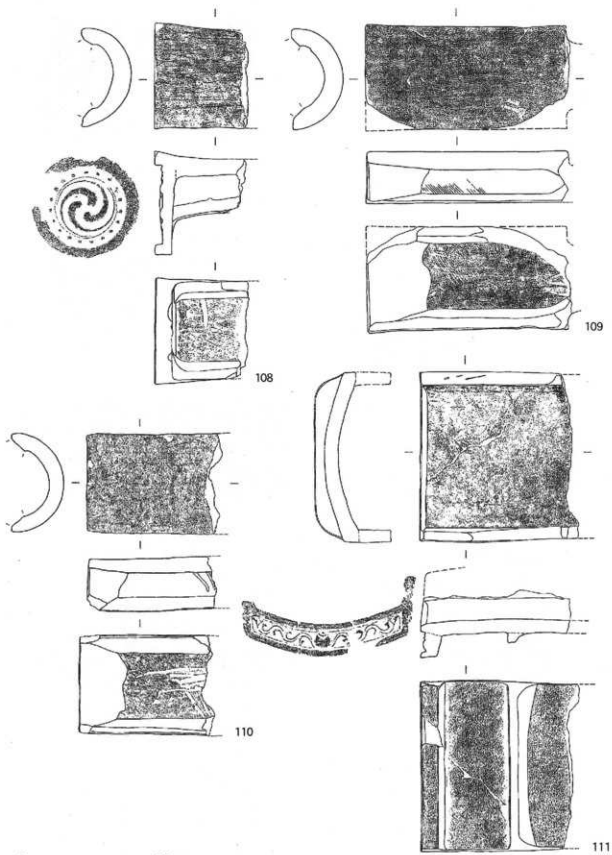


第39圖 SKG9・61出土遺物

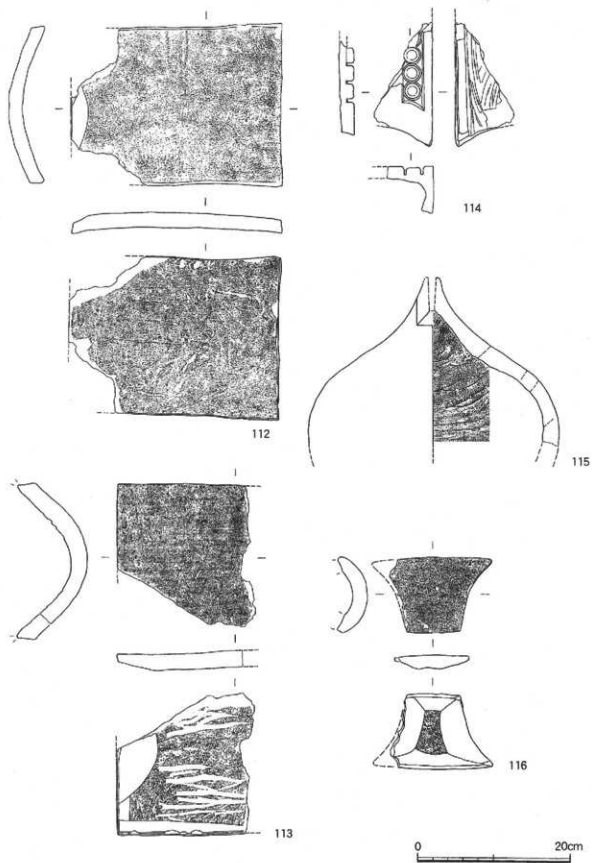




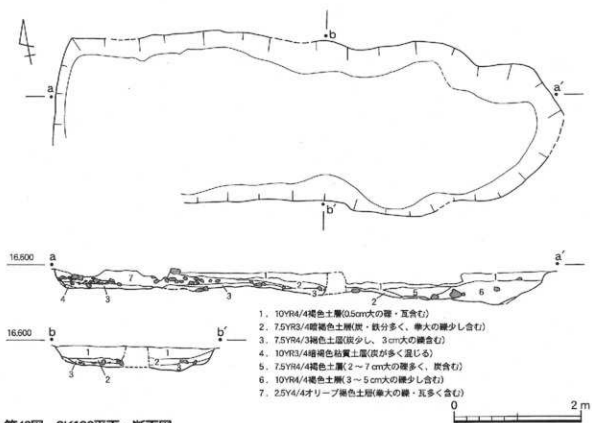
第40圖 SK63出土遺物



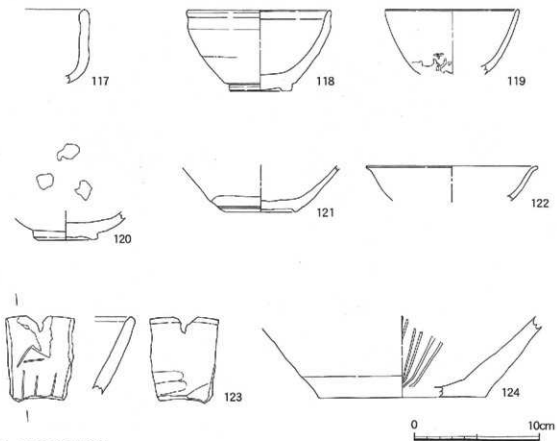
第41圖 SK93出土遺物(1)



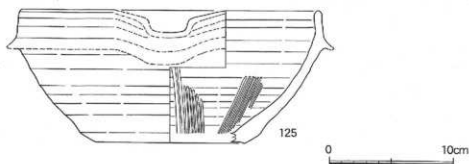
第42図 SK93出土遺物(2)



第43図 SK106平面・断面図



第44図 SK106出土遺物



第45図 SP242出土遺物

から15世紀後半～16世紀前半にかけて、この場所に庭園を伴う瓦葺きの建物が存在したことになる。SK59・60・61 (第38・39図 図版7・15・16)

この3カ所の遺構はともに近接し、それぞれ浅い土坑の中に細かく割れた瓦が集積している。SK59・60とSK61は僅かに離れているが、出土した瓦は同形式であり、遺構の時期は同じと考えられる。遺構の規模は、SK60を含めたSK59の範囲が南北3.0m、東西1.8m、深さは16cmである。また、SK61は、南北75cm、東西1.0mである。

出土した遺物は瓦のみで、SK59からは巴文軒丸瓦 (94・95)、宝珠唐草文軒平瓦 (97)、SK61からは巴文軒丸瓦 (98) などが出土している。

#### SK63 (第38・40図 図版7・16・17)

SK63は、SK61の南3mに位置し、浅い方形の土坑である。この遺構からは良好な形の軒丸瓦が出土している。遺構の規模は、南北1.8m、東西1.25m、深さ15cmである。

出土した瓦には、巴文軒丸瓦 (100～103) に加えて、宝珠瓦の基部 (106) が出土したほか、鱗が太い線描きで表現された鯪瓦の体部 (107) などが出土している。

#### SK93 (第41・42図 図版17～19)

SK93は、この調査では土坑として取り扱ったが、後に東側で行った第217次調査においてその続き (SD103) が検出され、堀状に続くことがわかった。遺構の規模は、幅262m、深さ65cmで、検出長は1.3mである。

遺構の内部から瓦が多数出土した。宝珠唐草文軒平瓦 (111) は瓦の端面が垂直に立ち上がる「水返し」(縦棧) が付き、瓦の下面には「滑り止め」(横棧) が付いている。また、雁振瓦 (113) や鬼瓦 (114)、宝珠瓦 (115)、面戸瓦 (116) などが出土している。

## 土坑

第2遺構面では、調査区の全域から土坑や小穴が検出されたが、用途や機能、また時期の明らかになるものは少ない。また、建物の存在を示すような柱穴列も確認できなかった。

#### SK106 (第43・44図 図版8・19)

SK106は、調査区の南壁際に位置する東西に長い不整形の土坑である。規模は、東西10.9m、南北3.4m、深さは最深68cmである。土坑の底は西から東に向けて緩やかに下がる。土坑内部から焼けた瓦が出土したほか、陶磁器も出土している。遺構の性格は不明である。

出土遺物には、焙烙 (117)、瀬戸・美濃焼天目碗 (118)、唐津焼灰釉碗 (119)、唐津焼砂目積み皿 (120)、丹波焼の本引きの播鉢 (123)、中国製白磁皿 (122) などがある。これらの遺物から見て、この遺構

は第2面の最終段階の遺構と考えられる。

### 第3面

第3面は、地山面で最終的に確認した遺構面である。遺構には幅の狭い溝状遺構や小穴が多い。調査区東側で主に検出された溝群は、第2面と方向性が異なっていることが注目される。多数の小穴の中には、穴の底に根石が敷かれているものがあり、これらは建築物の柱穴と考えられる。ただ全体を通して、規模の判明する建物跡は確認できなかった。この面の時期は、概ね鎌倉時代に相当する。

#### 溝

第3面の溝は、第2面の溝に比べて方向が東に振れるものが多い。とくに振れ方が強い溝は、SD30・38・39・40・41・42・45・49・50で、僅かに東に振れるものはSD43、南北方向に延びるものはSD31・45である。また、溝は調査区の中央部から東側に集中する傾向があり、調査区の西側から検出された溝はSD31だけである。

#### SD30・50 (第47図 図版9)

SD30は北側でいったん途切れるが、その先でSD50に続いている。検出長は14.2mである。溝幅は30～70cm、深さは15～20cmである。遺物は出土していない。

#### SD31・45 (第46図 図版9)

SD31は調査区の西端にあり、土坑に切られたその先はSD45に続いている。検出長は13.4mである。溝幅はSD45で72cm、深さ32cmである。

出土遺物には土師皿3点(126～128)がある。

#### SD38・41 (第47図 図版9)

SD38は調査区の南東隅に位置し、南壁際から北に延びているが、途中第2面のSX20に切られている。その先はSD41に続く可能性があるが、規模が異なっている。SD38の規模は、幅30～35cm、深さ10cm、SD41の規模は幅90cm～1mで、北側に行くにつれて細くなり消滅する。深さは10cmである。

#### SD39・42 (第47図 図版9)

SD39は調査区の南東隅に位置し、SD38と平行する。溝の北側をSX20に切れ、その先はSD42に続くと考えられるが、規模に差がある。SD39の規模は、幅75cm、深さ30cm、SD42の規模は、幅90cm～1.6m、深さ25cmである。

SD39から瓦器鉢(129・130)が出土している。

#### SD40 (第47図 図版9)

SD40は調査区の東側に位置し、西側のSD50と4mの間隔をおいて平行する。溝の規模は、幅40～50cmで、検出長は6.5mである。遺物は出土していない。

#### SD49 (第47図 図版9)

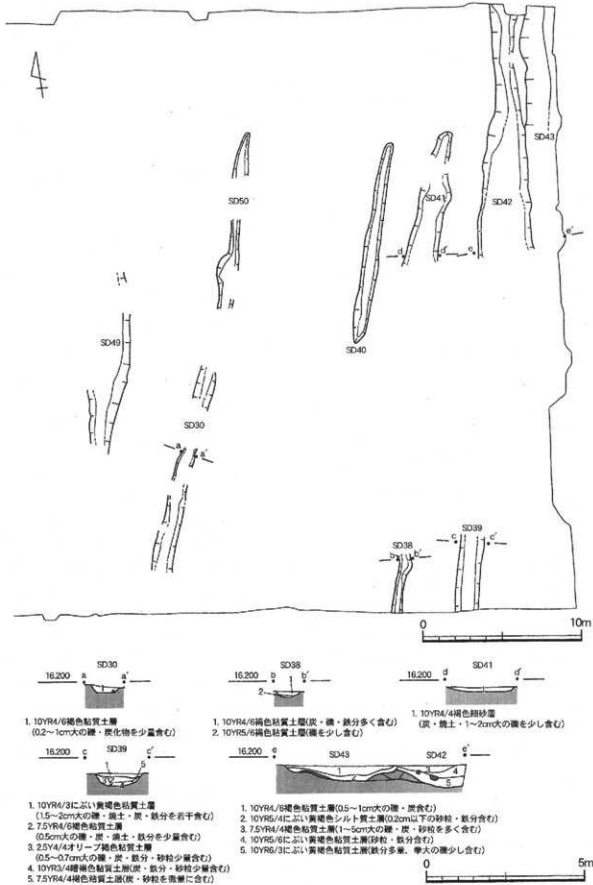
SD49は調査区の中央部に位置する。方向性は東側のSD30と平行するが、他の遺構に切れ、5mの範囲でしか検出できなかった。溝の規模は幅60cm～1.1mで、溝幅は南に行くほど狭くなる。遺物は出土しなかった。

#### 柱穴列 (建物跡)

調査区の中央部から南側にかけて柱穴が集中するが、掘立柱建物として確認できるものは少ない。その中でも柱穴の底に根石を敷くものがあり、一定の間隔をおいて並んでいる。それを柱穴列と呼称

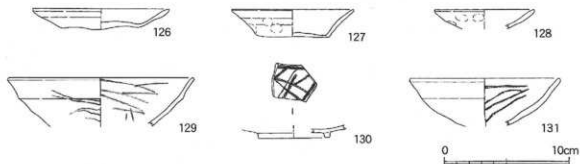


第46図 第3面全体図

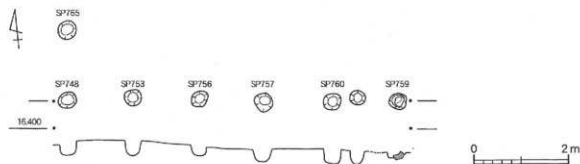


第47図 SD30・38~43・49・50平面・断面図





第48図 SD31・39・44出土遺物



第49図 柱穴列4平面・断面図

して説明しておく。確認された柱穴列は4ヵ所あり、そのうち柱穴列1と2は4.9mの間隔を置いて平行するとともに、柱穴の間隔も一致するので、この2列の柱穴が1軒の建物であった可能性が高い。柱穴列3は、これら2列の柱穴とほぼ同じ方向性をもつが、厳密には方向性と柱穴の間隔が揃わない。柱穴列4は調査区北東隅において検出されたが、調査区内でこれに関係する柱穴列は存在しなかった。

#### 柱穴列1・柱穴列2 (第50図 図版9)

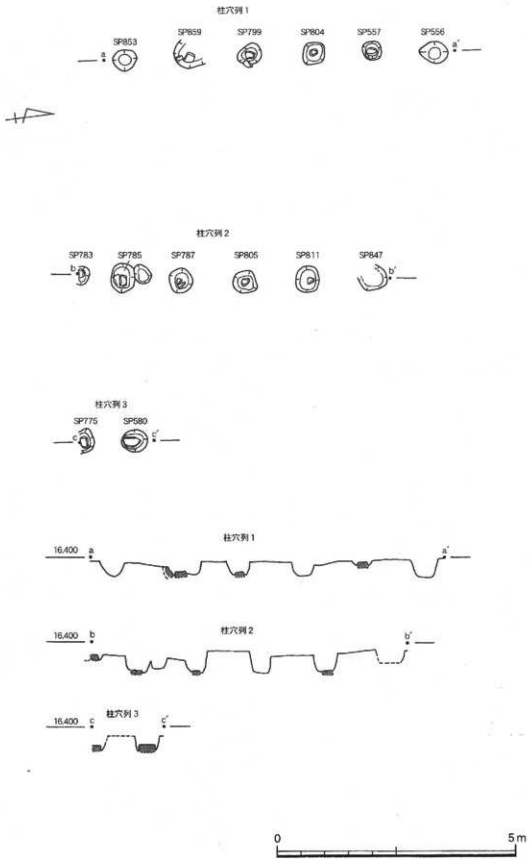
柱穴列1は、北からSP556・557・804・799・859・853の6ヵ所の柱穴の並びである。その内4ヵ所は底に根石を持っている。6ヵ所の柱穴の距離は4.95m、各柱穴の中心距離は99cmになる。柱穴の規模は、直径35～40cm、深さ20～30cmである。

柱穴列2は、北からSP847・811・805・787・785・783の6ヵ所の柱穴の並びである。そのうち5ヵ所の柱穴の底は根石を持っている。6ヵ所の柱穴の距離は4.95m、各柱穴の距離はSP785と783の距離がやや短く、SP811と北端の柱穴の距離がやや長い。

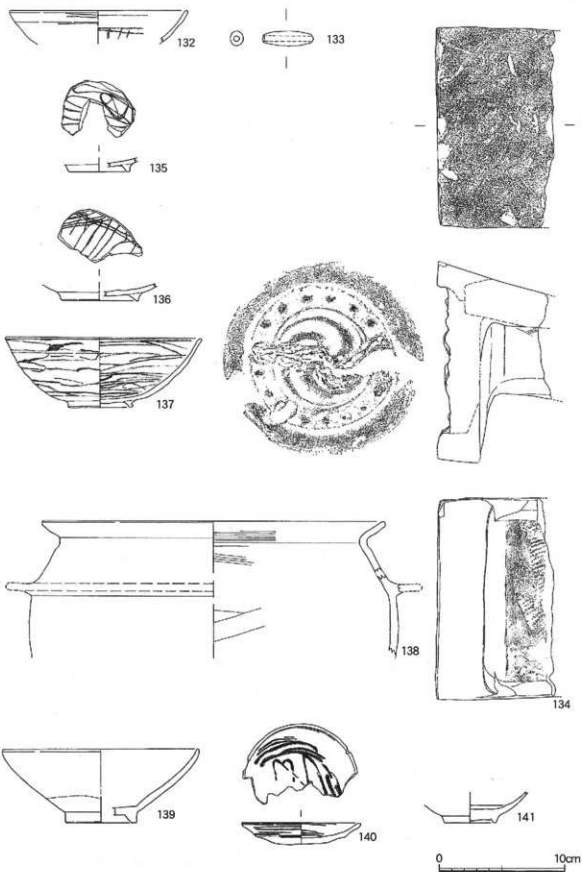
この2列の柱穴が1軒の建物跡になる可能性が高い。遺構の時期は出土遺物がないため判明しない。

#### 柱穴列3 (第50図 図版9)

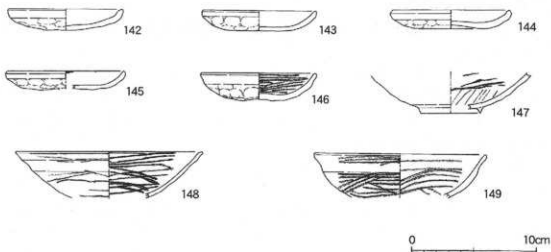
この柱穴列は、柱穴列2の東側に位置する。北からSP580・775の2ヵ所の柱穴の並びである。柱穴底に根石をもつ。



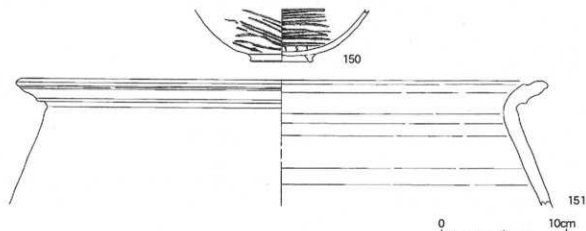
第50図 柱穴列1～3平面・断面図



第51圖 SK200・208・226・228・229出土遺物



第52図 SP607・652・670出土遺物



第53図 第3層出土遺物

#### 柱穴列4 (第49図)

柱穴列4は、調査区の北東隅に位置する。西からSP748・753・756・757・758・765の6カ所の柱穴の並びである。この柱穴に対応する柱穴列は調査区内で検出されていない。柱穴列の距離は7mで、各柱穴の間隔は1.4mの等間隔である。

遺物が出土していないため、遺構の時期は判明しない。

#### 土坑・小穴

第3面から検出された土坑や小穴のうち、遺物が出土したものを取り上げて説明を加えておく。SK200 (第51図 図版19)

この土坑は、調査区の南東部、SD30の西側において検出された。遺構の形状は不整形で、その規模は1.7×1.24m、深さ14cmである。

出土遺物には瓦器椀 (132) と土錘 (133) がある。

#### SK208 (第51図 図版20)

この土坑はSK200の北側において検出された。遺構の形状は長方形で、その規模は98×94cm、深さ16cmである。

出土遺物には、瓦器碗(135~137)がある。

#### SK226 (第51図 図版20)

この土坑は調査区の南側に位置し、柱穴列2のSP847を切っている。遺構の形状は不整形で、その規模は85×96cm、深さ38cmである。

土師質羽釜(138)が出土している。

#### SK228 (第51図 図版20)

この土坑は調査区の南東部に位置し、SK208の南側と接する。遺構の形状は不整形で、遺構の規模は1.22m×96cm、深さ14cmである。

出土遺物には、中国製白磁碗(139)がある。

#### SK229 (第51図 図版20)

この土坑は調査区の南東部に位置する。形状は円形で、その規模は直径1.5~1.54m、深さ66cmである。

出土遺物には、瓦器皿(140)と中国製青白磁碗(141)がある。

#### SP607 (第52図 図版20)

この遺構は、調査区の南東部、SD38の西側に位置する。遺構の形状は円形で、その規模は直径54~60cmである。

出土遺物には、土師皿(142~145)、瓦器皿(146)と瓦器碗(147)がある。

#### SP652 (第52図)

この遺構は、調査区の南東部、SD30の東側に位置する。規模は40×28cm、深さ81cmの小穴である。

出土遺物は瓦器碗(148)である。

#### SP670 (第52図)

この遺構は、調査区の南東部、SD30の東側に位置する。遺構の形状は不整形で、その規模は48×60cm、深さ13cmである。

出土遺物は瓦器碗(149)である。

## 小結

第203次調査地点には、江戸時代の建物が残る酒蔵が建っており、阪神・淡路大震災で被災しその後解体された。実際に酒造が行われたのは、昭和18年の酒造統制で保蔵の指定を受けるまでで、戦後は別の用途に使用されてきたものである。発掘調査は、今回の第203次調査を最初として、その後2回、計3回に分けて行われた。これらの調査の結果については後章にまとめるとして、本項では、今回の調査について若干整理しておきたい。

今回の発掘調査では、上層から下層にかけて3面の遺構を検出した。第1面は酒蔵が営まれた江戸時代後期から近代にかけて、第2面は鎌倉時代から安土桃山時代にかけて、そして第3面がそれ以前となる。

第1面と第2面の間、つまり有岡城が廃城になったと考えられる天正11年(1583)以降、この場所において酒蔵が営まれる18世紀中頃までの期間には、日立った遺構や遺物が検出されていない。伊丹郷町を描いた古絵図でも、「寛文9年(1669)伊丹郷町絵図」には当地点には家屋などは描かれていな

いので、この点は調査結果と一致する。年代ごとの絵図があるわけではないが、「寛政8年(1796)伊丹細見図」には敷地の西側と南側の道が描かれるとともに、北側と東側に敷地境が描かれているので、この段階には酒蔵としての土地利用が行われていたと考えられる。

第1面の遺構は、そのほとんどが酒蔵に関係するものである。酒蔵には酒造工程に必要な建物のほか、商いをする店舗や酒造家の居住空間である居宅、さらには蔵人(杜氏)の宿泊施設などがある。明治19年以降の酒蔵絵図面が何枚か残されているが、それによると敷地内に多くの建物が存在していたことがわかる。詳しくは後章で述べたい。

第2面と第3面との境界はあまり明確ではない。調査中に広い範囲の文化層を確認しながら掘り下げていったが、遺構によって所属が明らかではないものもあり、後の資料整理の段階で検出面の所属を変更したものがある。第2面からは、瓦器碗を伴った遺構も検出されたが、その中心となる時期は堀状遺構のSX20やSK93、そして調査区西側から多く発見された瓦溜り遺構が造られた15世紀後半～16世紀前半であろう。これらの遺構から出土した瓦は後に行った第217次・第231次調査で検出された池状遺構や堀状遺構出土の瓦と同形式の瓦である。鯪瓦や鬼瓦、宝珠瓦、埴瓦を用いた庭園まで備えた屋敷がこの敷地内に営まれていたことになる。瓦の種類などから寺院の存在がもっとも可能性があると考えられる。

第3面は、瓦器碗を出土する遺構が多い。その時期は12世紀後半～13世紀初頭頃のものが多いので、この時期に中心があると考えられる。第3面の遺構には溝状遺構が多い。この時期の溝の方向は第2面の溝(SD16・22)と異なり、その方向がやや東に振れている。すなわち、第2面の溝の方向は座標の南北方向を示しており、第3面になると8～14度ほど東に振れるようになる。ただ、第3面で検出された掘建柱建物跡(柱穴列1・2)の方向は、座標の南北方向を示しているため、第3面の段階で遺構の方向に変化があったものと考えられる。

(小長谷正治)

遺物名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他
レンガ 甍	第16図-1 図版10-1	磁器	皿	高台径 7.8 cm 口径 (20.6) cm	蛇ノ目凹型高台 雲紙摺り染付 内面花文 見込み 環状松竹梅文 外面文様有り 高台内胎部以外露胎	肥前 50% 二次焼成済み
	第16図-2	磁器	碗反皿		口縁波状形 銅版転写 緑色の釉で施文されている 内面口縁部菊花文 体部桜花鳥文	不明 5%
	第16図-3 図版10-3	レンガ	耐火 レンガ	長辺 22.9 cm 短辺 11.1 cm 厚さ 6.0 cm	表面中央に「TRC □K34」の赤印有り	100%
	第16図-4 図版10-4	レンガ	耐火 レンガ	長辺 22.7 cm 短辺 10.9 cm 厚さ 6.1 cm	表面中央に「KATO SK33」の赤印有り	100% 煤付着 長辺側一部加工され て台形状になっている
燃料 置き場	第17図-5 図版10-6	磁器	碗	口径 (11.6) cm 器高 5.4 cm 高台径 (4.2) cm	型紙摺り染付 外面花文 内面口縁部幾何学文 高台曇付露胎	不明 40%
	第17図-6 図版10-6	磁器	碗	口径 11.6 cm 器高 6.0 cm 高台径 3.9 cm	色絵 白・赤色釉の横線文 高台曇付露胎	不明 90%
	第17図-7 図版10-7	陶器	碗	口径 (7.8) cm 器高 5.3 cm 高台径 4.2 cm	内面白色釉による巻刷毛目文 外面褐色釉による横 線文 高台曇付露胎	不明 40%
	第17図-8	磁器	碗蓋	口径 (10.0) cm 器高 2.8 cm つまみ径 (3.8) cm	銅版転写染付 外面花唐草文 つまみ内「専成堂製」 の銘と欄線有り つまみ端部露胎	不明 40%
甍1	第19図-9 図版10-10	陶器	碗	口径 (10.6) cm 器高 5.6 cm 高台径 3.5 cm	内外面巻刷毛目文 高台曇付露胎 離れ砂付着	肥前 50%
	第19図-10 図版10-10	陶器	碗	口径 (10.6) cm 器高 6.9 cm 高台径 5.1 cm	染付 外面山水文 高台曇付露胎	肥前(露胎染付) 50%
	第19図-11 図版10-11	陶器	碗	高台径 4.2 cm	灰釉 高台から高台脇にかけて露胎	京焼系 10% 高台内曇着有り
	第19図-12 図版10-12	磁器	碗	口径 (10.8) cm 器高 5.4 cm 高台径 4.8 cm	見込み蛇ノ目輪刺ぎ 染付 外面草花文 高台曇付 露胎	肥前 60% 二次焼成済み
	第19図-13	磁器	皿	高台径 3.8 cm	見込み蛇ノ目輪刺ぎ 染付 内面文様有り アルミ ナ塗布 高台から高台脇まで露胎	肥前 40%
	第19図-14 図版10-14	瓦	軒丸	直径 13.9 cm 瓦当厚 1.1 cm 側面厚 1.6 cm	左巻き三巴文 珠文数19個 互当雷母粉付着	20%
	第19図-15 図版10-15	瓦	軒平	瓦当高 4.5 cm 側面幅 1.5 cm	横唐草文	70%
	第20図-16 図版10-16	陶器	壺	口径 (64.2) cm	内面体部ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部ナ デ	備前 30%
	第20図-17 図版10-152	陶器	壺	口径 (49.5) cm	内面底部ナデ 体部ハケ目とナデ 外面底部ナデ 体部ケズリとナデ	備前 30%
	第20図-153	陶器	壺		内外面ナデ 煎印有り	備前 1%
男柱2	第24図-18 図版11-18	土師質 土器	皿	口径 (12.6) cm 器高 2.7 cm	手捏丸成形 内面底部ナデ 内外面口縁部ヨコナデ	50% 口縁部付口文あり

第1表 第203次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他
男柱2	第24回-19 図版11-19	陶器	受皿	口 径 6.4 cm 器 高 1.1 cm 底 径 2.6 cm	灰釉 内面貫入入る 外面口縁以下露胎	京焼系 90% 内面一部附付着
	第24回-20 図版11-20	磁器	碗	口 径 (11.2) cm 器 高 4.8 cm 高台径 (4.4) cm	見込み蛇/目輪割ぎ 染付 外面丸窓文と丸文 高台壘付露胎 離れ付付着	肥前 40%
	第24回-21 図版11-21	磁器	端反碗	口 径 (11.0) cm 器 高 5.7 cm 高台径 (4.4) cm	染付 外面花文 内面口縁部二重線縁 見込み欄干と文様有り 高台壘付露胎	肥前 50%
	第24回-22 図版11-22	磁器	輪花皿	口 径 (9.2) cm 器 高 2.4 cm 高台径 4.9 cm	型押し成形 染付 内面輪草文 見込み欄干の花文 高台壘付露胎	瀬戸 40%
	第24回-23 図版11-23	磁器	香炉	口 径 (24.2) cm 器 高 10.8 cm 高台径 13.2 cm	蛇/目凹型高台 脚部三足 見込み蛇/目輪割ぎ 染付 外面花道草と鳳凰文 高台内凹部以外露胎	肥前 80%
	第24回-24 図版11-24	陶器	鉢鉢	口 径 32.4 cm 器 高 12.2 cm 高台径 14.8 cm	クシ目13本一単位 見込み1本一単位の放射状横目 外面ヨコナデ	明石 80%
男柱3	第25回-25 図版11-25	土師質土器	皿	口 径 12.8 cm 器 高 2.8 cm	手捏ね成形 内面底部ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外面ナデ	90% 口縁部灯芯痕有り
	第25回-26 図版11-26	陶器	受台	口 径 5.8 cm 器 高 3.5 cm 高台径 4.2 cm	灰釉 内外面貫入入る 内面体部から底部と外面底部露胎	京焼系 100% 二次焼成痕有り
	第25回-27 図版11-27	陶器	皿	高台径 2.6 cm	銅緑釉 内面露胎 高台露胎	京焼系 90%
	第25回-28	磁器	端反碗	口 径 (8.4) cm 器 高 4.1 cm 高台径 (3.3) cm	染付 内面口縁部欄干有り 見込み欄干有り 外面口縁部欄干有り 高台壘付露胎	瀬戸 50%
	第25回-29 図版12-29	陶器	碗	口 径 14.6 cm 器 高 5.5 cm 高台径 6.1 cm	灰釉 三島手 見込み花文と方形枠に「福」の文字 口縁部幾何学文 外面刷毛目 外面高台から高台部にかけて露胎 内面見込み3ヵ所良跡有り	赤檜 90% 高台部に「赤檜山」の刷印有り
	第25回-30 図版11-30	磁器	碗	口 径 (12.0) cm 器 高 4.9 cm 高台径 4.3 cm	染付 外面口縁部彫刻文 体部蓮井文 高台内二重線縁の蛇と欄干有り 高台壘付露胎	肥前 50%
	第25回-31 図版12-31	磁器	端反碗	口 径 (10.4) cm 器 高 5.9 cm 高台径 4.1 cm	染付 内面口縁部透割輪状文 見込み帯文と二重線縁 外面半曲文 高台壘付露胎	肥前 60%
	第25回-32 図版12-32	陶器	蓋	口 径 27.3 cm	内面灰釉 外面白色釉 かえり露胎	不明 50%
	第25回-33	瓦	軒丸	直 径 (15.8) cm 瓦 当 厚 2.4 cm 側 面 厚 2.3 cm	右巻き三巴文	10%
	第25回-34 図版12-34	瓦	軒丸	直 径 (14.4) cm 側 面 厚 2.1 cm	左巻き三巴文 珠文数12個	20%
	男柱5	第28回-35 図版12-35	陶器	壺	底 径 21.2 cm	外面体部数珠上から黒緑色釉流し掛け 内面鉄釉を刷毛掛け
井戸2	第29回-36	磁器	碗	高台径 (4.2) cm	染付 外面花文、見込み手描き五弁花と二重線縁 高台壘付露胎	肥前 20%
	第29回-37	磁器	皿	口 径 (19.1) cm 器 高 4.0 cm 高台径 (9.6) cm	見込み蛇/目輪割ぎ 染付 内面草文 高台壘付露胎	肥前 20%
	第29回-38 図版12-38	瓦	軒丸	直 径 14.0 cm 瓦 当 厚 2.3 cm 側 面 厚 1.1 cm	左巻き三巴文 珠文数13個	30%

第2表 第203次調査遺物観察表(2)



遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他
井戸2	第29図-39 図版12-39	瓦	軒平	瓦当高 3.7 cm 頸部幅 1.6 cm	横溝草文	20%
	第29図-40	瓦	軒平	瓦当高 4.6 cm 頸部幅 1.4 cm	横溝草文	30%
	第29図-41	瓦	軒平	瓦当高 4.5 cm 頸部幅 1.6 cm	横溝草文	20%
SK6	第30図-42	土師質土器	皿	口径 (12.9) cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ	10%
	第30図-43 図版12-43	磁器	碗	口径 9.5 cm 器高 4.7 cm 高台径 3.9 cm	染付 外面草花文 高台壘付露胎	肥前 80%
SK7	第30図-44	陶器	皿	口径 (11.3) cm 器高 2.5 cm 底径 (4.2) cm	灰釉 内面貫入入る 外面体部から底辺露胎 見込みに1ヶ所目録残存	京焼系 30% 口縁部打込あり
	第30図-45 図版13-45	磁器	碗反碗盤	口径 9.1 cm 器高 2.7 cm つまみ径 4.1 cm	口縁端反り 染付 内面口縁部帯文 見込み若波文と蘭文 外面草文 つまみ端部露胎	肥前 90%
	第30図-46 図版13-46	磁器	碗反碗	口径 10.1 cm 器高 5.7 cm 高台径 4.4 cm	見込み蛇/目録割ぎ 染付 内面口縁部二重蘭線 見込み露胎	100%
	第30図-47	磁器	角鉢	高台径 (12.4) cm	型押し成形 青磁 見込みに蘭刺の花鳥文 高台壘付露胎	京焼系 10%
SK16	第30図-48	磁器	碗反碗	口径 (12.7) cm 器高 5.6 cm 高台径 (5.0) cm	見込み蛇/目録割ぎ 高台壘付露胎	肥前 40%
	第30図-49	土師質土器	皿	口径 (13.0) cm 器高 2.3 cm	手捏ね成形 内面底部ナデ 内外面口縁部ヨコナデ	20% 口縁部打込あり
SK40	第30図-50	土師質土器	皿	口径 (11.2) cm	手捏ね成形 内面体部ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部ナデ	20%
	第30図-51	土師質土器	皿	口径 (12.9) cm 器高 2.8 cm	手捏ね成形 内面底部ナデ 内外面口縁部ヨコナデ	30% 口縁部打込あり
	第30図-52	磁器	皿	口径 (13.5) cm 器高 2.9 cm 高台径 (8.0) cm	染付 内面花文と斜格子文 外面遊院唐草文 高台内面縁有り 高台壘付露胎	肥前 30%
	第30図-53	磁器	香炉	高台径 3.9 cm	青磁 内面と高台露胎	肥前 10%
SK241	第30図-54	磁器	碗	口径 (10.8) cm 器高 5.2 cm 高台径 4.2 cm	見込み蛇/目録割ぎ 染付 外面コンニャク印形蘭文 高台壘付露胎	肥前 40%
	第30図-55 図版13-55	瓦	軒丸	直径 15.6 cm 瓦当厚 1.5 cm 側面厚 1.8 cm	左巻き三巴文 珠文数15個	10%
	第30図-56	瓦	軒平	瓦当高 4.1 cm 頸部幅 1.5 cm	横溝草文	3%
	第31図-57 図版13-57	磁器	碗	口径 10.9 cm 器高 4.8 cm 高台径 4.5 cm	見込み蛇/目録割ぎ 染付 見込み丸文 外面丸窓文と丸文 高台壘付露胎 龍刺し付帯	肥前 60%
SP41	第31図-58	土師質土器	皿	口径 (12.5) cm 器高 3.1 cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ 外面ナデ	30% 口縁部打込あり

第3表 第203次調査遺物観察表(3)

遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他
SP42	第31回-59	磁器	碗	口 径 (12.6) cm 器 高 5.9 cm 高 台 径 (4.8) cm	見込み蛇ノ目輪割ぎ 染付 内面口縁部二重線跡 見込みコンニャク印州五弁花と二重線跡 外面丸窓 文と并桁文 高台費付露胎 露胎砂付着	肥前 40%
SP79	第31回-60	陶器	碗	口 径 (13.2) cm 器 高 5.2 cm 高 台 径 (4.4) cm	灰釉 高台費付露胎 露胎砂付着	肥前 30%
SD16	第33回-61	土師質 土器	皿	口 径 (10.4) cm 器 高 2.2 cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ	30%
	第33回-62	土師質 土器	皿	口 径 (10.3) cm 器 高 1.7 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外 面ナデ	20%
	第33回-63	土師質 土器	皿	口 径 (10.9) cm 器 高 2.0 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外 面ナデ	30%
	第33回-64	瓦器	椀	口 径 (16.2) cm	内面体部ナデとミガキ 見込み平行線状ミガキ 内 外面口縁部ヨコナデ 外面口縁部から体部下半部にか けてミガキ 体部下半部指張汪痕	和泉型 20%
	第33回-65 図版13-65	瓦器	椀	口 径 (15.7) cm 器 高 5.0 cm 高 台 径 5.2 cm	内面体部ナデとミガキ 見込み平行線状ミガキ 内 外面口縁部ヨコナデとミガキ 外面体部指張汪痕と ナデとミガキ 高台ヨコナデ 高台内ナデ	和泉型 40%
	第33回-66	瓦器	椀	口 径 (15.8) cm	内面体部ナデとミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外 面口縁部から体部上半部にかけてミガキ 体部下 半部指張汪痕とナデ	和泉型 20%
	第33回-67	瓦器	椀	高 台 径 (5.0) cm	見込みヨコナデとジグザグ状ミガキ 高台ヨコナデ 高台内ナデ	和泉型 20%
	第33回-68 図版13-68	瓦質土器	火舎		内面体部から外面口縁部にかけてヨコナデ	奈良 5%
	第33回-69 図版13-69	陶器	壺		内外面ヨコナデ	丹波 1%
	第33回-70	磁器	碗	口 径 (15.8) cm	白釉 外面体部下露胎	中国 30%
	第33回-71	須恵器	片口鉢	口 径 (32.5) cm	内外面圓縁ナデ	東播磨 5%
	図版13-154	石製品	一石 五輪塔	幅 12.6 cm	花崗岩 空・露胎部	40%
	SD22	第34回-72	土師質 土器	皿	口 径 (9.5) cm 器 高 1.5 cm	手捏ね成形 底部内側に凹孔 内外面口縁部ヨコナ デ
第34回-73		土師質 土器	皿	口 径 (14.2) cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ 外 面体部ナデ	10%
第34回-74 図版13-74		陶器	香炉	口 径 (11.7) cm 器 高 4.8 cm	灰釉 内面体部から底部にかけて露胎 外面露胎部	瀬戸 30%
第34回-75 図版13-75		磁器	香炉	高 台 径 4.5 cm	青磁 脚部1ヵ所残存 内面露胎 外面高台内から 臺村にかけて露胎	中国 10%
第34回-76 図版14-76		磁器	碗	高 台 径 5.5 cm	青磁 高台内露胎 内面印花文	中国 20%
第34回-77 図版14-77		瓦	軒丸	直 径 (14.6) cm 瓦 当 厚 1.4 cm	左巻き三巴文	10%
						D類

第4表 第203次調査遺物観察表(4)

遺構名	番号	材質	器種	測量	特徴	備考 産地・残存率・その他
SD22	第34図-78	瓦	軒丸	直径 (13.6) cm	左巻き三巴文	5%
				側面厚 2.5 cm		
SX20 上層	第36図-79	瓦器	椀	高台径 (5.1) cm	内面ナデとミガキ 外面体部ナデ 高台ヨコナデ 高台内ナデ	和装型 10%
				直径 9.6 cm	内面見込みへラ推きによる格子目状の窪目 外面底部永切り(産右回転)	
	第36図-80 図版14-80	陶器	おろし皿	直径 9.6 cm	内外面緑色釉を施す	中国 10%
	第36図-81 図版14-81					
	第36図-82	白磁	碗	高台径 7.2 cm	見込み次第有り 体部下半部から高台露出	中国 30%
	高台径 6.6 cm					
	第36図-83 図版14-83	瓦	軒丸	直径 (14.2) cm	右巻き三巴文	20%
瓦当厚 2.4 cm	A類					
第36図-84	瓦	軒丸	直径 (14.6) cm	左巻き三巴文 内面線有り	10%	
						D類
SX20	第37図-85 図版14-85	土師質 土器	皿	口径 (8.3) cm 器高 1.3 cm	手捏丸成形 内面ナデ 内外縁口縁部ヨコナデ 外面ナデ	20%
	第37図-86 図版14-86	土師質 土器	皿	口径 (15.7) cm	手捏丸成形 内面体部ヨコナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外面ナデ	京都系 20% 口縁部口芯痕有り
	第37図-87 図版14-87	土師質 土器	皿	口径 (11.4) cm	手捏丸成形 内外面口縁部ヨコナデ 外面ナデ	京都系 20%
	第37図-88 図版14-88	土師質 土器	鍋	口径 (30.3) cm	内面ヨコハケ 内外面口縁部ヨコナデ 外面ヨコナデ	5%
	第37図-89 図版14-89	瓦質土器	羽釜	口径 (16.6) cm	内外面磨耗が著しく調査不明	10%
	第37図-90 図版14-90	土師質 土器	羽釜		内外面磨耗が著しく調査不明	5%
	第37図-91 図版15-91	磁器	碗	見込み次第有り 体部下半部から高台にかけて露出	中国 30%	
	高台径 6.9 cm					
	第37図-92	磁器	碗	青磁 外面内形りの漆丹文 高台内露出	中国 20%	
	高台径 (5.6) cm					
	第37図-93 図版15-93	瓦	軒丸	直径 (16.4) cm	左巻き三巴文 内面線有り	10%
	瓦当厚 2.0 cm 側面厚 3.0 cm			B類		
	図版14-155	陶器	指鉢		内外面口クロナデ クシ目8本一単位	備前 5%
SK59	第39図-94 図版15-94	瓦	軒丸	直径 (15.5) cm	左巻き三巴文 内外面線有り	30%
	瓦当厚 2.7 cm			NM1 B類		
	第39図-95	瓦	軒丸	厚さ 2.3 cm		60%
第39図-96 図版15-96	瓦	丸	厚さ 2.1 cm		20%	
			M1 C類			

第5表 第203次調査遺物観察表(5)

遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他	
SK59	第39回-97 図版15-97	瓦	軒平	瓦当高 4.1 cm 頸部幅 2.0 cm	宝珠蓮草文	10% 范キズ有り	
	図版16-156	瓦	鬼		隅塊 縁と鼻	30%	
SK61	第39回-98 図版16-98	瓦	軒丸	瓦当厚 1.4 cm 側面厚 2.3 cm	左巻き三巴文 内面線有り	10% 范キズ有り	
	第39回-99 図版16-99	瓦	軒平	瓦当高 4.5 cm 頸部幅 2.7 cm	半截菊花蓮草文	5%	
SK63	第40回-100 図版16-100	瓦	軒丸	直径 14.2 cm 瓦当厚 1.8 cm 側面厚 2.8 cm	左巻き三巴文 内面線有り	40%	
	第40回-101 図版16-101	瓦	軒丸	直径 (16.8) cm 瓦当厚 2.6 cm	左巻き三巴文 内面線有り	5%	
	第40回-102 図版17-102	瓦	軒丸	直径 (14.6) cm	内外面線有り	5%	
	第40回-103 図版16-103	瓦	軒丸	直径 (14.2) cm 瓦当厚 1.4 cm 側面厚 2.6 cm	左巻き三巴文 内面線有り	5% 范キズ有り	
	第40回-104 図版17-104	瓦	丸	広端幅 13.8 cm 厚さ 2.3 cm		80%	
	第40回-105 図版17-105	瓦	丸	全長 34.6 cm 広端幅 14.0 cm 厚さ 1.9 cm		100%	
	第40回-106 図版17-106	瓦	宝珠	基部径 (14.6) cm	宝珠瓦の基部	5%	
	第40回-107 図版17-107	瓦	鯉		鱗へラ揃	10%	
	SK93	第41回-108 図版17-108	瓦	軒丸	直径 13.8 cm 瓦当厚 1.3 cm 側面厚 2.2 cm	左巻き三巴文 珠文数19個 内面線有り	50% 范キズ有り
		第41回-109 図版18-109	瓦	丸	厚さ 2.5 cm		70%
第41回-110 図版17-110		瓦	丸	厚さ 2.0 cm		40%	
図版18-157		瓦	丸	厚さ 2.1 cm		40%	
第41回-111 図版18-111		瓦	軒平	上弦幅 22.2 cm 瓦当高 4.0 cm 頸部幅 2.3 cm	宝珠蓮草文	40%	
第42回-112 図版18-112		瓦	平	全長 27.9 cm 広端幅 21.7 cm 厚さ 2.0 cm		90%	
第43回-113		瓦	雁振	厚さ 2.2 cm		40%	
第42回-114 図版18-114		瓦	鬼	珠文径 2.0 cm	母屋 右下辺 側面は張削こしらえ 蓮珠溝内押型の半円形の珠有り 蓮珠の頂部は蓮珠溝より出ない	5%	

第6表 第203次調査遺物観察表(6)

遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他	
SK93	第42図-115 図版18-115	瓦	宝珠		頭頂部は穴が空いている	60%	
	第42図-116 図版18-116	瓦	面戸	厚 さ 2.0 cm	壁面戸	90%	
	図版18-158	瓦	鬼		隅鬼 右側から下顎	20% 第217次調査 SX301出土の 鬼瓦と接合	
	図版19-159	瓦	鬼		左目 瞳は貫通しない	1%	
	図版19-160	瓦	鬼		左目 瞳は貫通する	1%	
SK106	第44図-117	土師質 土器	焙烙		内面体部と外面口縁部ヨコナデ 外面体部右上がり の平行タタキ	5% 外面煤付着	
	第44図-118	陶器	天目輪	口 径 (11.7) cm 器 高 6.4 cm 高 台 径 5.0 cm	鉄輪 外面体部下部分から高台にかけて鉄輪かかる	瀬戸-美濃 40%	
	第44図-119	陶器	陶	口 径 (10.8) cm	灰胎 外面体部下部分露胎	鹿津 30%	
	第44図-120	陶器	皿		灰胎 外面体部下部分露胎 見込み砂目積み底有り	鹿津 20%	
	第44図-121 図版19-121	陶器	鉢	高 台 径 5.2 cm	灰胎 内面見込み露胎 外面体部下部分から高台かけ て露胎	30%	
	第44図-122	白磁	端反皿	口 径 (13.8) cm	白磁	中国 10%	
	第44図-123 図版19-123	陶器	擂鉢		内外面口縁部ヨコナデ 外面体部指環状瓦 掻目ヘ ラ横 内面口縁部に「△」の模刻有り	丹波 1%	
	第44図-124 図版19-124	陶器	擂鉢		外面体部ヨコナデ 掻目ヘラ横	丹波 5%	
	図版19-161	瓦	觥	底 径 (13.4) cm	背輪部 觥はヘラ横	1%	
	図版19-162	土師質 土器	不明		内径に鉄輪とスラグ状の付着物有り		
	SP242	第45図-125	陶器	擂鉢	口 径 (24.4) cm 器 高 10.6 cm 底 径 12.0 cm	外面口ヨコナデ クシ目8本一単位	備前 30%
	SD31	第48図-126	土師質 土器	皿	口 径 (11.0) cm 器 高 1.6 cm	手捏ね成形 内面底部ナデ 内外面口縁部ヨコナデ	40%
第48図-127		土師質 土器	皿	口 径 (9.8) cm 器 高 2.2 cm	手捏ね成形 内面底部ナデ 内外面口縁部ヨコナデ	40%	
第48図-128		土師質 土器	皿	口 径 (8.1) cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ	10%	
SD39	第48図-129	瓦器	觥	口 径 (15.0) cm	内面体部ナデとミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外 面体部指環状瓦とミガキ	和泉型 10%	

第7表 第203次調査遺物観察表(7)

遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他
SD39	第48回-130	瓦器	椀	高台径 (5.8) cm	見込みナデと格子状ミガキ 高台ヨコナデ 高台内ナデ	和泉型 10%
SD44	第48回-131	瓦器	椀	口径 (12.1) cm	内面体部ナデとミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部指環状瓦	和泉型 20%
SK200	第51回-132 図版19-132	瓦器	椀	口径 (14.3) cm	内面体部から外面口縁部にかけてヨコナデとミガキ 外面体部指環状瓦とナデ	和泉型 10%
	第51回-133 図版19-133	土師質土器	土器	最小径 0.9 cm 最大径 1.2 cm 長さ 4.1 cm	管状 絞縄型	100%
SK206	第51回-134 図版19-134	瓦	軒丸	直径 16.0 cm 瓦当厚 3.7 cm 側面厚 3.6 cm	左登き三巴文 珠文数17個 内外縁線有り	40%
	第51回-135	瓦器	椀	高台径 (5.0) cm	見込みナデとジグザグ状ミガキ 高台ヨコナデ 高台内ナデ	和泉型 10%
SK208	第51回-136	瓦器	椀	高台径 (6.2) cm	見込みナデとジグザグ状ミガキ 高台ヨコナデ 高台内ナデ	和泉型 10%
	第51回-137 図版20-137	瓦器	椀	口径 (15.8) cm 器高 5.5 cm 瓦台径 (5.2) cm	内面体部ナデとミガキ 見込み乱方向のミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部指環状瓦とナデとミガキ 高台ヨコナデ 高台内ナデ	和泉型 70%
SK226	第51回-138 図版20-138	土師質土器	羽釜	口径 (27.4) cm	内面体部ハウメ 縁部ヨコハケ 内外面口縁部ヨコナデ 外面汚濁部ヨコナデ 体部ナデ	20% 外面体部炭付着
SK228	第51回-139 図版20-139	磁器	椀	口径 (15.7) cm 器高 5.9 cm 高台径 (5.7) cm	白磁 外面高台から高台輪にかけて露胎	中国 40%
SK229	第51回-140 図版20-140	瓦器	皿	口径 (9.5) cm 器高 1.7 cm	見込みナデとジグザグ状ミガキ 内外面口縁部ヨコナデとミガキ 外面体部指環状瓦	和泉型 50%
	第51回-141 図版20-141	磁器	碗	高台径 4.1 cm	青白磁 高台内露胎	中国 40% 漆継痕有り
SP607	第52回-142 図版20-142	土師質土器	皿	口径 (9.3) cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内外面口縁部にかけてヨコナデ 外面ナデ	50%
	第52回-143 図版20-143	土師質土器	皿	口径 (9.2) cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内外面口縁部にかけてヨコナデ 外面ナデ	50%
	第52回-144 図版20-144	土師質土器	皿	口径 (9.8) cm 器高 1.5 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内外面口縁部にかけてヨコナデ 外面ナデ	50%
	第52回-145 図版20-145	土師質土器	皿	口径 (9.7) cm 器高 1.5 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内外面口縁部にかけてヨコナデ 外面ナデ	50% 口縁部灯芯痕有り
	第52回-146 図版20-146	瓦器	皿	口径 9.4 cm 器高 2.2 cm	内面体部ミガキ 見込み乱方向のミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部指環状瓦とナデ	80%
	第52回-147 図版20-147	瓦器	椀	高台径 (4.8) cm	内面体部ミガキ 見込み平行線状ミガキ 高台ヨコナデ 高台内ナデ	和泉型 40%
SP652	第52回-148	瓦器	椀	口径 (15.1) cm	内面ナデとミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外面指環状瓦とミガキ	和泉型 20%
SP670	第52回-149	瓦器	椀	口径 (13.9) cm	内面ナデとミガキ 見込み平行線状ミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外面指環状瓦とナデとミガキ	和泉型 20%

第8表 第203次調査遺物観察表(8)

遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 座地・残存率・その他
第3期	第53図-150	瓦器	椀	高台径 (5.1) cm 口径 (42.8) cm	内面体部ナデと横方向のミガキ 見込み平行線状ミ ガキ 外面体部頸部凹痕とミガキ 高台両輪部ヨコ ナデ 高台内ナデ	和泉型 30%
	内外面ヨコナデ					
	第53図-151 図版20-151	陶器	罐			丹波 5%
	図版20-163	瓦	鬼		隅鬼 眉間と左目	40%

第9表 第203次調査遺物観察表（9）

## 第2節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第217次調査

調査面積 1100㎡

調査期間 平成10年12月21日～平成11年3月31日

調査担当者 小長谷正治・中畔明日香

### 1. 遺跡の概要

本調査地点は、伊丹段丘東端にほど近く、有岡城（1574～79年）主郭から北西に200mの地点に位置し、当時は侍町に属していた。前年度に行われた第203次調査において1500年前後に作られたと思われる大量の瓦が出土し、伊丹城（伊丹氏居館）期の瓦葺建物の存在が推定されている。伊丹郷町期は湊町に属し、江戸時代後半には酒蔵として土地利用されていた。当地は、「富士山蔵」という伊丹を代表する酒造場の一つで、稼働はしていなかった。

### 2. 調査の概要

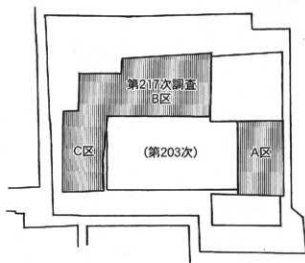
前年度の第203次調査（以後、「203次」とする）に引き続き、共同住宅建設に伴う記録保存のための緊急発掘調査（震災復旧・復興事業）として、開発予定地の残り1100㎡を調査した。当敷地内の開発範囲から外れた部分である北側には、コンクリート造平屋建ての建物が1棟残っており、酒造道具や建築部材が保管されていた。前調査時に残存していた敷地東隅の建物（コンクリート造平屋建て）は開発範囲内であるため、今回の調査開始までに取り壊された。今回の調査区は、前調査区を取り囲むように配置され、その東側をA区、北側をB区、西側をC区とした（第54図）。

調査は、既存建物解体撤去後の攪乱層を重機にて除去し、その後人力にて遺構検出を行い、適宜、図面作成・写真撮影を行った。調査期間中、一般市民を対象にした現地説明会（3月27日）や、公募による親子発掘体験講座（2月27日）を開催した。

### 3. 基本層序（調査面）

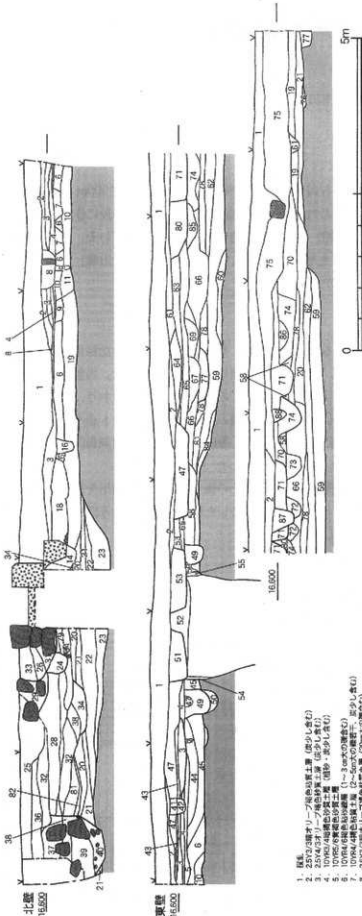
現表土から地山までの堆積土は敷地西側が浅く、東側が深い。A区・B区は3面、C区は2面で調査を行った。当敷地の高さは約T.P.+17.000mで、既存建物（酒蔵）の土間面とほぼ同じである。

第1面は、A・B・C区とも、既存建物の解体撤去後の攪乱層を除去した後、T.P.+16.600mを目安として調査を行った。第3面は地山上で遺構検出を行った。A・B区で調査した第2面は、地山直上に広がる暗褐色粘質土層（B区5I）などを検出し調査を行った。この層は敷地西側のC区には堆積していない。今回の調査及び報告は、203次に合わせて行ったため、調査面の時期区分は同様である。



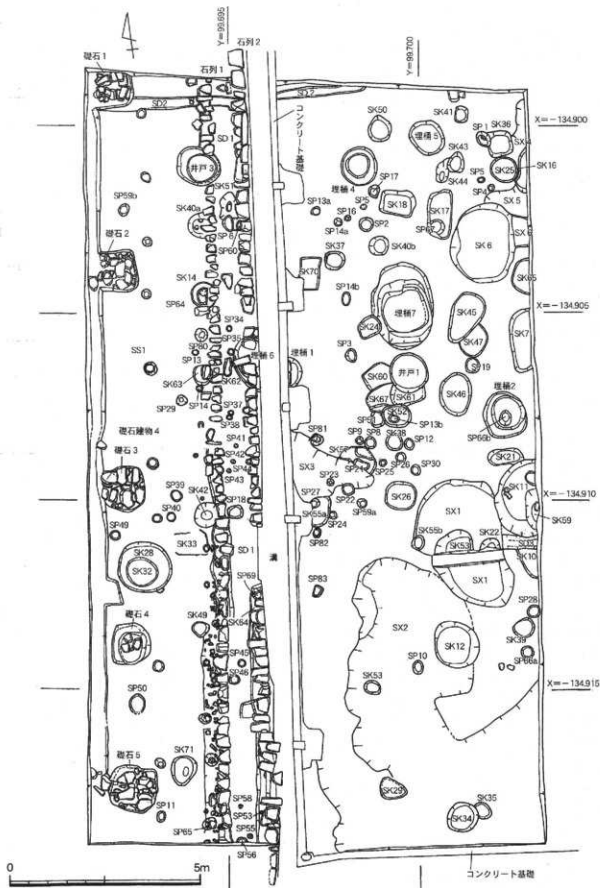
第54図 調査区設定図（1/1000）





第55図 A区土層断面図

1. 25V/3暗ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 2. 25V/4ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 3. 25V/5ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 4. 10V/2暗色粘土層 (底少し含む)  
 5. 10V/3暗色粘土層 (底少し含む)  
 6. 10V/4暗色粘土層 (底少し含む)  
 7. 10V/5暗色粘土層 (底少し含む)  
 8. 25V/3暗ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 9. 25V/4ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 10. 10V/5暗色粘土層 (底少し含む)  
 11. 10V/6暗色粘土層 (底少し含む)  
 12. 25V/6ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 13. 25V/7ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 14. 25V/8ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 15. 25V/9ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 16. 25V/10ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 17. 25V/11ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 18. 10V/12暗色粘土層 (底少し含む)  
 19. 10V/13暗色粘土層 (底少し含む)  
 20. 10V/14暗色粘土層 (底少し含む)  
 21. 25V/15ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 22. 25V/16ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 23. 25V/17ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 24. 25V/18ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 25. 10V/19暗色粘土層 (底少し含む)  
 26. 10V/20暗色粘土層 (底少し含む)  
 27. 10V/21暗色粘土層 (底少し含む)  
 28. 10V/22暗色粘土層 (底少し含む)  
 29. 10V/23暗色粘土層 (底少し含む)  
 30. 10V/24暗色粘土層 (底少し含む)  
 31. 10V/25暗色粘土層 (底少し含む)  
 32. 75V/26暗色粘土層 (底少し含む)  
 33. 10V/27暗色粘土層 (底少し含む)  
 34. 10V/28暗色粘土層 (底少し含む)  
 35. 10V/29暗色粘土層 (底少し含む)
36. 10V/30暗色粘土層 (底少し含む)  
 37. 10V/31暗色粘土層 (底少し含む)  
 38. 25V/32暗色粘土層 (底少し含む)  
 39. 10V/33暗色粘土層 (底少し含む)  
 40. 10V/34暗色粘土層 (底少し含む)  
 41. 25V/35ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 42. 10V/36暗色粘土層 (底少し含む)  
 43. 25V/37ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 44. 10V/38暗色粘土層 (底少し含む)  
 45. 10V/39暗色粘土層 (底少し含む)  
 46. 10V/40暗色粘土層 (底少し含む)  
 47. 25V/41ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 48. 10V/42暗色粘土層 (底少し含む)  
 49. 10V/43暗色粘土層 (底少し含む)  
 50. 10V/44暗色粘土層 (底少し含む)  
 51. 25V/45ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 52. 10V/46暗色粘土層 (底少し含む)  
 53. 25V/47ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 54. 10V/48暗色粘土層 (底少し含む)  
 55. 10V/49暗色粘土層 (底少し含む)  
 56. 10V/50暗色粘土層 (底少し含む)  
 57. 25V/51ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 58. 10V/52暗色粘土層 (底少し含む)  
 59. 10V/53暗色粘土層 (底少し含む)  
 60. 10V/54暗色粘土層 (底少し含む)  
 61. 10V/55暗色粘土層 (底少し含む)  
 62. 25V/56ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 63. 10V/57暗色粘土層 (底少し含む)  
 64. 10V/58暗色粘土層 (底少し含む)  
 65. 25V/59ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 66. 10V/60暗色粘土層 (底少し含む)  
 67. 10V/61暗色粘土層 (底少し含む)  
 68. 25V/62ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 69. 10V/63暗色粘土層 (底少し含む)  
 70. 10V/64暗色粘土層 (底少し含む)  
 71. 10V/65暗色粘土層 (底少し含む)  
 72. 25V/66ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 73. 10V/67暗色粘土層 (底少し含む)  
 74. 10V/68暗色粘土層 (底少し含む)  
 75. 10V/69暗色粘土層 (底少し含む)  
 76. 10V/70暗色粘土層 (底少し含む)  
 77. 10V/71暗色粘土層 (底少し含む)  
 78. 10V/72暗色粘土層 (底少し含む)  
 79. 10V/73暗色粘土層 (底少し含む)  
 80. 10V/74暗色粘土層 (底少し含む)  
 81. 10V/75暗色粘土層 (底少し含む)  
 82. 10V/76暗色粘土層 (底少し含む)  
 83. 25V/77ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)  
 84. 10V/78暗色粘土層 (底少し含む)  
 85. 10V/79暗色粘土層 (底少し含む)  
 86. 10V/80暗色粘土層 (底少し含む)  
 87. 10V/81暗色粘土層 (底少し含む)  
 88. 25V/82ナリ〜暗色粘土層 (底少し含む)



第56図 A区第1面全体図

## (1) A区

203次調査区東壁と接する調査区である。そのため、203次で検出された遺構に続くものが多くあり報告が重なるが、今回の調査で遺構の規模が明らかになった。第1面の建物跡(酒蔵)や、第2面の大量に瓦が廃棄された堀状遺構などである。調査は3面行い、地山にて検出した古墳時代の遺構のみ、第3面(地山面)調査後に掘削を行った。調査区東半に建っていた既存建物のコンクリート基礎が撤去されずに中央に残り、調査区を西・東に隔っている。

### 第1面(第56図 図版21)

江戸時代前期の遺構は検出されていない。江戸時代後期に調査区西側に礎石建物4が建てられる。203次でこの建物の西側半分が検出され、その内部には男柱・垂壺が作られた。そのため、この建物が酒蔵で、槽場があったことが確認されている。

### 礎石建物

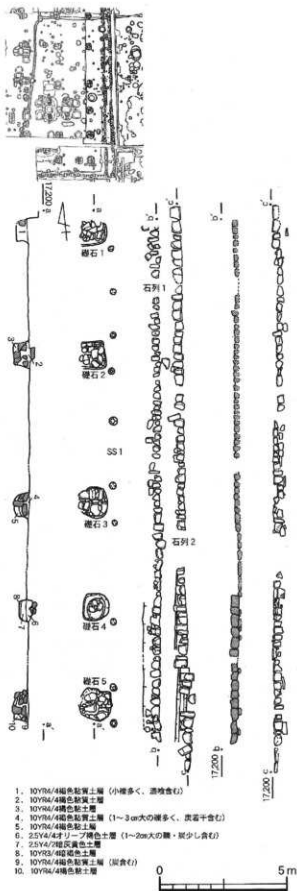
A区で遺構として検出された建物跡は1棟だけであるが、埋桶・井戸などの遺構から、少なくとももう1棟の建物が建てられていたことが推定できる。

### 礎石建物4(第57図 図版21)

調査区西壁際で、幅約1.2mの隅丸方形の掘り方をもつ礎石の根石4基(礎石1・2・3・5)と、幅70cmの隅丸方形の掘り方をもつ礎石の根石(礎石4)が南北に並んで検出された。礎石1・2・3は、203次で調査区東壁で検出されていたものである。

礎石1・2・3・5は石が3段に積まれ、掘り方は検出面から50cm掘りこまれていた(底面は約T.P.+16.000m)。地山はT.P.+16.100mであり、地山を掘りこんでいる。

それらと比べ、礎石4の掘り方は30cmと浅く、根石は2段で、石も小振りである。掘り方内に施されていた土も異なる。礎石4の掘



第57図 A区礎石建物4平面・断面図

り方の下に、さらに一段の礎石の掘りこみが認められた。礎石1・2・3の埋土も同じである。下の掘り方は建築当初のもので、礎石4のみ、後にやり直された可能性がある。

石列1は、自然石が3段積まれ、東側に面をもつ。掘り方内にはこぶし大の石が裏込めとして施されていた。その下からは約1m間隔で径15cm、深さ10cmの穴が見つかった。これは杭跡と考えられる。石を積む際に打たれたものであろう。この石列は、建物の壁の基礎と考えられる。積まれた石の面や裏込めの施された方向から、礎石建物4に関係するものであることがわかる。

203次で検出されている西と中央の2つの礎石列（P22、第15図）とあわせ、南北方向に棟をもつ建物が復元できる。

203次では、西礎石列の西側には、石列1のような石列は検出されず、下屋の存在は不明とされている。礎石建物4の規模は、石列1が東壁、203次の礎石17・16・13他の西列が西壁の位置とすると、この礎石建物4は幅約12.5m・長さ約21m以上となる。203次では、この建物内で江戸時代の男柱・垂垂跡が数基検出されており、搾り場として活用されていたことがわかる。

石列1の約1m東側に並ぶ石列2は、加工された石が並べられていた。掘り方や裏込めは持たない。石列2の石積み底には、黄色の漆喰が施された跡が残る箇所もある。また、その上の堆積土（石列2構築時に施された土）には、近代以降に作られた染付磁器が含まれる。石列1と石列2は、使用している石の違い、石積みの工法の違いなどから、建築当初に同時に存在したのではなく、石列1の施工後、石列2が構築されたと考えられる。

明治37年に描かれた絵図（第183図②）には、礎石建物4に相当する蔵の寸法が記載されている。その外側には逆し字形に区画された空間が描かれている。それは蔵の下屋を表していると考えられる。また、礎石建物の東側は「空地」と記載されている。それ以前の「明治19年酒造場届書写」（第186図）には礎石建物4の東側の記述はない。この時は敷地から外れていたが、明治39年までに取得したのであろう。石列2は、もともと敷地境の溝として、礎石建物4建設後につくられた。その後、東側に礎石建物4と平行して、昭和2年以降にコンクリート基礎をもつ建物が建てられた際、その間は幅50cmの排水溝となったものと考えられる。その溝内となる石列2の面にはコンクリートが施され、補修されたところがあった。

礎石列の東側で、直径約30cmの柱穴を11カ所検出した。前調査区内で検出されている柱穴列と合わせると、礎石の東西両側に平行する2条の柱列となる。建物建設時の足場材の柱列（SS1）と考えられる。柱間寸法は、礎石の四隅のみ1.4mであるが、その他は揃っていない。同様の足場材の柱列は203次で検出された中央礎石列でも確認されている。

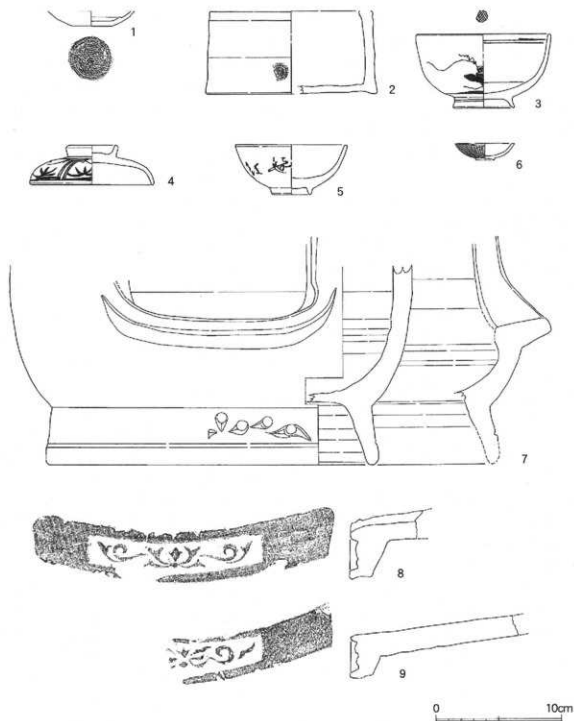
## 埋桶

A区では、埋桶跡と見られる遺構が数基検出された。桶の板材は残っていない。対になるものは便桶と考えられる。しかし、単独の便桶ではない大型の埋桶跡も検出された。

### 埋桶1（第58図 図版32）

調査区中央、コンクリート基礎の下から検出された。掘り方の直径は80cm、底面は平坦で、深さは60cmを測る。桶の木材は残っていないが、直径約50cmの桶が埋められていたことが断面観察から推定される。埋土には多くの瓦が廃棄されていた。

出土遺物は、軟質施釉陶器受皿（1）、備前焼匣鉢（2）、肥前磁器染付碗（3）・同蓋（4）、同紅猪口（5）、同白磁缸皿（6）、土師質土器焔炉（7）、軒平瓦（8・9）などである。



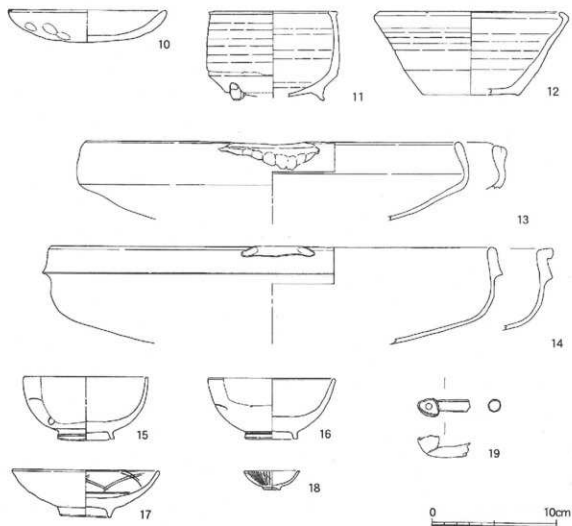
第58図 A区埋桶1出土遺物

埋桶4 (第56図 図版21)

調査区北側で検出された。直径90cmの円形の掘り方で、深さは約65cmを測る。桶材は残っていないが、平坦になった底部から径約60cmの桶が埋められていたと考えられる。

埋桶5 (第56図 図版21)

調査区北側で、埋桶4に隣接して検出された。直径約90cmのほぼ円形の掘り方で、深さは約40cmを測る。埋桶4と対で使用されていた便槽と考えられる。埋桶4・5とも、遺物は出土していない。



第59図 A区埋桶6出土遺物

## 埋桶6 (第59図 図版32・33)

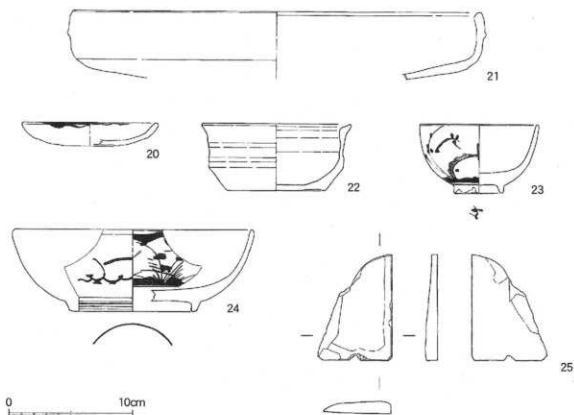
調査区中央で、石列2の下から検出された。1.3×1.1mの楕円形の掘り方で、深さは65cmを測る。直径約70cmの桶が埋められていたのだろう。位置から見て、埋桶1と対になる便槽と考えられる。

出土遺物は、土師質土器皿(10)、陶器火入れ(11)、丹波焼鉢(12)、土師質土器炮烙(13・14)、肥前磁器染付碗(15・16)・同皿(17)、白磁紅皿(18)、煙管雁首(19)などである。

## 埋桶7 (第60図 図版33)

調査区東側で検出された。2.3×1.5mの楕円形の掘り方で、深さは1mを測る。直径約1.2m、深さ約90cmの大型の桶が掘えられていたのだろう。後述する井戸1と隣接していることから、井戸に付属して使用する施設ではないかと考えられる。埋土最上層には漆喰が含まれていた。

出土遺物は、土師質土器皿(20)、同炮烙(21)、丹波焼火入れ(22)、肥前磁器染付碗(23)・同皿(24)、砥石(25)などである。



第60図 A区埋桶7出土遺物

## 井戸

数基検出されているが、底までの掘削を行っていないため、井戸と断定はできない。近接する遺構などにより井戸と推定できるものを報告する。

### 井戸1 (第56図 図版21)

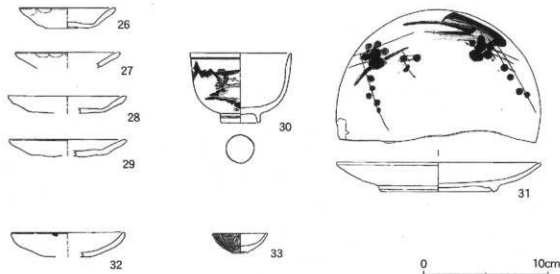
調査区東側で検出された。平面形はほぼ円形を呈し、直径約1mの掘り方をもつ。1mまで掘削したが、底までは達していない。上層には大量の瓦が廃棄されていた。コンクリート基礎建物前には瓦葺建物が建っていた。その内部に掘られ、使用されていた井戸で、近接して検出した埋桶7と共に使用されたものであろう。

### 井戸101 (第62図 図版22)

調査区東壁際で検出した。遺構半分は、調査区外に続く。第2面で検出したが、遺物(図示できるものはなかった)などから考えて第1面の遺構として報告することにした。平面形はほぼ円形を呈し、直径1.5mの掘り方をもつ。内径は約1mとなる。底には達していない。

### 井戸3 (第56図 図版21)

調査区西側北寄り、石列1内で検出した。平面形はほぼ円形を呈し、直径1m、内径75cmを測る。1.2mまで掘削したが、底には達していない。埋土上層から、レンガやコバルト釉の染付碗が出土した。近代以降に埋められたことがわかる。礎石建物4の東壁が東側の石列2に移行した時期、恐らくは、東側にコンクリート建物が建てられた時に、酒仕込みに使用する水を確保するために掘られたものではないだろうか。



第61図 A区SX1・SX2出土遺物

## 不明遺構

## SX1 (第61図 図版33)

調査区東側で検出された。東西2m×南北4m、最深30cmの遺構である。調査区中央のコンクリート溝より東であるので、増築されたコンクリート造平屋建ての建物内となる。

出土遺物は、土師質土器皿(26～29)・京焼系磁器染付碗(30)・同皿(31)などである。

この付近の土は油で非常に汚れており、遺構の検出が非常に困難であったため、重なり合う遺構を明確に検出しきれなかった。結果、下層や他の遺構の遺物が混入したことも考えられる。

## SX2 (第61図 図版33)

調査区東南隅で検出された。SX1と同じく、遺構の明確な規模・性格は不明である。

出土遺物は、土師質土器皿(32)、肥前白磁紅皿(33)などである。

## 第2面 (第62図 図版22)

有岡城期(1574～79年)および、それ以前の伊丹城期の調査面となる。溝・柱穴などの遺構を数多く検出した。年代を確定できる遺物がほとんど出土していないため、遺構の時期を見極めることや、有岡城期と伊丹城期の区画割の違いなどを明確にすることは難しい。第1面同様、主要な遺構のみの報告とする。特筆すべき点は、前調査区から続くSD103(203次SK93)・SX301(203次SX20)の検出である。また、大量に廃棄されていた瓦から、伊丹城期の寺院の存在が窺える。

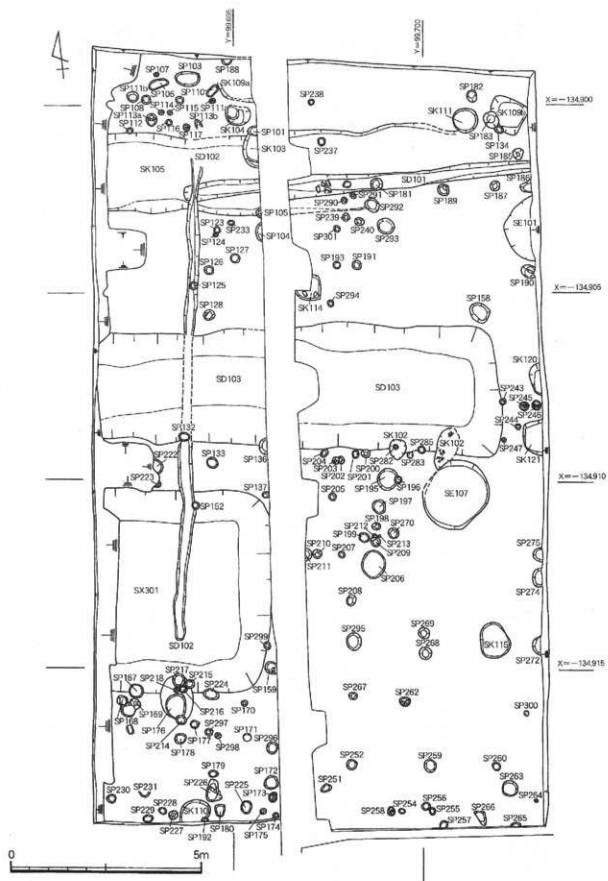
## 溝

南北方向の溝、東西方向の溝がともに検出されている。切りあっている溝があるため、数時期にわたることが推定される。

## SD101 (第62図 図版22)

調査区北側で検出された。東西方向に掘られ、東は調査区外に続く。当調査区内で検出した長さは8m、幅45cm、最深15cmを測る。東端は幅が30cm程に狭くなる。10YR3/4暗褐色粘質土で埋められていた。遺物は出土していない。





第62图 A区第2面全体图

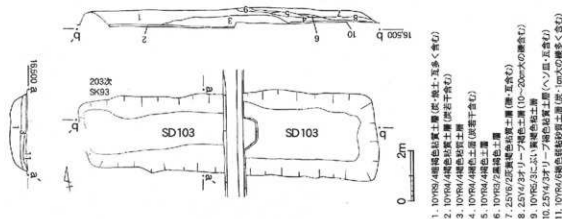
## SD102 (第62図 図版22)

調査区西側で検出された南北方向の溝である。検出長13m、幅30cm、最深15cmを測る。埋土は、2.5Y5/3黄褐色土で、荒い砂が混じる。SD101・SD103・SX301を切っている。

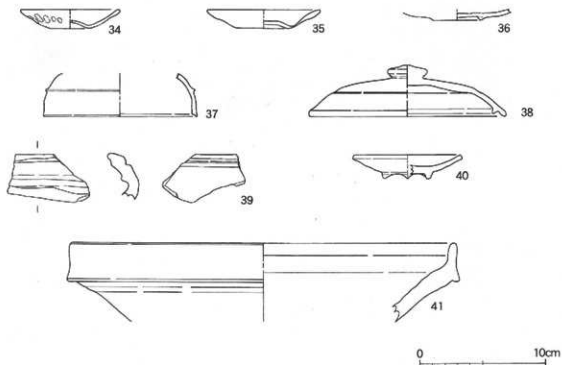
## SD103 (第63~70図 図版22~40)

前調査区より続く、東西方向に掘られた遺構である。前調査時は土坑 (SK93) と考えられていた。幅は3.5m、深さは70cmを測る。遺構の断面形は逆U字形を呈す。全長は前調査区検出分も含めて12.5mとなる。堀と言いきるには、深さをはじめとして小規模であるため、ここでは堀状遺構とする。

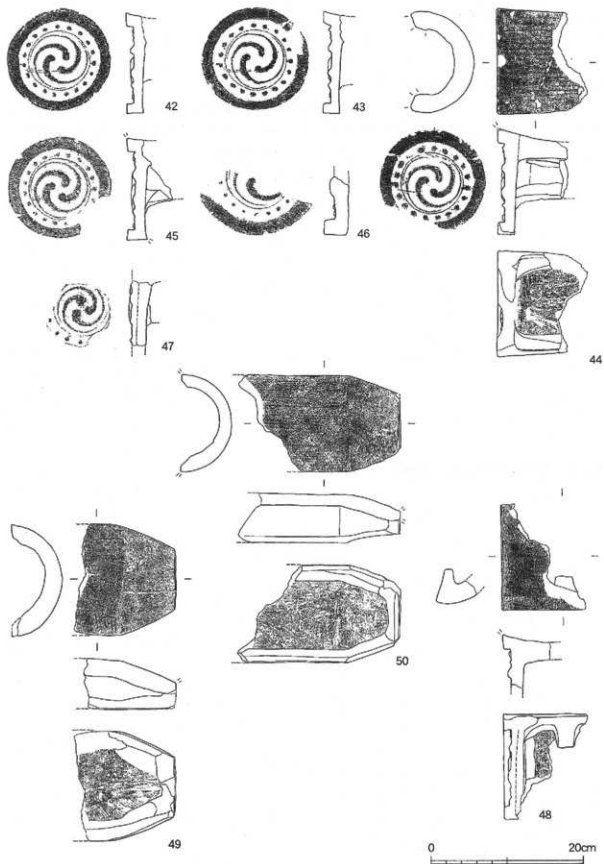
前調査時と同様、この遺構は、炭灰とともに大量の瓦が廃棄されていた点が注目される。しかし、



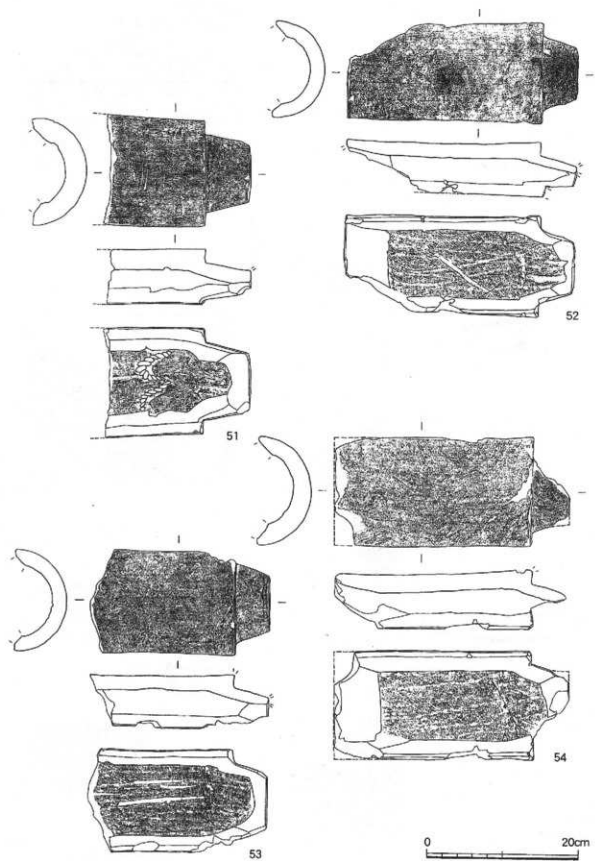
第63図 A区SD103平面図・断面図



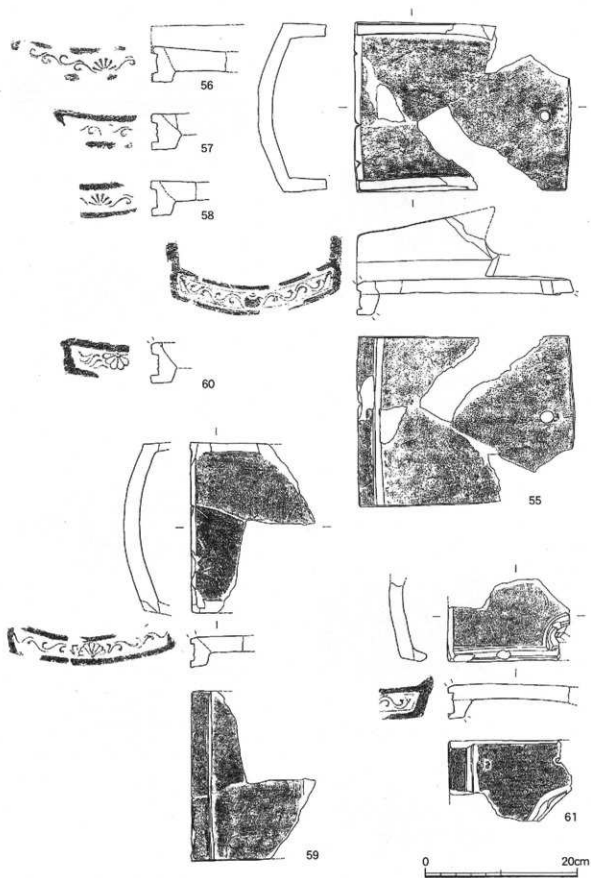
第64図 A区SD103出土遺物(1)



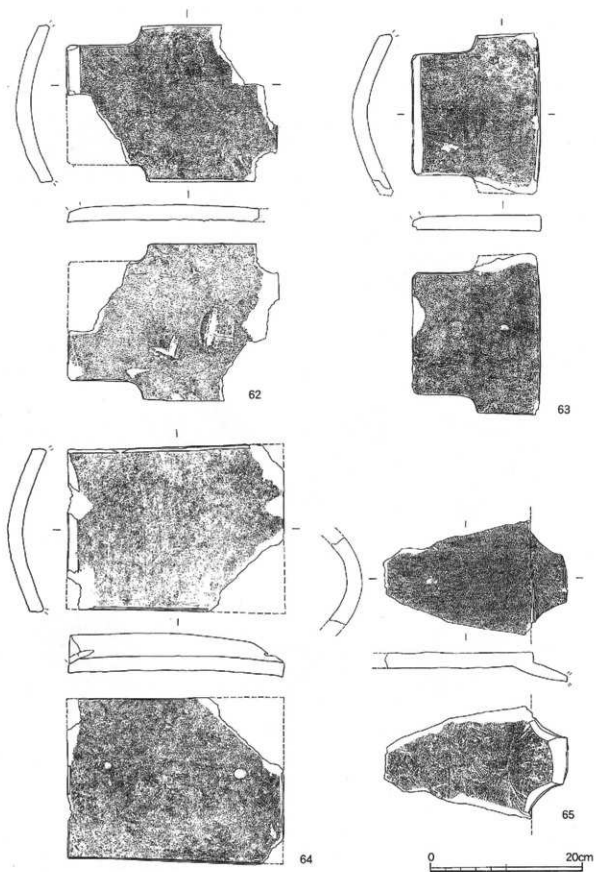
第65图 A区SD103出土遗物(2)



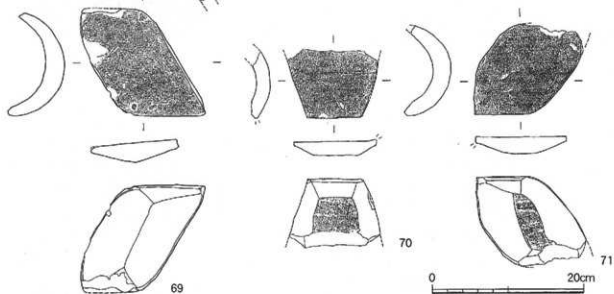
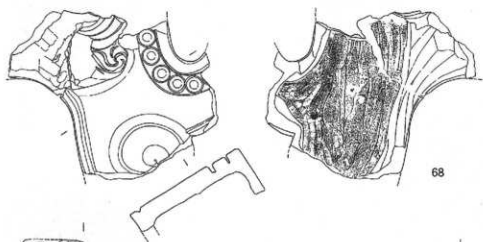
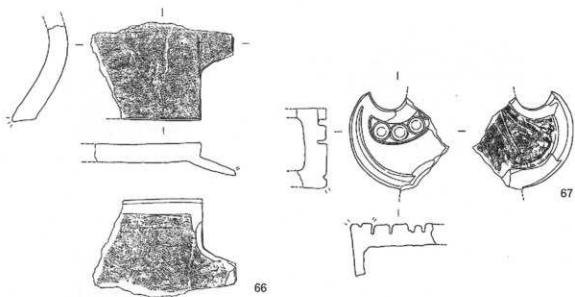
第66図 A区SD103出土遺物(3)



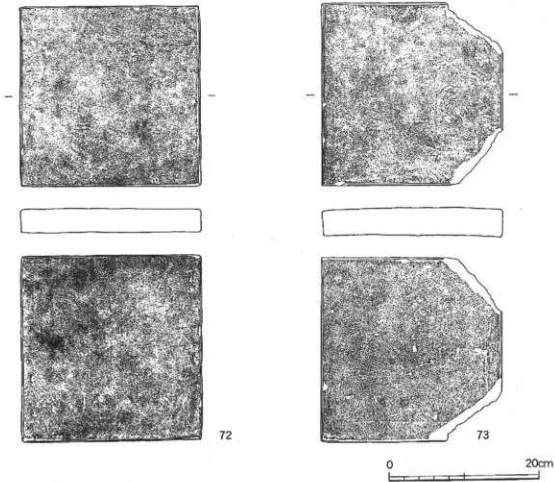
第67图 A区SD103出土遗物(4)



第68図 A区SD103出土遺物(5)



第69圖 A区SD103出土遺物(6)



第70図 A区SD103出土遺物(7)

遺構東側の埋土については、焼土・瓦をほとんど含まない。そのため、遺構を埋める際、先に東側を埋め、後から西側へ焼土・瓦を廃棄したと考えられる。

瓦はその多くが大きく割れており、完形で残る個体はほとんどなかった。調査中、残りが悪く特徴のない平・丸瓦などについては選別の上廃棄した。そのため総出土数は不明である。

遺構上層に堆積した炭灰を多く含む焼土は、火災による建物部材や壁土と考えられる。また、瓦は赤く焼けたものや表面のいぶし銀がとんでしまっているものがあるため、焼失した建物に聳かっていた瓦を廃棄した結果と考えていた。しかし、調査後の整理において、割れた鬼瓦などで瓦表面のいぶし銀がとんでいる片とない片とが接合できた。また、赤く焼けた瓦の多くが2次焼成によるものでなく、瓦製造時に窯内での焼成が悪かったためではないかとの指摘もあった。

出土した瓦の種類は、軒丸瓦(42・43・44~48)、丸瓦(49~54)、軒平瓦(55~61)、二の平瓦(62・63)、平瓦(64)、雁振瓦(65・66)、面戸瓦(69~70)、鬼瓦(67・68・189~203)、塼(72・73)の他、隅木蓋瓦など特殊な瓦もある。寺院の堂塔に使用されていた瓦と見て間違いない。

今回出土の丸・平の軒瓦には、“滑り止め”となる横棧・縦棧が付いている。二の平瓦などを組み合わせて使用する、室町時代中期以降に開発された瓦である。瓦当の文様・作り方・種類などから、1500年前後(15世紀末~16世紀初)に作られた瓦と考えられる。



数種類の范様の軒丸瓦・軒平瓦が出土したが、第65図42などの巴文軒丸瓦と第67図55などの宝珠唐草文軒平瓦のセットが大勢を占める。ともに范キズは見られるが、瓦当の文様は非常にシャープに彫られており、彫りかえした（再加工）痕は見られない。また現在、他に同范のものが見あたらないことから、この建物用に彫られた“オリジナル”の瓦范の可能性もある。そのため、播磨・大和・大坂（四天王寺）など、どの瓦師（瓦大工）の作か不明である。菊花文など瓦范の違う軒瓦（56～60）は、瓦屋根補修時に差し替えられたものであろう。大棟・降棟を飾る鬼瓦や、床材として使用する磚なども出土した。

鬼瓦は、大和法隆寺・播磨円教寺などの堂塔の同時期に作られた鬼瓦と、鬼の表情や形・焼きが非常に近似しており、これらの大寺院に類似する大棟・降棟をもつ堂宇が、伊丹城（伊丹氏居館）内に建っていたことが窺える。しかし、この瓦が作られた時期の伊丹の寺院に関する文献は見つかっていないため、現時点では推定の域を出ない。

瓦以外の出土遺物は、土師質土器皿（34・35）、瓦器椀（36）、須恵器杯蓋（37・38）、丹波焼甕（39）、中国製白磁皿（40）、備前焼播鉢（41）などである。これらの遺物から、遺構の埋められた時期は16世紀後半と考えられる。

今回、遺構の全体を検出したが、深さ・長さから考えて防御のために掘られた堀とは断言しがたい。瓦が大量に出土したにも関わらず、瓦葺建物跡を示す礎石・基壇・雨落ち溝などは、今回の調査区内はもとより、調査地点全体で確認されていないため、どのような目的で掘られた遺構であるかは、廃棄された瓦とこの遺構との関係も含めて現時点では不明である。

#### SX301（第71～74図 図版22・40・41）

前調査区（SX20）より続き、全体の形状はL字形を呈す。今回は、南北5.4m×東西4.6mの東西に延びる堀状の部分を検出した。それにより、長さは10mとなる。断面形は逆台形を呈し、深さは1.3mを測る。底面は非常に平坦に整えられており、法面は底から鋭利に立ち上がり、途中で角度がゆるやかになる。防御のための堀とするには長さが短い。埋土を大別すると、上層（明褐色粗砂層）、下層（青灰色砂層）、最下層（青灰色粘土層）の順に堆積する。最下層は約60cmのほぼ泥土である。遺構の性格は不明であるが、常時、水が溜まっていたことが窺える。この遺構はSD103よりも幅広く深い。しかし、同方向で掘られ、埋土に多くの瓦が含まれる。

廃棄された瓦は、軒丸瓦、丸瓦（80・81）、軒平瓦（82～84）、平瓦（86）、掛平瓦（85）、面戸瓦（87）、鬼瓦（88・89・204～206）などである。軒瓦の范様や技法などから、SD103の廃棄瓦と同時期のものであると考えられる。

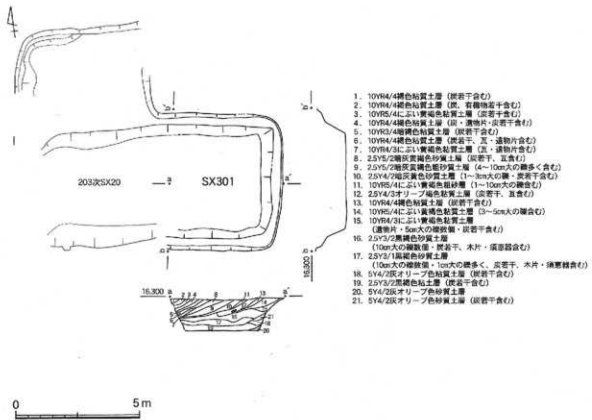
他の出土遺物は、土師質土器皿（74）、同鍋（75）、瓦器椀、陶器天目碗（76）、備前焼播鉢（77～79）などで、遺構の埋められた時期は16世紀後半と考えられる。

調査時は第3面で検出したが、遺構の方向や出土瓦がSD103と同じである点、また、出土遺物の時期や、上層埋土に若干の焼土が混じることから、この面で報告することとした。

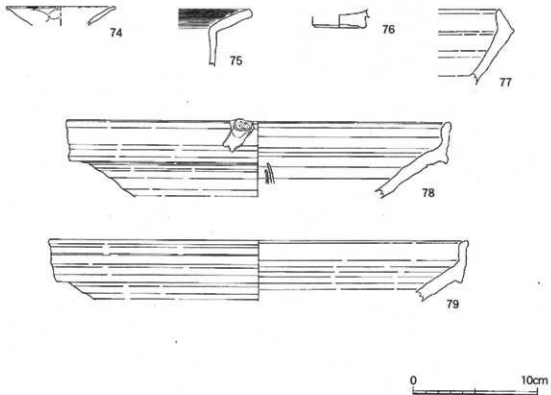
#### 井戸

##### SE107（第62図）

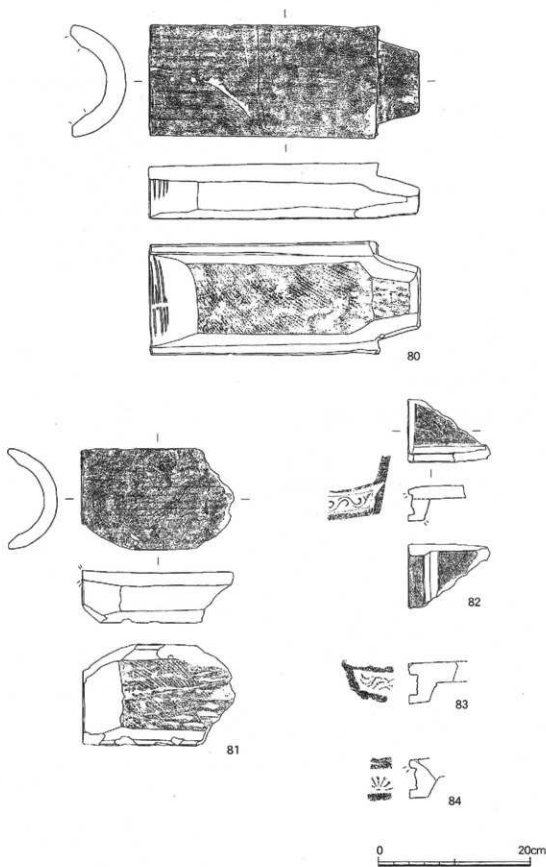
調査区中央東側で検出した。平面形は、ほぼ円形を呈す。直径1mを測る。1.2mまで掘削したが、底には達していない。遺物は出土していない。



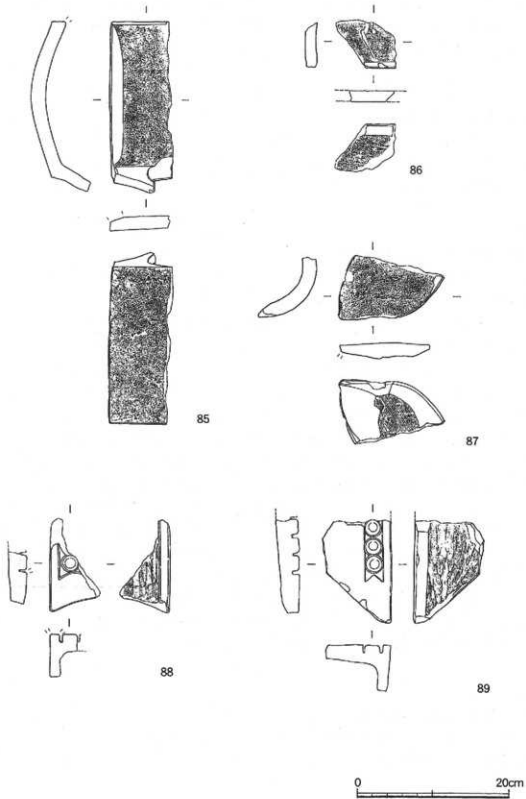
第71図 A区SX301平面・断面・立面図



第72図 A区SX301出土遺物(1)



第73圖 A区SX301出土遺物(2)



第74図 A区SX301出土遺物(3)

### 第3面

地山での調査である。溝や多くの柱穴を検出した。しかし、建物・櫓を復元するには至らなかった。溝・柱穴には瓦器椀を含む埋土をもつものがある。また、調査区北半部では地山面精査時に残りの悪い須恵器・埴輪片が検出された。そのため、第3面調査後に付近の調査を行った結果、古墳の周濠と見られる遺構を確認した。

#### 溝

##### SD302 (第75・76図 図版23)

調査区西側で検出した。南北方向に流れる溝である。多くの遺構に切られているため、断片的にし確認できていない。最大幅は1.4m、最深15cmを測る。非常に浅い溝である。

出土遺物は、瓦器椀(90~92)などである。

#### 周濠

##### SX302 (第75・77・78図 図版23・41・42)

第3面(地山面)精査時、調査区北側の広範囲で、中国製白磁碗(103)、瓦器椀(100・102・104)・瓦質土器三足(98)や須恵器(99)、埴輪片(97・101)を含む非常に地山に似たにぶい黄色粘土層(25Y6/3)を検出した。しかし、平面では遺構の明確な範囲を確認できなかったため、第3面としては調査せず、第3面の調査終了を待って、調査区東壁際(長さ9m)と、調査区中央コンクリート溝東際に2か所の計3か所に、幅40cmのサブトレンチを設定した。それぞれのサブトレンチでは、上層は瓦器などを含む地山近似の土が、下層に埴輪・須恵器などを含む灰色粘土層(7.5Y5/1)が堆積していた。その土は、人為的に埋めた土というよりも、自然に埋まった泥土のようであった。

その後、平面的に順にそれらの土を掘削した結果、調査区北端より南へ7m下がり、そこで東にほぼ直角に折れて5m続く、濠状の遺構を検出した。深さは、調査区北壁際で最深45cm、東壁際で35cmを測る。遺構断面(法面)は、西側がゆるやかだが、東側は急である。遺構は北・東とも調査区外に続いており、全体の形状はつかめない。また、遺構外側の形状が非常に不整形であり、埴輪が出土している以外は葺き石など古墳を示す要素が少ないため、現時点では古墳の濠とは言いきれない。

埋土に含まれている埴輪片は非常に細かく割れており、摩擦も著しい。実測できたものは非常に少ない。古墳周濠がその墳丘盛土により埋められたのなら、もう少し残りのよい個体が確認されるはずである。埴輪片は、主に円筒埴輪で、中には朝顔形円筒埴輪や形埴輪もごく少量混じる。

他に出土した杯(96)や長頸壺(99)などの須恵器は6世紀代のものと推定される。この遺構が埋まった時期を示していると考えたいが、遺構・遺物とも判断材料に欠けている。

#### 土坑

##### SK310 (第75・79図 図版23・42)

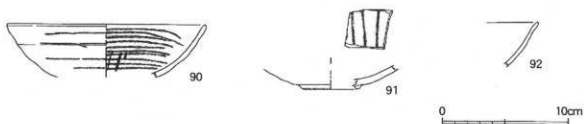
調査区西北で検出した。平面形は方形を呈し、一辺約80cm、深さ40cmを測る。

出土遺物は、土師質鍋(105)などである。

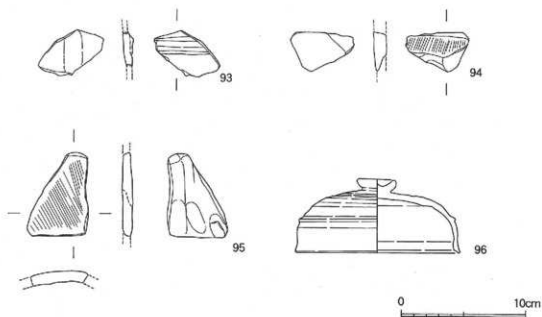
#### 柱穴

多くの柱穴を検出したが、建物・櫓を復元するには至らなかった。実測可能な遺物が出土した柱穴のみを報告する。





第76図 A区SD302出土遺物



第77図 A区SX302出土遺物

SP325 (第75・80図 図版23・42)

調査区中央南側で検出した。直径30cm、深さ21cmを測る。

出土遺物は、瓦器椀 (106) などである。

SP337 (第75・80図 図版23・42)

調査区中央南寄りで検出した。直径30cm、深さ33cmを測る。

出土遺物は、須恵器鉢 (107) などである。

SP373 (第75・80図 図版23・42)

調査区中央北側で検出した。直径30cm、深さ14cmを測る。

出土遺物は、円筒埴輪片 (108) などである。

SP448 (第75・80図 図版23・42)

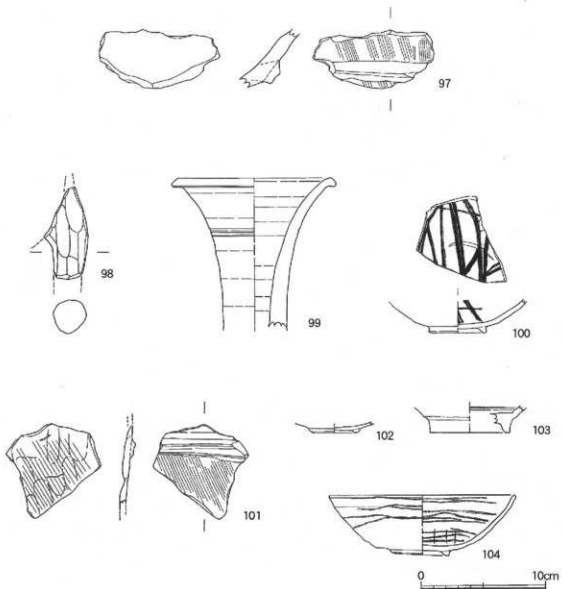
調査区西側南寄りで検出した。直径25cm、深さ32cmを測る。

出土遺物は、土師質土器皿 (109) などである。

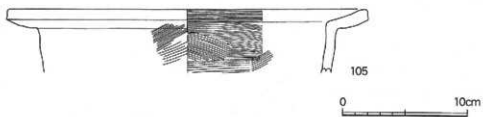
SP498 (第75・80図 図版23・42)

調査区南東隅、SD301内で検出した。直径40cm、深さ30cmを測る。

出土遺物は、土師質土器皿 (110)・瓦器椀 (111) などである。

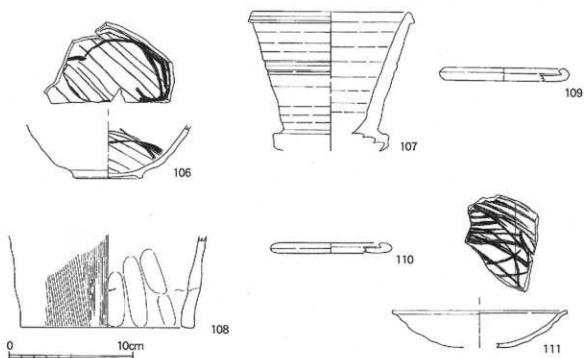


第78図 A区SX302周辺出土遺物



第79図 A区SK310出土遺物





第80図 A区SP325・337・373・448・498出土遺物

## (2) B区

前調査区北側に設定した調査区で、調査も前調査と同様3面で遺構検出を行った。A区同様に酒蔵・酒造遺構を検出したほか、伊丹城期のもと考えられる地鎮遺構・掘建柱建物跡などを検出した。

### 第1面(第82図 図版24)

A区と同様、酒蔵となる建造物や、釜屋・槽場などの酒造関係遺構を中心に報告する。

#### 礎石建物

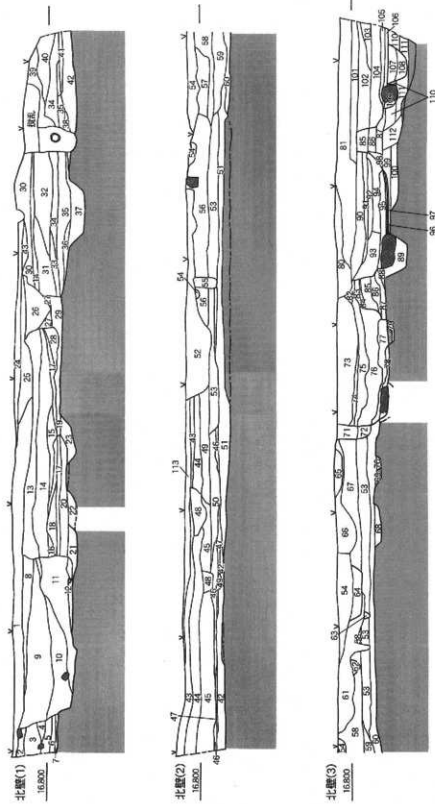
礎石・石列を数多く検出した。建物を復元するにあたって、絵図・写真を参考にして、3つ以上の建物が建っていたことがわかった。東西方向に棟を持ち南北に平行して並んで建つ礎石建物5・6(礎石1・2・3と石列1)や、その西側に、南北方向に棟をもつ建物(石列2)などである。

#### 礎石1(第83図 図版24)

調査区東側で検出した。槽7を切っている。ほぼ円形の掘り方をもち、直径12mを測る。検出面からの深さは40cmで、地山まで達している。礎石の根石部分のみが残っていた。約40cm大の根石を3つ掘え、こぶし大の礫が裏込められている。

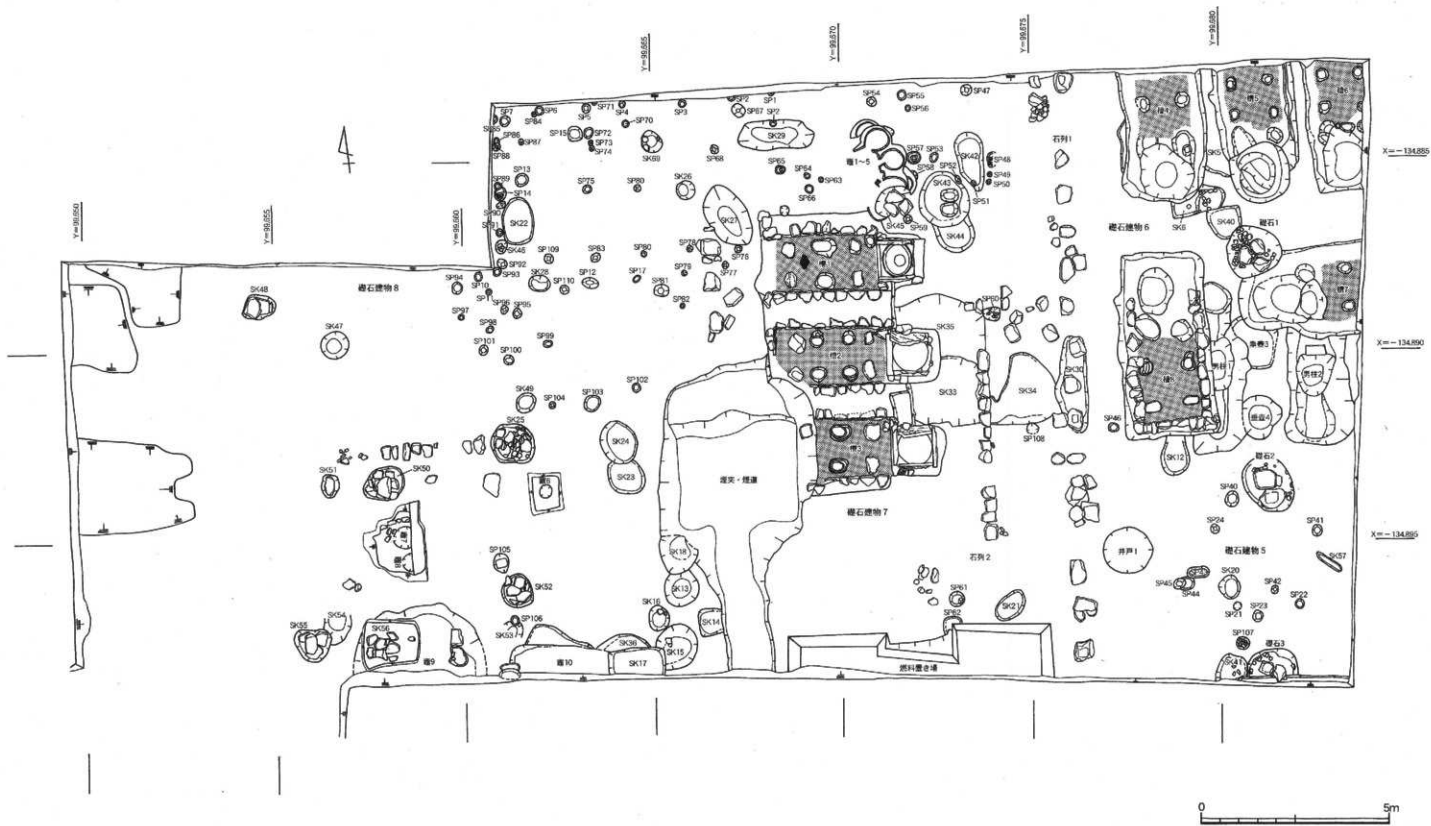
#### 礎石2(第83・84図 図版24・42)

調査区東側、礎石1の南で検出した。礎石2は2基の礎石が南北に並んで掘えられている。掘り方・根石を共有する。礫の裏込め方法や土(10YR4/4褐色粘質土)も礎石1と同じである。最上段の2つの礎石を、礎石2北・礎石2南として報告する。

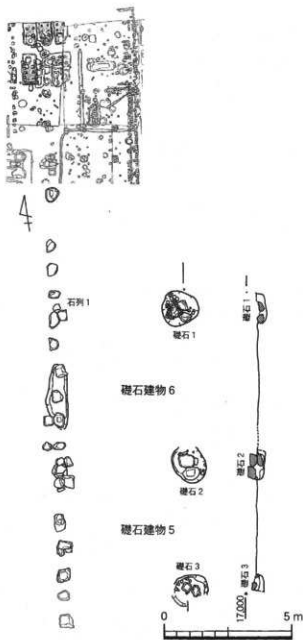


第31図 B区土層断面図





第82図 B区第1面全体図



第23図 B区礎石建物5・6平面・断面図

礎石2北は方形で、一辺60cm大を測る。上部は面をもち、柱を据えるために「十字」に墨打ちの痕跡が残っていた。礎石1と礎石2北の柱間は約5.5mとなる。礎石1から北に約5.5mの位置は調査区外で、調査時に残っていた東西棟のコンクリート建物の際にあたる。そこがこの礎石建物の壁の位置となり、東西方向に棟をもつ建物（礎石建物6）となる。

礎石2南は、60cm大の石で、上部に柱を据える際に施されたと考えられる彫りこみの痕跡がある。それから、一辺約30cmに加工された角柱が建っていたことが復元できる。

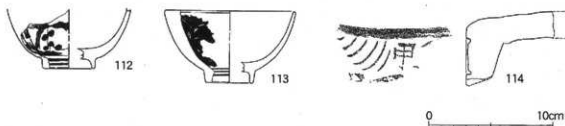
掘り方からの出土遺物は、肥前磁器染付碗(112・113)、軒平瓦(114)などである。

#### 礎石3 (第23図 図版24)

調査区東側南壁跡で検出した。遺構の南側は調査区外に続く。ほぼ円形の掘り方をもち、直径1.3m、深さ35cmを測る。根石しか残っていない。礎石2南との間は約4.5mを測る。

#### SK45 (第22図)

調査区中央で検出した。竈1～5を切っている。直径約1mの掘り方をもち、40cm大の石が3つ据えられている。礎石の根石と考えられる。位置から、石列2と同じ建物（礎石建物7）の基礎であろう。



第24図 B区礎石2出土遺物

## 石列

### 石列1 (第83図 図版24)

調査区中央で検出した。約1m間隔で南北に15基並び、203次の礎石21・20に続く。前述した4つの礎石と柱筋の合う位置の石は、他の石とは違い2段組になっており、大きな石が据えられている。そのため、礎石1・礎石2北の礎石建物(建物6)と、礎石2南・礎石3の建物(建物5)の東壁の基礎と考えられる。

### 石列2 (第82図 図版24)

調査区中央で検出した。検出した石列は5mで、石は12個である。北端の石のみ自然石で、あとの11個は加工された石材であり、東側に面をもって並べられていた。北端の石は、上部に面を持つ60cm大の長方形の石で、その大きさから礎石である可能性がある。この石列は建物(建物7)の東壁の基礎石であろう。

## 井戸

酒造工程上、水は欠かせない存在である。精米し終わった米を洗い研ぐだけでなく、道具を洗うほか、様々な用途で使用される。また、仕込みには大量の水が必要となる。

### 井戸1 (第82図 図版24)

調査区南東側で検出した。円形を呈し、直径1.4mを測る。上部(検出面-50cm)は、灰色シルト粘土(5Y6/1)で埋められていた。その下は直径70cmに縮み、-2.5mまでは空洞となっていた。それ以上の掘削は行っていないため、底には達していない。この井戸が掘られた位置は、洗い場・釜場ではなく槽場(搾り場)に近いので、仕込み用のものと考え方が妥当であろう。

## 釜屋

精米し、洗い終わった米を蒸す場である。酒造用の竈は、必ず径の違う大小2連の燃焼部を持ち、燃料をくべる作業場は半地下に設けられる。使用する燃料は、江戸期は木材、明治・大正期になると石炭、昭和には重油と変化する。

### 燃料置き場 (第82図 図版24)

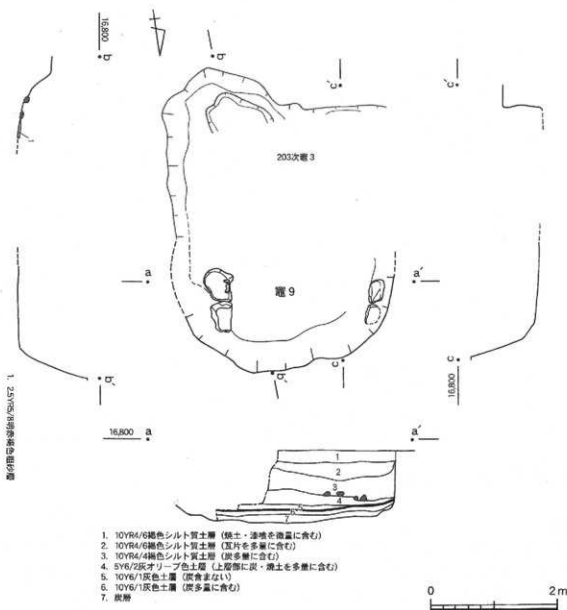
調査区南際中央で検出した。203次から続く。平面形は方形ではなく、北壁が凹状にくぼんでいる。規模は、前調査区検出分も含めて、東西7m、南北4m、検出面からの深さは1.7mを測る。半地下式の部屋になっており、壁内面は漆喰が塗られている。酒造期間中、竈で使われる木・石炭などを一時的に貯蔵する施設で、燃料が重油になるまで使用されていたと考えられる。

### 煙突・煙道 (第82図 図版24)

調査区中央から南壁際にかけて検出した。203次で検出したレンガカマド・煙道とつながる。この富士山窯で使用された最終期のものと考えられる。大量のレンガが出土した。そのため、レンガ造りであったと推定されるが、それらは解体撤去時に完全に破壊されており、規模・構造はまったくわからない。ただ最北端の煙突は構築時の裏込め土が残っており、それを掘削した結果、南北約3m、東西約4m、深さ1.2mの掘り方であることが確認された。また煙突と竈を結ぶ煙道は、南北方向に約8m続く。

### 竈9 (第85図 図版25)

調査区南壁際で検出した。203次で検出された竈3の残りの部分である。竈廃棄後に金属製のタンクが埋設され、床面は大きく破壊されていたため、検出できたのは掘り方だけである。203次分と合わ

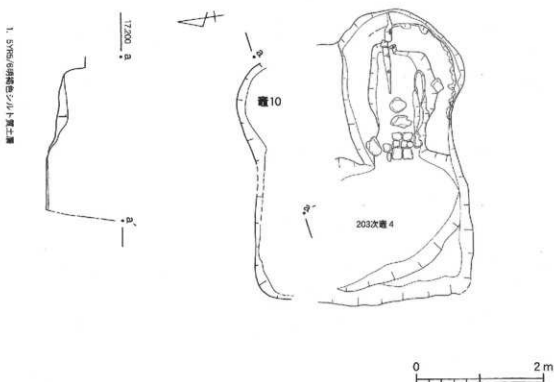


第85図 B区竈9平面・断面図

せて考えると、2連式の竈の焚口部と考えられる。今回検出した焚口部の掘り方は、幅3.8m、奥行2.5mを測る。床面には多量の炭灰が、層をなして堆積していた。また、埋土には多量の瓦が廃棄されていた。

#### 竈10 (第86図 図版24)

調査区南壁際で検出した。前調査で検出されている竈4の残りの部分である。焚口を西側にもつ、2連式の酒造用の竈と確認された。今回検出した燃焼部は、多くの遺構に切られ残りはよくないが、内径1.4mと推定できる。203次で検出された燃焼部より小さいため、脇釜が乗る燃焼部と考えられる。



第86図 B区窟10平面・断面図

### 槽場

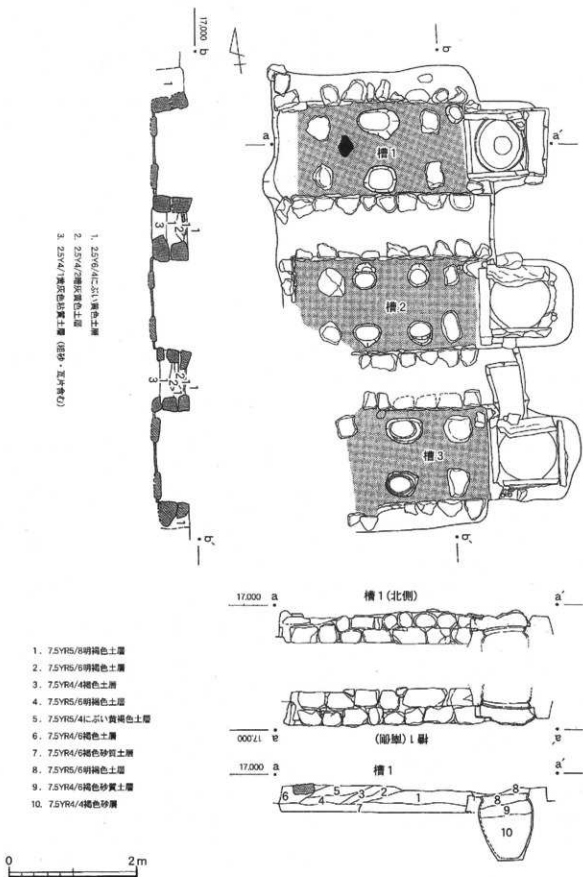
モロミを酒と粕とに分けるために加圧して搾る場である。槽（フネ）とは、モロミを入れた酒袋を積み重ねる長方体の木製容器で、これに上から圧をかけて搾る。調査区東側、建物7内で槽1～3、建物6内で槽4～8が検出された。槽7・8の下からは、男柱1・男柱2が検出された。

#### 槽1・槽2・槽3（第87・88図 図版25）

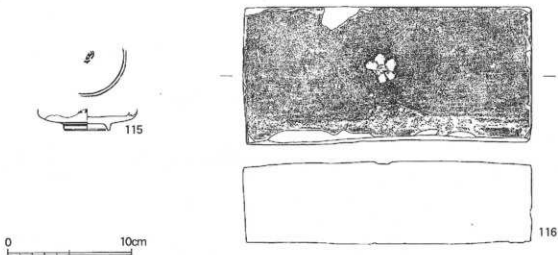
北から槽1、槽2、槽3と、3つの槽場が南北に並んで検出された。搾った酒が溜まる垂壺は、それぞれ槽の東側に埋設されている。この槽場は、江戸時代より続く男柱とハネ棒を用いた圧搾方式ではなく、近代以降に広まった圧搾機を用いたものである。この場所は、「明治19年酒造場絵図面書写」（第186図）では「登場」、明治37年絵図（第187図）では「空地」と記載されているため、その後築造されたものと考えられる。

槽を据える北壁と南壁には、形も大きさも揃いの石が2段（小振りの石の部分は3段）積み重ねていた。積み方は非常に雑で、石材と石材の間は埋められておらず、裏込め土がのぞいていた。3つはほぼ同規模・同構造だが、それぞれ細部が異なっている。また、槽1と槽2、槽2と槽3の間は幅1mしかないが、頑丈に版築が施されている。槽1の北側や槽2・3の間は、稼働時のGLを示す漆喰が施された面が残存していた。蔵人1人がやっとの作業スペースであるが、この3槽を擁する槽場の酒造工程と同じように「揚槽・責槽」と見るならば、この幅狭さは酒袋を積み替えるのに適している。また、3槽とも床面が酒蔵稼働時の作業（土間）面より掘り下げられていることも、槽を少しでも低く





第87図 B区槽1・2・3平面・断面・立面図



第88図 B区槽2出土遺物

据え、酒袋を積み替える作業の能率を上げるためと考えられる。しかし、甕のように4段程度の階段がつき、地下になったところに槽を据える「半地下式」の槽場の構造とは明らかに違っている。なお、203次で検出された槽1・2・3や、平成14年に調査した同酒造の「南蔵」(第271次調査/未報告)でも、今回と同様の、縦に平行に3槽並ぶ槽場が確認されている。甕の場合は、2つの酒甕を横一列に配置する槽場が多く、今回の出土例のような事例は見つかっていない。今後、伊丹と甕での槽場の違いを考えなければならない。

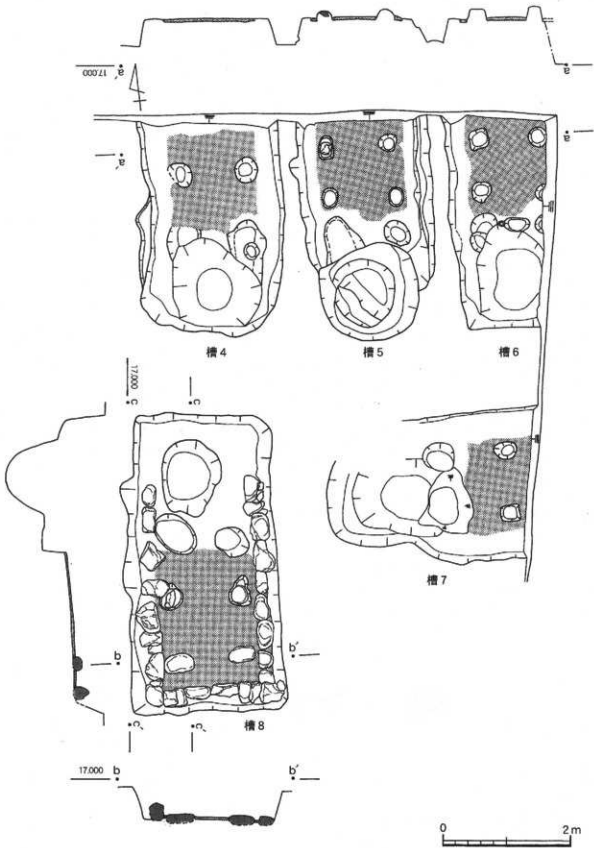
槽1は長方形を呈し、幅1.4m、長さ2.9m、深さ約50cmを測る。床には厚さ4cm程度の漆喰が施されているが、西壁際30cmだけはない。槽2では西壁も石積みされているため、これと同様の石積みがなくなったものと考えられる。漆喰の床面には平たい4つの石が置かれ、その石と石のほぼ中間に小穴が配置され、北東隅には小さな穴が開けられていた。垂壺には備前焼の甕が使用されている。甕の口縁にはコンクリートが施され、その高さは槽床面より約20cm高い。槽から搾り出された酒を垂壺に受けようとする、この分嵩上げが必要となる。床面の石の上には、槽を直接据えたのではなく、槽を据えるための材を設置したのであろう。また、垂壺の四方を、板状に加工された石材が取り囲んでいる。石材は、幅約40cm、長さ1m、厚さ約10cmを測り、すべて立てて据えつけられていた。槽と間の石材のみ、ほぼ甕口縁の高さに合わせて埋められているが、それ以外の3方は、口縁の高さより上に、平面コの字状に据えつけられていた。石材の上部がほぼ酒蔵稼働時の作業面となる。

槽2は、幅1.4m、長さ2.8m、深さ50cmを測る。ほぼ槽1と同規模・同構造であるが、西壁にも石が積まれていた。南西角を煙突解体撤去時に破壊されている。床面には、4つの石と、柱穴が4カ所確認された。垂壺となる位置には、内径85cmのコンクリート枠がうたれていた。ホウロウカステンレス製の円筒容器が垂壺として埋設されていたのであろう。

出土遺物は、肥前磁器筒型碗(115)、レンガ(116)などである。

槽3は、西半分を煙突解体撤去時に破壊されている。槽1・槽2同様に、幅は1.4mである。残存長は2mで、漆喰の床には石が2つ、小穴が2カ所残る。北東隅に20cm大の石が据え置かれていた。

槽1・槽2を観察しなおすと、同じ場所にほぼ同じ大きさの掘り込み跡があり、槽3同様に石が据え置かれていたものと考えられる。垂壺の部分は、槽2同様にコンクリート枠が残っていた。



第39図 B区槽4～8平面・断面図

槽4・槽5・槽6 (第89・90図 図版26・43)

調査区北東隅で、3基並んで検出した。3基の北側と、槽6の東端は調査区外に続く。槽1・2・3と同じく3基が平行に並ぶ。3基はほぼ同規模で、垂壺跡は南側から検出された。抜き取り跡の形状から、垂壺は槽1と同様、備前焼の壺が埋められていたと考えられる。垂壺を抜き取る際に、垂壺に近い槽の床は大きく壊されており、垂壺と槽の床との間がどのようにになっていたかは3基ともわからない。また、槽の内壁は槽1・2・3と同じような石積みは見られないが、床の漆喰が壁際20~30cmだけ施されていないことから、もともとは石積みの壁があった可能性がある。床には厚さ4cmの漆喰が施されている。その床の幅(石積壁の内内)は約1.4mを測り、槽1・2・3と同じである。床には径約10cmの柱穴が4~6個ある。槽と槽との間は、漆喰床のないところから石積み壁内面を推定すると、槽1・2・3と同じ1mとなる。

以上のようにこの3基は、槽1・2・3と同じ点が多い。しかし、コンクリートが使用された痕跡が一切ないこと、また、稼働中止後、使用されていた石材や垂壺がすべて抜き取られていることから、槽1・2・3よりも以前から稼働していた槽場と考えられる。

槽5の出土遺物は、京焼系陶器壺(117)、磁器碗(118)などである。

槽7 (第89・90図 図版26)

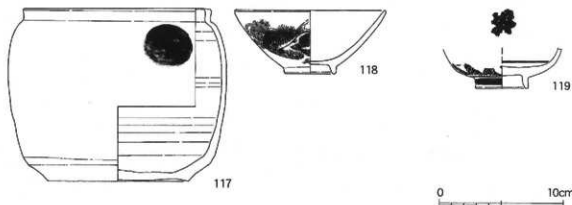
調査区東壁際で検出した。遺構は調査区外に続く。垂壺は抜き取られて残っていないが、槽の西側の抜き取り跡から壺が埋められていたことが復元できる。槽4・5・6と同じく、槽の床は漆喰貼りである。内壁の石積みは残っていないが、同じように床の漆喰が壁際にはなかったため、内壁には石積みがなされていたと考えてよいであろう。床には柱穴が掘られている。

この槽の漆喰床は幅1.6mと少し広い。石積の内壁をつくるための幅も40cmと広く、大きな石を積んでいたことが考えられる。また、槽1・2・3や槽4・5・6のように3基並ぶタイプではなく、1基単独である点が大きく異なる。

出土遺物は、磁器碗(119)などである。

槽8 (第89図 図版26)

調査区東側で検出した。幅2.2m、長さ4.8mの長方形の掘り方をもつ。北に垂壺跡があり、東・南・西の三方には石積みの内壁が残っていた。石は40~60cm大の自然石が使用されている。目地は埋められていない。西・東壁の石積みは北端までなく、ちょうど垂壺にかかるくらいまでである。槽の床は、幅1.6m、長さは2.1mを測る。槽7と同規模で、単基である点も同じである。



第90図 B区槽5・槽7出土遺物

## 男柱

東西に2基並んで検出された。西側を男柱1、東側を男柱2とする。槽8・7の前に使用されていた槽場（埴り場）である。調査中は、男柱1と男柱2には時期差があり、男柱2が男柱1より古いと考えていた。しかし整理するなかで、作られた順序はそうであるが、男柱1が作られた段階で、男柱2を廃棄した形跡が見当たらず、むしろ同時期に廃棄、埋められたとみる方がよいと考えられた。また、次年度に行われた第231次調査で、男柱2の東側に垂壺抜き取り穴と思われる土坑が検出されたことにより、男柱2の垂壺は、当初掘られ設置されていた西側から、東側に掘り直されたとみられる。それらから、男柱2は男柱1とともに、槽4基（垂壺4基）一体の「2槽挿し連基型」（小長谷・川口1996）として使用された時期があると考えられる。

このように、当初「2槽挿し単基式」で設置された槽場が、その後「2槽挿し連基式」として再設置される例は、他の酒蔵跡でも確認されている（伊丹3丁目地内、第289次調査/平成14年、未報告）。

この槽場と同じ建物内で、近代化・機械化した槽4・5・6が、後から遅れて築造された。男柱1・2を避けるように設置されているため、この築造によって男柱1・2は廃棄されたのではなく、槽7・8が築造されるまで、男柱1・2と槽4・5・6が同時に稼動していたと考える方が適切であろう。「明治37年絵図」（第187図）を見ると、ちょうど男柱1・2の位置に槽が4基描かれ、男柱1・2の槽の置き方に合致しており、明治37年段階では、男柱1・2のみが使用されていたことが裏付けられる。槽4・5・6がその後設置されて、男柱1・2とともに稼動し、その後、槽場（槽1・2・3）の増設とともに、男柱1・2が廃止されて、槽7・8がつくられたものと考えられる。

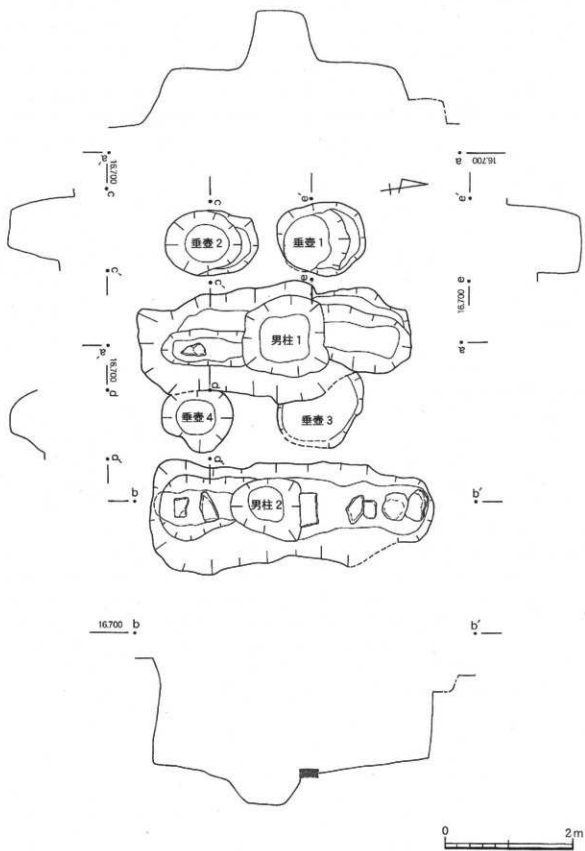
### 男柱1（第91図 図版26）

調査区東側、槽8の下から検出した。木材・石材などすべての構築材は抜き取られ残っていない。南北方向の横木（胴木）をもち、2基の垂壺跡をその西側で検出した。男柱1本に槽・垂壺が2基のタイプ「2槽挿し単基型」の槽場である。しかし、前述したとおり東側の男柱2に遅れて設置され、それとともに4槽一体の「2槽挿し連基型」の槽場として稼動したと考えられる。男柱は、隅丸方形を呈し、一辺90cm、深さ1.7mを測る。横木（胴木）の掘り方は幅80cm、長さ3.6mを測る。垂壺の抜き取り方はほぼ円形で、直径90cm、深さ1.3mを測る。

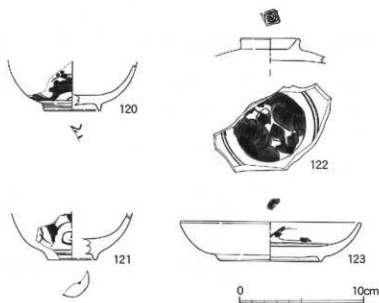
### 男柱2（第91・92図 図版26）

調査区東壁際、槽7の下から検出した。木材は抜き取られ残っていない。南北方向の横木（貫）をもち、2基の垂壺跡をその西側で検出した。横木の掘り方は幅約80cm、長さ3.7mを測る。横木を据える時に、その下に設置されていた石が7つ残る。石の面はそろえられており、その高さから、横木はT.P.+14.600mに据えられていたことがわかる。男柱は隅丸方形を呈し、一辺1m、深さ2.3mを測る。垂壺の抜き取り方はほぼ円形で、直径80cm、深さ1.3mを測る。

出土遺物は、肥前磁器染付碗（120・121）・同皿（123）・同碗蓋（122）などである。



第91图 B区男柱1·2、垂壶1~4平面·断面图



第92図 B区男柱2出土遺物

## 埋甕

SK13・15・18 (第82図 図版24)

調査区西南で3基の土坑を検出した。北からSK18・SK13・SK15と南北に並ぶ。3基とも、埋土に非常に多く砂を含むこと、また30cmを超える漆喰片を含むことから、甕か甕を埋設していたものと考えられるが、どのように使用されていたものかはわからない。また、遺物が出土していないため、時期は不明である。

SK18はほぼ円形を呈し、直径80cm、深さ80cmを測る。北・東側を煙突・煙道の攪乱で壊されている。漆喰片を多く含む埋土を掘り上げた底には、搾り場の垂壺を掘り方内に据えつける時に裏込めに使うような砂が約40cm堆積していた。

SK13はほぼ円形を呈し、直径90cm、深さ55cmを測る。SK18に切られている。

SK15はほぼ円形を呈し、直径1.1cm、深さ80cmを測る。

## 第2面 (第93図 図版27)

地山上に堆積する暗褐色粘質土(51)他の上面で精査し遺構検出を行った。調査区の西に行くに従い、堆積は薄くなる。

この調査面の遺構は、A区同様、有岡城期及びそれ以前の伊丹城期(室町時代後期)のものを報告する。なお、第3面の掘立柱建物と思われる遺構については、他の遺構などとの関係から、この面の遺構である可能性が極めて高いが、調査時に確認された第3面で報告することとした。

### 溝

#### SD107 (第98図 図版28)

調査区東端で検出した。真北に軸をもつ、南北方向に掘られた溝である。幅1.7m、深さ30cmを測る。北側は男柱2に切られ、南側は前調査区で検出されたSD16(第32図)に続く。合わせると、長さは25m以上となる。前調査区の南にもさらに続いており、敷地境の溝として掘られたものである可能性が高い。

### 地鎮遺構

調査区内で2基検出された。ほぼ円形に掘られた土坑内に、土師質土器皿と銭が入った土師質鍋(羽釜)が丁寧に埋められていた。地鎮遺構と名づけたが、埋められた意図は断定できない。ただ、鍋で粥を炊き、土師皿・銭を入れて埋める祭りのものとの見解がある。

#### 地鎮遺構1 (第94・96図 図版27・43)

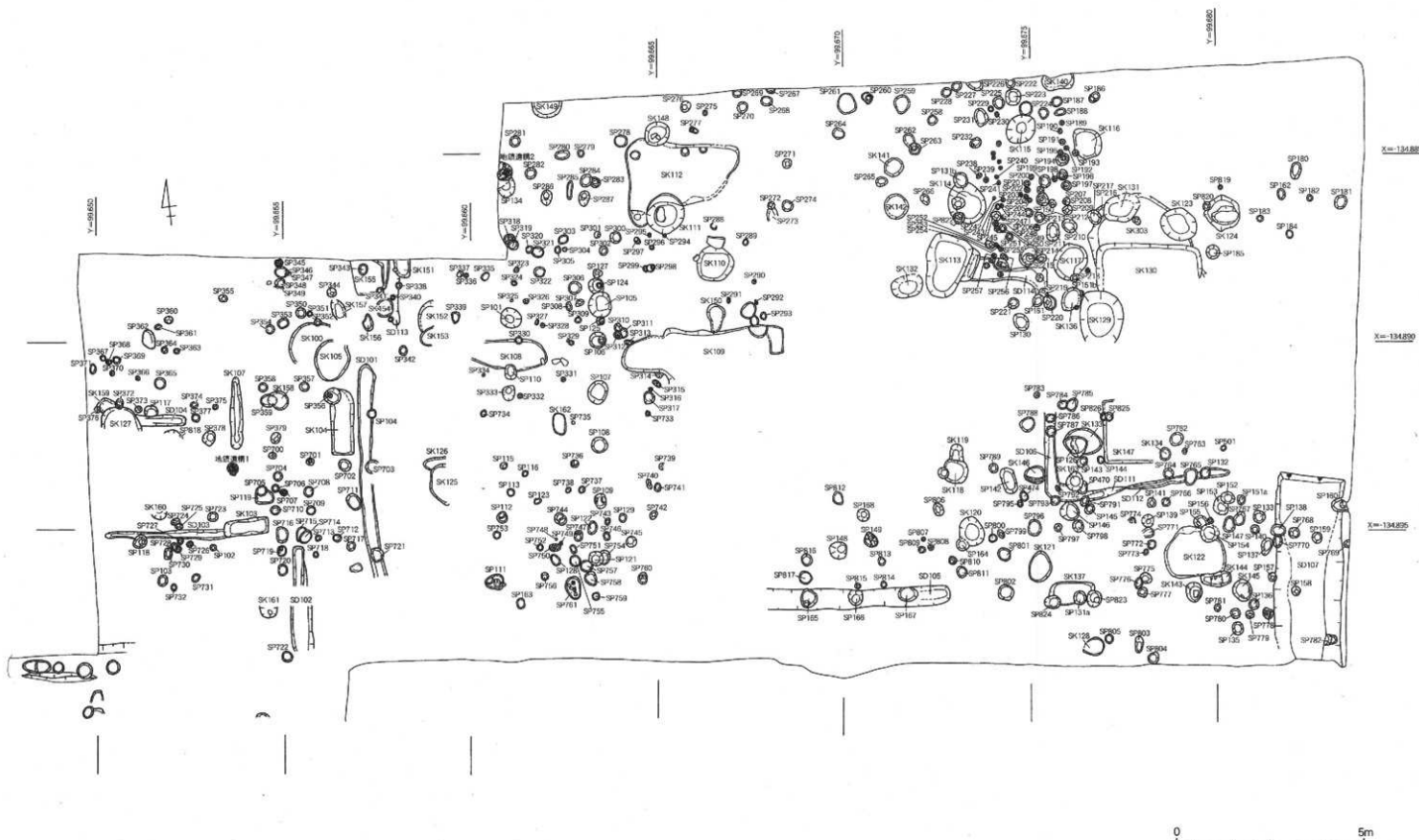
調査区西端、稜敷き北側で検出した。直径約30cmのほぼ円形に掘られた土坑内に土師質鍋が埋められていた。その上半部は既存建物により壊されていた。また、埋められた時の生活面は検出面より高いことがわかる。下半部しか残っていなかった鍋の内より、多くの銭と土師質土器皿が出土した。銭は「熙寧元寶」(129)など輸入した中国銭である。土師質土器皿(124~127)もすべて土師質鍋の内より出土した。接合できない小片が多いが、7枚以上はあることがわかる。

上半部のない土師質鍋から時期を推定することは難しい。また、銭は古い時代のもも含んでいる。土師質土器皿を見ると、16世紀前半の遺構と考えられる。

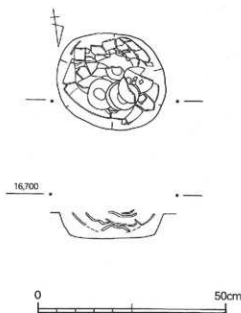
#### 地鎮遺構2 (第95・97図 図版27・43)

調査区北側の西壁際で検出した。直径約45cmのほぼ円形に掘られた土坑内に、土師質鍋・土師質土器皿が埋められている。土師質鍋は掘り方の中央ではなく、南西側に寄って埋められていた。その分、掘り方内の空いた空間に、土師質鍋を支えるように石が添えられ、その脇に11枚以上の土師質土器皿(130~134、143~147)が埋められていた。土師質土器皿が鍋の外にも埋められているのは、地鎮遺構1と大きく異なる。土師質鍋の内には、10枚以上の土師質土器皿(135~141)と、「永楽通寶」(154・155)・「明道通寶」(149)・「元祐通寶」(151)・「紹聖通寶」(152)・「洪武通寶」(153)・「元豊通寶」(150)・不明(156~158)などの輸入銭が10枚以上埋納されていた。

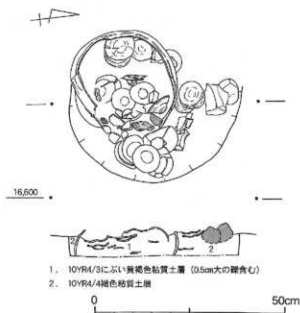




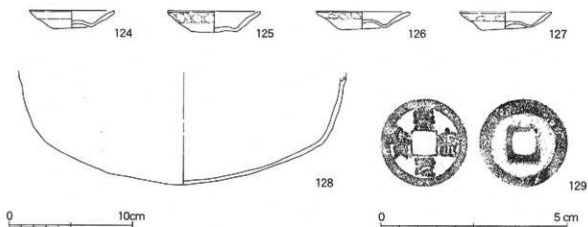
第93図 B区第2面全体図



第94図 B区地鎮遺構1平面・断面図



第95図 B区地鎮遺構2平面・断面図

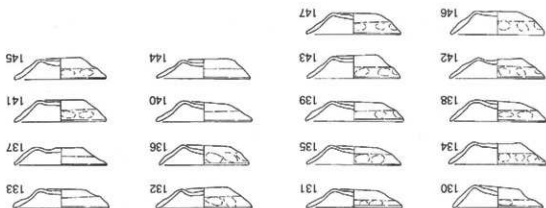
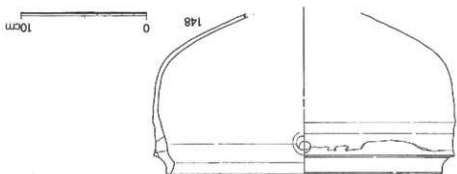
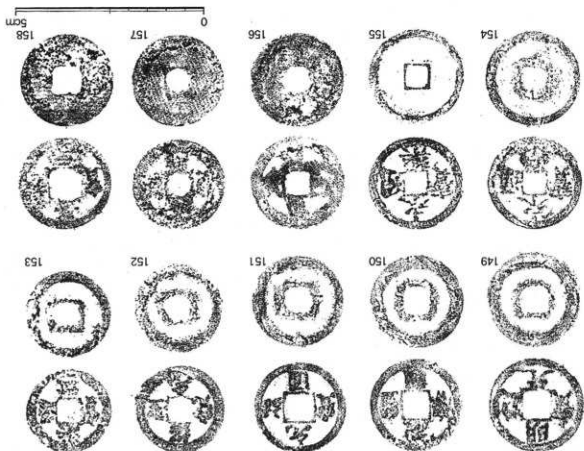


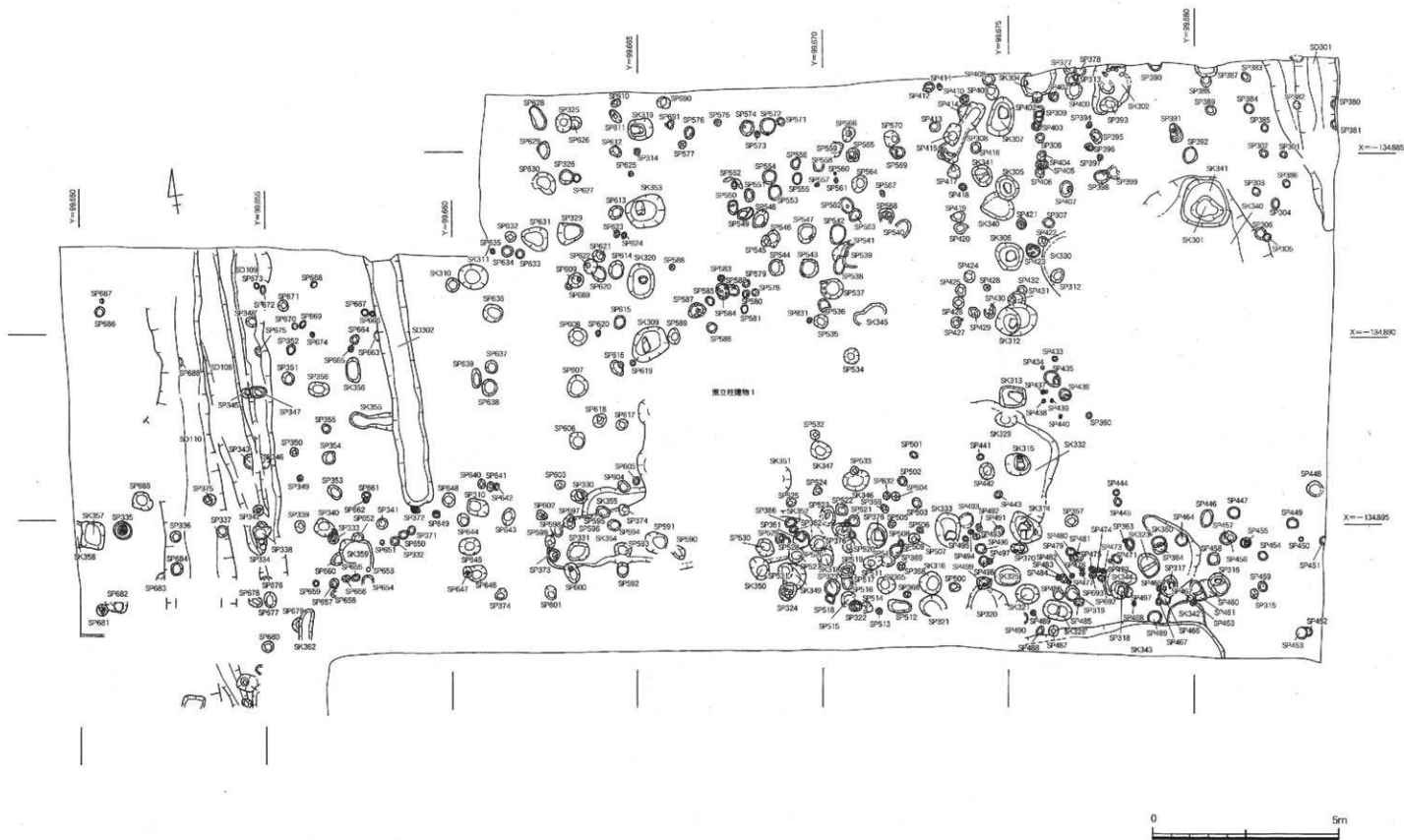
第96図 B区地鎮遺構1出土遺物

### 第3面 (第98図 図版28)

A区同様、地山で調査した面である。しかしながら、本来、第2面となるべき遺構を調査時点で検出しきれず、地山にて確認したものが少なくない。例えば、掘立柱建物1と考えている遺構は、いくつかの柱穴は第2面時に検出したが、そのほとんどは第3面でしか検出できなかった。

この調査区内では、A区のように地山直上の堆積土に埴輪や須恵器を含むことはなかった。





第98図 B区第3面全体図

## 溝

南北方向の溝を、調査区西端で検出した。これらは、真北に軸をもつもの、やや西に軸を振るものがある。そのため、少なくとも2時期の規格に基づき掘られた溝であることが推定される。

## SD108・109・110 (第98・99図 図版28)

遺構検出時、調査区西端で、砂礫(砂利)で埋まった幅約3m、長さ10m以上を測る南北方向の遺構を検出した。その東側には整地のために轆かかれたと思われる礫敷きの痕跡が、その遺溝に平行して幅約4mにわたり確認された。なお、SD110は、礫敷きより後に新しく掘られた溝である。遺構に埋まった砂利は、この礫敷きの上に施されていたものだろう。この砂利と礫敷きは、通路として舗装するために敷かれたものだろう。浅く埋まった砂利を取り除くと南北方向の溝を3条検出した。これらは、同時に存在したのではなく、中央に位置するSD108がもっとも古い。

SD108は、幅約70cm～1m、深さ20cmを測る。やや西に軸を振っている。

SD109は、幅約40～60cm、深さ20cmを測る。SD108を切っている。SD110との新旧は不明である。瓦質三足(159)などが出土している。

SD110は、幅約1～1.5m、深さ30cmを測る。3つの溝のうち、一番幅が広い。ほぼ真北に軸をもつ。調査区東端で第2面に検出されたSD107と軸の方向が同じであるため、同時期に掘られた可能性が高い。

## 建物(塀)・柵

## 掘立柱建物1(第101図 図版28)

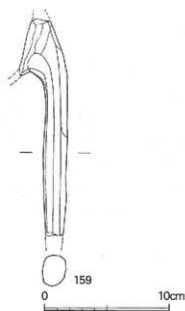
調査区北辺中央で検出した、南側柱列5間、東側・西側柱列7間以上となる南北棟掘立柱建物である。中心軸をほぼ真北にもつ。北側は調査区外に続く。西と南に柵列(SA1・SA2)が付属する。建物内部からは、柱穴やその他の関連する遺構は検出されていないため、側柱構造の大型の建物が復元できる。しかし、奥行5間にもなる建物の梁を支える柱がないことは考えられないため、建物ではなく塀などの可能性が高いが、現在、この遺構が建物以外にどのような施設になるのかまったく不明である。

柱間寸法は1.8mで割り付けられている。柱穴は、直径60～80cm、深さ約60cmを測る。柱はすべて抜き取られ残っていないが、底の礎盤(根石)が残っているものもあった。柱の抜き取り方向は一定していない。東側柱列の南から2番目の柱穴(SK315)は、礎盤となる石(一石五輪塔)の上の穴壁際に、15～25cm大の石が柱を据えたと推定する中心を外して積み、灰色砂(7.5Y5/1)が施されていた。3つの柱列とも、外側に足場材の柱列が検出されている。柱間の規則性や事業の丁寧さなどを見ると、権力を持った階級の使用する極めて重要な役割をもつ施設であったことが窺える。今後、伊丹城(伊丹氏居館)期に、どのような目的で使用された施設かを深く考えていく必要がある。

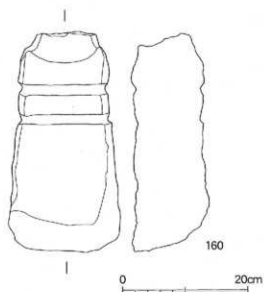
柱穴は、炭を含む灰黄褐色土(10YR4/2)で埋められていた。出土遺物は土師質土器Ⅲなどであり、16世紀に廃棄されたと考えられる。柱穴の多くを地山(第3面)上で検出したが、第2面でもいくつかの柱穴は確認されていた。この第2面遺構検出時に確認していた砂混じりの黄褐色砂層(41など)は、SD107(第2面)やSD110で区画され、この施設などが建てられた時に施された化粧土ではないかと考えられる。

## SA1・2(第98図)

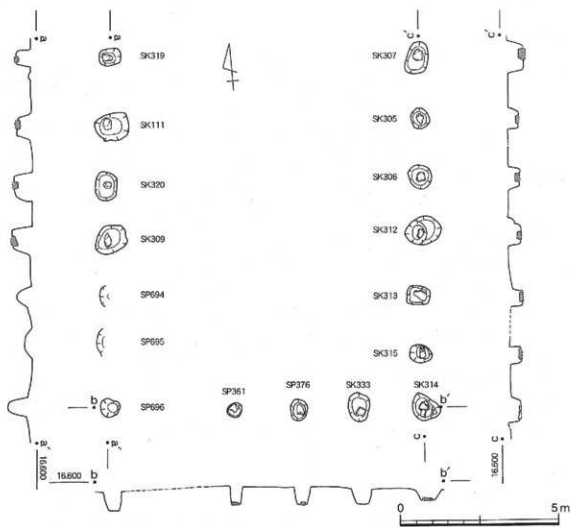
SA1は、掘立柱建物1の西2mに位置し、掘立柱建物1と柱筋を合わせた南北柵(塀)である。SP331を南端とし、8ヵ所柱穴が並ぶ。掘立柱建物1と同じく、北側は調査区外に続く。柱穴は、直径



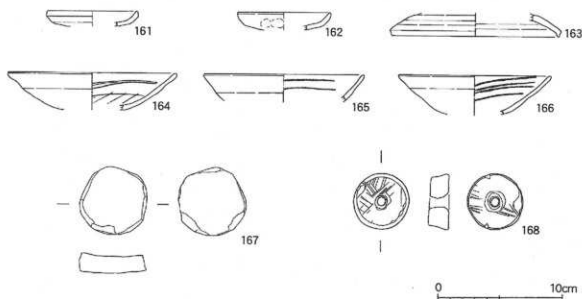
第99图 B区SD109出土遗物



第100图 B区SK315出土遗物



第101图 B区掘立柱建物1平面·断面图



第102図 B区SK332出土遺物

40cm、深さ30～40cmを測る。南端の柱穴は、掘立柱建物1の南西隅でとまり、南側柱列と並ぶ。柱間寸法は均等に1.4mで割り付けられている。8間以上の櫓（塼）が復元できる。

SA 2は、掘立柱建物1の南16mに、掘立柱建物1と柱筋を合わせた掘立柱東西櫓（塼）である。4間、2間分あいて、また4間の櫓（塼）が復元できる。柱間寸法は1.3mで割り付けられている。柱穴は、直径35～50cm、深さ約30cmを測る。柱間があいた部分は、柱穴を確認できなかっただけが、当初からなかったのか不明である。

### 土坑

SK332（第98・102図 図版28・43）

調査区東南で検出した。多くの遺構に切られている。平面形は方形を呈し、南北3m以上、東西2.5m以上を測る。

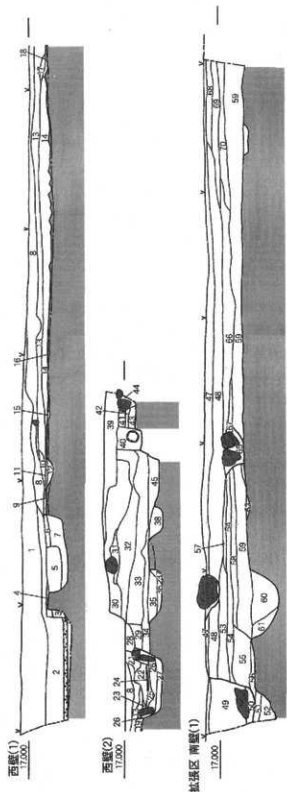
出土遺物は、土師質土器皿（161・162）、須恵器杯蓋（163）、瓦器椀（164～166）、平瓦を加工した円板（167）、石製紡錘車（168）などである。

## (3) C区

前調査区の西側に位置する。この調査区は2面調査とした。調査後、南側を拡張し地山にて調査を行った。そのため、平面図は第1面のものに合わせて報告する。

### 第1面（第104図 図版29・31）

この調査区内には、富士山蔵の母屋（主屋）が建っていた。調査では、その建物の礎石以外に、竈や井戸などが検出された。



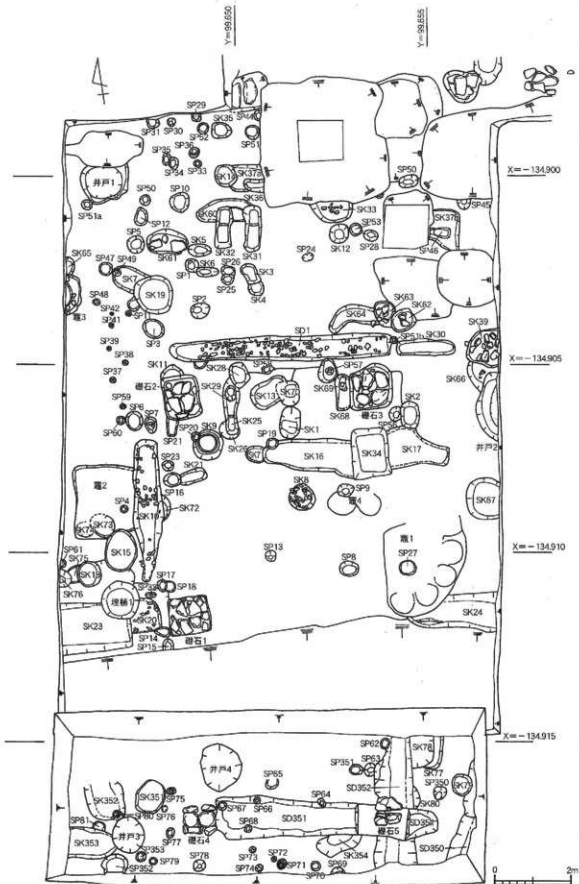
- 49. 10784/3C 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土・遺跡内含む)
- 50. 10784/3B 暗褐色シルト質土層 (埋砂・腐土・遺跡内含む)
- 51. 10784/3A 暗褐色シルト質土層 (混・腐土・遺跡内含む)
- 52. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 53. 10785/4 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 54. 10787/15 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 55. 10788/15 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 56. 10784/4 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 57. 10784/3B 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 58. 10783/4 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 59. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 60. 10783/4 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 61. 10783/4 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 62. 10783/4 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 63. 2578/2 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 64. 10784/4 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 65. 10784/4 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 66. 2574/2 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 67. 2574/2 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 68. 10784/4 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 69. 10784/4 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 70. 10784/4 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 71. 2574/2 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 72. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)

- 23. 2574/4 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 24. 5784/4 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 25. 5784/4 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 26. 2578/2 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 27. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 28. 2578/2 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 29. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 30. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 31. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 32. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 33. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 34. 2574/4 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 35. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 36. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 37. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 38. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 39. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 40. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 41. 2574/4 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 42. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 43. 2574/4 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 44. 2574/4 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 45. 10785/4 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 46. コンクリート
- 47. 腐土

- 1. 2574/4 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 2. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 3. 2578/2 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 4. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 5. 10784/3 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 6. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 7. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 8. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 9. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 10. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 11. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 12. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 13. 2574/4 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 14. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 15. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 16. 10784/4 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 17. 10784/4 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 18. 2574/4 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 19. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 20. 2574/4 赤い黄褐色シルト質土層 (混・腐土)
- 21. 10783/3 暗褐色シルト質土層 (混・腐土)

第103図 C区土層断面図





第104図 C区第1面全体図

## 礎石建物

### 礎石建物 1 (第105図 図版29・31)

調査区中央で3個の礎石(礎石1・2・3)、拡張区で2個(礎石4・5)を検出した。3基とも礎石はなく、根石のみが残る。一辺1mの方形の掘り方をもつ。

礎石2の根石の中には、墨書をもつものがあつた。これらの礎石は、富士山蔵で通りに面して建っていた建物の礎石と考えられる。その東側は203次で確認されている。

建物の西壁の位置を確認するために、礎石2と礎石3の柱通りの延長にあたる位置、敷地西側の通り際で、サブトレンチを設定し、礎石・側石の検出を試みたが、発見できなかった。

## 竈

酒造用ではない、台所用の竈を3基検出した。いずれも残りは非常に悪い。

### 竈 1 (第104図 図版29)

調査区中央で検出した。平面形は扇型を呈す。作業場を含め、一辺約2mを測る。径60cmの燃焼部を5つもつ。ここが酒造空間ではなく、居住空間として使用されていたことが推察される。

## 井戸

4基以上の井戸が検出された。すべて底までの掘削は行っていない。井戸2は、前調査で検出された井戸4で、酒造り用のものと確認されている。これ以外の井戸は、掘られた位置などから、酒造用ではないと考えられる。

### 井戸 1 (第104図)

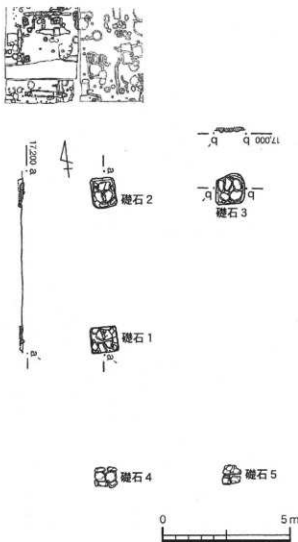
調査区北西隅で検出した。直径1.3mを測る。居家用のものと考えられる。

## 第3面 (第106図 図版30)

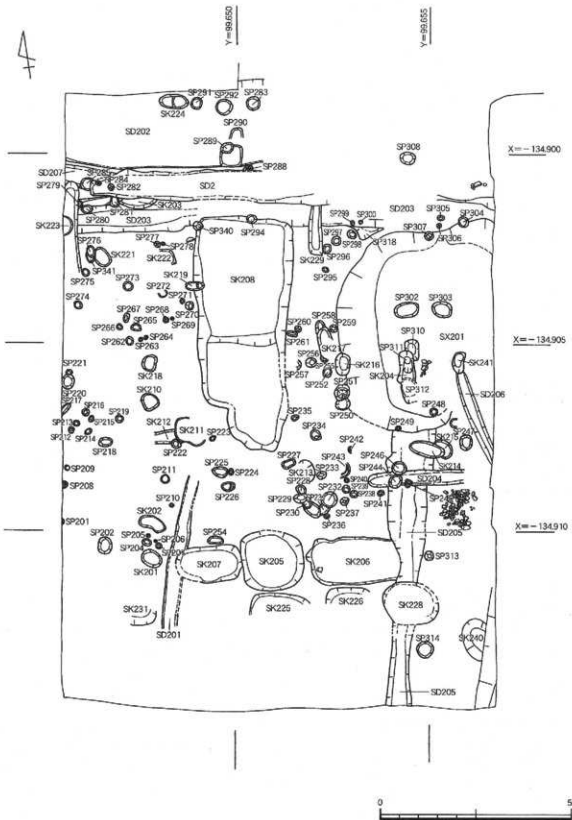
地上上で遺構検出を行った。他の区では第3面(調査面)となる。

## 溝

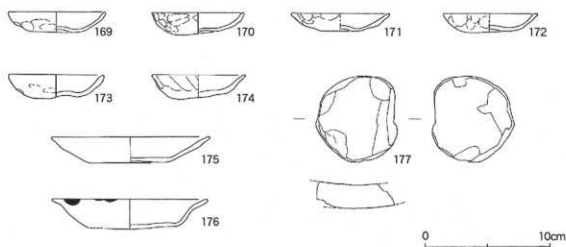
7条の溝を検出した。方向軸が違うものや、切り合うものがあるため、数時期の溝と考えられる。



第105図 C区礎石建物1平面・断面図



第106図 C区第2面全体図



第107図 C区SD2出土遺物

SD2 (第104図 図版29・44)

調査区北側で検出した。東西方向の溝で、東側は調査区外に続く。幅50cm、深さ10~30cmを測る。

出土遺物は、瓦を丸く加工したもの(177)や、多くの土師質土器皿などが出土した。土師質土器皿は直径10cmを超える大振りなもの(173・175・176)と、8cm以内のもの(169~172・174)がある。

SD202 (第106図 図版30)

調査区北端で検出した。東西方向の溝で、幅2.5m、深さ15cm、長さ5mを測る。西は調査区外に続く。

SD203 (第106・108図 図版30)

調査区北側で検出した。東西方向の溝で、幅70~90cm、深さ30cmを測る。SD2と軸を同じくし、平行に掘られている。SD2に先行する溝である。



第108図 C区SD203出土遺物

出土遺物は、土師質土器皿(178・179)などである。

SD205 (第106図 図版30)

調査区南側で検出した。南北方向の溝で、ほぼ真北に軸をもつ。北側はSX2に切られおり、南側は調査区外に続く。幅約60~1m、最深45cm、長さは約8mを測る。

不明遺構

SX201 (第106・109図 図版30)

調査区中央東際で検出した。東側は調査区外に続く。平面形は隅丸方形を呈す。規模は、東西4.5m×南北5.5mを測る。落ち込みはゆるやかで、最深40cmを測る。埋土上層は堆積した炭灰や焼成をうけた粘土を含む土で、その下には、炭灰だけが薄く堆積していた。底面には、灰白色の粘土が敷かれていた。

出土遺物は、土師質土器皿(180)や中国製青磁碗(181)などである。



第109図 SX201出土遺物

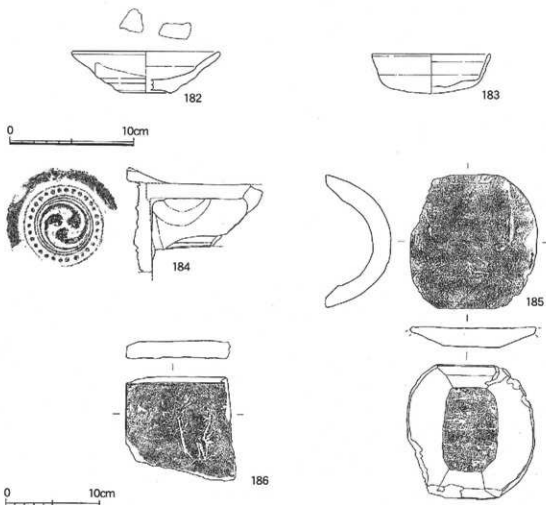
## 土坑

数基の土坑を検出した。遺物が出土したもののみ報告する。

## SK207 (第106・110図 図版30・44)

調査区中央南よりで検出した。東西1.6m×南北1mの隅丸長方形を呈す。深さは20cmを測る。形は異なるが、6基の土坑 (SK207・205・206・225・226・228) が隣接して掘られている。

出土遺物は、唐津焼皿 (182) などである。今回の調査において、唐津焼の製品はほとんど出土していない。



第110図 C区SK207・208・228・352出土遺物

#### SK208 (第106・110図 図版30・44)

調査区中央で検出した。南端は別遺構である可能性がある。それを除くと平面形は長方形を呈す。東西2.5m×南北5mを測る。底は2段になっており、北側が深さ40cm、南側が深さ15cmである。

出土遺物は、軒丸瓦(184)・面戸瓦(185)・鬼瓦などである。鬼瓦の中には、A区SD103から出土した一般的な鬼の顔をしていない垂形の鬼瓦片(192)と同一個体のものもあった。巴文軒丸瓦(184)は、内外ともに圓線をもち、今回の調査の中で唯一、室町時代前期以前の中世瓦である。差し替え瓦として使用されたものであろう。

#### SK228 (第106・110図 図版30・44)

調査区南東で検出した。平面形は楕円形を呈し、南北1.1m×東西1.4m、深さ42cmを測る。

山羊と考えられる動物が彫り刻まれた平瓦(186)などが出土した。

#### SK352 (第106・104図 図版31・44)

拡張区西端で検出した。北側は擾乱を受けている。平面形は楕円形を呈し、南北1m以上×東西1m、深さ10cmを測る。

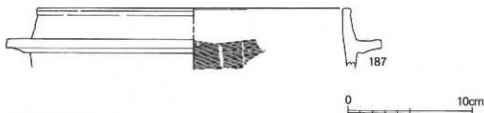
出土した遺物は須恵器杯(183)などである。

### 柱穴

#### SP303 (第106・111図 図版30・44)

調査区中央東よりで検出した。ほぼ円形を呈し、直径50cm、深さ18cmを測る。

出土した遺物は、土師質羽釜(187)などである。



第111図 C区SP303出土遺物

### 小結

今回の調査は、203次調査と同様に3面調査とした。第1面は、酒蔵として使用されていた江戸時代以降、第2面は有岡城期を含む伊丹城期である戦国時代(室町時代後期)、そして第3面はそれ以前となる。

第1面は、礎石建物4などの酒蔵跡や、その内部につくられた槽場などの酒造遺構が主要な遺構である。江戸時代中期からの酒蔵である、とする203次成果を裏付ける結果がでた。第4章第4節で詳しく述べられているため、省略する。

第2面と第3面の遺構は、調査時に面の検出が不明瞭であったため、所属が明らかでないものもあり、整理段階で所属する面を変更したものがある。

第2面は、SD103やSX301など、多くの瓦が廃棄されていたという共通点に特徴があり、ますます寺院の存在が強まった。地鎮遺構も、この敷地が一般武家屋敷でなかったことを裏付けている。

第3面は、多くはないが瓦器柄が出土する。目立った遺構は確認されなかったが、203次と同じく、13世紀前後から、居住空間として利用されたことが明らかになった。(中群明日香)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考
A	埋構1	第58回-1 図版32-1	軟質施釉 陶器	受皿	口 径 6.9 cm	口ク口成形 底部糸切り痕(左回転) 透明釉 外面 体部から底部露胎	90% 口縁部灯芯痕有り
		器 高 1.4 cm					
		底 径 3.2 cm					
		第58回-2 図版32-2	陶器	腰鉢	口 径 (13.0) cm	内面底部ヨコナデ 内外面体部ヨコナデ 外面体部 塗土を揃す 扉印有り	備考 30%
		器 高 6.9 cm					
		底 径 (13.7) cm					
		第58回-3 図版32-3	磁器	碗	口 径 (10.7) cm	染付 外面紫と蔓草文 内面口縁部二重筒線 見込 み襷縁と草文有り 高台豊付露胎	肥前 50%
		器 高 6.0 cm					
		高台径 5.0 cm					
第58回-4	磁器	碗蓋	口 径 (10.0) cm	染付 外面体部竹笹文 つまみ幅露胎	肥前 30%		
器 高 3.2 cm							
つまみ径 4.2 cm							
第58回-5 図版32-5	磁器	紅猪口	口 径 (9.0) cm	染付 外面「大口口町お惣取」の文字文有り 高台 豊付露胎	肥前 70%		
器 高 4.1 cm							
高台径 3.2 cm							
第58回-6 図版32-6	磁器	紅皿	口 径 4.8 cm	白磁 型押し成形 外面口縁部以下露胎	肥前 100%		
器 高 1.4 cm							
高台径 1.5 cm							
第58回-7 図版32-7	土師質 土器	燈炉	高台径 26.6 cm	風口部し字型で受け有り 内外面体部ヨコナデ 体 部と脚明け合面にクシ目有り 脚部に唐草文の彫刻 外面体部から脚部にかけて赤色顔料塗布	50% 内面体部彫り着		
上 笠 幅 24.2 cm							
第58回-8	瓦	軒平	瓦 当 高 4.2 cm	橘唐草文	25%		
椽 部 幅 1.9 cm							
第58回-9	瓦	軒平	瓦 当 高 3.5 cm	橘唐草文	25%		
椽 部 幅 1.8 cm							
埋構6	第59回-10	土師質 土器	皿	口 径 (12.8) cm	手捏ね成形 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ	40% 口縁部灯芯痕有り	
	器 高 2.6 cm						
	第59回-11 図版32-11	陶器	火入れ	口 径 (10.5) cm	脚部三足 鉄軸 内面口縁以下と口縁端部 外面体 部下部露胎	40% 口縁部灯芯痕有り	
	器 高 7.2 cm						
	第59回-12	陶器	鉢	口 径 (15.6) cm	内外面ヨコナデ 灰釉 外面口縁部から底部露胎	丹波 20%	
	器 高 6.7 cm						
	底 径 (8.0) cm						
	第59回-13 図版32-13	土師質 土器	炆焙	口 径 (30.5) cm	外面口縁部把手貼り付け 内外面体部ヨコナデ 外 面底部ナデ	40% 内面底部彫り着 外 面底部彫り着	
	第59回-14 図版32-14			土師質 土器			炆焙
	第59回-15	磁器	碗		口 径 (10.1) cm	見込み蛇/目輪割ぎ アルミナ塗布 染付 高台豊 付露胎 離れ砂付着	
	器 高 5.1 cm						
	高台径 4.6 cm						
	第59回-16 図版32-16	磁器	碗	口 径 10.3 cm	見込み蛇/目輪割ぎ アルミナ塗布 染付 外面松 竹横文 高台豊付露胎	肥前 80%	
器 高 4.9 cm							
高台径 4.3 cm							
第59回-17 図版32-17	磁器	皿	口 径 (12.0) cm	見込み蛇/目輪割ぎ アルミナ塗布 染付 内面斜 格子文 高台豊付露胎 離れ砂付着	肥前 70%		
器 高 3.8 cm							
高台径 4.2 cm							
第59回-18 図版32-18	磁器	紅皿	口 径 4.5 cm	型押し成形 白磁 外面口縁部以下露胎	肥前 100%		
器 高 1.5 cm							
高台径 1.4 cm							
第59回-19 図版33-19	銅	煙管	長 さ 4.3 cm	扉首	90%		
縁合部径 1.0 cm							
埋構7	第60回-20	土師質 土器	皿	口 径 (11.1) cm	手捏ね成形 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外 面ナデ	60% 口縁部灯芯痕有り	
器 高 1.9 cm							

第10表 第217次調査遺物観察表(1)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考
A	埋構7	第60回-21	土師質土器	網絡	口径 (33.2) cm	内面底部ナデ 内外面腰部ヨコナデ 外面底部と腰部の接合部に縦方向のハケ目 底部保存状態	産地・残存率・その他 20% 内面底部集げ付着 外面底部集げ付着
		第60回-22 図版33-22	陶器	火入れ	口径 (12.1) cm 口径 5.4 cm 底径 8.1 cm	内外面ヨコナデ	丹波 60%
		第60回-23 図版33-23	磁器	碗	口径 9.6 cm 口径 5.6 cm 高台径 4.0 cm	染付 外面雷輪草文花文 高台内文様有り 高台集付 露胎 隠れ砂付着	肥前 80%
		第60回-24 図版33-24	磁器	皿	口径 (19.6) cm 口径 6.6 cm 高台径 (10.35) cm	染付 内面草文花文 外面漆絵草文花文 高台内面露胎有り 高台集付露胎 隠れ砂付着	肥前 30%
		第60回-25	石製品	砥石			粘板岩
	SX1	第61回-26	土師質土器	皿	口径 (7.8) cm 口径 1.4 cm	手捏ね成形 内面底部ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外面ナデ	30%
		第61回-27	土師質土器	皿	口径 (8.5) cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 外面ナデ	10%
		第61回-28	土師質土器	皿	口径 (9.6) cm 口径 1.4 cm	手捏ね成形 内面底部ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外面ナデ	40%
		第61回-29	土師質土器	皿	口径 (9.6) cm 口径 1.4 cm	手捏ね成形 内面底部ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外面ナデ	40%
		第61回-30 図版33-30	磁器	碗	口径 (8.2) cm 口径 5.2 cm 高台径 3.6 cm	染付 外面口縁部二重雷輪 体部山水文 高台内面露胎有り 高台集付露胎	京焼系 50%
		第61回-31 図版33-31	磁器	皿	口径 16.4 cm 口径 2.4 cm 高台径 9.5 cm	色絵 内面染付と赤・白・緑色絵による梅花文 高台集付露胎	不明 50%
	SX2	第61回-32 図版33-32	土師質土器	皿	口径 (9.2) cm 口径 3.0 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外面ナデ	40% 口縁部口芯痕有り
		第61回-33 図版33-33	磁器	紅皿	口径 4.4 cm 口径 1.6 cm 高台径 1.3 cm	型押し成形 白磁 外面口縁部以下露胎	肥前 100% 二次焼成痕有り
	SD103	第64回-34	土師質土器	皿	口径 (8.0) cm 口径 1.5 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内外面口縁部ヨコナデ	30%
		第64回-35	土師質土器	皿	口径 (9.1) cm 口径 1.5 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内外面口縁部ヨコナデ	40%
		第64回-36	瓦器	椀	高台径 3.8 cm	磨耗が著しく調査不明	30%
		第64回-37	須恵器	杯蓋	口径 (12.3) cm	内外面回転ナデ	10%
		第64回-38	須恵器	杯蓋	口径 (15.8) cm 口径 4.1 cm	内外面回転ナデ	20%
		第64回-39 図版33-39	陶器	壺		内外面ヨコナデ	丹波 1%
		第64回-40 図版33-40	磁器	皿	口径 (8.8) cm 口径 1.9 cm 高台径 (3.9) cm	割高台 白磁 外面高台から高台幅にかけて露胎	中国 40%

第11表 第217次調査遺物観察表(2)



地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考
A	SD103	第64図-41 図版34-41	陶器	環鉢	口 径 (31.1) cm	外面口クロナデ	産地・残存率・その他 備前 5%
			瓦	軒丸	直 径 13.5 cm 瓦 当 厚 1.4 cm 側 面 厚 2.2 cm	左巻き三巴文 珠文数19個 内面線有り	10% 范キズ有り
		第65図-43 図版34-43	瓦	軒丸	直 径 13.5 cm 瓦 当 厚 1.3 cm 側 面 厚 2.2 cm	左巻き三巴文 珠文数19個 内面線有り	10% 范キズ有り NM13 D類
		第65図-44 図版33-44	瓦	軒丸	直 径 14.0 cm 瓦 当 厚 1.6 cm 側 面 厚 2.3 cm	左巻き三巴文 珠文数19個 内面線有り	30% 范キズ有り NM12 D類
		第65図-45	瓦	軒丸	直 径 13.8 cm 瓦 当 厚 1.5 cm 側 面 厚 2.6 cm	左巻き三巴文 珠文数19個 内面線有り	10% 范キズ有り NM9 D類
		第65図-46 図版34-46	瓦	軒丸	直 径 (16.0) cm 瓦 当 厚 2.0 cm 側 面 厚 2.8 cm	左巻き三巴文 内面線有り	5% NM15 F類
		第65図-47 図版34-47	瓦	軒丸	瓦 当 厚 2.1 cm	左巻き三巴文 内面線有り	5% NM14 E類
		第65図-48 図版34-48	瓦	軒丸	直 径 13.6 cm 瓦 当 厚 1.6 cm	左巻き三巴文 内面線有り	10% 范キズ有り NM11 D類
		第65図-49	瓦	丸	厚 さ 2.4 cm		20% M13 A1類
		第65図-50 図版35-50	瓦	丸	厚 さ 1.5 cm		30% M14 A2類
		第66図-51 図版35-51	瓦	丸	広 端 幅 (14.7) cm 厚 さ 2.8 cm		40% M15 D1類
		第66図-52 図版35-52	瓦	丸	全 長 30.2 cm 広 端 幅 (12.8) cm 厚 さ 2.0 cm		90% M18 J類
		第66図-53 図版35-53	瓦	丸	広 端 幅 (13.4) cm 厚 さ 1.9 cm		50% M19 K類
		第66図-54 図版35-54	瓦	丸	全 長 30.6 cm 広 端 幅 14.2 cm 厚 さ 2.4 cm		90% M20 L類
		図版35-188	瓦	丸	広 端 幅 (14.6) cm 厚 さ 2.2 cm		50% M21 M類
		第67図-55 図版36-55	瓦	軒平	上 弦 幅 22.5 cm 瓦 当 高 4.0 cm 頸 部 幅 2.1 cm		80% 范キズ有り NH12 AⅡa類
		第67図-56 図版36-56	瓦	軒平	瓦 当 高 4.6 cm 頸 部 幅 2.4 cm	半截菊花唐草文	10% NH6 D類
		第67図-57	瓦	軒平	瓦 当 高 4.8 cm 頸 部 幅 2.9 cm	半截菊花唐草文	5% NH7 D類
		第67図-58 図版36-58	瓦	軒平	瓦 当 高 4.8 cm 頸 部 幅 2.5 cm	半截菊花唐草文	5% NH8 D類
		第67図-59 図版36-59	瓦	軒平	瓦 当 高 3.7 cm 頸 部 幅 2.1 cm	半截菊花唐草文	20% 范型両端部切欠 ている NH9 C類

第12表 第217次調査遺物観察表(3)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考
							産地・残存率・その他
A	SD103	第67回-60	瓦	軒平	瓦当高 5.0 cm 頸部幅 2.5 cm	半截菊花水波文	5%
		第67回-61 図版35-61	瓦	軒平	瓦当高 4.0 cm 頸部幅 2.1 cm	廣肩左羽 宝珠雲草文	NH10 Ba類 10%
		第68回-62	瓦	二の平	厚さ 2.2 cm		NH15 AIIa類 60%
		第68回-63 図版36-63	瓦	二の平	全長 16.9 cm 狭端部幅 16.1 cm 厚さ 2.1 cm		95%
		第68回-64	瓦	平	全長 28.3 cm 広端部幅 (21.5) cm 厚さ 2.0 cm		80%
		第68回-65	瓦	腰振	厚さ 2.0 cm		H5 A類 30%
		第69回-66	瓦	腰振	厚さ 2.5 cm		30%
		第69回-67 図版37-67	瓦	鬼	珠文径 2.1 cm	棟鬼 母屋左側 側面は張側こしらえ 連珠溝内押型の半円球の珠有り 珠文の顔頂部は出ない 鋪足元龍文様	5%
		第69回-68 図版37-68	瓦	鬼	珠文径 2.1 cm	棟鬼 母屋右側と鬼の右下隅 側面は張側こしらえ 連珠溝内押型の半円球の珠有り 珠文の顔頂部は出ない 鋪足元龍文様	30%
		図版37-189	瓦	鬼	珠文径 2.1 cm	母屋左側 側面は張側こしらえ 連珠溝内押型の半円球の珠有り 珠文の顔頂部は出ない	5%
		図版37-190	瓦	鬼	珠文径 2.1 cm	母屋左側上辺隅 側面は張側こしらえ 連珠溝内押型の半円球の珠有り 珠文の顔頂部少し出る	5%
		図版37-191	瓦	鬼	珠文径 2.1 cm	母屋右側上辺隅 側面は張側こしらえ 連珠溝内押型の半円球の珠有り	10%
		図版38-192	瓦	鬼		隅鬼 左隅と鼻と上隅 端は貫通する	40%
		図版38-193	瓦	鬼		隅鬼 額と右目と鼻 端は貫通する	40%
		図版38-194	瓦	鬼		隅鬼 鼻と上隅と左耳 母屋一部残存 側面は張側こしらえ 連珠溝内押型の半円球の珠有り 珠文の顔頂部は出ない	30%
		図版38-195	瓦	鬼		棟鬼 母屋取手一部残存 鬼の右下隅残存	20%
		図版39-196	瓦	鬼		棟鬼 下隅	10%
		図版39-197	瓦	鬼		隅鬼 額	5%
		図版39-198	瓦	鬼		隅鬼 左下隅	5%
		図版39-199	瓦	鬼		角	1%

第13表 第217次調査遺物観察表(4)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他
A	SD103	図版39-200	瓦	鬼		角と層	5%
		図版39-201	瓦	鬼		耳	1%
		図版39-202	瓦	鬼		鬼瓦の胴筋 火槍宝珠の一部	1%
		図版40-203	瓦	鬼		鬼瓦の胴筋 日輪	10%
		第69図-69	瓦	面戸	最大長 11.8 cm 最大幅 13.9 cm 厚さ 2.5 cm	面戸	90%
		第69図-70	瓦	面戸	厚さ 1.9 cm	面戸	40%
		第69図-71	瓦	面戸	最大長 12.9 cm 厚さ 2.3 cm	面戸	80%
		第70図-72	瓦	塼	全長 24.0 cm 幅 24.0 cm 厚さ 3.2 cm		100%
		第70図-73	瓦	塼	全長 24.0 cm 幅 24.0 cm 厚さ 3.7 cm		90%
	SX301	第72図-74	土師質土器	皿	口径 8.8 cm	手捏ね成形 底部内側に凹凸 内外面口縁部ヨコナデ	20% 口縁部灯芯炭有り
		第72図-75	土師質土器	鍋		内面体部ナデ 胴部上蓋ヨコハケ目 胴下面ナデ 外面体部タテハケ目	10%
		第72図-76	陶器	天目碗	高台径 4.4 cm	鉄輪 高台隆起	10%
		第72図-77	陶器	燈鉢		外面口クロナデ	備前 5%
		第72図-78	陶器	燈鉢	口径 (31.0) cm	外面口クロナデ	備前 10%
		第72図-79	陶器	燈鉢	口径 (33.7) cm	外面口クロナデ	備前 10%
		第73図-80 図版40-80	瓦	丸	全長 35.7 cm 広端幅 14.4 cm 厚さ 2.6 cm		100% M24 H2類
		第73図-81 図版40-81	瓦	丸	広端幅 13.4 cm 厚さ 1.8 cm		30% M23 C類
		第73図-82 図版40-82	瓦	軒平	瓦当高 4.2 cm 頸部幅 2.1 cm	真草文	5% N+18 AIIa類
		第73図-83	瓦	軒平	瓦当高 5.3 cm 頸部幅 2.5 cm	水波文	1% N+16 B類
第73図-84	瓦	軒平	瓦当高 5.1 cm 頸部幅 2.5 cm	半乾菊花文	1% N+17 B類		

第14表 第217次調査遺物観察表(5)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考	
							産地・残存率・その他	
A	SX301	第74図-85 図版40-85	瓦	平	狭端部幅 2.1 cm 厚 さ 1.6 cm		20% H7 B類	
		第74図-86 図版40-86	瓦	平	厚 さ 1.5 cm	凹面に線刻有り	1%	
		第74図-87	瓦	面戸	厚 さ 2.1 cm	磨面戸	80%	
		第74図-88	瓦	鬼	株文径 2.0 cm	母屋左端 側面は倒側こしらえ 連珠溝内押型の半円球の珠有り 珠文の頭頂部は出ない	5%	
		第74図-89 図版41-89	瓦	鬼	株文径 2.0 cm	母屋右端 側面は倒側こしらえ 連珠溝内押型の半円球の珠有り 珠文の頭頂部は出ない	5%	
		図版41-204	瓦	鬼		隅鬼 母屋取手と右下腰と牙	20%	
		図版41-205	瓦	鬼		棟鬼 母屋左端足元 側面は倒側こしらえ 瓦文様有り	5%	
		図版41-206	瓦	鬼		左耳	1%	
		SD302	第76図-90 第76図-91 第76図-92	瓦器	椀	口 径 (16.0) cm	内面体部ナデとミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部指環瓦痕とミガキ	和泉型 20%
				瓦器	椀	高 台 径 (4.3) cm	見込みナデと平行輪状ミガキ 外面体部指環瓦痕高台ヨコナデ	和泉型 10%
瓦器	椀			口 径 (15.1) cm	内外面磨耗が著しく調整不明	和泉型 20%		
SX302	第77図-93 図版41-93 第77図-94 図版41-94 第77図-95 図版41-95 第77図-96 図版41-96	土師質	円筒埴輪		突帯部 内面ナデ 外面磨耗が著しく調整不明	1%		
		土師質	円筒埴輪		内面磨耗が著しく調整不明 外面タテハケ	1%		
		土師質	形象埴輪		内面ナデ 外面タテハケ	1%		
		須恵器	杯蓋	口 径 13.9 cm 器 高 7.9 cm つまみ径 3.1 cm	内外面回転ナデ 外面体部上半部回転ヘラケズリ	80%		
		土師質	朝顔形 円筒埴輪		口縁部突帯 外面体部タテハケ 突帯部ヨコナデ	1%		
SX302 周辺	第78図-97 図版41-97 第78図-98 第78図-99 第78図-100 図版42-100 第78図-101 図版41-101	瓦質	三足釜		脚部磨耗が著しく調整不明	1%		
		須恵器	長頸甕	口 径 (13.2) cm	内外面回転ナデ 外面体部1条の沈線有り 外面自然軸かか	10%		
		瓦器	椀	高 台 径 (4.6) cm	見込みナデと平行輪状ミガキ 外面体部指環瓦痕高台ヨコナデ	和泉型 30%		
		土師質	円筒埴輪		突帯部 内面ナデとタテハケ 外面体部タテハケ 突帯部ヨコナデ	5%		

第15表 第217次調査遺物観察表(6)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他
A	SX302 周辺	第78回-102	瓦器	椀	高台径 (4.0) cm	見込みナデとミガキ 外面体部指環圧痕 高台ヨコナデ	和泉型 10%
		第78回-103			磁器	碗	
		第78回-104 図録42-104	瓦器	椀	口径 (15.1) cm 器高 4.8 cm 高台径 4.6 cm	内面体部ナデとミガキ 見込みナデと平行線状ミガキ 外面口縁部ヨコナデとミガキ 体部上半部指環圧痕とミガキ 体部下半部指環圧痕 高台ヨコナデ	和泉型 70%
	SK310	第79回-105 図録42-105	土師質土器	鍋	口径 (28.9) cm	片口 内面口縁部から体部ハケム 外面磨耗が著しく調整不明	5% 内面磨耗付着
	SP325	第80回-106 図録42-106	瓦器	椀	高台径 (5.6) cm	見込みナデと平行線状ミガキ 外面指環圧痕 高台ヨコナデ	和泉型 30%
	SP337	第80回-107 図録42-107	須恵器	鉢	口径 (12.6) cm 器高 11.2 cm 高台径 (9.2) cm	襷鉢型 内外面回転ナデ 外面体部2本の沈線有り	30%
	SP373	第90回-108 図録42-108	土師質	内輪環輪	底径 (14.0) cm	基部部 外面タテハケ 内面ナデアゲ	1%
	SP448	第90回-109 図録42-109	土師質土器	皿	口径 (10.5) cm 器高 1.1 cm cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 外面直線ナデ	京都系 10%
	SP498	第80回-110 図録42-110	土師質土器	皿	口径 (8.1) cm 器高 0.9 cm cm	内外面磨耗が著しく調整不明	京都系 10%
		第80回-111	瓦器	椀	口径 (14.1) cm cm cm	内面体部ナデとミガキ 見込み平行線状ミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部ナデ	和泉型 20%
第84回-112 図録42-112		磁器	椀	高台径 (4.3) cm	染付 外面草花文 高台曇付露胎	肥前 20%	
B	礎石2	第84回-113 図録42-113	磁器	椀	口径 (10.6) cm 器高 5.8 cm 高台径 (3.9) cm	染付 外面コンニャク印判花文 高台曇付露胎	肥前 30%
		第84回-114 図録42-114	瓦	軒平	瓦当高 5.3 cm 喉部幅 2.2 cm	「甲」の文字文と水波文	5%
		第88回-115	磁器	筒形碗	高台径 (3.8) cm	染付 見込みコンニャク印判五弁花と二重雲線 高台曇付露胎	肥前 20% 二次焼成痕有り
	第88回-116	レンガ	レンガ	長辺 23.3 cm 短辺 11.0 cm 厚さ 6.6 cm	表裏面に刻印有り	100% 長辺側面煤付着	
	礎5	第90回-117 図録42-117	陶器	壺	口径 15.2 cm 器高 13.8 cm 高台径 11.4 cm	灰胎 口縁部と外面直線露胎 外面体部深縁の丸文有り	京泉系 90%
		第90回-118	磁器	椀	口径 12.2 cm 器高 5.1 cm 高台径 4.2 cm	色絵 銅彩転写 外面黒色輪と緑色輪の龍文と水草文 高台曇付露胎	不明 100%
	礎7	第90回-119	磁器	椀	高台径 4.3 cm	染付 見込みコンニャク印判五弁花と雲線 外面型紙摺りの酸化コバルト釉の透井文 高台曇付露胎	不明 30% 二次焼成痕有り
	男柱2	第92回-120	磁器	碗	高台径 (4.6) cm	染付 外面草花文 高台内文様有り 高台曇付露胎	肥前 30%
		第92回-121	磁器	碗	高台径 (4.0) cm	染付 外面花唐草文 高台内面線と文様有り 高台曇付露胎 難れ付着	肥前 10%

第16表 第217次調査遺物観察表(7)

地区	遺構名	番号	材質	器種	注意	特徴	備考
B	男柱2	第92図-122	磁器	碗蓋	つまみ径 (4.8) cm	青磁染付 見込み二重筒縁と花文 つまみ内方形枠 溝槽 つまみ端取縁部 離れ付着	肥前 40%
		第92図-123	磁器	皿	口径 (14.6) cm 器高 3.2 cm 高台径 (8.4) cm	見込み輪ノ目輪割ぎ 染付 内面草文 見込みコ ニヤク印刷五弁花 高台費付縁部 離れ付着	肥前 30%
地縄 遺構1	第96図-124 図版43-124	土師質 土器	皿	口径 6.9 cm 器高 1.4 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	100%	
		土師質 土器	皿	口径 7.4 cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	100%	
	第96図-126 図版43-126	土師質 土器	皿	口径 7.5 cm 器高 1.4 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	100%	
	第96図-127 図版43-127	土師質 土器	皿	口径 7.4 cm 器高 1.4 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	100%	
	第96図-128 図版43-128	土師質 土器	鍋		内面底部から体部ナデ 外面体部タクキ 底部タク キとナデ	30%	
	第96図-129 図版43-129	銅	鏡	径 2.4 cm 厚さ 0.1 cm	部卑光質	100%	
	地縄 遺構2	第97図-130 図版43-130	土師質 土器	皿	口径 7.2 cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	100%
土師質 土器			皿	口径 7.7 cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	鏡外 100%	
第97図-132 図版43-132		土師質 土器	皿	口径 7.7 cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	鏡外 100%	
第97図-133 図版43-133		土師質 土器	皿	口径 7.6 cm 器高 1.5 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	鏡外 100%	
第97図-134 図版43-134		土師質 土器	皿	口径 7.8 cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	鏡外 100%	
第97図-135 図版43-135		土師質 土器	皿	口径 7.6 cm 器高 1.5 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	鏡外 100%	
第97図-136 図版43-136		土師質 土器	皿	口径 7.2 cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	鏡内 100%	
第97図-137 図版43-137		土師質 土器	皿	口径 7.4 cm 器高 1.4 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	鏡内 100%	
第97図-138 図版43-138		土師質 土器	皿	口径 7.7 cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	鏡内 100%	
第97図-139 図版43-139		土師質 土器	皿	口径 7.9 cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	鏡内 100%	
第97図-140 図版43-140		土師質 土器	皿	口径 7.7 cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	鏡内 100%	
第97図-141 図版43-141		土師質 土器	皿	口径 7.3 cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	鏡内 100%	

第17表 第217次調査遺物観察表(8)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考	
B	地蔵 溝堀2	第97回-142 図録43-142	土師質 土器	皿	口 径 7.7 cm 器 高 1.5 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	100%	
		第97回-143 図録43-143	土師質 土器	皿	口 径 7.4 cm 器 高 1.8 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	100%	
		第97回-144 図録43-144	土師質 土器	皿	口 径 7.5 cm 器 高 1.6 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	100%	
		第97回-145 図録43-145	土師質 土器	皿	口 径 7.3 cm 器 高 1.7 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	100%	
		第97回-146 図録43-146	土師質 土器	皿	口 径 7.5 cm 器 高 1.9 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	100%	
		第97回-147 図録43-147	土師質 土器	皿	口 径 7.6 cm 器 高 1.7 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外 面口縁部ヨコナデ	100%	
		第97回-148 図録43-148	土師質 土器	鍋	口 径 (22.1) cm	口縁部穿孔有り 内面底部ナデ 内外面口縁部ヨ コナデ 外面底部平行タタキ 底部平行タタキとナデ	30% 内面底部集げ付着 外 面底部煤付着	
		第97回-149 図録43-149	銅	銭貨	径 2.5 cm 厚 さ 0.1 cm	明透元裏(真書体)	100%	
		第97回-150 図録43-150	銅	銭貨	径 2.4 cm 厚 さ 0.1 cm	元豊通裏(真書体)	100%	
		第97回-151 図録43-151	銅	銭貨	径 2.4 cm 厚 さ 0.1 cm	元祐通裏(真書体)	100%	
		第97回-152 図録43-152	銅	銭貨	径 2.3 cm 厚 さ 0.1 cm	紹聖元裏(真書体)	100%	
		第97回-153 図録43-153	銅	銭貨	径 2.2 cm 厚 さ 0.1 cm	洪武通寶	100%	
		第97回-154 図録43-154	銅	銭貨	径 2.5 cm 厚 さ 0.1 cm	永楽通寶	100%	
		第97回-155 図録43-155	銅	銭貨	径 2.5 cm 厚 さ 0.1 cm	永楽通寶	100%	
		第97回-156 図録43-156	銅	銭貨	径 2.5 cm 厚 さ 0.1 cm		100%	
		第97回-157 図録43-157	銅	銭貨	径 2.4 cm 厚 さ 0.1 cm		100%	
		第97回-158 図録43-158	銅	銭貨	径 2.4 cm 厚 さ 0.1 cm		100%	
		SD109	第96回-159	瓦質	三足釜		脚部ナデ	5%
		SK315	第100回-160	石製品	一石 五輪塔	幅 17.9 cm	花崗岩 火・水・地輪部	40%
		SK332	第102回-161	土師質 土器	皿	口 径 (7.2) cm	手捏ね成形 内面底部ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外面底部ナデ	10%

第18表 第217次調査遺物観察表(9)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他	
B	SK332	第102図-162	土師質土器	皿	口径 (7.5) cm	手捏ね成形 内面底部ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外面一部ナデ	10%	
		第102図-163	須恵器	杯蓋	口径 (13.4) cm	内外面回転ナデ	10%	
		第102図-164	瓦器	椀	口径 (13.7) cm	内面一部ナデとミガキ 外面口縁部ヨコナデ 指張圧痕	和泉型 20%	
		第102図-165	瓦器	椀	口径 (12.9) cm	内面一部ナデとミガキ 外面口縁部ヨコナデ 指張圧痕	和泉型 5%	
		第102図-166	瓦器	椀	口径 (12.3) cm	内面一部ナデとミガキ 外面口縁部ヨコナデ 指張圧痕	和泉型 10%	
		第102図-167	瓦	円板	最大径 5.4 cm 厚さ 1.6 cm	平瓦を丸く打ち欠く 面子あるいは裏込め用の瓦の可能性有り	100%	
		第102図-168 図版43-168	滑石	紡錘車	最大径 4.4 cm 最小径 3.8 cm 厚さ 1.6 cm	軸径約0.7cm	100%	
C	SD2	第107図-169	土師質土器	皿	口径 7.9 cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面ナデ 内面口縁部ヨコナデ	90%	
		第107図-170 図版44-170	土師質土器	皿	口径 7.4 cm 器高 1.8 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面ナデ 内面口縁部ヨコナデ	100%	
		第107図-171	土師質土器	皿	口径 (8.0) cm 器高 1.4 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面ナデ 内面口縁部ヨコナデ	40%	
		第107図-172	土師質土器	皿	口径 7.6 cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外面一部ナデ	100%	
		第107図-173	土師質土器	皿	口径 7.7 cm 器高 1.9 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ	100% 口縁部灯芯痕有り	
		第107図-174 図版44-174	土師質土器	皿	口径 (8.1) cm 器高 1.5 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面ナデ 内面口縁部ヨコナデ	100%	
		第107図-175 図版44-175	土師質土器	皿	口径 12.8 cm 器高 2.1 cm	手捏ね成形 内面底部ナデ 内外面口縁部ヨコナデ	京都系 40%	
		第107図-176 図版44-176	土師質土器	皿	口径 12.6 cm 器高 2.4 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ	100% 口縁部灯芯痕有り	
		第107図-177	瓦	円板	最大径 5.4 cm 厚さ 1.6 cm	平瓦を丸く打ち欠く 面子あるいは裏込め用の瓦の可能性有り	100%	
		SD203	第108図-178 図版44-178	土師質土器	皿	口径 10.0 cm 器高 2.0 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ	70%
			第108図-179	土師質土器	皿	口径 (11.2) cm 器高 2.7 cm	手捏ね成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ	30%
SX201	第109図-180	土師質土器	皿	口径 (8.4) cm	手捏ね成形 内面ヨコナデ	30%		
	第109図-181	磁器	碗	高台径 5.1 cm	青磁 高台内蛇ノ目状に輪を割く	中国 20% 二次物成産有り		

第19表 第217次調査遺物観察表 (10)



地区	遺構名	番号	材質	器種	法差	特徴	備考 産地・存在率・その他
C	SK207	第110区-182 図録44-182	陶器	皿	口 径 12.0 cm 器 高 3.3 cm 高 台 径 (4.8) cm	外面下半部磨治 見込み砂目積み痕有り	産地 40%
	SK352	第110区-183 図録44-183	須恵器	杯身	口 径 (9.6) cm 器 高 3.2 cm	内面底部から外周体部にかけて回転ナデ 外周底部 回転ヘラケズリ	90%
	SK208	第110区-184 図録44-184	瓦	軒丸	直 径 (12.3) cm 瓦 当 厚 1.7 cm	左巻き三巴文 珠文数30個 内外面線有り	20% NM16 18類
		第110区-185 図録44-185	瓦	面戸	最 大 長 12.5 cm 最 大 幅 14.1 cm 厚 さ 2.0 cm	雙面戸	100%
	SK228	第110区-186 図録44-186	瓦	平	厚 さ 1.7 cm	ヤキの線跡有り	1%
	SP303	第111区-187 図録44-187	土師質 土器	羽釜	口 径 (25.3) cm	内面体部ハケ目 内外面口縁部ヨコナデ 鋤部ヨコナデ	5%

第20表 第217次調査遺物観察表 (11)



### 第3節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第231次調査

調査面積 500㎡

調査期間 平成12年2月1日～4月30日

調査担当者 小長谷正治・岡野理奈

#### 1. 遺跡の概要

本調査地点は有岡城（伊丹城）の本丸から約200m北西に位置する。「文禄伊丹之図」（第3図）や「寛文9年伊丹郷町絵図」（第4図）によると、本調査地点は伊丹郷町を南北に延びる大溝筋の東側にあたり、有岡城期には侍町に属していた。2つの絵図から、有岡城の廃城後しばらくはこの周辺は空き地であったことが窺え、「寛政8年伊丹細見図」を見ると当地点周辺は浪町に属している。

また、伊丹酒造組合文書「明治19年酒造場絵図面届書写」（以下、「明治19年絵図」と記す）（第184図）によると、当調査地点には伊塚利兵衛（江戸時代は榊屋利兵衛と称す）所有の酒蔵があり、酒造りが営まれていたことがわかっている（第4章第3・4節参照）。さらに明治年間に酒蔵の所有者は小西酒造へと移り、小西新右衛門文書中に明治37年、42年、44年、昭和2年等に描かれた酒蔵の絵図が存在し、酒蔵建物の詳細を知ることができる（第186図）。

#### 2. 調査の概要

今回の調査は、平成10年度の第203次調査（以下「203次」と記す）、平成11年度の第217次調査（以下「217次」と記す）に続く、小西酒造富士山蔵敷地内の3回目の発掘調査で、有岡城跡・伊丹郷町遺跡第231次調査（以下「231次」と記す）にあたる。当初の開発計画では、203次・217次の調査で発掘調査は終了する予定であったが、事業者側から開発計画変更の申し出があり、設計変更に基づく未調査部分の発掘調査を実施することとなった。

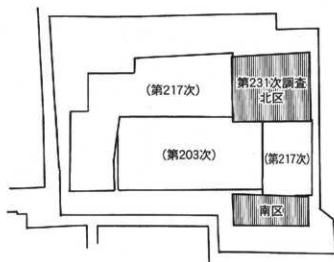
調査範囲は、217次A区の北側「北区」と、同じく南側「南区」の2地区である。

#### 3. 調査成果

##### 基本層序（第113・147図）

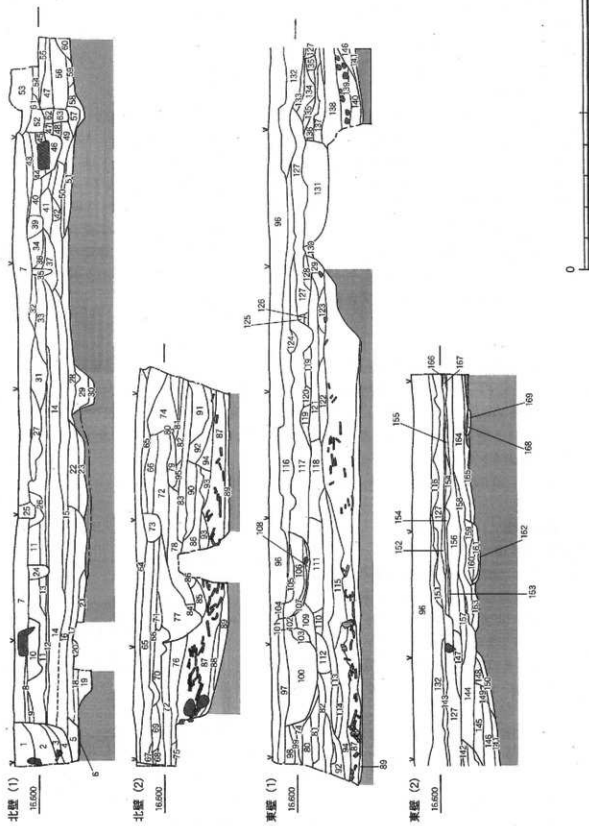
基本層序は、203次の調査直前の確認調査による成果をもとにしている。遺構面は5面である。地表面はおよそT.P.+17.000mである。地表面から約20cmは表土で、その下には褐色系の土層（北区東壁116・132層、南区北壁95層）や黄褐色土層（北区北壁11層）が堆積し、18世紀から20世紀のものが含まれていた。これら褐色系の土層を取り除いた面を第1面とした（T.P.+16.500～16.600m）。

褐色系の土層の直下には調査区の広い範囲で炭・焼土を含む褐色粘質土層が

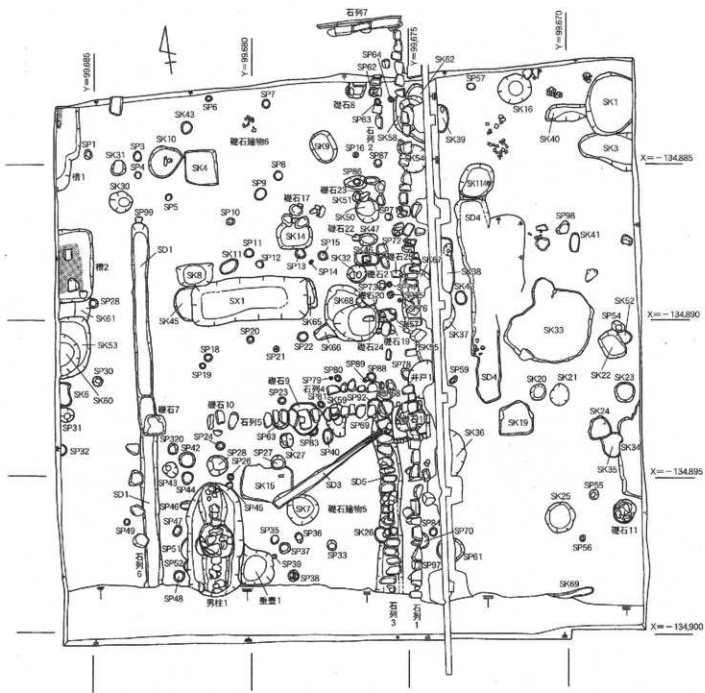


第112図 調査区設定図（1/1000）

第113图 北区土层断面图







第114图 北区第1面全体图

堆積していた（北区東壁117層・127層、同北壁14層・76層・82層・83層）。さらにこの下層には黄褐色系の層が堆積し（北区東壁130・136・156層、同北壁47層、南区北壁99層）、ここから掘り込まれた遺構を多く確認したことにより、この黄褐色系の土層を第2面とした（T.P.+16.300～16.400m）。第2面では主に15世紀後半から16世紀後半の遺構を検出した。

第2面直下には整地層が数層堆積し、さらにその下には中世遺物を含む黄褐色系の土層（北区東壁164層・165層、北壁17層・28層・51層）・（南区北壁100～102層、西壁8層・13層）が堆積し、ここから掘り込まれた遺構を確認した。この層は富士山麓調査区内の広い範囲で見ることができた（第12図203次南壁63層、第81図217次B区北壁60層など）。これらの層の下面は地山で、これを第3面とした（T.P.+15.900～16.100m）。

## 調査面

調査面は、203次・217次の調査面に符合するように、江戸期・有岡（伊丹）城期・伊丹城以前の遺構をそれぞれ確認するように掘削した。まず、掘削するにあたり、北区の調査区西側部分に南北トレンチをあけて、217次B区第1面であるT.P.+16.600mまで掘り下げ、周りの調査区の層位や遺構の検出状況を確認しながら3面の調査を行った。なお、北区の南側は217次A区と重なったため、こちらは土層を確認するトレンチとして活用した。

## （1）北区

### 第1面（第114図）

江戸時代中期から現代までの遺構を検出した。調査区内は「明治19年絵図」によると、ほとんどが酒蔵建物部分にあたる。これを裏付けるように建物に関する複数の石列や礎石、さらにそれら建物内に作られた酒造工程に関わる槽場の槽や男柱を検出した。

#### 礎石建物

礎石建物は2棟検出した。これら2棟の建物の調査成果は、昭和2年の絵図（第186図⑥）にほぼ一致し、図面中東端に記された「木造瓦葺式階建 酒造場」がそれにあたると思われる。また、建物は建て増しや改造を行ったようすが窺えた。

#### 礎石建物5・6（第115図）

調査区内西側で検出した。石列1は217次A区石列2の北側に続く遺構である。217次A区での検出長は21m、今回の調査での検出長は18.5mで、2つの次数を合わせた検出長は39.5mである。この石列はさらに231次南区へと続く。これについては南区で述べる。この石列は昭和2年の図面東端の南北ラインに相当し、図面中東端に記された「木造瓦葺式階建 酒造場」がそれにあたると思われる（第186図⑥）。遺構の検出状況から礎石建物5・6が共有して使用していたと考えられる。また石列1東側に石列を利用してコンクリート溝を設けていることから、溝・石列ラインが、建物の東端と考えられる。礎石建物5・6の西端は217次B区で検出されており石列1がこれにあたる。この石列も建物5・6を明確に分ける状況ではなかったため、231次北区石列1と同様に2つの建物が共有していたと思われる。礎石建物5・6の東西幅を京間1間=1.969mで換算すると、共に9間7分（19m）である。

また、石列1から西に延びる石列5、その西側に平行して検出した礎石7・10・9・12、及び217次B区礎石2は、昭和2年の図面に見られる棟境と考えられる。また、昭和36年の航空写真を見ると礎石建物4・5は別棟であるが、礎石建物5の南端と考えられるあたりでは棟を分ける柱通りは検出されておらず、このことから昭和2年の絵図のように1棟の可能性があり、昭和2年から昭和36年の間



第115図 北区礎石建物5・6平面・断面図

に建て替えられたと推定できる。

石列5よりさらに北側でも石列1から西に延びる石列4を検出した。これは先述した礎石建物5の北端(石列3)と平行しており礎石建物6の南端と考えられ、さらに同じ状況でそれより北側で石列7が検出されており、それは礎石建物6の北端にあたると思われる。このことから建物の南北の大きさは6間1分(12m)であることがわかった。

また、石列1の西側に平行する石列2・3は、217次A区石列1の北側に続く遺構である。それぞれの遺構の切り合い関係から石列1に造り替える前段階の遺構と思われる。

さらに、明治19年絵図やその他の明治年間の図面によると、礎石建物6は東端が217次B区石列1から東に5間(9.84m)の規模をもっていたようだが、今回の調査では明確に示す遺構は検出されなかった。SD1は217次B区石列1から東に約10mの位置にあるが、この遺構は礎石建物6の北端まで延び



ず、所言できなかつた。

#### 槽場

槽場は一連の酒造工程の中で、木綿の洗袋にもろみを入れて、酒槽の中に積み上げ、酒と粕に分離する圧搾工程を行う場所である。『日本山海名産図会』では、大きな男柱とそこに挿し込まれたハネ棒によりテコの原理で搾るようすが描かれている。ここで搾られた酒は地下に埋められた垂壺で受けている。発掘調査で検出する槽場の遺構は、テコの原理を利用して酒槽に圧力をかけ酒を搾るための「男柱」、あるいはテコの原理を用いずに圧力をかける「槽」と、それらから搾られた酒を受ける「垂壺」である。

槽場の遺構は合計3基検出した。槽1・2と、男柱1である。

#### 槽1 (第116図)

調査区北西隅で検出した。酒槽を据えるための半地下式に掘り込まれた遺構を検出した。平面形は長方形を呈し、遺構の大きさは、長辺2.6m、短辺35~75cm以上で、深さ37~50cmである。この遺構は217次B区槽6の東側に続く遺構である。前回の調査成果と合わせた遺構の大きさは、長辺3.5m、短辺1.6~2.2m以上で、北側は調査区外へ延びるため全長は不明である。垂壺の部分は217次B区槽6で検出した。壁には217次B区槽8と同様に三方に石が組まれていたと考えられるが、槽1では石は抜き取られていた。漆喰は残存していた。漆喰部分は長辺1.7m以上、短辺1.5mである。床面に東西に2列、南北に3列の計6ヵ所に径約30cm、漆喰面から深さ10cmの円形の小穴があった。酒槽を据えるための基礎になると考えられる。この上に直接据えたのか、何か台のようなものを必要としたのかは定かでない。

今回の調査では遺物は出土していないが、前回の調査で瀬戸美濃磁器染付碗(銅板刷り)(第90図118)やレンガが出土していることから、近代のものと考えられる。

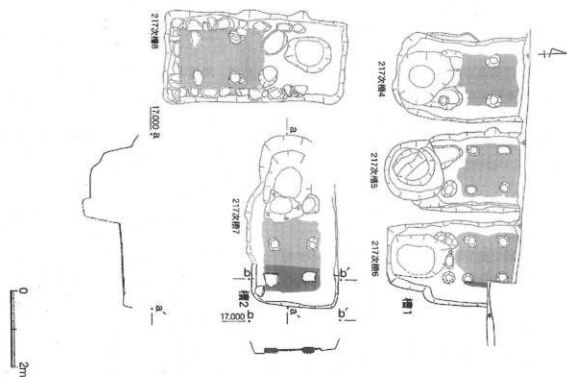
#### 槽2 (第116図 図版46)

調査区北西隅で、酒槽を据えるための半地下式に掘りこまれた遺構を検出した。平面形は長方形を呈し、遺構の大きさは東西1.3m以上、南北2.35mで、深さ約30cmである。この遺構は217次B区槽7の東側に続く同じ遺構である。217次と231次の調査成果と合わせた遺構の大きさは、長辺4.5m、短辺2~2.4mである。垂壺の部分は217次B区槽7の調査で検出した。壁には217次B区槽8と同様に三方に石が組まれていたと考えられるが、槽2では石は抜き取られていた。床面の漆喰は長辺2m、短辺1.5mの範囲である。垂壺を抜き取る際に崩れた部分もあるが、床面に幅約1m間隔で東西に3列、南北に2列の計6ヵ所に石が据えられていた。しかし、石が残っていたのは東側2ヵ所のみである。

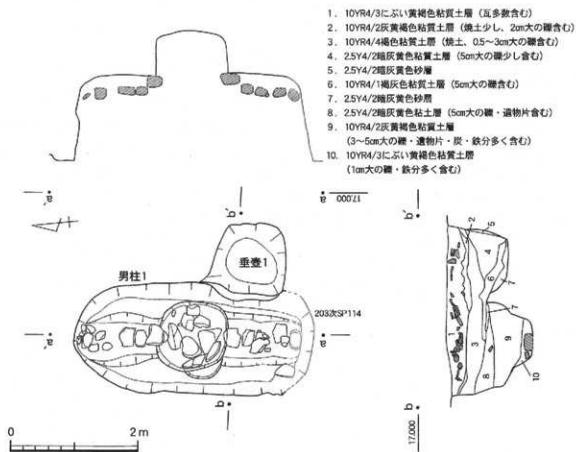
出土した遺物は残りが悪く図示できなかつたが、土師質土器や瓦質土器焔炉片、肥前磁器染付碗などがあつた。217次B区槽7から瀬戸美濃焼染付碗(銅板刷り)(第90図110)が出土していることから、近代のものと考えられる。

#### 男柱1・垂壺1 (第117~119図)

調査区南側で検出した。男柱及び男柱の浮き上がりを防ぐための貫(横木)や垂壺は抜き取られて残っていなかつた。平面形は長楕円形を呈し、遺構の大きさは、長辺3.6m以上、短辺1.75mである。深さは1.14mで、中心部は円形にさらに50cmほど深くなっている。この遺構は203次SP114の北側に続く遺構である。これらの調査成果から遺構の大きさは、長辺3.7m、短辺1.75mである。また、男柱1の東側で垂壺1を検出した。平面形は方形で、遺構の大きさは一辺1.1m、深さ90cmである。この槽場は「一槽挿し単基型」である。

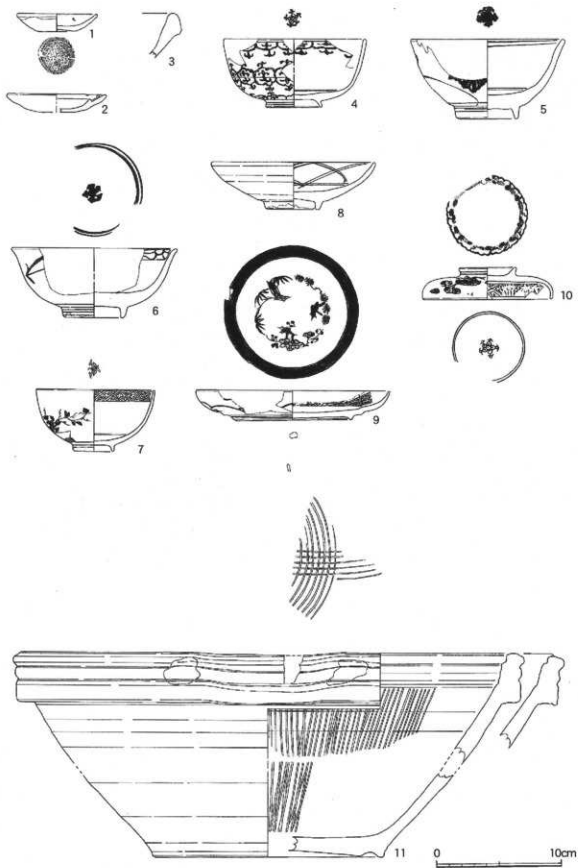


第116図 北区槽1・2平面・断面図

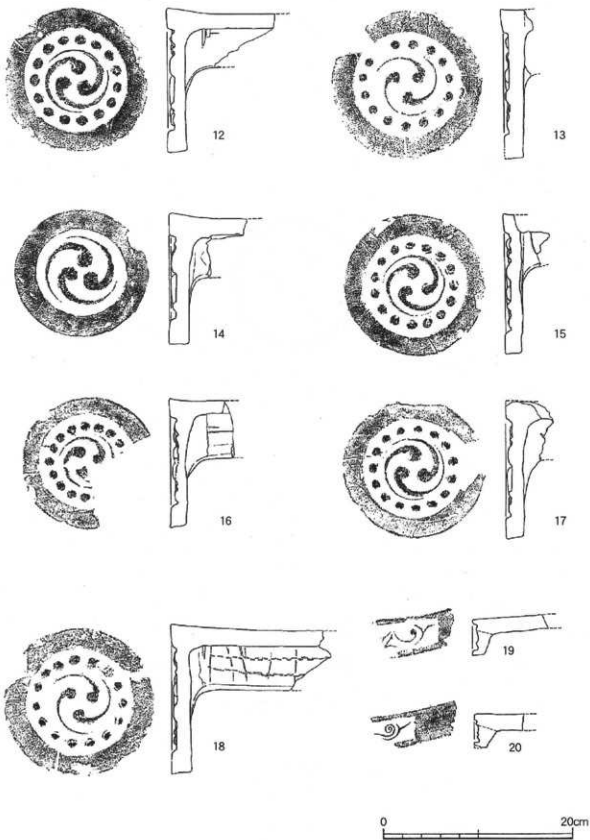


1. 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土層 (互多数含む)
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質土層 (焼土少し、2m大の礫含む)
3. 10YR4/4褐色粘質土層 (焼土、0.5~3m大の礫含む)
4. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土層 (5m大の礫少し含む)
5. 2.5Y4/2暗灰黄色砂層
6. 10YR4/1褐灰色粘質土層 (5m大の礫含む)
7. 2.5Y4/2暗灰黄色砂層
8. 2.5Y4/2暗灰黄色粘土層 (5m大の礫・遺物片含む)
9. 10YR4/2灰黄褐色粘質土層 (3~5m大の礫・遺物片・炭・鉄分多く含む)
10. 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土層 (1m大の礫・鉄分多く含む)

第117図 北区男柱1平面・断面図



第118図 北区男柱1出土遺物(1)



第119图 北区男柱1出土遗物(2)

男柱1の埋土の上層から30cmは瓦が多数含まれていた。下層には焼土を含む褐色粘質土層と暗灰黄色粘質土が堆積していた。遺物を上層と下層に分けて取り上げてみたが、時期差はなく、一気に埋められていた。また垂壺1の周囲、及び底部分には暗灰黄色細砂が入っていた。壺を固定するために入れた砂と思われる。

出土遺物のうち、1は軟質施釉陶器皿、2は軟質施釉陶器受皿である。3は土師質土器焙烙で残りは悪いが難波分類G類と考えられる。4から10の肥前磁器のうち、5と6は染付端碗である。この他に11の堺・明石焼播鉢、12～18の軒丸瓦、19・20の軒平瓦がある。これら出土遺物の年代観は19世紀初頭と考えられる。

#### SK60 (第114図)

調査区西壁周辺で検出した。遺構の大きさは、東西60cm以上、南北1.3m、深さ1mである。この遺構は、217次B区男柱2に伴う垂壺の可能性もある。明治37年の絵図(第186図)によると、このあたりに描かれている槽場は、酒槽を4基置く「二槽挿し連基型」であったと推定できる。「明治19年絵図」に描かれている槽場は、203次調査の男柱2・3と考えられ、その後、20年の間に217次B区男柱1・2の場所へ槽場が移動したようすが窺える。出土遺物は残りが悪く、図示できるものはなかった。

#### SK61 (第114図)

調査区西壁周辺で検出した。遺構の大きさは東西65cm以上、南北1.4m、深さ50cmである。この遺構はSK60と同様に、217次調査B区男柱2に伴う垂壺の可能性もある。遺構は調査区外へ広がるため、正確な規模は不明である。ここからは遺物は出土していない。

### 井戸

調査区内から井戸を1基検出した。この井戸は敷地の中でも奥側に位置し、酒蔵の中でも裏手にあったと考えられるが、酒蔵建物内部に位置していたかどうかは不明である。

#### 井戸1 (第114・120図 図版56)

調査区中ほどで検出した。平面形は円形を呈し、遺構の大きさは直径約1.2mである。断面形はほぼ直線に落ちる。危険なため約1m掘削したところで調査を断念し、深さは不明である。

出土遺物のうち、21の肥前磁器染付碗は雪輪草花文を施すくらわんか手で、22は肥前磁器染付碗の蓋物である。23は煙管吸い口である。これら出土遺物の年代観は18世紀中頃から後半と考えられる。

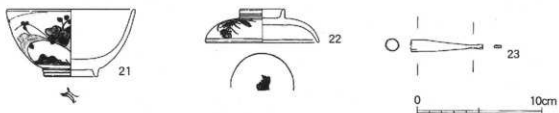
### 土坑

調査区内から多数の土坑を検出した。その中で遺物の種類が豊富である廃棄土坑と思われるものを取り上げた。SX1は、調査当初大型の方形遺構であることから槽を想定したが、調査の結果、槽1・2のような垂壺跡や石垣・漆喰の痕跡などは確認されなかったため、酒造関係以外の性格をもつと考えている。

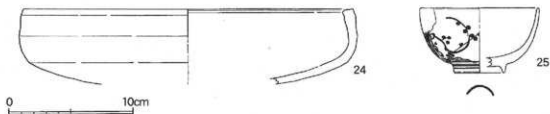
#### SX1 (第114・121図)

調査区中央で検出した。平面形は長方形を呈し、遺構の大きさは長辺365m、短辺1.4m、深さ約60cmである。遺構の断面形は逆台形を呈し、底部は若干ではあるが、西から東へ傾く。埋土は3層に分けられる。上層は褐色砂質土層で0.5～1cm、5cm前後の礫が多く混じる。中層は褐色砂質土層で5cm大の礫が多く入る。下層はにぶい黄褐色粘質土層である。

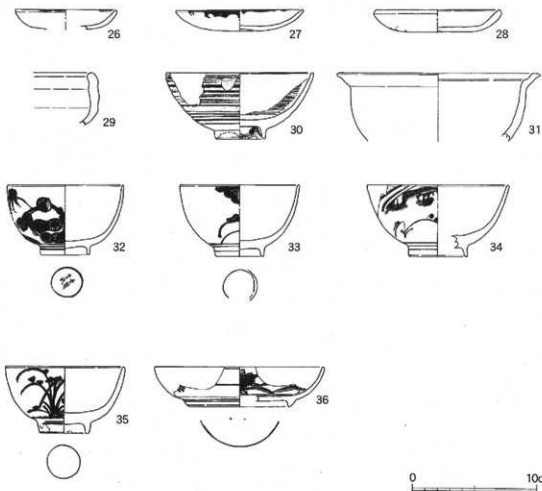
出土遺物のうち、24は土師質土器焙烙(難波分類E類)、25は肥前磁器染付碗である。これら出土遺物の年代観は18世紀中頃と考えられる。



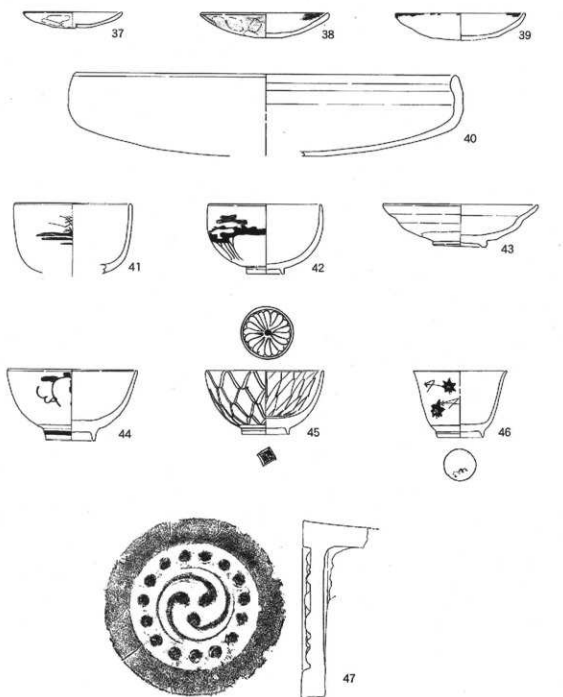
第120図 北区井戸1出土遺物



第121図 北区SX1出土遺物

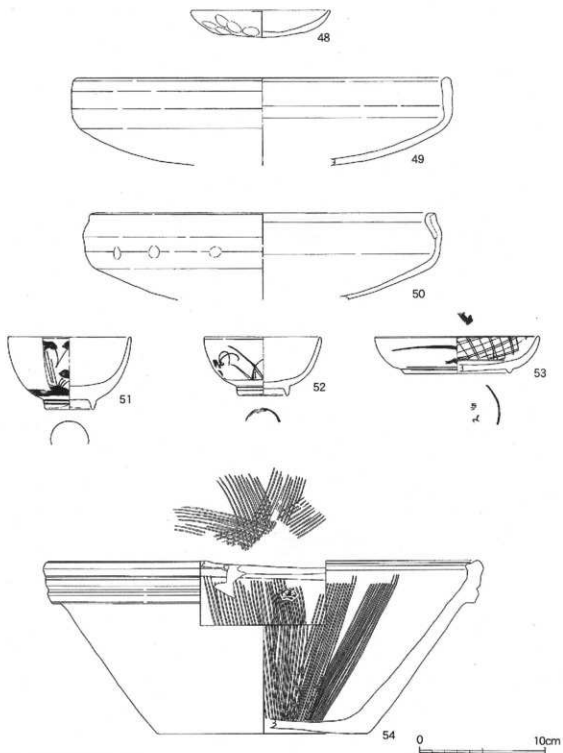


第122図 北区SK8・16出土遺物



0 10cm

第123図 北区S K54出土遺物



第124図 北区SK81出土遺物

SK8 (第114・122図 図版46・56)

調査区中央付近で検出した。平面形は長方形を呈し、遺構の大きさは長辺1.1m、短辺70cm、深さ約60cmである。

出土遺物のうち、26～28は土師質土器皿で、26・27は口縁部に灯芯痕が付着していることから、灯



明皿として使用されたと考えられる。29は土師質土器焙烙（難波分類E類）である。この他に30は肥前陶器刷毛目碗で、高台内の削りこみが高台脇よりも深いタイプである。31は鉄軸の京焼系陶器土鍋、32～34は肥前磁器染付碗である。これら出土遺物の年代観は18世紀前半から中頃と考えられる。

#### SK16 (第114・122図)

調査区北側で検出した。平面形は円形を呈し、遺構の大きさは直径約1m、深さ約55cmである。

出土遺物のうち、35は肥前磁器染付碗、36は肥前磁器染付皿である。これらは18世紀前半から中頃のものと考えられる。

#### SK54 (第114・123図 図版57)

調査区北側で検出した。平面形はほぼ円形を呈し、遺構の大きさは直径約1mである。深さ57cmである。

出土遺物のうち、37～39は土師質土器皿で、37・39は口縁部に灯芯痕が付着していることから、灯明皿として使用されたと考えられる。40は土師質土器焙烙（難波分類E類）である。この他に41は肥前京焼風陶器碗で外面に山水文を描く。42は色絵の京焼系陶器碗、43は肥前陶器皿で、44の肥前磁器染付碗は見込みに蛇ノ目輪刺ぎを施す。45の肥前磁器染付碗は内外面に網目文を施す。46は肥前磁器染付小坏でコンニャク印判と染付を併用する。47は軒丸瓦である。これら出土遺物の年代観は18世紀中頃と考えられる。

#### SK81 (第114・124図 図版46・57・58)

調査区内中央部分の第2面で検出したが、所属時期からここで述べる。平面形は楕円形を呈し、遺構の大きさは長辺1.75m、短辺1.65mで、深さは北西部分では約20cmで、南西部分に至ると一段深くなり、約50cmである。

出土遺物のうち、48の土師質土器皿、49・50の土師質土器焙烙、51・52は肥前磁器染付碗、53は肥前磁器染付皿、54は塀焼播鉢である。片口部直下の内側播目上に「長上」の刻印がある。これら出土遺物の年代観は18世紀前半と考えられる。

## 柱穴

#### SP61 (第114・125図 図版58)

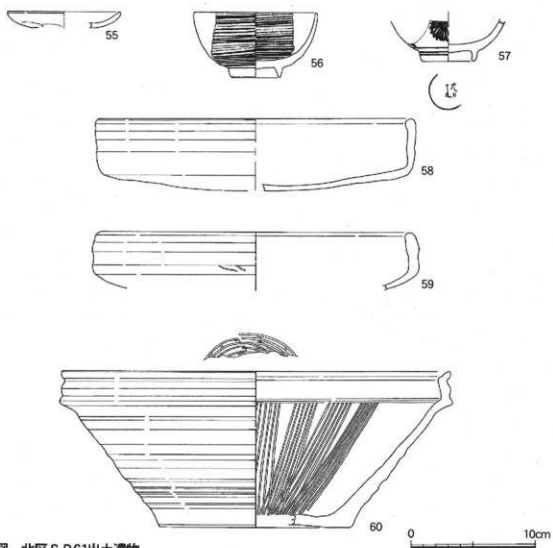
調査区内南側で検出した。平面形は楕円形を呈し、遺構の大きさは長辺88cm、短辺72cm、深さ25～32cmである。

出土遺物のうち、55は土師質土器皿、56は肥前陶器刷毛目碗で内外面に刷毛目を施す。57は肥前磁器染付碗で、コンニャク印判を施す。58・59は土師質土器焙烙、60は丹波焼播鉢である。これら出土遺物の年代観は18世紀前半と考えられる。

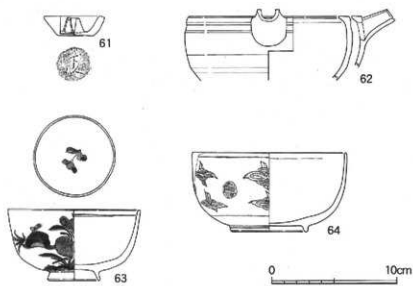
#### SP70 (第114・126図 図版58)

調査区南側で検出した。平面形はほぼ円形を呈し、遺構の大きさは長辺53cm、短辺50cm、深さ30～35cmである。

出土遺物のうち、61は土師質土器乗燭、62は京焼系陶器片口鉢、63は肥前磁器染付碗でハの字状高台である。64は肥前磁器染付蓋物である。これら出土遺物の年代観は18世紀後半から19世紀前半と考えられる。



第125図 北区SP61出土遺物



第126図 北区SP70出土遺物

## 第2面 (第127図 図版47)

第2面直上には焼土層が広く堆積し、瓦の破片が多く含まれていた。おもに15世紀後半から16世紀前半の遺構と遺物を検出した。埋土に焼土や炭が含まれる遺構が多く見られ、また、調査区内北東隅において焼土混じりの埋土に瓦を大量に含む遺構を検出するなど、当調査区の様相を知る上で好資料となるものが見られた。調査の結果、西端に石垣を組み、逆S字状の平面形をもつ池状遺構を確認した。この遺構の北側と東側は調査区外へ延びていたため、北辺を確認するために後に調査区の北側を拡張して調査を行った。

### 庭園遺構

#### 池状遺構 (第128～139図 図版48・59～69)

調査区の北東隅で検出した。調査当初は、遺構の平面形が明確ではなかったため、瓦が多量に出土した2ヵ所を中心に、十字にアゼを残して周辺全体を少し掘り下げ、平面形を確認した。その結果、遺構の西端は南北方向に石垣をもち、石垣の南側から南東方向へ逆S字状に緩やかな円を描き、東側の調査区外へ延びていくことがわかった。また北側は、石垣も含めて遺構が調査区外へ延びていくことが分かった。そこで、遺構の北側を確認するために、調査区の北側を東西8m、南北3m拡張し、引き続き調査を行った。

調査の結果、この遺構の平面形は、逆S字状形を呈する。西端では、南北方向に長さ4.2mの石垣を検出した。遺構の南側は、石垣の南端から南東方向へ逆S字状に円を描きながら東側の調査区外へ延びており、また、遺構の北側は、石垣の北端から南東方向へ、緩やかな円を描いて東側の調査区外へ延びていることがわかった。

遺構の規模は、南北方向は最長9.9m、最短4.3mである。北側の東西幅は約6.8m以上で、調査区外へ延びるため正確な幅は不明である。断面は北側と南側ともに浅い段をもつ。段は北側のほうが広く南側は狭い。池底面は平らに近い平底である。

石垣は、大きさの違う自然石を野面積みしている。調査の結果、石垣は、池の最底部から組み上げられたものでなく、底部から約30cm高いところから築かれていることがわかった。

池状遺構の埋土は、大きく5層に分けられる。最上層、上層、瓦層、砂層、粘土層である。

最上層は、遺構の平面形がまだ明確でない層であるため、池状遺構の埋土ではない可能性があり、遺物にも若干新しいものが含まれていた。上層の埋土は褐色系の土層で、少量であるが、こぶし大の丸い石が出土した。瓦層は灰色系の粘土層で、焼土や炭と共に大量の瓦が出土した(第128図)。瓦の出土量はコンテナ約120箱分におよんだ。特に石垣のすぐ東側では瓦が何重にも折り重なって堆積していた。遺構の東側へ行くほど瓦は出土の密度が薄くなった。その下層には褐色系の砂層が部分的に堆積し、さらに最下層は褐色系の粘土層で、これは遺構底部全域で確認した。

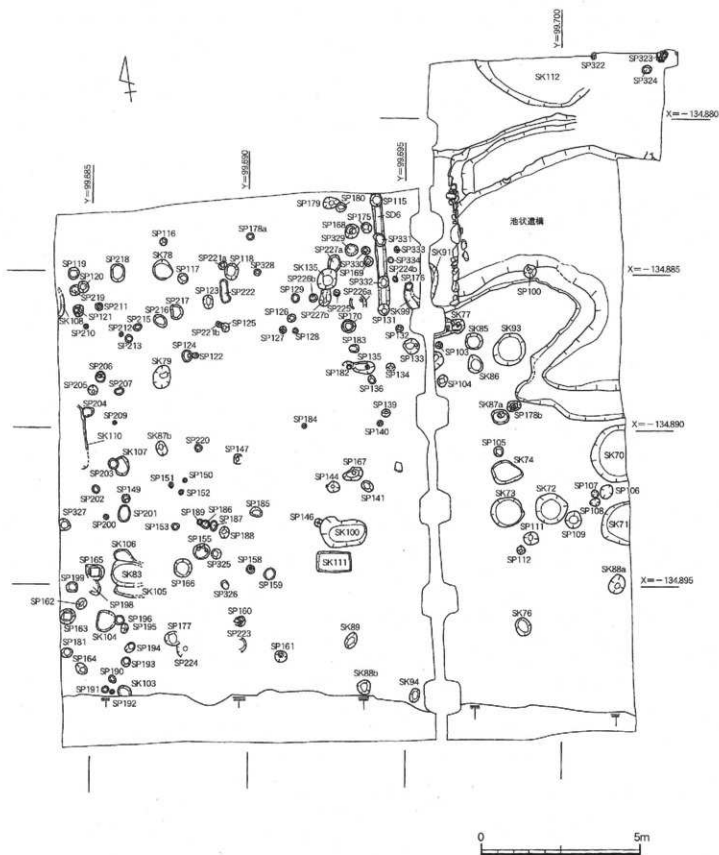
石垣をはずすと、南北方向に緩やかな円を描く築造当初の形が現れた(第129図)。

以下、出土した遺物を層序ごとに述べていく。

最上層から65の土師質土器皿が出土した。

66～74は上層から出土したものである。66～72は土師質土器皿である。73は瓦質土器羽釜で、口縁部が出土した。鈿は短く口縁の立ち上がりもさほど長くない。74は青花碗である。口径に対して高台径が小さく感じられる。全面施軸され、外面体部には連子文が描かれている。全体に焼きが甘く、貫入が入り、軸は乳白色を呈し呉須の発色はあまい。

75～92と115～119・121～140は瓦層から出土したものである。



第127図 北区第2面全体図



第128図 北区池状遺構(上層)平面・断面図

## 土層(1)

- 25Y4/2暗灰黄色粘質土層 (灰・粘土多量含む)
- 10YR4/2灰黄褐色土層
- 25Y4/3オリーブ褐色砂質土層
- 10YR4/2灰黄褐色粘土層
- 25Y4/2暗灰黄色粘土層 (磁砂・灰・0.5m次の磁砂、鉄分少し含む)
- 25Y4/2暗灰黄色粘土層 (0.5-1m次の磁砂多量含む)
- 25Y4/1暗灰色粘土層 (磁砂・鉄分含む)
- 10YR4/4褐色粘土層 (磁砂・鉄多量含む)
- 10YR4/2黒褐色粘土層 (灰・磁砂少し含む)
- 10YR4/3にいい黄褐色粘土層 (灰・0.5m以下の磁砂含む)
- 10YR4/2灰黄褐色粘土層 (鉄少し含む)
- 10YR4/2灰黄褐色土層 (灰・2.5m以下の礫含む)
- 25Y4/2暗灰黄色粘質土層 (灰・砂粘含む)
- 10YR3/2黒褐色粘質土層 (砂粘・地山の土少し含む)
- 10YR4/2にいい黄褐色粘土層
- 10YR5/2灰黄褐色粘土層 (鉄分多量含む)

## 土層(2)

- 10YR4/3にいい黄褐色土層 (磁砂・鉄分多量含む)
- 25Y4/2暗灰黄色土層 (赤大の礫・瓦片多量含む)
- 10YR4/2灰黄褐色粘土層 (赤大の礫・灰少し含む)
- 25Y4/2暗灰黄褐色粘土層 (0.5m次の礫少し含む)
- 10YR4/3にいい黄褐色粘土層 (1m次の礫多量含む)
- 25Y4/2暗灰黄色粘土層 (磁砂少し含む)
- 25Y4/3オリーブ褐色砂層 (礫多量・鉄分少し含む)
- 25Y4/2暗灰黄色砂層
- 10YR4/4褐色砂層
- 10YR4/2灰黄褐色土層 (砂粘少し含む)
- 10YR4/2灰黄褐色粘土層
- 10YR3/2黒褐色土層 (0.5m次の礫多量・鉄分・灰少し含む)
- 10YR4/3にいい黄褐色土層 (灰・砂粘含む)
- 10YR4/3にいい黄褐色土層 (1m次の礫・磁砂多量・鉄分・灰少々含む)
- 10YR4/6褐色土層 (0.5m次の礫少し含む)
- 10YR4/1暗灰色粘土層 (大量の瓦・灰土・灰を含む)
- 10YR4/3にいい黄褐色土層 (磁砂多量含む)
- 10YR4/2灰黄褐色粘土層
- 10YR4/3にいい黄褐色粘土層
- 10YR3/2黒褐色粘土層 (灰・鉄分少々含む)
- 10YR4/2灰黄褐色粘土層 (磁砂・鉄分少々含む)
- 10YR3/2黒褐色粘土層
- 25Y4/2黒褐色粘土層 (1m次の礫少し含む)
- 10YR4/3にいい黄褐色土層 (磁砂少し含む)

## 第128図 (土層名)

75~82は土師質土器である。口縁部に灯心痕をもつものが多く、灯明皿として使用されていたことが窺える。83と84は備前焼鉢である。83は遺構上部で大きく割れた状態で出土した。摺目は9本1単位で、胎土は灰色を呈している(乗岡編年中世4期)。84は摺り目は8本1単位で、胎土は赤褐色を呈している。口縁の縁帯部に凹線は見られない(乗岡編年中世5期)。85~87は瓦質土器羽釜である。88は天目碗で中国製と考えられる。89は備前焼盤である。90は中国製白磁皿で、91は中国製白磁碗である。92は中国製青磁碗である。

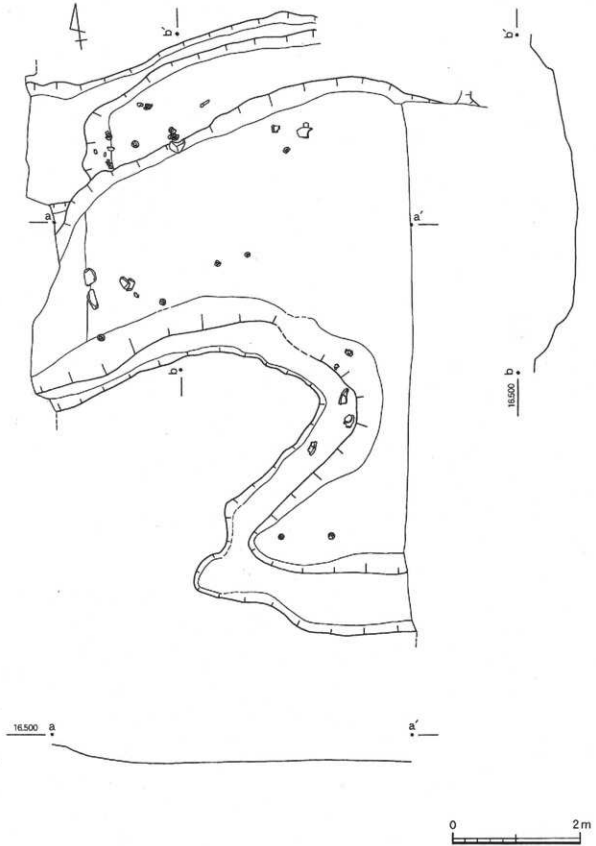
115・116は右巻き三巴文軒丸瓦で、117~120は左巻き三巴文軒丸瓦である。121は鳥倉瓦である。122~125は丸瓦である。126・128・130・131は軒平瓦である。瓦当部の文様は、宝珠唐草文(126・128)、半截菊花文(130・131)があった。宝珠唐草文の瓦には、凹面部側縁に縦棧が付き、凸面中央部分に横棧が付く。132は連珠文で、134は菊花均整唐草文の總羽瓦である。127・129は二の平瓦で、平瓦前方部側縁を一部切り込んでいる。また129の瓦の凸面部にはヘラで人物の顔が描かれていた。この瓦は、宝珠唐草文のように縦棧が付く瓦と組み合わせ使用されたと考えられる。133は平瓦である。135は切り隅瓦である。この瓦は3個体分出土した。軒平瓦の平瓦部を三角形に半裁したものを2つ合わせて、平瓦凹面側縁に「水返し」がつく。136・137は雁振り瓦である。138は面戸瓦である。139は宝珠瓦連弁部の基底部と考えられる。140は「阿」の鰭瓦である。

## 土層(3)

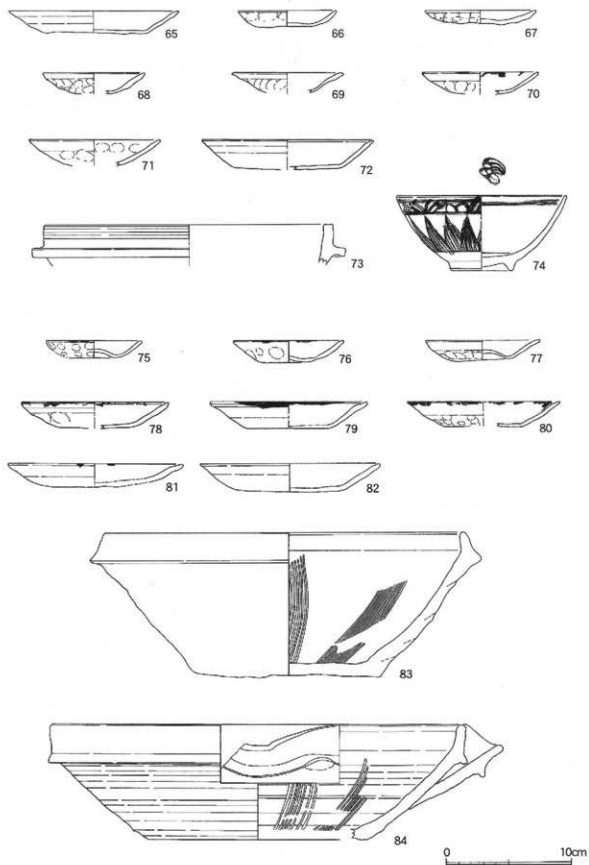
- 10YR4/3にいい黄褐色土層 (磁砂・1m次の礫含む)
- 10YR4/2灰黄褐色粘質土層 (1~5m次の礫・鉄分少し含む)
- 25Y4/2暗灰黄色粘質土層 (鉄分多量・0.5~3m次の礫・砂粘含む)
- 25Y3/2暗オリーブ褐色粘質土層 (粘土・灰・0.5~5m次の礫含む)
- 25Y3/1黒褐色粘質土層 (粘土・灰・1~3m次の礫含む)
- 10YR3/2暗褐色粘質土層 (粘土・鉄少し含む)
- 25Y4/2暗灰黄色粘質土層 (粘土・灰・0.2m次の磁砂含む)
- 10YR4/2暗灰黄色粘質土層 (粘土・灰化した木片多量含む)
- 5Y4/1灰色粘質土層
- 10YR4/4褐色土層 (粘土・灰若干・鉄分多量・1m次の礫少し含む)
- 5Y3/1オリーブ灰色粘土層
- 25Y4/1黄灰色粘土層
- 25Y4/2暗灰黄色粘土層

## 土層(4)

- 10YR4/2灰黄褐色土層
- 10YR5/6黄褐色粘土層 (鉄分若干含む)
- 10YR4/4褐色土層 (砂粘含む)
- 25Y3/1黒褐色粘土層 (瓦多量含む)

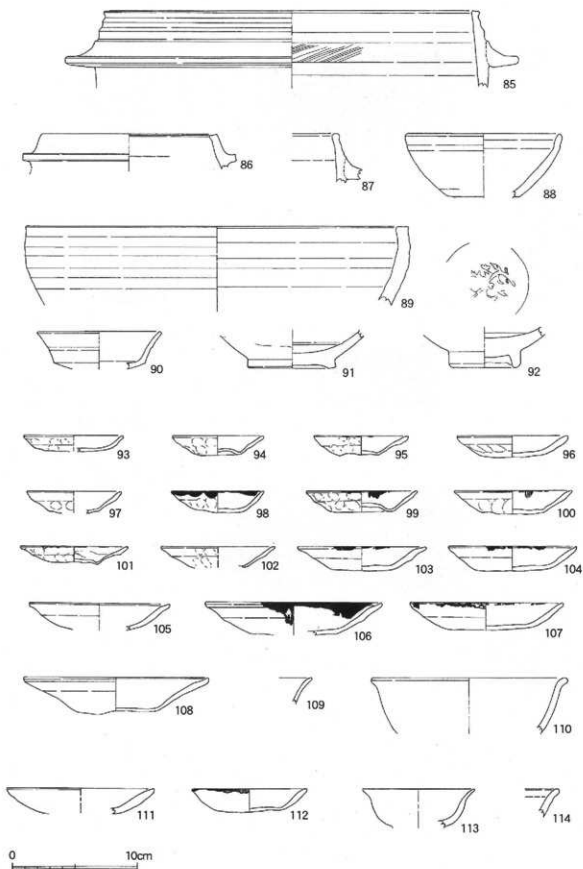


第129図 北区池状遺構(下層)平面・断面図

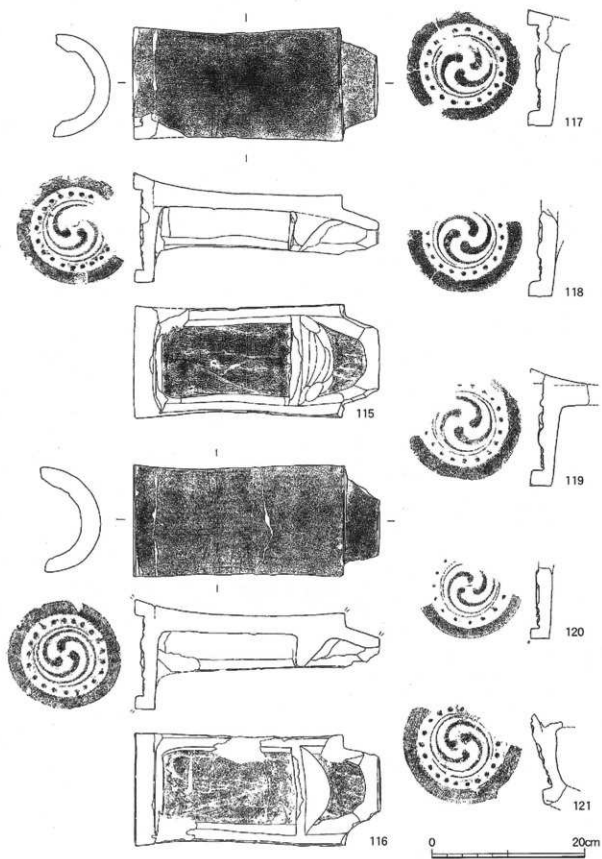


第130图 北区池状遺構出土遺物(1)

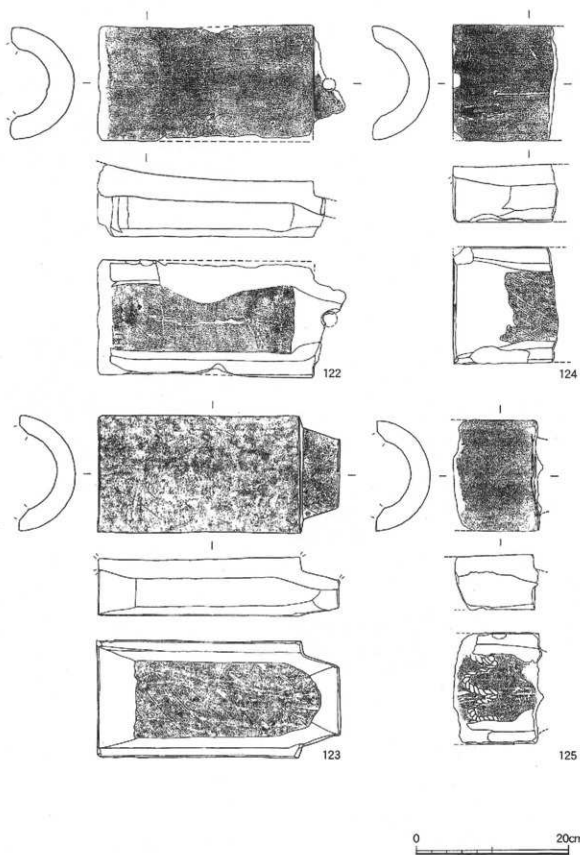




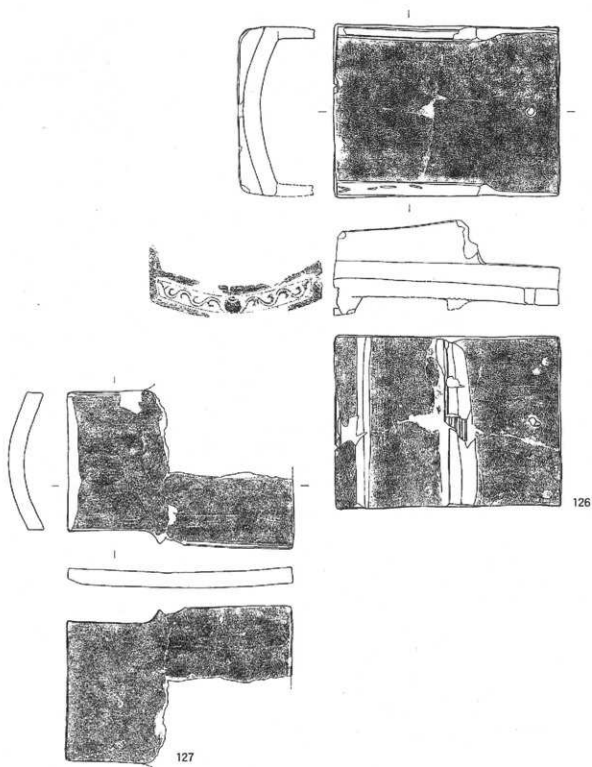
第131圖 北区池状遺構出土遺物(2)



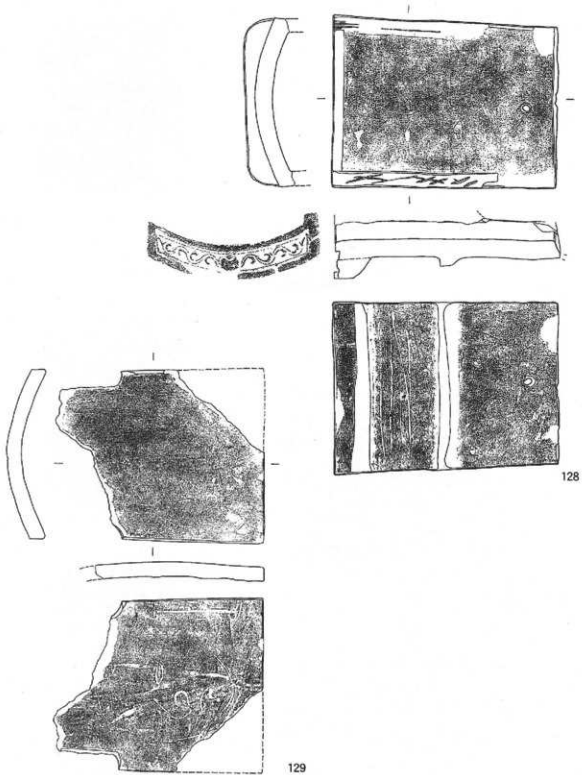
第132图 北区池状遺構出土遺物(3)



第133図 北区池状遺構出土遺物(4)

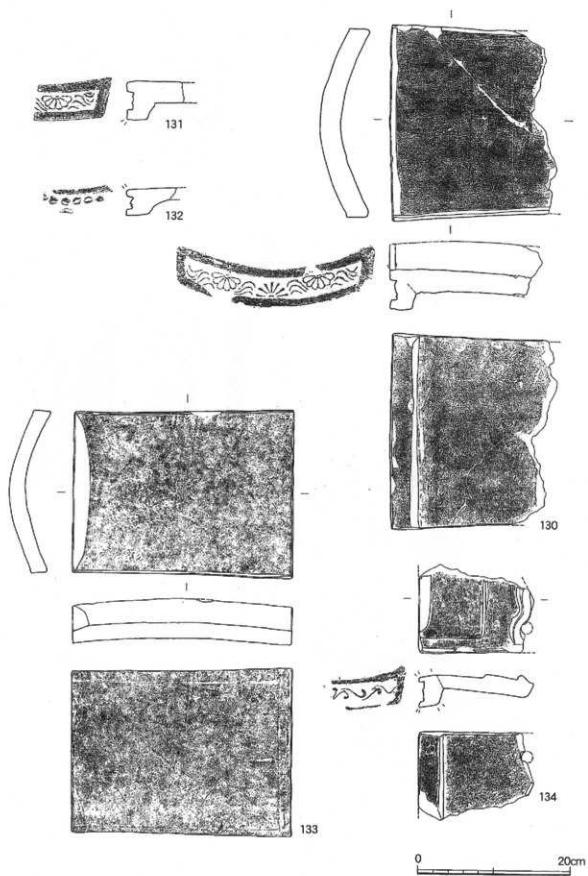


第134图 北区池状遺構出土遺物(5)

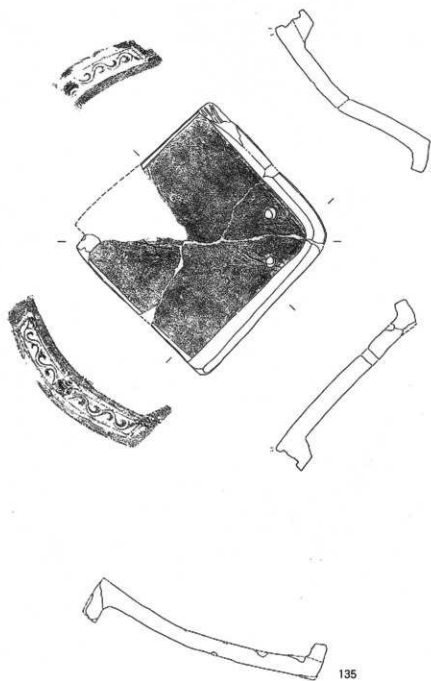


0 20cm

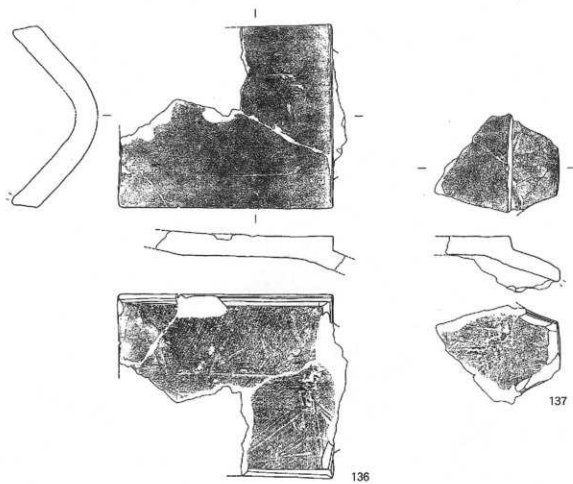
第135図 北区池状遺構出土遺物(6)



第136图 北区池状遺構出土遺物(7)

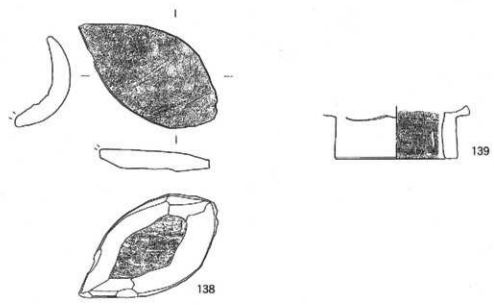


第137図 北区池状遺構出土遺物(8)



137

136



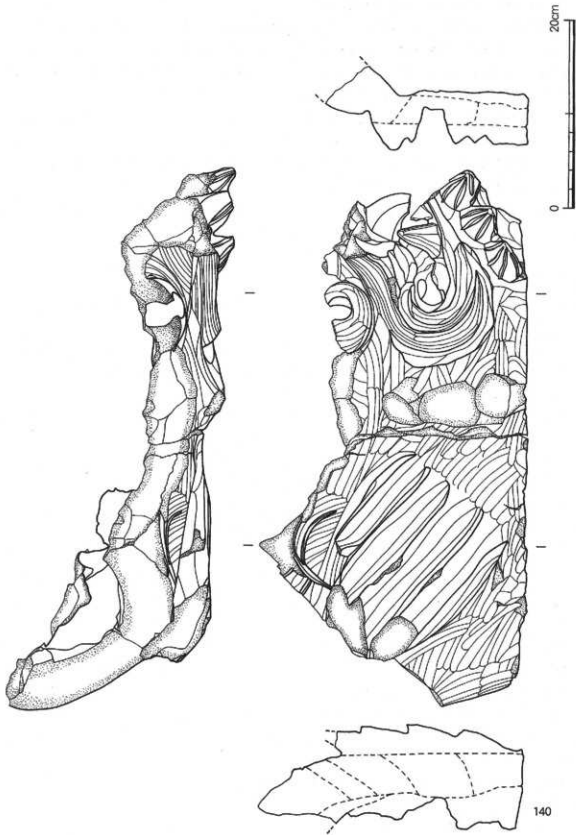
139

138



第138图 北区池状遺構出土遺物(9)





第139図 北区池状遺構出土遺物 (10)

93・94は砂層から出土した土師質土器皿である。

95～108は砂層及び粘土層から出土した土師質土器皿である。いずれも粘土層上面で出土した。ここで出土した土師質土器皿は約20～30枚あったが、それぞれが折り重なるように出土した。これらの土師皿は、口縁部に灯芯痕が付着しているものが多く、灯明皿として使用されていたことが窺える。109は中国製白磁角鉢で、110は中国製青磁碗である。

111～114は石垣をはずした後から出土したものである。111と112は土師質土器皿である。113は、中国製白磁輪花碗である。114は中国製青磁碗である。

以上、遺物を取り上げた層序ごとに説明を加えたが、これらの出土遺物の年代には幅があり、年代観は15世紀後半から16世紀後半と考えられる。

中世瓦は今回の調査だけでなく、203次瓦溜り(SK59・61・63)、217次A区SD103、217次C区SK208や、後述する231次南区SK31等でも出土している。これらの瓦は調査区内全体に広がって出土する。

## 土坑

調査区内で検出した土坑の中で特徴のあるものを取り上げた。

### SK70 (第127・140図 図版47)

調査区東壁付近で検出した大型の土坑で、庭園遺構に伴う植栽痕の可能性を考えたが、推定の域を出ない。平面形は円形を呈し、遺構の大きさは東西1.6m以上、南北1.8mで、東側は調査区外へ延びる。深さ27cmである。

出土遺物のうち、141・142は土師質土器皿、143は中国製青磁碗である。143は残りが悪く底部のみ出土した。図示できなかったが、中国製連弁文青磁碗などが出土しており、遺物の年代観は13～15世紀頃と考えられる。

### SK111 (第141図 図版47)

調査区中央付近で検出した。平面形は方形を呈し、遺構の大きさは長辺1.26m、短辺66cmである。埋土にはこぶし大の礫が多数埋まっていた。礎石の根石の可能性もあるが、これに並ぶ遺構は検出していない。

残りが悪く図示できなかったが、土師質土器皿が出土している。16世紀代のものと考えられる。

## 柱穴

調査区内から多数の柱穴を検出したが、建物跡を復元できるものはなかった。これらの柱穴の埋土には、炭や焼土を含むものが多い。

### 柱穴列 (第127図)

調査区北壁付近で検出した布掘りの柱穴列である。検出長4.0m、幅30～40cm、深さ5～10cmである。溝の中に直径約40cmの柱穴を4ヵ所確認した。柱穴の深さは20～40cmである。埋土には焼土や炭を含む。

図示できる遺物はなかったが、土師質土器皿、同銅、瓦などが出土した。

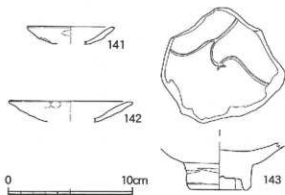
### SP133 (第127・141図)

調査区中央付近で検出した。平面形は円形を呈し、遺構の大きさは直径50cmで、深さ10cmである。

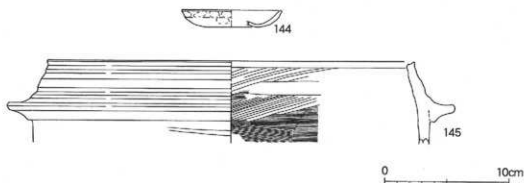
出土遺物は、144の土師質土器皿、145の土師質土器羽釜である。これらの遺物は、16世紀代のものと考えられる。

## 第3面 (第148図 図版49)

第3面では溝や土坑、柱穴を検出した。溝は203次や217次でも確認しており、そのほとんどが東西方向、あるいは南北方向の区画溝と考えられているが、231次北区では、それらの他に様相が異なる溝を検出している。溝の方向は何度も変化し、切りあい関係がある。調査中は検出した場所で細かく遺構名をつけたが、遺構名が違っていても同じ遺構と思われるものを以下に述べていく。なお、調査区東側の北半分は第2面の池状遺構の



第140図 北区SK70出土遺物



第141図 北区SP133出土遺物

調査があったため、第3面では調査を行わなかった。

## 溝

溝の方向を見ると、南北方向のSD24・25、東西方向のSD11・14、円弧を描いてその方向を変えるSD12・13・25・26等がある。調査区南東からは、埋土に埴輪片や須恵器を含む、古墳の周濠と考えられる溝(SD35)を検出した。

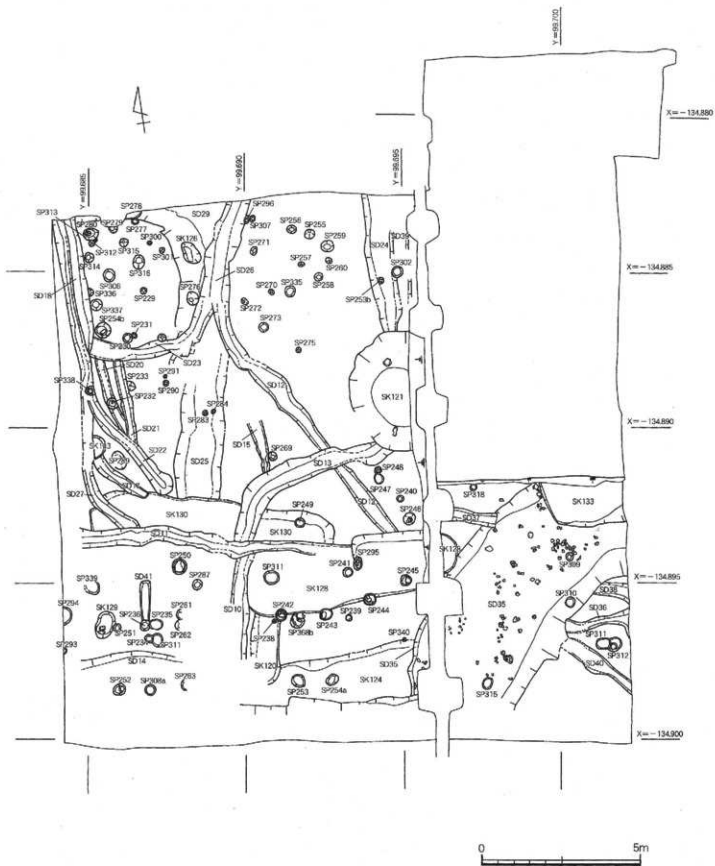
## SD10・13 (第142図 図版50)

調査区の南側で検出した溝で、東側に円を描く。両遺構は、規模に若干の違いが見られるが、同一遺構と考えられる。検出長8.2m、幅45~70cmで、深さは10~20cmである。

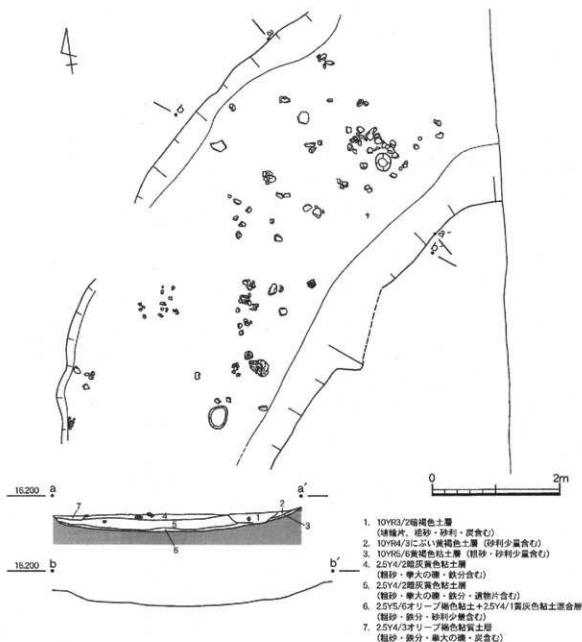
出土した遺物は、残りが悪く図示できなかったが、瓦器輪が含まれることから、12~13世紀代には廃絶したと思われる。

## SD18・22 (第142図 図版50)

調査区北西部で検出した溝で、北側から南東方向へ円を描く。北側は調査区外へ延びて行く。検出長9.6m、幅30~65mで、深さは15cmである。SD18周辺ではこの溝を主流としてSD17からSD27、SD22へ溝の造り替えが行われている。出土した遺物は残りが悪く図示できなかったが、瓦器輪が含まれることから、12~13世紀代には廃絶したと思われる。



第142图 北区第3面全体图



第143図 北区SD35平面・断面図

## SD24 (第142図 図版50)

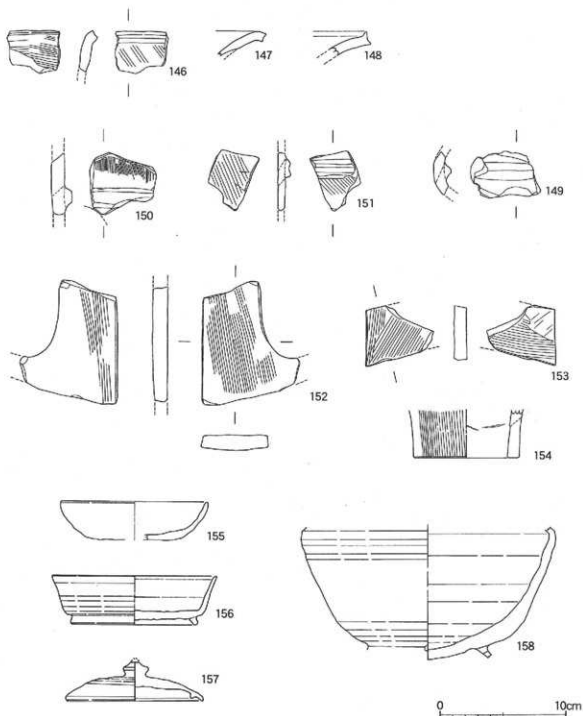
調査区北側で検出した南北方向の溝である。検出長4.6m、幅40～84cmで、深さは15cmである。北側は調査区外へ延びるため、溝の全長は不明である。

## SD25 (第142図 図版50)

調査区西側で検出した南北方向の溝である。検出長9.6m、幅1.3～1.5m、深さ34cmである。北側は調査区外へ延びるため、溝の全長は不明である。南側はSK130に切られるが、それよりも南には延びない。

## SD35 (第143・144図 図版49・69・70)

調査区内南東で検出した。217次A区SX302の北側に続く遺構である。丸い石や埴輪片、須恵器が出



第144図 北区SD35出土遺物

土したことにより、周濠と考えられる。平面形は円形と推定した。遺構の大きさは、外周が径13.5m、内周が径9.5m、幅1.6～2m、深さは40cmである。埋土は灰色系や褐色系の土層である。

出土遺物のうち、146は円筒埴輪の口縁部で、147～149は朝顔形円筒埴輪の口縁部である。150と151は円筒埴輪の体部片である。152と153は衣蓋形埴輪の羽根飾りの一部と考えられる。155から158は須恵器で、155・156は杯身、157は杯蓋、158は長頸壺の体部である。

## 土坑

## SK121 (第142・145図)

調査区中央付近で検出した。遺構の大きさは東西1m以上、南北3.8m、深さ47cmである。

出土遺物のうち、159は瓦器椀で、外面に若干ミガキを残している。160は東播系須恵器片口鉢で、口縁の一部のみ出土した。12世紀後半から13世紀前半のものと考えられる。

## SK133 (第142・145図)

調査区東駅付近で検出した。遺構の大きさは、東西3m以上、南北1.5m以上で、深さ48cmである。遺構の北側部分は地山面での調査を行っておらず、また東側は調査区外へ延びるため、規模は不明である。

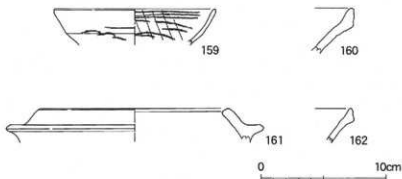
161は瓦質土器三足釜であるが、口縁の一部のみ出土した。162は東播系須恵器片口鉢の口縁部である。

## 柱穴

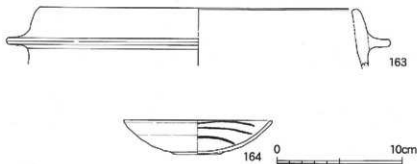
## SP253 (第142・146図)

調査区南側で検出した。平面形は円形を呈し、遺構の大きさは直径約40cm、深さは18cmである。

遺物は土師質土器羽釜(163)が出土している。



第145図 北区SK121・133出土遺物



第146図 北区SP253・279出土遺物

## SP279 (第142・146図)

調査区北壁周辺で検出した。平面形はほぼ円形である。遺構の大きさは東西30cm、南北10cm以上で、北側は調査区外へ延びるため不明である。

出土した遺物は、瓦器碗(164)である。外面にミガキが施されておらず、13世紀前半頃のものと考えられる。

## (2) 南区

### 第1面(第148図 図版51・52)

第1面では、18世紀代から20世紀代にかけての酒蔵の建物跡と、それに付属する男柱、土坑などを検出した。調査区内は「明治19年絵図」によると、ほとんどが酒蔵建物部分にあたる。礎石建物4の石列や礎石、さらに建物内に作られた酒造工程に関わる槽場遺構の男柱1を検出した。

#### 礎石建物

##### 礎石建物4(第149図 図版51・52)

調査区内北西部分で検出した。この建物は北区で検出した礎石建物5・6と一連のものである。石列1は231次北区石列1と217次A区石列2の南側に続く同じ遺構である。総検出長は44.5mである。この石列は昭和2年の絵図(第186図⑥)東端の南北ラインに相当し、礎石建物4・5・6が共通して使用していたことがわかった。昭和36年の航空写真によると礎石建物4・5は別棟であるが、今回の調査ではそれを明確に分ける柱通りは検出されなかった。

礎石建物4は203次及び217次A区で先に調査を行っていた。これらの調査成果と今回の調査成果を合わせると、柱通りは南北方向に3列検出した。東西方向は幅約5mで並んでいるが、南北方向は一定ではない。西列は北から203次礎石17・16・13・2・9で、これらが建物の西端となる。中央列は北から203次礎石36・6・5・4・3、231次南区礎石3である。東列は北から217次A区礎石1・2・3・4・5、231次南区礎石1である。南端は231次南区礎石1・3の南側に石列3を検出しており、これが相当する。

これらから建物の規模は東西14m(7間1分)、礎石建物5の北端から礎石建物4の南端までの南北の長さは32m(16間3分)である。

石列1の西側から検出した石列2は、231次北区石列2と217次A区石列1の南側に続く遺構である。検出状況から石列1よりも前段階のもので、その東側は石列1と同様に石列2の東方を利用した漆喰の溝を検出した。総検出長は31.5mである。231次北区石列2と217次A区石列1、石列2も礎石建物4・5を分ける明確な遺構が検出されなかったことから、東方ラインは共有していたと考える。

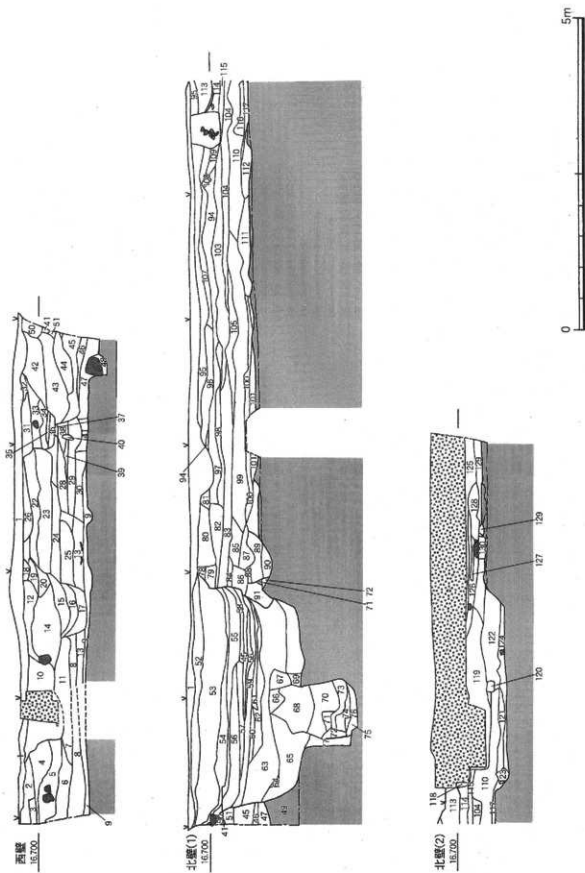
#### 槽場

圧搾により清酒と粕に分離する作業を行う場所である。槽場の遺構としては男柱を1基検出した。礎石建物4に付属する遺構である。

##### 男柱1(第150～153図)

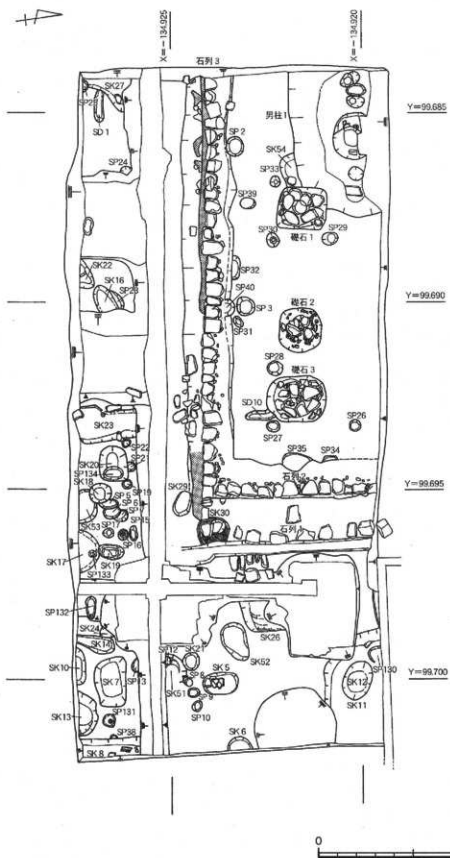
調査区の北西隅から検出した。男柱や男柱の浮き上がりを防ぐための貫(横木)等は抜き取られ残っていない。平面形は楕円形を呈し、遺構の大きさは、東西38m以上、南北26m以上である。男柱1の北側と西側部分は調査区外へ延びる。遺構の深さは1.4m、男柱を埋めこんだ中心部はさらに78cm掘りこまれていた。中心部分にはこぶし大の石や長方形の石が方形に並べられていた。男柱の周囲に埋め



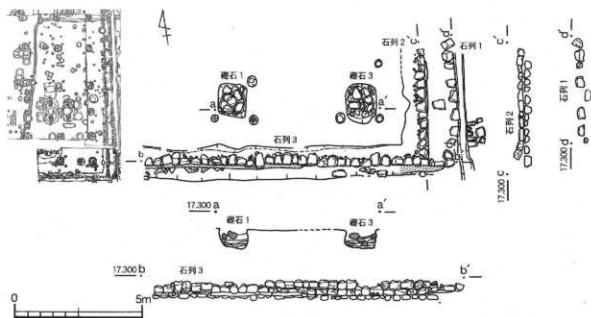


第147図 南区土層断面図





第148図 南区第1面全体図



第149図 南区礎石建物4 平面・断面図

られた石と推定される。この男柱に伴う垂壺は調査区内では確認できず、酒槽の位置からおそらく男柱の北側にあると思われる。203次SP76がそれにあたる可能性がある。

埋土は瓦が多量に埋められた層と粘質土層が交互に堆積しており、層序にしたがって遺物を取り上げてみたが時期差はあまりなく、一度に埋め戻されたと考えられる。また、土層断面には男柱を抜き取った際の痕跡かと思われる木皮が見られた（第150図22層と24層の間）。

出土遺物のうち、165～169は土師質土器皿である。すべて灯芯痕をもつことから、灯明皿として使用されていたことが窺える。170～178は土師質土器焙烙である。179は丹波焼片口鉢である。180は丹波焼鉢で、口縁部が輪花状を呈する。181は信楽焼壺である。182は丹波焼甕である。183～190は肥前磁器である。183はくらわんか手の染付碗、184は染付朝顔形碗、185は染付筒形碗、186は染付皿、187は口径16 cmの染付大碗である。190は青磁香炉で、蛇の目高台を呈する。191・192は軒丸瓦である。193～198は軒平瓦である。これらの出土遺物の特徴は19世紀初頭と考えられる。

#### 土坑

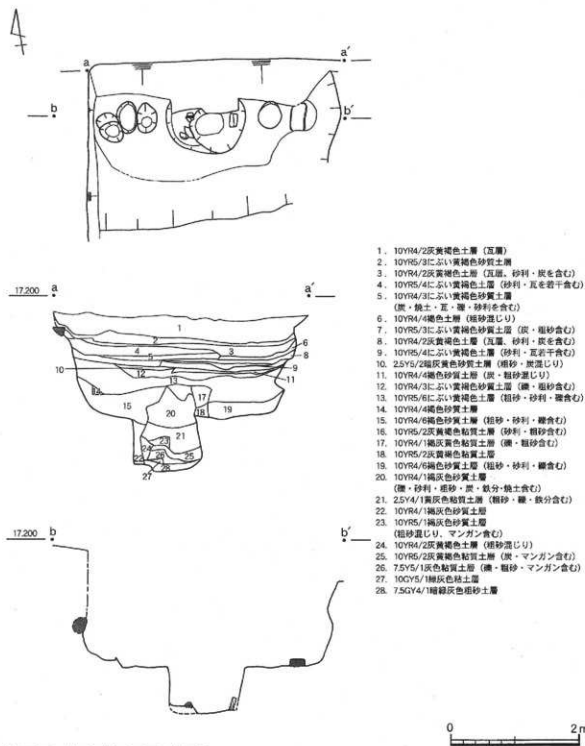
##### SK 7 (第148・155図 図版71・72)

調査区の南東より検出した。平面形は長方形を呈し、遺構の大きさは長辺1.28m、短辺66cm、深さ66cmである。

出土遺物のうち、204・205は土師質土器皿、206は軟質施軸陶器の受皿、207はくらわんか手の肥前磁器染付碗、208は肥前磁器筒形碗、209は内面に斜格子文を施す肥前磁器染付皿、210は肥前磁器染付碗蓋、211はハの字状高台の肥前青磁染付碗蓋、212は肥前磁器染付広東碗蓋である。これらの遺物の年代観は18世紀末から19世紀初頭と考えられる。

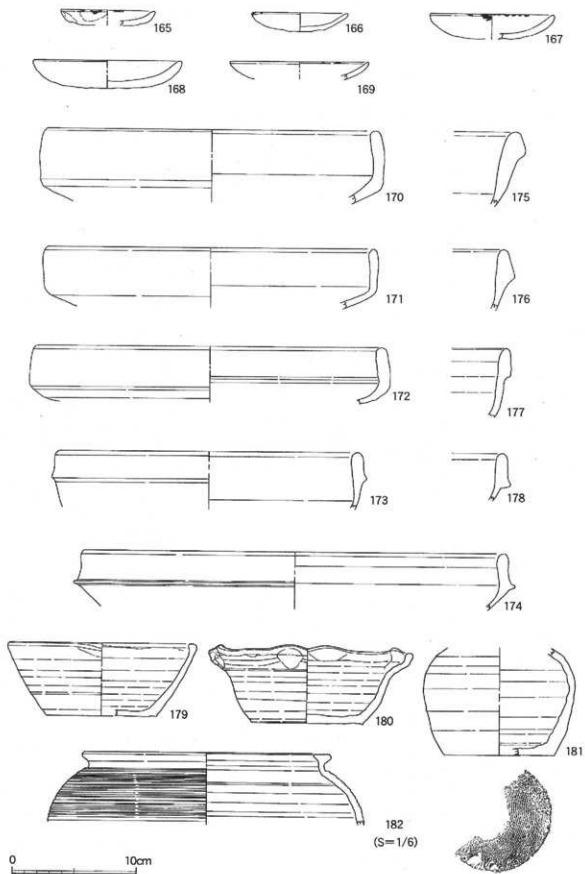
##### SK18 (第148・156図)

調査区の中央南側より検出した。平面形は楕円形を呈し、遺構の大きさは長辺60cm、短辺52cm、深さは31cmである。

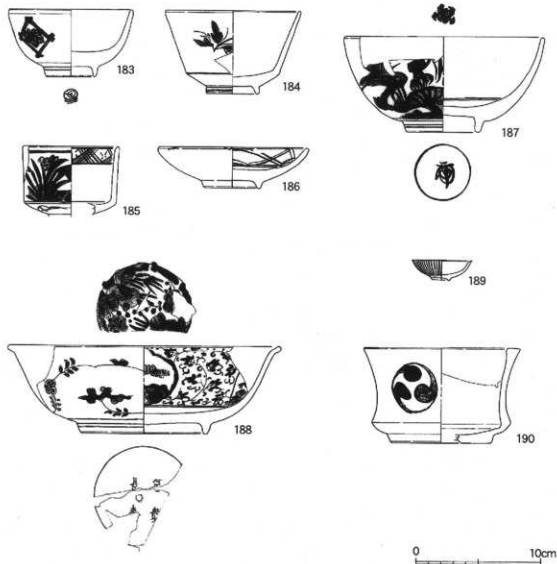


第150図 南区男柱1平面・断面図

出土物のうち、213は京焼系陶器蓋物、214と215は口縁部が輪花状の京焼系磁器染付皿である。216は肥前磁器染付八角鉢である。これら出土物の年代観は19世紀前半と考えられる。



第151图 南区男柱1出土遗物(1)

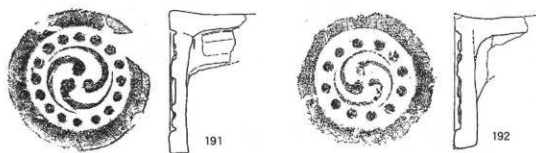


第152図 南区男柱1出土遺物(2)

SK30 (第148・154図 図版71)

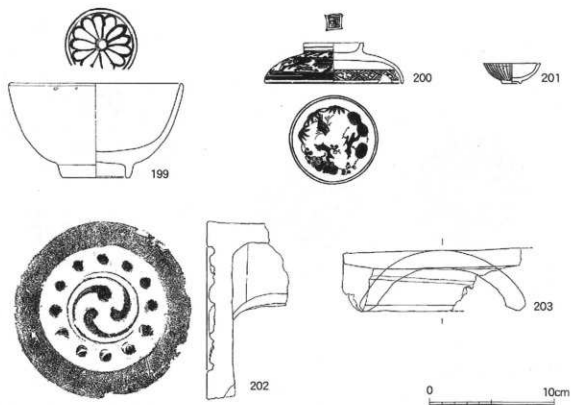
調査区の中央より東側で検出した埋桶遺構である。底部から桶の側板下部と底板を検出した。桶は円形を呈し、直径は60cm、深さ45cmである。桶の掘り方は若干楕円形を呈し、大きさは長辺86cm、短辺82cmである。

出土遺物のうち、199は肥前青磁染付碗で見込みに菊花文を施す。200は肥前磁器染付碗蓋でハの字状高台碗の蓋と思われる。201は肥前白磁紅皿である。202は軒丸瓦、203は丸瓦である。これらの出土遺物の年代観は18世紀後半と考えられる。

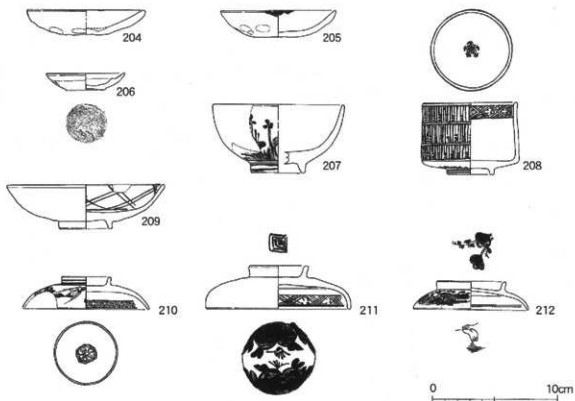


第153图 南区男柱1出土遗物(3)

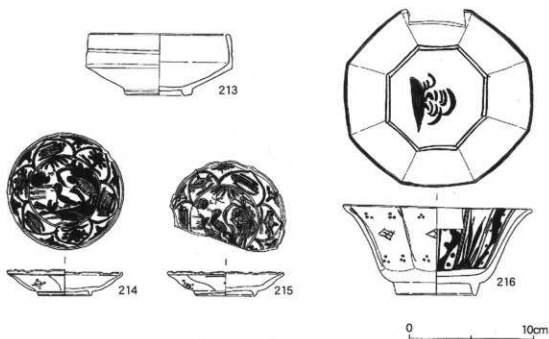




第154図 南区SK30出土遺物



第155図 南区SK7出土遺物



第156図 南区SK18出土遺物

## 第2面 (第157図 図版53)

第2面直上には焼土層が堆積していた。ここでは土坑や柱穴を検出したが、多くの遺構の埋土には焼土や炭が含まれていた。

### 瓦溜り

#### SK31 (第157・158図 図版53)

調査区の西側より検出した。平面形は方形を呈し、南東部分は隅丸に変形している。遺構の大きさは、長辺(東西)4.02m、短辺(南北)2.66m以上で、深さは23cmである。南側は近代の建物基礎に切られており、正確な大きさは不明である。

出土遺物のうち、217～219は土師質土器皿である。220は備前焼縮鉢である。口縁部縁帯に若干凹線が入る(乗岡編年中世5期)。221は唐草文軒平瓦である。これと同範の瓦は富士山麓調査区からは出土していない。残りが悪くて図示できなかったが、この他に、203の瓦溜り(SK59・61・63等)、217次A区SD103、同C区SK208と同範の瓦が出土している。これらの出土遺物の年代観は16世紀中頃から後半と考えられる。

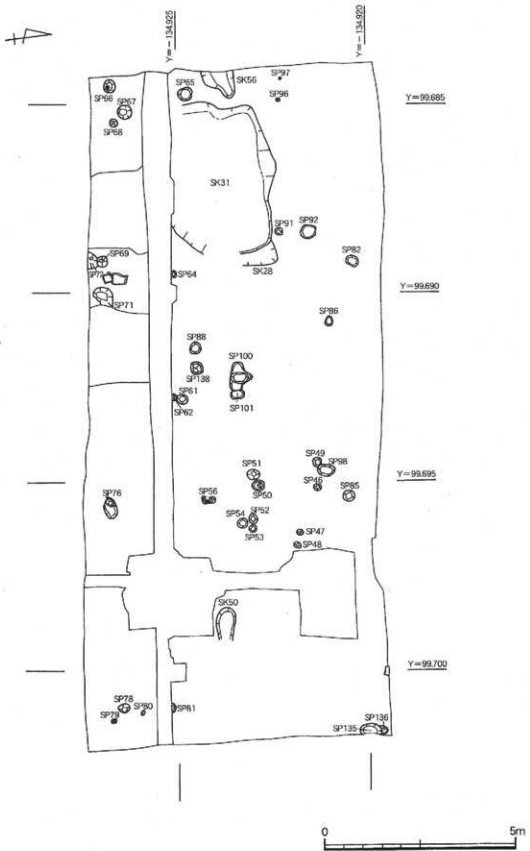
## 第3面 (第159図 図版54)

第3面は地山面である。調査区内で地山は西へ傾斜していく。ここでは、12世紀後半から13世紀初頭の溝や土坑、柱穴などを検出した。

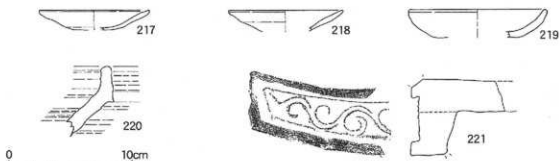
### 溝

南北方向の溝を2条検出した。溝は平行しており区画溝と考えられる。203次第2面SD16・22の方向よりも若干東へ軸がふれており、203次第3面で検出したSD30・38・39・41・42・50と方向が同じである。

#### SD3 (第159図 図版54)



第157図 南区第2面全体図



第158図 南区SK31出土遺物

調査区の西側で南北方向に検出した。検出長3.5m以上、幅50cm、深さは8cmである。この溝は、主軸方向が東に7度振れる。

残りが悪くて図示できなかったが、土師器壺や瓦器椀が出土した。これら出土遺物は12世紀から13世紀と考えられる。

#### SD 4 (第159・160図 図版54・72)

調査区の西側で南北方向に検出した。検出長7.7m以上、幅66～76cm、深さは28cmである。溝の主軸方向が東に7度振れる。また、平面図上ではこの遺構の延長上に203次調査SD39・42が検出されており、同じ遺構と考えられる。これらの調査成果を合わせると、溝の検出長は約26mである。

出土遺物のうち、222～224は土師質土器皿である。225は須恵器杯身である。226～232は瓦器椀である(尾上編年Ⅱ-3期～Ⅲ-2期)。232は他のものより若干器高が低くなり、外面にミガキが施されていない。233は東播系須恵器片口鉢である。234は陶器褐釉四耳壺である。これは中国製の可能性も考えられる。235は中国製白磁碗である。これらの出土遺物の年代観は12世紀後半から13世紀前半と考えられる。

### 土坑

#### SK35 (第159・161図)

調査区の東側で検出した。平面形は長楕円形を呈し、遺構の大きさは長辺2.5m、短辺68cm、深さ16cmである。

236の瓦器椀は、12世紀末から13世紀初頭(尾上編年Ⅲ-1期)のものと考えられる。

#### SK36 (第141・161図)

調査区の東側、北壁周辺で検出した。遺構の大きさは、長辺(東西)4.3m以上、短辺(南北)2.5m以上、深さ12cmである。浅い落ち込みのようである。

237の瓦器椀は、見込みに平行ミガキが残る。12世紀末から13世紀初頭(尾上編年Ⅲ-1期)のものと考えられる。

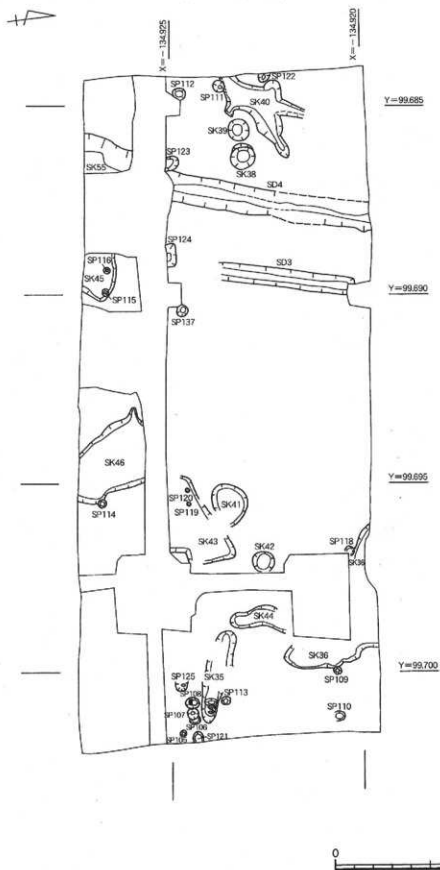
### 土層出土遺物

第3面直上に堆積する黄褐色系の土層から出土した遺物である。

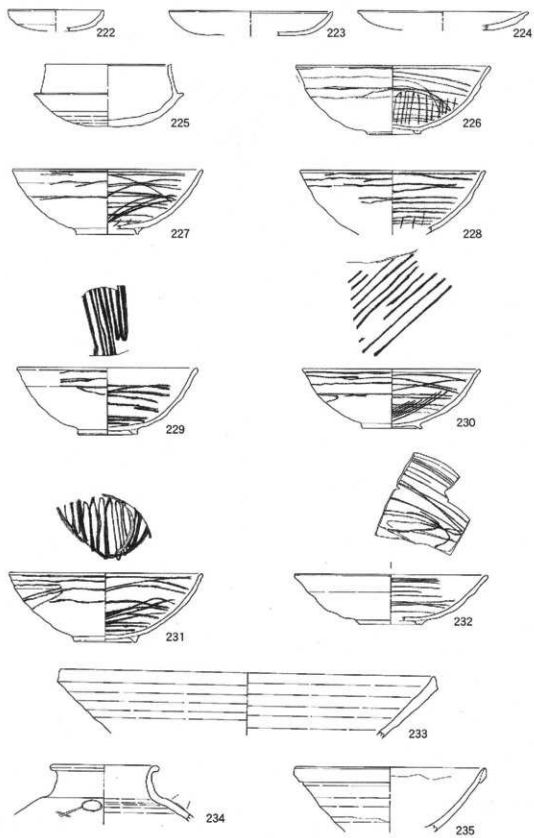
#### 西壁11層 (第147・161図)

238の瓦器椀が出土した。

#### 北壁100～102層 (第162図)

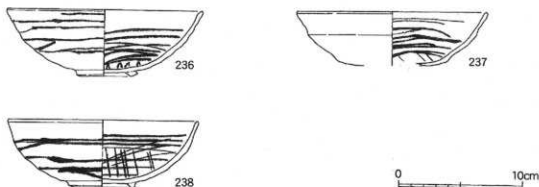


第159図 南区第3面全体図

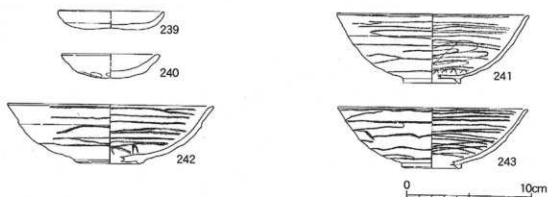


0 10cm

第160图 南区SD4 出土遗物



第161図 南区SK35・36、西壁第11層出土遺物



第162図 南区北壁100～102層出土遺物

北壁100～102層（包含層）では瓦器碗が出土した。239と240は土師質土器皿である。241から243は瓦器碗である。242は高台が若干退化し、外面にミガキが残る。

## 小結

203次調査及び217次調査成果に加え、231次調査の調査によって、調査区内の遺跡の様相をより詳しく知ることができ、大きな成果が得られた。北区と南区を合わせて、面ごとにまとめていく。

第1面では18世紀から20世紀にかけての酒蔵建物とそれに関係する酒造遺構を検出した。北区と南区で酒蔵の礎石建物4・5・6を検出した。同じ敷地内を3回に分けた調査のため、他の調査時では不明なところがあったが、今回の調査によって礎石建物4・5・6の東端と礎石建物4の南端を確認し、建物の規模が明らかになった。また、これらの建物は昭和2年の図面と一致し、さらにこれら3棟の建物の東端は少なくとも2回造り替えられていることがわかった。

昭和36年の航空写真によると、3つの建物はそれぞれ棟が違う。礎石建物5と6の棟痕は調査でも確認されたが、礎石建物4と5を明確に分ける柱通りは検出されなかった。今回の調査では確認できなかったが、昭和2年から昭和36年の間に建て替えられた可能性が考えられる。

本調査では、酒造遺構は槽場を調査区内で4ヵ所検出した。北区槽1・2、男柱1と南区男柱1がそれにあたる。これらから出土した遺物の年代観から富士山蔵酒蔵の搾り場の変遷が明らかとなった。まず、231次北区男柱1と南区男柱1が19世紀初頭まで使用され、この後に「明治19年絵図」に描かれた203次男柱2・3へと移行したと考える。その後明治19年から39年の間に217次男柱1・2へと

造り替えられ、さらに231次北区槽1（217次B区槽6）、231次北区槽2（217次B区槽7）と造り替えられることがわかった。

第2面は、主に15世紀後半から16世紀前半の遺構や遺物を多く検出した。これらの遺構には焼土や炭が含まれたものが多かった。その中で池状遺構は、庭園遺構の池泉と思われる。この遺構の埋土からは大量の瓦が出土した。従来は、有岡城跡・伊丹郷町遺跡内において伊丹城期の遺構や遺物は検出例が少かったが、富士山麓敷地内における203次、217次の調査と今回の231次調査の結果とを合わせて、伊丹城期の遺構・遺物の新しい資料が加わった。

池状遺構では、庭園に伴う池泉の要素である護岸施設や、景石、州浜などは確認できなかった。遺構底部には粘土を張って水を滞水させたと考えられるが、遺構底部はほぼ平らで、導水や排水に関わる施設も確認できなかった。また、残存状態は悪く朽ちかけていたが、瓦に混じって直径7～8cmの木桶が出土し、池周辺にあった導水・排水施設の一部とも考えられるが、推定の域を出ない。遺構の西側の石垣周辺には石垣から崩れた石が落ち込んでいたが、遺構埋土中にはこれ以外に石は検出されなかった。

15・16世紀代とされる中世武家館の庭園跡は、一乗谷朝倉氏館跡や江馬氏下館跡、大内氏館跡などいくつか知られているが、これらと比較すると、今回検出した遺構は規模も造りも小さいものである。これら武家館以外に寺院跡庭園遺構との比較検討も必要と思われるが、今後の課題としておきたい。

遺構の埋土から出土した大量の瓦は、近くに瓦葺の建物の存在を窺わせるものであるが、調査区内からは礎石建物は検出できなかった。また、瓦を詳細に分類することによって、それらの違いからも瓦葺建物が数棟建てられていたことがわかった（軒瓦の分類については第4章第2節参照）。軒丸瓦では203次や217次で出土していた左巻き三巴文（D類）は1点しか出土しなかった。ここで多数を占めたのは右巻き三巴文（A類）である。また、宝珠唐草文軒平瓦でも203次や217次で出土した瓦と池状遺構から出土した瓦では瓦の大きさや調整が違い、これらのことは瓦が葺かれていた場所、つまり棟が違う建物が建てられていたと推定した。この他にも鯉瓦や棟鬼瓦、<sup>つらば</sup>鯉羽瓦と切り隅瓦の出土により、少なくとも1棟は入母屋造りの建物が存在し、これとは別にもう1棟、建物が建てられていたことが想定できる。

この他に第2面では中世瓦が出土した南区SK31がある。217次A区SD103でも出土している左巻三巴文軒丸瓦（D類）・宝珠唐草文軒平瓦（A II類）と同種類のものが出土している。掲載した唐草文（A I類、第158図221）はここで出土した1点のみであった。これら同種の瓦の出土箇所は富士山麓敷地全域に及ぶ。

第3面では、主に12世紀後半から13世紀前半の遺構・遺物と、5世紀代の古墳の周濠の可能性をもつSD35を検出した。溝は南北方向、あるいは東西方向の地割り溝以外に、円を描いて方向を変える溝が多数検出された。溝の埋土からは遺物は破片程度しか出土していないが、土師質土器や瓦器輪が含まれていた。北区SD35は、217次A区SX302と同じ遺構と思われる、217次での調査では平面形が不整形であったが、231次の調査により平面形は円形と推定した。これら溝内の埋土から円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、形象埴輪や須恵器が出土した。埴輪の出土によりこの溝は古墳の周濠である可能性をもつ。遺構は東側の調査区外へ延びるため、全容を明らかにできなかった。

以上、231次の調査によって礎石建物4・5・6の規模が明らかになり、また新たに槽場遺構の検出により、酒蔵内の槽場の変遷を考える上での資料が加わった。さらに池状遺構の検出と大量の瓦の出土により、伊丹城時代の新たな資料を得ることができた。

（岡野理奈）



地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考	
北	男住1	第118回-1 図録55-4	軟質施釉 陶器	皿	口 径 6.5 cm 器 高 1.5 cm 底 径 2.9 cm	ロク口成形 底部糸切り痕(右回転) 透明釉 外面 体部から底面露胎	100% 口縁部欠損有り	
		第118回-2	軟質施釉 陶器	突皿	口 径 (8.0) cm 器 高 1.5 cm	ロク口成形 底部糸切り痕 透明釉 外面体部から 底面露胎	30% 口縁部欠損有り	
		第118回-3	土師質 土器	炆炆			内面体部から外面口縁部ヨコナデ	1% 外面煤付着
		第118回-4 図録55-4	磁器	碗	口 径 (11.4) cm 器 高 5.6 cm 高台径 4.5 cm	染付 内面口縁部輪宝文 見込み手描き五弁花と二 重線線 外面輪宝文 高台豊付露胎	肥前 40%	
		第118回-5 図録55-5	磁器	端反碗	口 径 12.3 cm 器 高 6.4 cm 高台径 5.0 cm	見込み蛇ノ目輪割ぎ アルミナ塗布 染付 見込み コンニャク印判五弁花 外面コンニャク印判雲文と 手描きの折れ松葉文 高台豊付露胎 離れ砂付着	肥前 90%	
		第118回-6	磁器	端反碗	口 径 (13.3) cm 器 高 5.6 cm 高台径 5.0 cm	見込み蛇ノ目輪割ぎ アルミナ塗布 染付 見込み コンニャク印判五弁花 外面折れ松葉文 高台豊付 露胎 離れ砂付着	肥前 30%	
		第118回-7 図録55-7	磁器	碗	口 径 (9.5) cm 器 高 5.0 cm 高台径 3.2 cm	染付 内面口縁部四方槽文 見込み足生文と二重 線 外面体部花鳥文 高台豊付露胎	肥前 50%	
		第118回-8	磁器	皿	口 径 13.1 cm 器 高 3.9 cm 高台径 4.4 cm	見込み蛇ノ目輪割ぎ アルミナ塗布 染付 内面斜 格子文 高台豊付露胎 離れ砂付着	肥前 80%	
		第118回-9 図録55-9	磁器	皿	口 径 (15.5) cm 器 高 2.5 cm 高台径 9.4 cm	染付 内面体部露胎に山水文と四方槽文 見込み環 状松竹梅文 高台内ハリ支え痕有り 豊付露胎	肥前 70%	
		第118回-10 図録55-10	磁器	碗蓋	口 径 (10.4) cm 器 高 2.6 cm つまみ径 4.6 cm	染付 内面口縁部四方槽文 見込み手描き五弁花と 二重線線 外面花文 つまみ境部露胎	肥前 60%	
		第118回-11	陶器	摺鉢	口 径 (40.9) cm 器 高 (16.3) cm 底 径 (18.5) cm	外面四転ヘラケズリ クシ目7本一単位 底部高台 星	堺・明石 30%	
		第119回-12 図録55-12	瓦	軒丸	直 径 16.5 cm 瓦 当 厚 2.0 cm 側 面 厚 2.1 cm	左巻き三巴文 珠文数15個	30%	
		第119回-13 図録55-13	瓦	軒丸	直 径 16.1 cm 瓦 当 厚 2.2 cm 側 面 厚 2.0 cm	左巻き三巴文 珠文数15個	20%	
		第119回-14 図録55-14	瓦	軒丸	直 径 14.1 cm 瓦 当 厚 2.5 cm 側 面 厚 2.2 cm	左巻き三巴文 珠文無し	30%	
		第119回-15 図録56-15	瓦	軒丸	直 径 15.2 cm 側 面 厚 1.7 cm	左巻き三巴文 珠文数15個	20%	
		第119回-16 図録56-16	瓦	軒丸	直 径 13.8 cm 瓦 当 厚 1.8 cm 側 面 厚 1.7 cm	左巻き三巴文	20%	
		第119回-17 図録56-17	瓦	軒丸	直 径 15.0 cm 瓦 当 厚 2.1 cm 側 面 厚 2.0 cm	左巻き三巴文 珠文数15個	20%	
		第119回-18 図録56-18	瓦	軒丸	直 径 16.0 cm 瓦 当 厚 2.1 cm 側 面 厚 2.2 cm	左巻き三巴文 珠文数15個	70%	
		第119回-19	瓦	軒平	瓦 当 高 頸 部 幅 3.7 cm 1.2 cm	縁部草文	10%	
		第119回-20	瓦	軒平	瓦 当 高 (3.5) cm 頸 部 幅 1.3 cm	縁部草文	5%	

第21表 第231次調査遺物観察表(1)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考
北	井戸1	第120回-21 図56-21	磁器	碗	口 径 (10.4) cm 器 高 5.4 cm 高 台 径 4.3 cm	染付 外面雷輪草花文 高台内文様有り 高台豊付露胎	底地・残存率・その他 肥前 60%
		第120回-22 図56-22			口 径 9.2 cm 器 高 2.7 cm つまみ径 3.6 cm	染付 見込みコンニャク印半文と圓線有り 外面草花文 つまみ端部露胎 離れ砂付着	
		第120回-23 図56-23	銅	煙管	吸 口 径 0.4 cm 長 さ 5.8 cm 接合部径 1.0 cm	吸口 製造	100%
	SX1	第121回-24	土師質土器	焙烙	口 径 (26.6) cm	外面直部離れ砂付着 内面直部ナデ 内外面体部ヨコナデ	20% 内面底部焦げ付着 外面直部煤付着
		第121回-25	磁器	碗	口 径 (9.6) cm 器 高 5.2 cm 高 台 径 (4.1) cm	染付 外面草花文 高台内圓線有り 高台豊付露胎	肥前 40%
	SK8	第122回-26	土師質土器	皿	口 径 (8.2) cm	手捏ね成形 内面ナデ 内面口縁部ヨコナデ 外面ナデ	30% 口縁部灯芯灰有り 外面体部煤付着
		第122回-27	土師質土器	皿	口 径 (10.2) cm 器 高 1.7 cm	手捏ね成形 内面直部ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外面ナデ	40% 口縁部灯芯灰有り
		第122回-28	土師質土器	皿	口 径 (10.3) cm 器 高 1.8 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ	30%
		第122回-29	土師質土器	焙烙		内外面体部ヨコナデ	5% 内面底部焦げ付着 外面煤付着
		第122回-30 図56-30	陶器	碗	口 径 11.8 cm 器 高 5.3 cm 高 台 径 4.0 cm	見込み蛇ノ目輪割ぎ 内外面垂刺毛目文 高台豊付露胎 離れ砂付着	肥前 60%
		第122回-31	陶器	鍋	口 径 (16.4) cm	鉄輪	京焼系 20%
		第122回-32 図56-32	磁器	碗	口 径 9.4 cm 器 高 5.6 cm 高 台 径 4.0 cm	染付 外面松竹梅文 高台内「大明年製」銘と圓線有り 高台豊付露胎	肥前 70%
		第122回-33	磁器	碗	口 径 (9.6) cm 器 高 5.7 cm 高 台 径 3.9 cm	染付 外面草花文 高台内圓線有り 高台豊付露胎 離れ砂付着	肥前 30%
		第122回-34 図56-34	磁器	碗	口 径 (11.9) cm 器 高 5.8 cm 高 台 径 (4.7) cm	見込み蛇ノ目輪割ぎ 染付 外面折れ松葉文 高台内圓線有り 高台豊付露胎 離れ砂付着	肥前 20%
		SK16	第122回-35	磁器	碗	口 径 9.6 cm 器 高 5.4 cm 高 台 径 4.0 cm	染付 外面草花文 高台内圓線有り 高台豊付露胎 離れ砂付着
	第122回-36		磁器	皿	口 径 (13.6) cm 器 高 3.2 cm 高 台 径 8.2 cm	染付 内面コンニャク印半文と波文 外面連続草文 高台内圓線有り 高台豊付露胎	肥前 20%
	SK54	第123回-37 図56-37	土師質土器	皿	口 径 (8.0) cm 器 高 1.3 cm	手捏ね成形 内面ナデ	40% 口縁部灯芯灰有り
		第123回-38 図56-38	土師質土器	皿	口 径 10.3 cm 器 高 2.1 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内面口縁部ヨコナデ 外面ナデ	90% 内面口縁部煤付着
		第123回-39 図56-39	土師質土器	皿	口 径 10.4 cm 器 高 2.2 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内面口縁部ヨコナデ 外面ナデ	80% 口縁部灯芯灰有り
		第123回-40 図56-7-40	土師質土器	焙烙	口 径 30.8 cm	外面直部離れ砂付着 内面直部ナデ 内外面体部ヨコナデ	40% 外面煤付着

第22表 第231次調査遺物観察表(2)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他
北	SK54	第123回-41 図版57-41	陶器	碗	口 径 (9.5) cm	外面山水文 高台段露胎	肥前京焼陶 30%
		第123回-42 図版57-42	陶器	碗	口 径 (9.1) cm 器 高 5.7 cm 高 台 径 3.0 cm	色絵 外面赤・緑・青色輪の松文 内外面貫入 高台から高台段にかけて露胎	京焼系 70%
		第123回-43 図版57-43	陶器	皿	口 径 12.4 cm 器 高 3.5 cm 高 台 径 4.4 cm	見込み絵/目輪刺ぎ 外面下半部露胎	肥前 100%
		第123回-44 図版57-44	磁器	碗	口 径 10.5 cm 器 高 5.8 cm 高 台 径 4.0 cm	見込み絵/目輪刺ぎ 染付 外面書草文 高台書付 露胎	肥前 70% 二次焼成あり
		第123回-45 図版57-45	磁器	碗	口 径 9.5 cm 器 高 5.2 cm 高 台 径 3.8 cm	染付 見込み菊花文と二重回線 内面刷目文 外面 二重刷目文 高台内二重方形枠の裏掛 高台書付露 胎	肥前 90%
		第123回-46 図版57-46	磁器	小杯	口 径 (7.4) cm 器 高 5.4 cm 高 台 径 3.7 cm	口縁端反り 染付 外面手掻きの折れ松葉文とコン ニャク印判もみじ文 高台内面線有り 高台書付露 胎	肥前 50%
		第123回-47 図版57-47	瓦	軒丸	直 径 14.4 cm 瓦 当 厚 1.5 cm 張 面 厚 2.0 cm		左巻き三巴文 珠文数15個
SK81	SK81	第124回-48 図版57-48	土師質 土器	皿	口 径 11.1 cm 器 高 2.2 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内面口縁部ヨコナデ 外面 一部ナデ	60% 口縁部灯芯痕有り 内 外面煤付着
		第124回-49 図版57-49	土師質 土器	燈塔	口 径 27.6 cm	外面底部離れ砂付着 内面底部から外面口縁部ヨ コナデ 外面体部指張爪痕とナデ	30% 内面底部集け付着 外 面煤付着
		第124回-50 図版58-50	土師質 土器	燈塔	口 径 30.3 cm	外面底部離れ砂付着 内面底部ナデ 内外面口縁部 ヨコナデ 外面体部指張爪痕とヨコナデ	40% 外面煤付着
		第124回-51	磁器	碗	口 径 (9.9) cm 器 高 5.9 cm 高 台 径 (4.0) cm	染付 外面草花文 高台内面線有り 高台書付露胎 離れ砂付着	肥前 40%
		第124回-52	磁器	碗	口 径 (9.4) cm 器 高 4.8 cm 高 台 径 (4.0) cm	染付 外面草花文 高台内面線有り 高台書付露胎 離れ砂付着	肥前 40%
		第124回-53	磁器	皿	口 径 (13.1) cm 器 高 3.0 cm 高 台 径 (8.5) cm	染付 内面体部斜格子文 見込みコンニャク印判五 弁花と二重回線 外面連続書草文 高台内「大明年 製」銘と面線有り 高台書付露胎 離れ砂付着	肥前 40%
		第124回-54 図版58-54	陶器	燈鉢	口 径 (35.2) cm 器 高 13.9 cm 高 台 径 (16.6) cm	注口有り 内外面口縁部ヨコナデ 外面回転ヘラケ ズリ クシ目1本一単位 内面注口部に扇形の特 に「長上」の捺印有り	堺 50%
SP61	SP61	第125回-55 図版58-55	土師質 土器	皿	口 径 9.2 cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ	10%
		第125回-56 図版58-56	陶器	碗	口 径 (10.0) cm 器 高 5.2 cm 高 台 径 (4.0) cm	高台書付露胎 離れ砂付着 内外面巻刷毛目文	肥前 40%
		第125回-57 図版58-57	磁器	碗	高 台 径 (4.4) cm	染付 外面体部コンニャク印判開文 高台内「大明 年製」銘と面線有り 高台書付露胎	肥前 30%
		第125回-58 図版58-58	土師質 土器	燈塔	口 径 (25.5) cm 器 高 5.9 cm	外面底部離れ砂付着 内面底部ナデ 内外面体部ヨ コナデ	40% 外面煤付着
		第125回-59 図版58-59	土師質 土器	燈塔	口 径 (25.6) cm	外面底部離れ砂付着 内面底部ナデ 内外面体部ヨ コナデ	20% 外面底部煤付着
		第125回-60 図版58-60	陶器	燈鉢	口 径 (31.3) cm 器 高 12.5 cm 直 径 15.3 cm	外面ヨコナデ クシ目6本一単位	丹波 30%

第23表 第231次調査遺物観察表(3)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他
北	SP70	第126図-61 図58-61	土師質 土器	乗揚	口 径 4.9 cm 器 高 1.5 cm 高 台 径 2.8 cm	型押し成形 芯立部貼り付け 内外面磨粉付着 溝状芯立 口縁部ヨコナデ 底部縁部の「久」銘 有り	100% 芯立部灯芯灰有り
		第126図-62	陶器	片口鉢	口 径 (13.0) cm	鉄釉	京焼系 30%
		第126図-63 図58-63	磁器	碗	口 径 (10.6) cm 器 高 5.7 cm 高 台 径 (4.2) cm	染付 内面口縁部二重線縁 見込み花文と二重線縁 有り 外面花文 高台豊付露胎	肥前 80%
		第126図-64 図58-64	磁器	蓋物	口 径 12.4 cm 器 高 6.4 cm 高 台 径 6.2 cm	染付 外面寿字と露花文 口縁部と高台豊付露胎	肥前 80%
	池伏 遺構 (掘上期)	第130図-65 図58-65	土師質 土器	皿	口 径 13.6 cm 器 高 1.7 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ	100%
			土師質 土器	皿	口 径 7.9 cm 器 高 1.3 cm	手捏ね成形 内面ナデ	100%
			土師質 土器	皿	口 径 (8.9) cm 器 高 1.1 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外 面ナデ	40%
			土師質 土器	皿	口 径 (8.2) cm 器 高 1.7 cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	50%
			土師質 土器	皿	口 径 (8.9) cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	20%
			土師質 土器	皿	口 径 (9.3) cm 器 高 1.8 cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	30% 口縁部灯芯灰有り
			土師質 土器	皿	口 径 ( 10.5) cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	40%
			土師質 土器	皿	口 径 (13.7) cm 器 高 2.4 cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	京都系 30%
			瓦質土器	羽釜	口 径 23.1 cm	内面体部ヨコナデ 外面口縁部から唇部ヨコナデ	5%
磁器			碗	口 径 (13.6) cm 器 高 6.1 cm 高 台 径 (5.2) cm	青花 内面口縁部界線 見込み界線と文様有り 外 面口縁部分等文様有り 体部建弁文 高台豊付露胎	中国 90%	
池伏 遺構 (瓦期)	第130図-75 図59-75	土師質 土器	皿	口 径 7.7 cm 器 高 1.4 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面ナデ 内外面口 縁部ヨコナデ	100% 口縁部灯芯灰有り 底 部磨粉付着	
		土師質 土器	皿	口 径 8.9 cm 器 高 1.8 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内面 口縁部ヨコナデ	100% 口縁部灯芯灰有り	
		土師質 土器	皿	口 径 9.2 cm 器 高 1.7 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面体部から外面口 縁部ヨコナデ	100% 口縁部灯芯灰有り	
		土師質 土器	皿	口 径 (11.8) cm 器 高 2.1 cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	30% 口縁部灯芯灰有り	
		土師質 土器	皿	口 径 12.6 cm 器 高 2.2 cm	手捏ね成形 内面底部ナデ 内面体部から外面口縁 部ヨコナデ	40% 口縁部灯芯灰有り	
		土師質 土器	皿	口 径 (12.2) cm 器 高 2.1 cm	手捏ね成形 内面 内面底部部に磨粉有り 内面体 部から外面口縁部ヨコナデ	京都系 40% 口縁部灯芯灰有り	

第24表 第231次調査遺物観察表(4)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考
北	池状遺構 (瓦葺)	第130回-81 図録60-81	土師質土器	皿	口 径 14.0 cm 器 高 1.9 cm	手捏ね成形 内面底部ナデ 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	産地・残存率・その他 90% 口縁部灯芯溝有り 内外面底部残付着
		第130回-82 図録60-82	土師質土器	皿	口 径 14.4 cm 器 高 2.3 cm	手捏ね成形 内面底部ナデ 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	90% 内外面底部残付着
		第130回-83 図録60-83	陶器	攪鉢	口 径 28.6 cm 器 高 11.5 cm 底 径 14.4 cm	内外面口クロナデ クシ目9本一単位	備前 80%
		第130回-84 図録60-84	陶器	攪鉢	口 径 (33.2) cm 器 高 9.3 cm 底 径 (17.6) cm	内外面口クロナデ クシ目8本一単位	備前 40%
		第131回-85 図録60-85	瓦質土器	羽釜	口 径 (30.0) cm	内面体部ヨコナデとハケ目 外面口縁部から胴部ヨコナデ 胴部以下ヘラケズリ	5%
		第131回-86	瓦質土器	羽釜	口 径 (14.0) cm	内外面口縁部ヨコナデ 胴部ヨコナデ	1%
		第131回-87	瓦質土器	羽釜		内面体部ヨコナデ 外面口縁部から胴部ヨコナデ 胴部以下ヘラケズリ	1%
		第131回-88 図録60-88	陶器	天目碗	口 径 (12.5) cm	外面下半部露胎	中国 20%
		第131回-89 図録60-89	陶器	盤	口 径 (30.7) cm	内外面口クロナデ	備前 5%
		第131回-90	磁器	皿	口 径 (10.0) cm	白磁	中国 10%
		第131回-91 図録60-91	磁器	碗	高 台 径 7.0 cm	白磁 見込み丸縁有り 外面下半部露胎	中国 30%
		第131回-92 図録60-92	磁器	碗	高 台 径 5.7 cm	青磁 見込み印花文 高台内露胎	中国 30%
池状遺構 (砂葺)	第131回-93	土師質土器	皿	口 径 (8.0) cm 器 高 1.3 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面底部ナデ 内外面口縁部ヨコナデ	50%	
	第131回-94 図録60-94	土師質土器	皿	口 径 (7.3) cm 器 高 1.6 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面ナデ	100%	
池状遺構 (砂葺/ 粘土葺)	第131回-95 図録60-95	土師質土器	皿	口 径 7.6 cm 器 高 1.5 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	100% 口縁部灯芯溝有り	
	第131回-96 図録60-96	土師質土器	皿	口 径 8.8 cm 器 高 1.8 cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	90%	
	第131回-97	土師質土器	皿	口 径 (7.6) cm 器 高 1.8 cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	20%	
	第131回-98 図録60-98	土師質土器	皿	口 径 7.4 cm 器 高 1.7 cm	手捏ね成形 内面体部から口縁部ヨコナデ	100% 口縁部灯芯溝有り	
	第131回-99 図録60-99	土師質土器	皿	口 径 8.9 cm 器 高 1.7 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面体部から口縁部ヨコナデ	100% 口縁部灯芯溝有り	
	第131回-100 図録60-100	土師質土器	皿	口 径 9.4 cm 器 高 1.9 cm	手捏ね成形 内面体部から口縁部ヨコナデ	100% 口縁部灯芯溝有り	

第25表 第231次調査遺物観察表(5)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 塵地・残存率・その他
北	池伏 遺構 (砂層/ 粘土層)	第131回-101 図版61-101	土師質 土器	皿	口 径 8.6 cm 器 高 1.3 cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面体部から口縁部 ヨコナデ	100% 口縁部灯芯痕有り
		第131回-102	土師質 土器	皿	口 径 (9.1) cm	手捏ね成形 底部内側に凹む 内面体部から口縁部 ヨコナデ	40%
		第131回-103 図版61-103	土師質 土器	皿	口 径 10.3 cm 器 高 1.9 cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	100% 口縁部灯芯痕有り
		第131回-104 図版61-104	土師質 土器	皿	口 径 10.2 cm 器 高 2.0 cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	100% 口縁部灯芯痕有り
		第131回-105	土師質 土器	皿	口 径 (11.3) cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	10%
		第131回-106 図版61-106	土師質 土器	皿	口 径 (14.2) cm 器 高 1.6 cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	30% 口縁部灯芯痕有り
		第131回-107 図版61-107	土師質 土器	皿	口 径 (12.3) cm 器 高 2.2 cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	90% 口縁部灯芯痕有り
		第131回-108 図版61-108	土師質 土器	皿	口 径 14.8 cm 器 高 2.7 cm	手捏ね成形 内面体部から外面体部ヨコナデ	90%
		第131回-109 図版61-109	磁器	角鉢		白磁	中国 5%
		第131回-110	磁器	端反碗	口 径 (15.7) cm	青磁	中国 6%
		池伏 遺構 (石場の 後より)	第131回-111	土師質 土器	皿	口 径 (11.8) cm	手捏ね成形 内面体部から外面体部ヨコナデ
第131回-112 図版61-112	土師質 土器		皿	口 径 9.2 cm 器 高 1.9 cm	手捏ね成形 内面体部から外面体部ヨコナデ	100% 口縁部灯芯痕有り	
第131回-113 図版61-113	磁器		輪花碗	口 径 (9.0) cm	白磁	中国 20%	
第131回-114	磁器		端反碗		青磁	中国 3%	
池伏 遺構	第132回-115 図版62-115	瓦	軒丸	直 径 14.6 cm 瓦 当 厚 1.9 cm 側 面 厚 2.6 cm	右巻き三巴文 珠文数21個	90% 笠ノズ有リ NM18 A類	
	第132回-116 図版62-116	瓦	軒丸	直 径 14.5 cm 瓦 当 厚 2.3 cm 側 面 厚 2.6 cm	右巻き三巴文 珠文数21個	100% 笠ノズ有リ NM20 A類	
	第132回-117 図版62-117	瓦	軒丸	直 径 15.4 cm 瓦 当 厚 2.4 cm 側 面 厚 3.1 cm	左巻き三巴文 珠文数19個 内面線有リ	20% NM23 B類	
	第132回-118 図版62-118	瓦	軒丸	直 径 15.3 cm 瓦 当 厚 2.0 cm 側 面 厚 3.1 cm	左巻き三巴文 内面線有リ	10% NM24 B類	
	第132回-119 図版63-119	瓦	軒丸	直 径 15.5 cm 瓦 当 厚 1.9 cm 側 面 厚 2.9 cm	左巻き三巴文 内面線有リ	20% NM25 B類	
	第132回-120 図版63-120	瓦	軒丸	直 径 (13.7) cm 瓦 当 厚 1.7 cm 側 面 厚 2.4 cm	左巻き三巴文 内面線有リ	10% 笠ノズ有リ NM27 C類	

第26表 第231次調査遺物観察表(6)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他
北	池状遺構	第132回-121 図録63-121	瓦	鳥倉	瓦当厚 1.6 cm	右巻き三巴文	20% 范十次有り
		第133回-122 図録63-122	瓦	軒丸	広端幅 14.8 cm 厚さ 3.3 cm		NM17 A類 80%
		第133回-123 図録63-123	瓦	丸	全長 31.7 cm 広端幅 15.5 cm 厚さ 2.3 cm		100% M34 Eb1類
		第133回-124 図録64-124	瓦	丸			20% M32 F類
		第133回-125 図録64-125	瓦	丸	厚さ 2.7 cm		20% M30 D類
		図録64-244	瓦	丸	全長 30.8 cm 広端幅 15.1 cm 厚さ 2.1 cm		100% M36 Eb2類
		図録64-245	瓦	丸	全長 31.1 cm 広端幅 14.0 cm 厚さ 2.2 cm		100% M38 Eb3類
		図録64-246	瓦	丸	厚さ 2.9 cm		40% M28 C2類
		第134回-126 図録65-126	瓦	軒平	上弦幅 22.8 cm 瓦当高 4.7 cm 頸部幅 2.8 cm	宝珠唐草文	90% NH31 AⅡc類
		第134回-127	瓦	二の平	全長 29.3 cm 扶端部幅 18.7 cm 厚さ 2.1 cm		70%
		第135回-128 図録65-128	瓦	軒平	上弦幅 22.6 cm 瓦当高 4.8 cm 頸部幅 2.8 cm	宝珠唐草文	80% 范十次有り NH33 AⅡd類
		図録65-247	瓦	軒平	上弦幅 22.5 cm 瓦当高 5.1 cm 頸部幅 2.8 cm	宝珠唐草文	80% 范十次有り NH24 AⅡb1類
		第135回-129 図録64-129	瓦	二の平	厚さ 2.0 cm	人物の繡刻有り	80%
		第136回-130 図録64-130	瓦	軒平	上弦幅 25.5 cm 瓦当高 5.2 cm 頸部幅 2.8 cm	半截菊花水波文	60% NH22 Ba類
		第136回-131 図録64-131	瓦	軒平	瓦当高 4.9 cm 頸部幅 2.7 cm	半截菊花水波文	5% NH23 Bb類
		第136回-132 図録64-132	瓦	軒平	瓦当高 3.2 cm 頸部幅 3.0 cm	繡羽用 蓮珠文	5% NH20 E類
		第136回-133	瓦	平	全長 29.0 cm 広端部幅 22.4 cm 厚さ 2.2 cm		100% H17 Fb類
		第136回-134 図録66-134	瓦	軒平	瓦当高 3.9 cm 頸部幅 2.6 cm	繡用 半截菊花均整唐草文	20% NH21 C類
		第137回-135 図録66-135	瓦	軒平	上弦幅 24.4 cm 瓦当高 4.4 cm 頸部幅 2.2 cm	繡用 宝珠唐草文	80% 范十次有り NH30 AⅡb2類
		第138回-136 図録67-136	瓦	腰板	厚さ 2.8 cm		60%

第27表 第231次調査遺物観察表(7)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考	
							産地・残存率・その他	
北	池伏 遺構	第138回-137	瓦	扉板	厚 さ 2.5 cm			20%
		第138回-138 図説67-138			面戸			
		第138回-139 図説67-139	瓦	鬼	基部径 (16.1) cm		諸花 体部輪花状	5%
		第139回-140 図説68-140				鯨		鯨左側面 横ヘラ指
		図説67-248	瓦	鬼	珠文径 2.1 cm		母屋右端部 側部は縁取りこしらえ 連珠溝内押型の半円球の珠文有り 連珠の頂部は連珠溝より出ない	10%
		図説67-249				鬼		母屋左端部 側部は縁取りこしらえ 連珠溝内押型の半円球の珠文有り 連珠の頂部は連珠溝より出ない
		図説67-250	瓦	鬼			左角	1%
		図説67-251				鯨		鯨左端
		図説69-252	瓦	不明			凸面雷文残存 凹面糸切り痕と布目痕と差違ひ痕有り	10%
	SK70	第140回-141				土師質 土器	皿	口 径 7.1 cm
		第140回-142	土師質 土器	皿	口 径 10.0 cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	10%	
		第140回-143	磁器	碗	高台径 5.2 cm		青磁 見込みヘラ指きによる文様有り 高台内と壘付露胎	中国 30%
		SP133			第141回-144	土師質 土器	皿	口 径 8.0 cm 器 高 (1.4) cm
		第141回-145	土師質 土器	羽釜	口 径 (29.6) cm		内面ハケ目 口縁部一部ヨコナデ 外面口縁から裏部ヨコナデ	10%
	SD35	第144回-146 図説69-146	土師質	円筒埴輪		口縁部 内面ヨコハケ 外面タテハケ 口縁部ヨコナデ	1%	
	第144回-147 図説69-147	土師質	朝顔形 円筒埴輪			口縁部 磨耗が著しく状態不明	1%	
	第144回-148 図説69-148	土師質	朝顔形 円筒埴輪			口縁部 外面体部タテハケ 口縁部ヨコナデ	1%	
	第144回-149 図説69-149	土師質	朝顔形 円筒埴輪			頸部尖部部 磨耗が著しく状態不明	1%	
	第144回-150 図説69-150	土師質	円筒埴輪			内面ナデ 外面タテハケ 突部ナデ	1%	
	第144回-151 図説69-151	土師質	円筒埴輪			内外裏タテハケ 突部ヨコナデ	1%	

第28表 第231次調査遺物観察表(8)



地区	遺構名	番号	材質	器種	法番	特徴	備考 産地・特殊事・その他	
北	SD35	第144回-152 図版69-152	土師質	形象埴輪		衣蓋の羽根飾りの一部 表裏面タテハケ	1%	
		第144回-153 図版69-153	土師質	形象埴輪		衣蓋の羽根飾りの一部 表裏面ハケ目	1%	
		第144回-154 図版69-154	土師質	形象埴輪		衣蓋の羽根飾りの輪部 外面タテハケ 内面ナデ	1%	
		第144回-155	須恵器	杯身	口径 11.8 cm 器高 3.1 cm	内外面回転ナデ	30%	
		第144回-156	須恵器	杯身	口径 13.1 cm 器高 4.0 cm 高台径 10.1 cm	内外面回転ナデ	40%	
		第144回-157 図版70-157	須恵器	杯蓋	口径 10.9 cm	内面回転ナデ 外面上半部回転ヘラクスリ 下部 回転ナデ つまみ部ナデ	80%	
		第144回-158 図版70-158	須恵器	長頸壺		貼り付け高台 高台4カ所穿孔あり 内面底部ナ デ 体部回転ナデ 外面下部回転ヘラクスリ 体部回 転ナデ	30%	
		SK121	第145回-159	瓦器	椀	口径 13.0 cm	内面ヨコナデと平行線状ミガキ 外面口縁部ヨコ ナデ 体部指張任痕とミガキ	和泉型 20%
		第145回-160	須恵器	片口鉢		内外面回転ナデ	東播系 1%	
		SK133	第145回-161	瓦質土器	三足釜	口径 15.3 cm	内外面ヨコナデ	5%
第145回-162	須恵器		片口鉢		内外面回転ナデ	東播系 1%		
SP253	第146回-163	土師質 土器	羽輪	口径 25.4 cm	内面磨耗が著しく痕跡不明 外面口縁から胴部ヨ コナデ	10%		
SP279	第146回-164	瓦器	椀	口径 11.8 cm 器高 2.7 cm 高台径 3.8 cm	内面体部ナデとミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 体 部指張任痕 高台ナデ	和泉型 40%		
南	男柱1	第151回-165	土師質 土器	皿	口径 7.6 cm 器高 1.3 cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	20% 口縁部灯芯痕有り	
		第151回-166 図版70-166	土師質 土器	皿	口径 7.8 cm 器高 1.5 cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	90% 口縁部灯芯痕有り	
		第151回-167 図版70-167	土師質 土器	皿	口径 10.0 cm 器高 2.0 cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	100% 口縁部灯芯痕有り	
		第151回-168	土師質 土器	皿	口径 12.0 cm 器高 2.3 cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	30% 口縁部灯芯痕有り	
		第151回-169	軟質施釉 陶器	皿	口径 11.2 cm	口口口成形 透明釉	10% 口縁部灯芯痕有り	
		第151回-170	土師質 土器	燈塔	口径 27.0 cm	内外面体部ヨコナデ	5% 外面体部から底部煤付 着	
		第151回-171	土師質 土器	燈塔	口径 26.8 cm	内外面体部ヨコナデ	5% 内面底部集げ付着 外 面体部から底部煤付着	

第29表 第231次調査遺物観察表(9)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他
南	男柱1	第151回-172	土師質 土器	焙烙	口 径 (30.8) cm	内外面体部ヨコナデ	5% 内面底部焦げ付着 外 面体部煤付着
		第151回-173	土師質 土器	焙烙	口 径 (24.8) cm	外面底部離れ砂付着 内外面体部ヨコナデ	5%
		第151回-174	土師質 土器	焙烙	口 径 (34.3) cm	外面底部離れ砂付着 内外面体部ヨコナデ	5%
		第151回-175	土師質 土器	焙烙		内外面体部ヨコナデ 外面底部ナデ	1% 外面底部煤付着
		第151回-176	土師質 土器	焙烙		外面底部離れ砂付着 内外面体部ヨコナデ	1% 外面煤付着
		第151回-177	土師質 土器	焙烙		外面底部離れ砂付着 内外面体部ヨコナデ	1% 内面底部焦げ付着 外 面煤付着
		第151回-178	土師質 土器	焙烙		外面底部離れ砂付着 内外面体部ヨコナデ	1% 内面底部焦げ付着 外 面煤付着
		第151回-179	陶器	片口鉢	口 径 (15.2) cm 器 高 5.9 cm 高 台 径 (9.0) cm	灰釉 外面体部から底部露胎	丹波 40%
		第151回-180 図版70-180	陶器	輪花鉢	口 径 (16.4) cm 器 高 6.3 cm 高 台 径 (9.1) cm	鉄釉 外面体部から底部露胎	丹波 40%
		第151回-181	陶器	壺	高 台 径 (8.8) cm	鉄釉 底部露胎 底部糸切り痕	備前 40% 内面鉄分付着
		第151回-182	陶器	壺	口 径 39.8 cm	内面鉄釉を刷毛塗り 外面鉄釉	丹波 5%
		第152回-183 図版70-183	磁器	碗	口 径 10.1 cm 器 高 5.4 cm 高 台 径 4.1 cm	染付 外面コンニャク印印流文 高台内溝掘 高台 豊付露胎 離れ砂付着	肥前 100%
		第152回-184	磁器	特殊形碗	口 径 (10.9) cm 器 高 6.7 cm 高 台 径 4.3 cm	染付 外面花文 高台豊付露胎	肥前 40%
		第152回-185	磁器	筒形碗	口 径 (7.8) cm	染付 内面口縁部四方文 見込み開線有り 外面 水仙文	肥前 30%
		第152回-186 図版70-186	磁器	皿	口 径 12.1 cm 器 高 3.3 cm 高 台 径 4.6 cm	見込み蛇/目輪割ぎ 染付 内面斜格子文 高台豊 付露胎 離れ砂付着	肥前 80% 口縁部打芯あり
		第152回-187 図版70-187	磁器	碗	口 径 (16.1) cm 器 高 7.7 cm 高 台 径 6.6 cm	染付 見込みコンニャク印印五弁花と二重線外 面草花文 高台内溝掘と開線有り 高台豊付露胎	肥前 40%
		第152回-188 図版70-188	磁器	鉢	口 径 (22.0) cm 器 高 7.1 cm 高 台 径 (10.2) cm	染付 内面窓縁の松文と康草文 見込み環状松竹梅 文 外面花唐草文 高台内「富貴長寿」と開線有り 高台豊付露胎	肥前 40%
		第152回-189 図版70-189	磁器	紅血	口 径 4.8 cm 器 高 1.6 cm 高 台 径 1.5 cm	型押し成形 白磁 外面下半部露胎	肥前 60%
		第152回-190 図版71-190	磁器	香炉	口 径 (12.6) cm 器 高 7.7 cm 高 台 径 (8.2) cm	蛇/目高台 染付 外面左巻き三つ巴文 内面下半 部露胎 高台豊付露胎	肥前 40%
		第153回-191 図版71-191	瓦	軒丸	直 径 15.2 cm 瓦 当 厚 2.4 cm 側 面 厚 2.0 cm	左巻き三巴文 珠文数16個	30%

第30表 第231次調査遺物観察表(10)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他
南	男性1	第153回-192 図版71-192	瓦	軒丸	直径 14.4 cm	右巻き三巴文 珠文数12個	20%
		瓦当厚 2.6 cm					
		第153回-193	瓦	軒平	瓦当高 4.5 cm	横溝草文	40%
					頸部幅 1.6 cm		
		第153回-194	瓦	軒平	瓦当高 4.7 cm	横溝草文	10%
					頸部幅 1.5 cm		
		第153回-195	瓦	軒平	瓦当高 3.9 cm	横溝草文	20%
					頸部幅 1.5 cm		
第153回-196	瓦	軒平	瓦当高 3.7 cm	横溝草文	30%		
			頸部幅 1.8 cm				
第153回-197	瓦	軒平	瓦当高 4.0 cm	中心飾りが左巻き三巴の唐草文	20%		
			頸部幅 2.1 cm				
第153回-198	瓦	軒平	瓦当高 4.1 cm	横溝草文	5%		
			頸部幅 1.8 cm				
SK30 (埋蔵)	第154回-199 図版71-200	磁器	碗	口径 (14.2) cm	青磁染付 見込み菊文と二重墨線 高台置付露胎	肥前 40%	
				器高 7.6 cm			
				高台径 5.4 cm			
				口径 (11.1) cm			
				器高 3.3 cm			
				つまみ径 4.8 cm			
第154回-201 図版71-201	磁器	紅血	口径 4.6 cm	型押し成形 白磁 外面体部から高台露胎	肥前 100%		
器高 1.6 cm							
第154回-202 図版71-202	瓦	軒丸	直径 14.3 cm	左巻き三巴文 珠文数12個	20%		
			瓦当厚 1.9 cm				
第154回-203 図版71-203	瓦	丸	厚さ 1.4 cm		70%		
SK7	第155回-204 図版71-205	土師灰 土器	皿	口径 9.6 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外面一部ナデ	50% 口縁部欠損あり	
				器高 2.0 cm			
	第155回-205 図版71-206	土師灰 土器	皿	口径 9.3 cm	手捏ね成形 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ 外面一部ナデ	80% 口縁部欠損あり	
				器高 2.2 cm			
	第155回-206 図版71-206	軟質滑胎 陶器	受皿	口径 6.4 cm	ロクロ成形 底部糸切り痕(右回転) 透明釉 外面体部から底部露胎	100%	
				器高 1.3 cm			
	第155回-207 図版71-207	磁器	碗	口径 (10.6) cm	染付 外面草花文 高台置付露胎	肥前 30%	
				器高 5.5 cm			
	第155回-208 図版71-208	磁器	筒形碗	口径 7.6 cm	染付 内面口縁部四方禰文 見込み手描き五弁花と二重墨線 外面梵字文 高台置付露胎	肥前 100%	
				器高 5.9 cm			
第155回-209 図版71-209	磁器	皿	口径 12.7 cm	見込み蛇ノ目輪刺ぎ 染付 内面斜格子文 高台置付露胎 龍刺紗付着	肥前 90%		
			器高 3.6 cm				
第155回-210 図版71-210	磁器	碗蓋	口径 (10.2) cm	染付 内面口縁部四方禰文 見込み花文と二重墨線 外面梵文 つまみ内縁部露胎	肥前 70%		
			器高 2.6 cm				
第155回-211 図版72-211	磁器	碗蓋	口径 11.6 cm	青磁染付 内面口縁部四方禰文 見込み果菜文と二重墨線 つまみ内二重方形形滑槽 つまみ喉部露胎 龍刺紗付着	肥前 100%		
			器高 3.5 cm				
			つまみ径 4.8 cm				

第31表 第231次調査遺物観察表(11)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他
南	SK7	第155図-212 図版72-212	磁器	碗蓋	口 径 9.2 cm	染付 内面口縁部二重線 見込み壁文と龍蹄 外面河骨文と壁文 高台内河骨文 つまみ頭部露出	肥前 80%
					器 高 2.3 cm		
					つまみ径 5.6 cm		
	SK18	第156図-213 図版72-213	陶器	碗	口 径 11.4 cm	外面下半部露出 鉄箱	京焼系 90%
					器 高 5.0 cm		
	第156図-214 図版72-214	磁器	輪花皿	口 径 (9.4) cm	型打ち成形 染付 芙蓉手 内面水草文と鳥文 外面幾何学文 高台置付露出	京焼系 100%	
				器 高 2.0 cm			
	第156図-215 図版72-215	磁器	輪花皿	口 径 (9.4) cm	型打ち成形 染付 芙蓉手 内面水草文と鳥文 外面幾何学文 高台置付露出	京焼系 60%	
				器 高 2.0 cm			
	第156図-216 図版72-216	磁器	八角鉢	口 径 15.2 cm	染付 内面梅文と草文を交互に配す 見込み文様有り 外面幾何学文 高台置付露出	肥前 90%	
				器 高 7.0 cm			
	SK31	第158図-217	土師質土器	皿	口 径 (8.9) cm	手捏ね成形 内面口縁部に2線露出 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	20%
					器 高 2.7 cm		
	第158図-218	土師質土器	皿	口 径 (9.3) cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ	10%	
				器 高 2.7 cm			
第158図-219	土師質土器	皿	口 径 (11.2) cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	30%		
			器 高 2.7 cm				
第158図-220	陶器	燻鉢	口 径 (11.2) cm	外面口クロナデ	備前 1%		
			器 高 2.7 cm				
第158図-221	瓦	軒平	瓦 当 高 5.1 cm	唐草文	10%		
			額 部 幅 2.7 cm				
SD4	第160図-222	土師質土器	皿	口 径 (7.8) cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	30%	
				器 高 1.7 cm			
	第160図-223	土師質土器	皿	口 径 (13.2) cm	手捏ね成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ 内外面重部ナデ	40%	
				器 高 2.7 cm			
	第160図-224	土師質土器	皿	口 径 (13.8) cm	手捏ね成形 内面ナデ	30%	
				器 高 2.7 cm			
	第160図-225	須恵器	杯身	口 径 (10.2) cm	内面と外面上半部露出ナデ 下半部露出ヘラケズリ	40%	
				器 高 5.0 cm			
	第160図-226 図版72-226	瓦器	椀	口 径 15.7 cm	内面体部ナデとミガキ 見込み平行線状ミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部上半部指環状とミガキ 下半部指環状 高台ヨコナデ 高台内ナデ	和泉型 80%	
				器 高 5.5 cm			
	第160図-227	瓦器	椀	口 径 (15.3) cm	内面体部ナデとミガキ 見込み平行線状ミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部上半部指環状とミガキ 下半部指環状 高台ヨコナデ	和泉型 40%	
				器 高 5.2 cm			
第160図-228	瓦器	椀	口 径 (15.0) cm	内面体部ナデとミガキ 見込みナデと平行線状ミガキ 内外面口縁部ヨコナデとミガキ 体部下半部指環状	和泉型 40%		
			器 高 5.0 cm				
第160図-229	瓦器	椀	口 径 (14.5) cm	内面体部ナデとミガキ 見込み平行線状ミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部上半部指環状とミガキ 下半部指環状 高台ヨコナデ 高台内ナデ	和泉型 40%		
			器 高 5.4 cm				
第160図-230 図版72-230	瓦器	椀	口 径 14.3 cm	内面体部ナデとミガキ 見込み平行線状ミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部上半部指環状とミガキ 高台ヨコナデ	和泉型 60%		
			器 高 4.8 cm				
第160図-231 図版72-231	瓦器	椀	口 径 (15.4) cm	内面体部ナデとミガキ 見込みジグザク状ミガキ 内外面口縁部ヨコナデとミガキ 体部下半部指環状とナデ 高台ヨコナデ 見込み重た焼成有り	和泉型 50%		
			器 高 5.5 cm				
第160図-231 図版72-231	瓦器	椀	口 径 (15.4) cm	内面体部ナデとミガキ 見込みジグザク状ミガキ 内外面口縁部ヨコナデとミガキ 体部下半部指環状とナデ 高台ヨコナデ 見込み重た焼成有り	和泉型 50%		
			器 高 5.1 cm				

第32表 第231次調査遺物観察表 (12)

地区	遺構名	番号	材質	器種	法量	特徴	備考 産地・残存率・その他		
南	SD4	第160回-232	瓦器	椀	口 径 (15.6) cm 器 高 4.0 cm 高 台 径 5.0 cm	内面体部ナデとミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外 面体部下半部指環状痕 高台ヨコナデ	和泉型 30%		
		第160回-233			須恵器	片口鉢	口 径 (30.2) cm	内外面回転ナデ	東播系 5%
		第160回-234 図版72-234	陶器	四耳壺	口 径 (8.8) cm	繩物 胴部に線刻文様あり	中国 10%		
		第160回-235	磁器	碗	口 径 (15.4) cm	白磁 外面下半部露胎	中国 10%		
SK35	第161回-236	瓦器	椀	口 径 (16.0) cm 器 高 5.3 cm 高 台 径 (5.0) cm	内面体部ナデとミガキ 見込みジグザグ状ミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部指環状痕とミガキ 高台ヨコナデ 高台内ナデ	和泉型 50%			
SK36	第161回-237			瓦器	椀	口 径 (15.6) cm	内面体部ナデとミガキ 見込み平行線状ミガキ 内 外面口縁部ヨコナデ 外面体部指環状痕とナデ	和泉型 20%	
西壁11	第161回-238 図版72-238	瓦器	椀	口 径 (15.4) cm 器 高 5.4 cm 高 台 径 5.4 cm	内面体部ナデとミガキ 見込み平行線状ミガキ 内 外面口縁部ヨコナデ 外面体部指環状痕とミガキ 高台ヨコナデ 高台内ナデ	和泉型 50%			
				第162回-239	土師質 土器	皿	口 径 (8.5) cm 器 高 1.5 cm	手捏丸成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	30%
第3期	第162回-240	土師質 土器	皿	口 径 (8.0) cm 器 高 2.0 cm	手捏丸成形 内面体部から外面口縁部ヨコナデ	30%			
				第162回-241	瓦器	椀	口 径 (16.6) cm 器 高 4.7 cm 高 台 径 (5.5) cm	内面体部ナデとミガキ 見込みジグザグ状ミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部指環状痕とミガキ 高台ヨコナデ 高台内ナデ	和泉型 30%
				第162回-242	瓦器	椀	口 径 (15.5) cm 器 高 5.5 cm 高 台 径 (4.6) cm	内面体部ヨコナデとミガキ 見込みジグザグ状ミガ キ 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部指環状痕とナ デとミガキ 高台ヨコナデ 高台内ナデ	和泉型 40%
				第162回-243	瓦器	椀	口 径 (15.3) cm 器 高 4.8 cm 高 台 径 4.8 cm	内面体部ヨコナデとミガキ 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部指環状痕とミガキ 高台ヨコナデ	和泉型 30%

第33表 第231次調査遺物観察表 (13)

